

# 博 士 論 文

子ども・若者とかかわる地域活動が高齢者の  
生きがいに与える影響及び支援に関する研究  
—ジェネラティヴィティの視点から—

A Study on the Affects and Support of Community Activities Related to  
Children and Young People on the IKIGAI of the Elderly:  
Focusing on Generativity

2020 年度

日本福祉大学大学院  
福祉社会開発研究科  
社会福祉学専攻博士課程

氏 名: 崔 恩熙

# 論文要旨

## ◆論文題目

子ども・若者とかかわる地域活動が高齢者の生きがいに与える影響及び支援に関する研究  
—ジェネラティヴィティの視点から—

## ◆要 旨

### 序 章

本研究の目的は、高齢者と子ども・若者がかかわる地域活動に焦点をあて、交流の場で共有する時間や支援者によるかかわり支援のあり方が、高齢者の生きがいにどのような影響を与えるかを明らかにすることである。また、ジェネラティヴィティの視点から考察することで、高齢者の生きがいを促す支援のあり方や高齢者の生きがい関連対策について示唆を得ることである。目的を明らかにするため、参加高齢者及び支援者に対するインタビュー調査を実施し、質的分析法を参考に分析を行う。参加高齢者と支援者への調査分析をする際、その背景として高齢者の生きがい関連対策をも検討する。

### 第1章 高齢者の生きがい及び高齢者と子ども・若者の交流に関する先行研究

高齢者の生きがいの概念及び高齢者と子ども・若者の交流に関する先行研究の検討から、高齢者の生きがいは、過去と現在、そして未来に生きる価値や意味を与えるものであるが、従来、家庭を中心とした日常生活圏内での生きがいは過去と比べると期待ができにくいこと、また、子ども・若者との交流による高齢者への効果は、高齢期におけるジェネラティヴィティや生きがい感と深く関連しており、地域での高齢者と子ども・若者の交流活動が、高齢者の生きがいを促す可能性が期待されていることが把握された。

### 第2章 高齢者の生きがいにおけるジェネラティヴィティ及び研究課題

高齢者の生きがいと高齢期のジェネラティヴィティとの関係性の検討から、高齢者のジェネラティヴィティは、子ども・若者への関心や交流への継続的な参加、子ども・若者との相互関係性の構築に関与しているという見解から、高齢者の生きがいの変容を明確にするための重要な視点であることが確認された。なお、本研究でとらえる高齢者の生きがいとジェネラティヴィティの関係は、高齢者の生きがい概念の中にジェネラティヴィティが一部重なっており、ジェネラティヴィティを発揮することで重なる部分は大きくなり、高齢者の生きがいを豊かにするとした。また、本研究における3点の研究課題を提示した。

### 第3章 交流の場の類型化と調査対象

交流の場に関する既存類型の限界や本研究における高齢者と子ども・若者をつなぐ支援者の視点の重視を踏まえ、アメリカ・韓国・日本における交流の場を検討し、交流の場を構成する基本要素を見出した。基本要素のうち、共有する時間及び支援者によるかかわり支援の有無または多少は、子ども・若者とのかかわりから得られる高齢者の生きがいに影響を及

ばす可能性が高いという想定から、「時間の共有」と「支援者によるかかわり支援」の多少を軸として、支援者のいる交流の場を4類型に分類した。各類型の条件を示し、その条件を満たす調査対象を選定した。

#### 第4章 高齢者インタビュー調査の概要と結果

子ども・若者とのかかわりが高齢者の生きがいへ及ぼす影響を明らかにするために、各類型の参加高齢者を対象にインタビュー調査を実施し、M-GTA分析法を参照し検討した。分析する際、McAdams and Aubin (1992)によるジェネラティヴィティの展開過程及び要素を参考にした。分析の結果、参加高齢者は、子ども・若者への関心段階と行動段階を通して意味段階に至るプロセスが示された。具体的に、類型Ⅰの高齢者は、若者や自己への肯定的な感情とともに、次世代が暮らしていく地域社会の未来を考える等の未来志向的な生き方がみられた。類型Ⅱの高齢者は、かかわりが重なるにつれて子どもの成長を感じ、祖父母のような見守りがみられた。類型Ⅲの高齢者は、子どもの純粋さから癒される等の感情が得られた。類型Ⅳの高齢者は、活動の達成感や情緒的な交感を感じており、自身の行動が子ども・若者の人格形成に有意義な影響を与えると認識していた。なお、各類型に参加している子ども・若者の感想の声も聞き取り、各節の導入部に紹介した。

#### 第5章 参加高齢者の生きがい感の数値化

類型や男女による参加高齢者の生きがいへの影響を客観的に把握するために、本研究において作成したジェネラティヴィティを含む高齢者の生きがい感の尺度を用い、参加高齢者の生きがい感の数値化を試みた。その結果、類型Ⅰと類型Ⅳの得点は広い範囲に分布している反面、類型Ⅱと類型Ⅲは集まっていること、類型に関係なく高得点と低得点の高齢者の差は、次世代を意識した未来への積極的・肯定的態度をあらわす項目の得点に深く関連していること等が示された。一方、参加高齢者の生きがいへの男女による統計的な有意差は確認されなかった。

#### 第6章 支援者インタビュー調査の概要と結果

支援者は子ども・若者のかかわる活動を通して高齢者の生きがいを促すために、どのような役割を果たしているかを明らかにするために、支援者のインタビュー調査を実施し、質的分析法を参照し分析した。類型Ⅰの支援者は、高齢者と子ども・若者の交流プログラムを企画し、両世代が交流できる多様な仕掛けを設けている。類型Ⅱの支援者は、同じ空間を共有することで自然な交流が生まれるという見解から、意図的・計画的な支援は行わず、物品提供等の補助的な支援をしている。類型Ⅲの支援者は、お互い見慣れることを重視し、一緒に体験できる活動は提供しているものの、相互作用を促進するかかわり支援は行っていない。類型Ⅳの支援者は、相互理解等を求める世代間交流プログラムを企画し、交流方法や内容に意図的なかかわり支援を行っている。

#### 第7章 高齢者の生きがいと支援者のかかわり支援の関係

第4章と第6章で示された調査結果を照合し、各類型の「関心-関心と行動の境界-行動-

意味」の諸段階で展開されている高齢者の生きがいプロセスでの、支援者によるかかわり支援について検討した。各類型には高齢者と子ども・若者のかかわりの目的や重視する点があり、それに相応した高齢者の生きがい得られていることが確認できた。このことから、高齢者の生きがいに支援者によるかかわり支援が深く関係していることが示された。

## 第8章 高齢者の生きがい対策における子ども・若者との交流事業の意味と課題

第4章から第7章における検討結果を踏まえ、日本の高齢者の生きがい対策の中で子ども・若者との交流事業が拡大されてきているものの、なぜ、高齢者と子ども・若者をつなぐ支援者の役割やかかわり支援は重視されていないのかという批判的視点から、高齢者の生きがい対策の展開における、高齢者と子ども・若者の交流事業の意味や課題について検討した。高齢者の生きがい対策の一環として高齢者と子ども・若者の交流事業が用いられ、対策方針に従って政府からNPO法人や民間、住民等へと提供主体が拡大された。また、高齢者の自己実現から、健康維持や介護予防を強調する生きがいのとらえ方への変化は、高齢者と子ども・若者の交流活動にも反映され、子ども・若者とのかかわりによる高齢者の生きがいやかかわり支援の必要性等については重視されなかったことが課題として示唆された。

## 第9章 考察

高齢者の生きがいや高齢者と子ども・若者の交流に関する先行研究の検討、参加高齢者及び支援者のインタビュー調査の結果等を踏まえ、総合的に考察した。支援者による適切なかかわり支援があり、子ども・若者と親密な相互関係性が形成された高齢者は、次世代を意識するジェネラティヴィティの視点が強い生きがい感を得られることが示唆された。また、ジェネラティヴィティの発揮は、積極的な参加や次世代を意識した未来志向的な生き方の強化につながる。今後、ジェネラティヴィティを発揮する高齢者の生きがいを促すためには、高齢者と子ども・若者との円滑な相互作用を通して親密な相互関係を目指すかかわり支援が求められる。なお、高齢者の生きがい関連対策においても、高齢者と子ども・若者とのかかわりの質を確保する対策への転換が求められる。

## 終章

本研究は、高齢者と子ども・若者がかかわる交流の場において、共有する時間や支援者によるかかわり支援は、子ども・若者との相互作用・相互関係性に左右することで、高齢者の生きがいに影響することが把握された。また、ジェネラティヴィティの視点から、高齢者と子ども・若者がかかわる地域活動において高齢者の生きがいを促すためには、高齢者と子ども・若者との心理的つながりを重視し、高齢者のジェネラティヴィティが発揮できる高齢者と子ども・若者へのかかわり支援が重要である。しかし、支援者によるかかわり支援のみでは限界があり、高齢者の生きがい関連対策においても心理的つながりを重視した対策への必要性が指摘できた。なお、本研究は、地域における高齢者と子ども・若者とのかかわりに注目し、ジェネラティヴィティの視点から高齢者の生きがいのプロセスを検討している点、高齢者の生きがいを促す支援者によるかかわり支援が示唆された点から、学術的・実践的意義を持つ。

# 目 次

<b>序 章 研究の背景と目的</b> -----	1
第1節 研究背景	
第2節 研究目的と方法	
第3節 用語定義	
第4節 論文構成	
<b>第1章 高齢者の生きがい及び高齢者と子ども・若者の交流に関する先行研究</b> -----	11
第1節 高齢者の生きがい	
第2節 高齢者と子ども・若者との交流効果	
第3節 高齢者と子ども・若者の交流の関連理論	
<b>第2章 高齢者の生きがいにおけるジェネラティヴィティ及び研究課題</b> -----	25
第1節 心理社会発達論におけるジェネラティヴィティ	
第2節 高齢者の生きがいと高齢期のジェネラティヴィティとの関係性	
第3節 本研究における研究課題	
<b>第3章 交流の場の類型化と調査対象</b> -----	35
第1節 類型化の必要性及び方法	
第2節 アメリカの交流の場	
第3節 韓国の交流の場	
第4節 日本の交流の場	
第5節 本研究における交流の場の類型化及び調査対象選定	
<b>第4章 高齢者インタビュー調査の概要と結果</b> -----	50
第1節 調査概要	
第2節 類型Ⅰの参加高齢者の生きがい	
第3節 類型Ⅱの参加高齢者の生きがい	
第4節 類型Ⅲの参加高齢者の生きがい	
第5節 類型Ⅳの参加高齢者の生きがい	
<b>第5章 参加高齢者の生きがい感の数値化</b> -----	104
第1節 参加高齢者の生きがい感の数値化の概要	
第2節 参加高齢者の生きがい感の結果	
第3節 子ども・若者とかかわる活動と高齢者の生きがいの循環	

<b>第6章 支援者インタビュー調査の概要と結果</b>	-----	114
第1節 調査概要		
第2節 類型Ⅰの支援者のかかわり支援		
第3節 類型Ⅱの支援者のかかわり支援		
第4節 類型Ⅲの支援者のかかわり支援		
第5節 類型Ⅳの支援者のかかわり支援		
<b>第7章 高齢者の生きがいと支援者のかかわり支援の関係</b>	-----	128
第1節 類型Ⅰの高齢者の生きがいプロセスと支援者のかかわり支援		
第2節 類型Ⅱの高齢者の生きがいプロセスと支援者のかかわり支援		
第3節 類型Ⅲの高齢者の生きがいプロセスと支援者のかかわり支援		
第4節 類型Ⅳの高齢者の生きがいプロセスと支援者のかかわり支援		
第5節 生きがいプロセスにおける支援者によるかかわり支援		
<b>第8章 高齢者の生きがい対策における子ども・若者との交流事業の意味と課題</b>	-----	138
第1節 高齢者の生きがいに関する対策動向		
第2節 子ども・若者との交流の視点からみた生きがい対策と事業		
<b>第9章 考察</b>	-----	156
第1節 子ども・若者との相互作用・相互関係性に基づき発揮されるジェネラティビティは高齢者の生きがいへ		
第2節 ジェネラティビティを発揮する高齢者の生きがいを促すための子ども・若者とのかかわり支援		
第3節 ジェネラティビティを発揮する高齢者の生きがい関連対策		
<b>終章 結論と意義</b>	-----	169
第1節 各章で明らかになったこと及び結論		
第2節 本研究の意義と課題		
<b>注</b>	-----	176
<b>引用・参考文献</b>	-----	178

## 序 章 研究の背景と目的

### 第1節 研究背景

日本は、少子高齢化により人口が減少しており、今後その傾向はさらに強まると予想されている。国立社会保障・人口問題研究所の将来人口推計（2017（平成 29）年推計）によると、日本の総人口は、長期の人口減少過程に入っており、2053 年に 1 億人を割って、2065 年には 8,808 万人 になると推計されている。

2020（令和 2）年 5 月 1 日現在の総人口は、約 1 億 2589 万 5 千人である。そのうち、65 歳以上の人口は 3607 万 9 千人であり、高齢化率は 28.7%、75 歳以上の後期高齢者人口は 14.8%に達している（『人口推計』2020）。高齢化率の上昇はしばらく続くと予想されているが、その要因の一つとして、1947 年～1949 年に生まれた、いわゆる「団塊世代」の高齢期への突入があげられる。団塊世代が 65 歳以上となった 2015 年の高齢化率は 26.6%であったが、これは 5 年前の 2010 年の 23.0%に比べて急激に増加した数値である。さらに、団塊世代が 75 歳以上となる 2025 年の高齢化率は 30.0%に達すると予測されている（『令和 2 年版高齢社会白書』2020）。高齢者人口は 2042 年に 3,935 万人でピークを迎え、その後は減少に転じると推計されているが、総人口が減少していくにもかかわらず高齢化率は上昇傾向の見通しであり、2065 年にはその割合が 38.4%に達し、国民の約 2.6 人に 1 人が 65 歳以上の高齢者となり、国民の約 4 人に 1 人が 75 歳以上の高齢者となる社会が到来すると見込まれている（『日本の将来推計人口（平成 29 年推計）』2017）。

人口減少や高齢者人口の増加とともに、高齢者の家族形態も大きく変化すると予想される。『2019（令和元）年国民生活基礎調査』によれば、2019 年 6 月時点、全世帯（5178 万 5 千世帯）のうち、65 歳以上の者のいる世帯は、49.4%（2558 万 4 千世帯）で約半分近く占めている。その世帯構造をみると、「夫婦のみの世帯」が 32.3%で最も多く、次いで一人暮らしで生活している「単独世帯」が 28.8%、「親と未婚の子のみの世帯」<sup>1)</sup>が 20.0%である。これらの数値は 10 年前と比べ、「夫婦のみの世帯」は約 2.5%、「単独世帯」は約 5.8%、「親と未婚の子のみの世帯」は約 1.5%程度上昇したものである。とくに高齢者の「単独世帯」の増加が顕著にみられる。一方、65 歳以上の者のいる三世帯世帯（世帯主を中心とした直系三世帯以上の世帯）の年次推移をみると、1986（昭和 61）年は 44.8%で多い割合を占めていたが、その後、減少傾向が進み 2016（平成 28）年には 11%、2019（令和元）年には 9.4%まで減ってきている。このような三世帯世帯の減少傾向は今後も続くと考えられる。

高度経済成長期以降、人口の流動化や家族形態の多様化が進み、今日のような高齢者世帯の増加や三世帯世帯の減少という状況のなかで、家族内でのつながりや情緒的な交流は弱くなってきた。2015（平成 27）年度に報告された『第 8 回高齢者生活と意識に関する国際調査』によれば、高齢者の 51.2%は、週 1 回以上（「ほとんど毎日（20.3%）」及び「週 1 回以上（30.9%）」）別居している子どもと交流していたが、約 45.6%の高齢者の場合は、月 1～2 回以下（「月 1～2 回（26.8%）」及び「年に数回（18.8%）」）のみであった。同質問に対する 2000（平成 12）年度第 5 回同調査以降の年次推移をみると、変化は小さく、

比較的安定した傾向を示している（藤崎 2015）。

しかし、上記の第 8 回調査におけるアメリカの調査結果をみると、週 1 回以上別居者と交流している高齢者は 78.6%（「ほとんど毎日（42.9%）」と「週 1 回以上（35.7%）」の計）で、「月 1～2 回」は 13.7%、「年に数回」は 5.6%という結果であった。

調査結果から、高齢者の同居している子どもとの交流については、アメリカの高齢者よりも日本の高齢者の方がはるかに少ないことが分かる。ここでの交流頻度は対面での交流とともに、電話での連絡も含まれている点を勘案すると、日本の 45.6%の高齢者は月 1～2 回以下に子どもと交流していることや、18.8%の高齢者は年に数回しか子どもと交流していないことは、高齢者と子ども・孫との情緒的つながりが弱くなってきているとも考えることができる。

また、高齢者の家族間のつながりのほか、家族外の近隣とのつながりも変化している。『平成 29 年版高齢社会白書』によれば、60 歳以上の高齢者の近所付き合い程度は、「付き合いがない」（「あまり付き合いがない」と「全く付き合いがない」の計）と回答した高齢者は、女性 19.8%、男性 25.3%となっているが、平成 25 年版同調査では、同質問に対し、女性 4.8%、男性 5.4%を示しており、高齢者の近所との付き合い程度も急激に減少している傾向がみられる。

こうした高齢者の生活領域におけるつながりや支え合いの希薄化は顕在化しており、重要な社会的問題として認識されており、とりわけ、高齢者にとって家庭や社会での役割の縮小や喪失は孤独死をもたらすという懸念も高まっている。

これに対し政府の『高齢社会対策大綱』では、高齢者が社会の重要な一員として、生きがいを持って活躍できるよう、高齢者の社会参加活動を促進する整備を図るとしている。厚生労働省は、地域共生社会の実現に向けて従来の制度・分野ごとの「縦割り」や「支え手」「受け手」という関係を超え、地域住民や地域の多様な主体が「我が事」として参画し、人と人、人と資源が「丸ごと」つながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会を目指すことを提唱している。とくに地域共生社会の実現を目指す上では、支え手・担い手としての高齢者の役割が期待されている。実際に、共生社会の構築へ向け、高齢者と子ども・若者の交流・相互理解をねらった実践活動が多数行われてきている（大場 2014）。

ところが、高齢者は、地域における子ども・若者との交流活動を通じて生きがいを感じており、地域共生のために、子ども・若者に対する支え手・担い手になっているのか。『平成 29 年度版高齢社会白書』によれば、現在、社会貢献活動に参加している高齢者は約 3 割に過ぎず、特に、高齢者の 6 割が若い世代と交流したいと考えているものの、回答者の 31.7%が「交流機会の設定」の不足を訴えている。現行の生きがい対策は高齢者が実際の望む生きがいと乖離しているといえる（桑川・堀田 2006）。

## 第2節 研究目的と方法

### 1. 研究目的

本研究の目的は、高齢者の地域活動への参加を促進し、高齢者の生きがいを図ろうと取り組む地域において、高齢者が子ども・若者とかかわる活動に焦点をあて、交流の場で共有する時間や支援者によるかかわり支援のあり方が、高齢者の生きがいにどのような影響を与えるかを明らかにすることである。また、generativity（以下、ジェネラティヴィティと表記する）<sup>2)</sup>の視点から考察することで、高齢者の生きがいを促す支援のあり方や高齢者の生きがい関連対策について示唆を得ることである。

子ども・若者とかかわる地域活動が高齢者の生きがいに与える影響を想定する際に、図1のように直接子ども・若者とかかわりから影響を得られる「高齢者個人レベル」（ミクロ）、交流の場を設定する機関や団体等「地域社会レベル」（メゾ）、そして関連制度や施策として支援する「制度・政策レベル」（マクロ）がある。

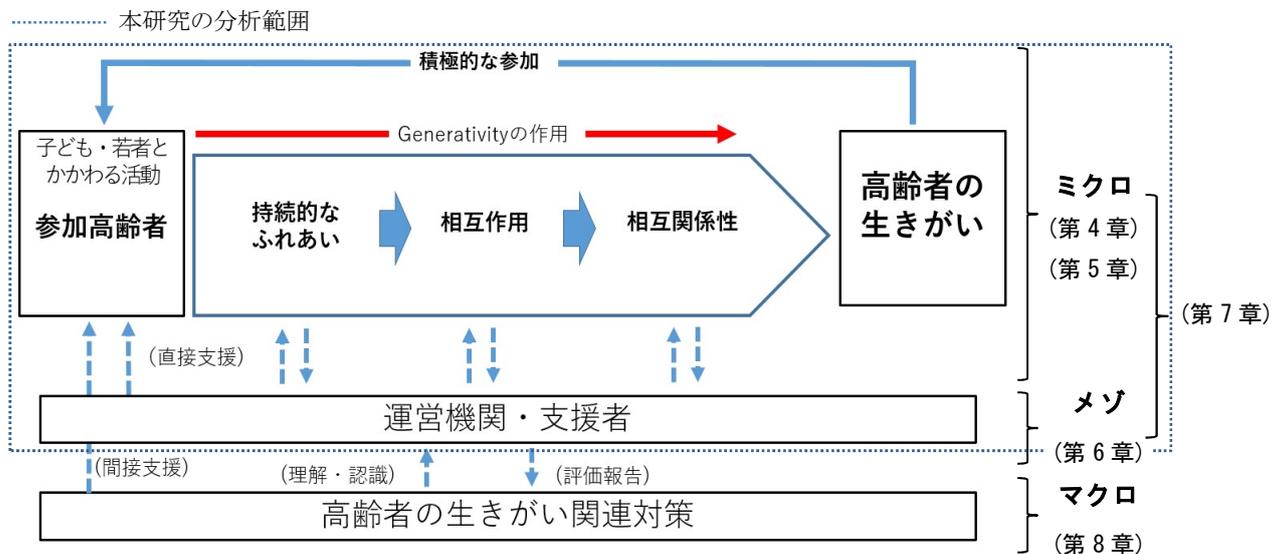
筆者の高齢者と子ども・若者とかかわりに関した韓国での調査結果及び日本での参与観察から、高齢者の子ども・若者との持続的なふれあいは、相互作用と相互関係を築き、かかわりへの積極的な参加<sup>3)</sup>の動機づけになるなど、子ども・若者とかかわりから得られる諸効果は高齢者の生きがいに影響を与えていることが見て取れた。とくに、高齢者と子ども・若者との相互関係を築き、促す媒体として高齢者のジェネラティヴィティがあげられる。次世代への関心や行動という意味であるジェネラティヴィティが、子ども・若者とかかわりのなかで十分に発揮されると、子ども・若者とかかわりから得られる高齢者の生きがいは豊かになると考えられる。

しかし、子ども・若者とかかわるすべての高齢者に生きがいへの影響がみられるわけではない。子ども・若者とかかわる時間やかかわり方によって高齢者への効果や影響は異なる。高齢者と子ども・若者とかかわる時間やかかわり方は支援者側が意図的に設定し介入するものである。つまり、支援者が高齢者と子ども・若者とかかわる時間をどのくらいに設定するのか、また、そこでかかわり方を参加者たちの自由意思に任すような自由交流の形とするのか、あるいはある程度のかかわり方に工夫をするのかによって、高齢者と子ども・若者との相互作用や相互関係性が異なり、高齢者のジェネラティヴィティの発揮及び高齢者の生きがいに影響すると考えられる。

しかし、従来、子ども・若者とかかわりから与えられる高齢者への影響は、ミクロ部分に焦点を当てどのような効果や影響があるかという検証が主流となっており、高齢者への効果や影響に至るまでの過程や、支援者のかかわり支援については十分に検討されているとは言い難い。

そこで、本研究では、主に「高齢者個人レベル」のプロセスを中心としつつ、高齢者の生きがい（ミクロ）の変容に機関や団体（メゾ）等「地域社会レベル」がどのような影響を与えているかを探ることを研究の分析範囲として絞る。そして、高齢者の生きがい関連「制度・政策レベル」は、高齢者個人レベルと地域社会レベルを分析する際の背景として検討する。

図1 子ども・若者とかかわる地域活動が高齢者の生きがいに与える影響の研究枠組み



以上のような子ども・若者とかかわる地域活動が高齢者の生きがいに与える影響の研究枠組みに沿って3つの研究課題を設定する。

- 研究課題1** 子ども・若者とかかわる地域活動に積極的に参加している高齢者を対象にインタビュー調査を実施し、ジェネラティビティの視点から、子ども・若者とかかわりが高齢者の生きがいへ及ぼす影響を明らかにする。
- 研究課題2** 高齢者と子ども・若者とかかわる地域活動を行う機関や団体の支援者を対象にインタビュー調査を実施し、子ども・若者とかかわる活動が高齢者にもたらす生きがいを促すために、支援者がどのような役割を果たしているかについて明らかにするとともに、研究課題1の結果と照合する。
- 研究課題3** 研究課題1と研究課題2の結果を踏まえ、高齢者が子ども・若者とかかわる活動や高齢者の生きがいに関連する対策を批判的に検討し、今後のあり方への示唆を得る。

## 2. 研究方法

研究目的に沿って設定した3つの研究課題を明らかにするために、各々研究課題における適切な研究方法を用いる。

地域における高齢者と子ども・若者とかかわる活動は、その目的や活動内容、交流形態、実施主体、交流活動やサービスの方向性などによって多種多様な交流の場が行われている。

「研究課題1」と「研究課題2」をより明確にするために、本研究における交流の場を分類する。まず、交流の場を構成する基本要素を見出すために、崔(2018)の韓国調査分析の結果及び日本での参与観察をふまえ、アメリカ、韓国、日本における高齢者と子ども・若者とかかわる活動に関する先行研究を検討した。その結果、血縁関係ではない高齢者と子ども・若者の交流には、両世代のかかわりができる空間や時間の共有とともに、両世代をつな

げる支援者の存在及び支援者による高齢者と子ども・若者とのかかわりへの関与程度が重要な基本要素として見出された。

交流の場を構成する要素として導出された「時間の共有」（ハード面）と「支援者によるかかわり支援」（ソフト面）を軸に類型化を試みる。類型化は、両軸の多少により4つの類型に分類される。具体的に、①時間の共有とかかわりへの支援者の支援が多い型（類型Ⅰ）、②時間の共有は多いが、かかわりへの支援者の支援が少ない型（類型Ⅱ）、③時間の共有とかかわりへの支援者の支援が少ない型（類型Ⅲ）、④時間の共有は少ないが、かかわりへの支援者の支援が多い型（類型Ⅳ）である。それぞれの類型に該当する高齢者と子ども・若者の地域活動を選定し、3か所での実証調査を実施する。類型Ⅰ～Ⅲは本調査から検証し、類型Ⅳは、最も当てはまると判断した過去に筆者が実施した韓国社会福祉館での調査データを用い、再分析を行う。

「研究課題1」を明らかにするため、類型Ⅰ～Ⅳに該当する子ども・若者とかかわる地域活動に参加している高齢者26名（類型Ⅰ：5名、類型Ⅱ：9名、類型Ⅲ：8名、類型Ⅳ：4名）を対象にインタビュー調査を実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下M-GTA）を参照して分析する。M-GTAの分析方法は、高齢者が子ども・若者とのかかわりから得られる影響のプロセスを明確にするために最も適切であると判断した。特に、高齢者と子ども・若者をつなぐものとして次世代への関心や行動を表す高齢者のジェネラティヴィティ理論がある。高齢者のジェネラティヴィティは、高齢者と子ども・若者のかかわりのなかで発揮され、高齢者への効果をより豊かにするといわれている。子ども・若者とのかかわりの過程で、どのような場面や場所で、高齢者のジェネラティヴィティが発揮されているかを検討することは、高齢者の生きがいへの影響を明確にするために重要な視点であると考えられる。

「研究課題2」を明らかにするため、類型Ⅰ～Ⅳの調査対象機関や団体における支援者のインタビュー調査を実施し、分析する。分析方法は、質的分析方法を参考にコード、サブカテゴリー、カテゴリーという順に行う。

「研究課題3」を明らかにするため、高齢者の生きがい関連政策が見られた1960年から現在までの文部科学省（旧文部省）、厚生労働省（旧厚生省）を中心に対策及び背景を検討することにより、高齢者と子ども・若者との交流事業が高齢者の生きがい対策の中にどのように意味付けられてきたかをジェネラティヴィティの視点から検討するとともに、今日における課題を示す。

以上、分析枠組みに沿った調査結果をそれぞれ4つの交流の場における高齢者の生きがいへのプロセスを検討し、共通点及び各類型における特徴について明らかにする。また、ジェネラティヴィティを発揮する高齢者の生きがいを促すための支援者によるかかわり支援について考察する。

### 第3節 用語定義

本研究において用いる「高齢者の生きがい」「子ども・若者」「高齢者と子ども・若者と  
かかわる地域活動」「支援者」「かかわり」「ジェネラティヴィティ (generativity)」と  
いう用語の意味について以下のように定義しておく。

「高齢者の生きがい」とは、現在の楽しみだけではなく、過去や現在を通して個人的かつ  
社会的に肯定的方向性、すなわち、次世代への関心や行動を持ち、共に生きていくことへの  
価値や志向であり、それに伴う生き方を含むものとする。

「子ども・若者」という用語は、『子ども・若者育成支援推進法』において明示している  
が、年齢区分に関する規定はない。同法の規定に基づき策定された「子ども・若者ビジョン」  
において、「子ども」とは、乳幼児期（義務教育年齢に達するまで）、学童期（小学生）及  
び思春期（中学生からおおむね18歳まで）の者とし、「若者」とは、思春期、青年期（お  
おむね18歳からおおむね30歳未満まで）の者としている。本研究では、『子ども・若者育  
成支援推進法』における「子ども・若者」の年齢区分を参照し、「子ども・若者」が示す範  
囲は、幼児から大学生までの年齢層であるが、幼児から大学生までの全体を示す際には「子  
ども・若者」と表記し、第4章の事例調査のような子ども・若者の中で特定の部分を示す際  
には、「幼児・小学生・中学生・高校生・大学生」という具体的な表記を用いる。

「高齢者と子ども・若者とかわる地域活動」とは、高齢者と子ども・若者をつなげる場  
を設定・提供し、高齢者と子ども・若者のかかわりに支援者によるかかわり支援がある活動  
を意味する。ここでいう支援者によるかかわり支援とは、高齢者と子ども・若者とのかかわ  
り方を意図的に設定する積極的な支援を意味する。

「支援者」とは、地域の福祉機関や団体に所属し、高齢者と子ども・若者との交流の場を  
設定・提供、あるいは、高齢者と子ども・若者のかかわりを促すかかわり支援を行う者であ  
る。

「かかわり」とは、高齢者と子ども・若者が空間と時間の共有するなかで、両世代の間に  
直接的な相互作用が発生していることを意味する。

「ジェネラティヴィティ (generativity)」は、Erikson (1950, 1963) による次世代を  
確立させ導く行動への関心という定義を踏まえ、「高齢者がもつ次世代への関心や行動」と  
する。そこには人生を先に歩んできた先輩として、次の時代を生きていく後輩に伝えて残し  
たい価値が含まれている。子育てや若者の養育への関与、子ども・若者とのかかわり地域活  
動、地域文化の継承、より良い社会のための関心や関与等を通してジェネラティヴィティは  
発揮される。また、子ども・若者とのかかわりによる高齢者の生きがいに役立つ。

### 第4節 論文構成

本研究は、序章と終章を含め、全11章で構成している。

序章では、本研究における背景（第1節）及び目的と方法（第2節）について示す。本研  
究の目的は、高齢者と子ども・若者がかかわる地域活動に焦点をあて、交流の場で共有する

時間や支援者によるかかわり支援のあり方が、高齢者の生きがいにどのような影響を与えるかを明らかにすることである。また、ジェネラティヴィティの視点から考察することで、高齢者の生きがいを促す支援のあり方や高齢者の生きがい関連対策について示唆を得ることである。研究目的を明らかにするため、「高齢者個人レベル」「地域社会レベル」高齢者の生きがい関連「制度・政策レベル」における研究課題を設定し、適切な研究方法を示す。また、本研究で用いる「高齢者の生きがい」「子ども・若者」「高齢者と子ども・若者とかわる地域活動」といった主要用語について定義を行い（第3節）、本論文の全体構成及び主要内容について概観する（第4節）。

第1章では、高齢者の生きがい及び高齢者と子ども・若者の交流に関する先行研究について検討する。高齢者の生きがい概念や構造の検討を踏まえ、地域の子どもの若者との活動のような公共圏での高齢者の生きがいの必要性について示す（第1節）。そして、高齢者と子ども・若者の交流効果や交流の類型に関する先行研究を検討し（第2節）、高齢者と子ども・若者の交流に関連した諸理論について概観する（第3節）。

第2章では、高齢者と子ども・若者の交流の関連理論の中で、高齢者と子ども・若者をつなぐものとしてあげられる高齢者の「ジェネラティヴィティ」は、子ども・若者への関心や交流への継続的な参加、子ども・若者との相互関係性の構築に関与しているという見解から、本研究における高齢者の生きがい変容を明確にするための重要な視点であることを示す。具体的には、心理社会発達論におけるジェネラティヴィティの概念について検討し（第1節）、高齢者の生きがいと高齢期のジェネラティヴィティとの関係性について検討する（第2節）。第1章と第2章の検討内容を踏まえ、本研究における3つの研究課題を設定する（第3節）。

第3章では、既存の類型化の限界や高齢者と子ども・若者をつなぐ支援者の視点の必要性を示し（第1節）、アメリカ・韓国・日本における交流の場を検討し、交流の場を構成する基本要素を見出し、類型化を行う。その上、本研究における調査対象の条件を示す。まず、意図的・計画的な世代間交流プログラムを提供するアメリカの高齢者と子ども・若者の交流について概観する（第2節）。次に、世代間の隔たりや葛藤という社会問題への対応としてあらわれた韓国社会福祉館における世代間交流について検討する（第3節）。そして、日本における世代間交流の展開過程及び多様な主体による世代間交流について検討する（第4節）。これらを踏まえ、交流の場を構成する基本的な要素を抽出する。「時間の共有」と「支援者によるかかわり支援」を軸として類型化を行う。その上、4類型それぞれの条件を満たす調査対象を選定する（第5節）。

第4章では、子ども・若者とのかかわりがジェネラティヴィティを発揮する高齢者の生きがいに与える影響を明らかにするために、4類型に参加している高齢者を対象にインタビュー調査を実施し、M-GTA分析法を参照し分析する。分析する際、McAdams and Aubin (1992, 1998, 2001) が示したジェネラティヴィティの展開過程及び要素を参考にする。まず、参加高齢者へのインタビュー調査の目的及び調査・分析方法等の調査概要について説明し（第1節）、第2節から第5節にかけて4つの類型毎における分析結果について記述する。な

お、本章は、高齢者に焦点を当てた調査であるが、子ども・若者との相互作用・相互関係性を前提としているため、各類型に参加している子ども・若者の感想の声も聞き取り、各節の導入部に紹介する。

第5章では、参加高齢者の生きがいを客観的なものとして示し、類型や男女による生きがいの差を明らかにするため、高齢者のインタビュー調査から収集された生データを用い、参加高齢者の生きがい感の数值化を試みる。参加高齢者の生きがい感を数值化する目的や方法、用いる尺度の構成等、生きがい感の尺度調査の概要について説明する（第1節）。作成したジェネラティビティを含む高齢者の生きがい感の尺度を用い、測定・分析した結果を示す。類型別の得点分布の特徴や質問項目別の得点傾向、男女による得点特徴について示す（第2節）。また、生きがい感の高得点を獲得した高齢者を対象に、質問項目に該当した語りを再検討し、共通する特徴について明らかにする（第3節）。

第6章では、4つの類型の支援者が高齢者にもたらす生きがいを促すために、どのような役割を果たしているかを明らかにする。各類型における支援者へのインタビュー調査を実施し、質的分析法を用いその結果を示す。まず、支援者へのインタビュー調査の目的及び分析方法等の調査概要について説明し（第1節）、第2節から第5節にかけて4つの類型毎の結果について記述する。

第7章では、第4章と第6章で見出された調査結果に基づき、高齢者の生きがいと支援者によるかかわり支援の関係性について検討する。4つの類型毎に、高齢者の生きがいプロセス（関心段階、関心段階と行動段階をつなぐ境界、行動段階、意味段階）における支援者によるかかわり支援を照合し、どのような支援が行われているかを検討する。各類型において検討した結果を第1節から第4節にかけて記述する。その上、上記で示した4つの段階項目と4つの類型のマトリックス表を作成し、類型毎の共通点や相違点について検討する（第5節）。

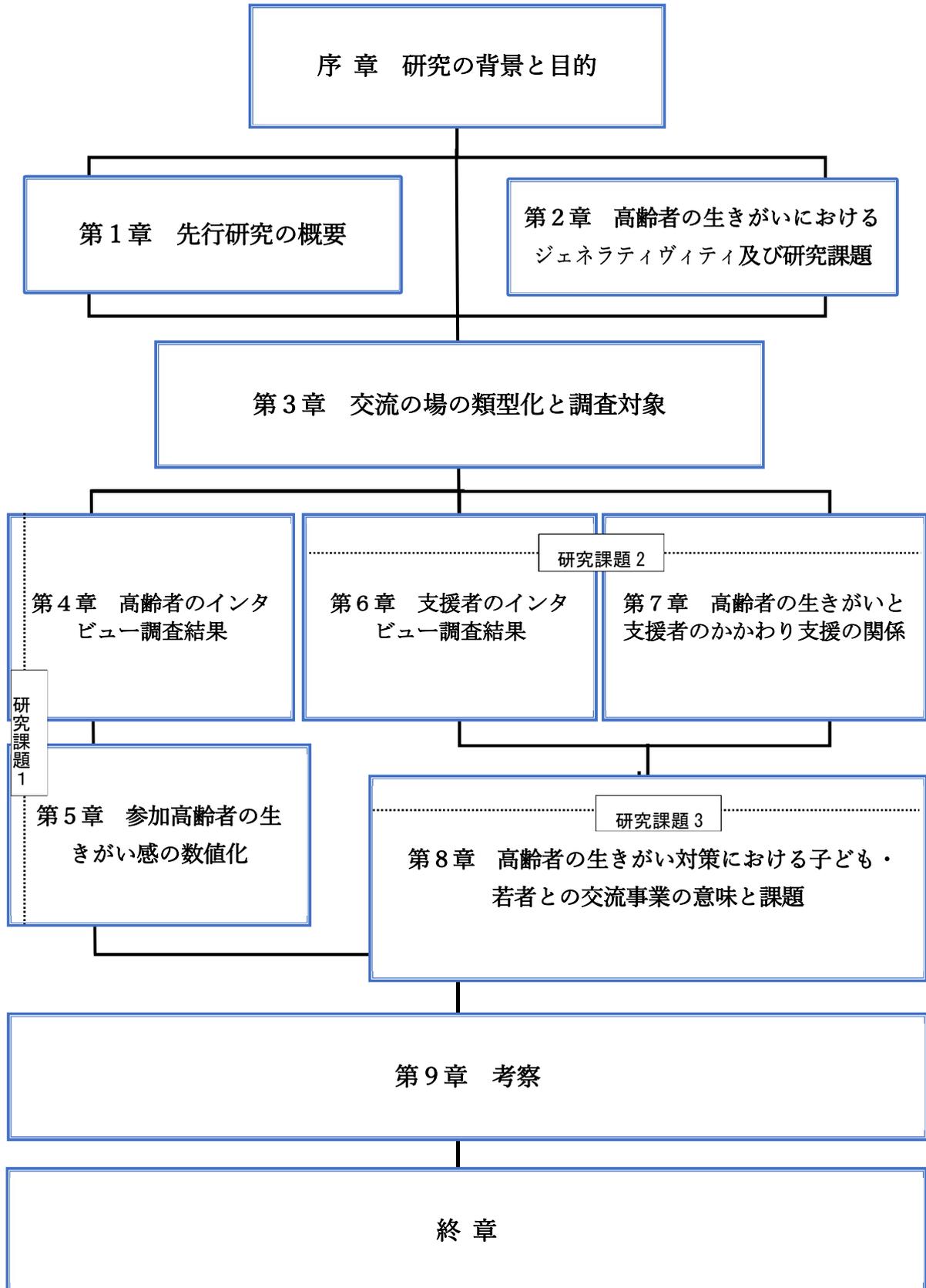
第8章では、日本における高齢者の生きがい対策の中で、子ども・若者との交流事業は拡大されているものの、なぜ、高齢者と子ども・若者をつなぐ支援者の役割やかかわり支援は重視されていないのか。高齢者と支援者の調査結果を踏まえ、高齢者が子ども・若者とかわる活動や高齢者の生きがいに関連する対策を批判的に検討し、高齢者の生きがい対策の展開の中で高齢者と子ども・若者の交流事業の意味付けや課題について検討する。1960年以降、主に文部科学省（旧文部省）や厚生労働省（旧厚生省）を中心とした高齢者の生きがい対策の展開動向を概観する（第1節）。その上、高齢者と子ども・若者の交流活動は高齢者の生きがい対策の展開のなかでどのように位置付けられ、拡大されてきたのか。また高齢者が子ども・若者への関心や行動が十分に発揮できる場になるために、高齢者の生きがい対策における課題について検討する（第2節）。

第9章では、第1章から第8章にわたり行った高齢者の生きがいや高齢者と子ども・若者の交流に関する先行研究の検討、参加高齢者及び支援者のインタビュー調査の結果等を踏まえて総合的に考察する。第1節では高齢者個人レベルを中心に、第2節では地域社会レベル、第3節では制度・政策レベルについて考察する。具体的に、高齢者個人レベルで

は、子ども・若者のかかわりから高齢者の生きがいに至るまでのプロセスや、各類型における特徴、男女によるジェネラティヴィティの様相、今日におけるジェネラティヴィティの意味等について考察する（第1節）。地域社会レベルでは、類型化の特徴や意味、高齢者のジェネラティヴィティが発揮できる支援者によるかかわり支援について考察する（第2節）。そして、制度・政策レベルでは、子ども・若者とのかかわり活動を通して高齢者の生きがいを促すためには、交流の場での支援者によるかかわり支援のみでは限界があり、高齢者の生きがい対策による後押しが求められることを示す。その上、交流の質を向上しつつ拡大してきたアメリカの世代間交流プログラムの展開から、今後、子ども・若者とのかかわる活動においてジェネラティヴィティを発揮する高齢者の生きがい関連対策への示唆を得る（第3節）。

終章では、本研究の結論と意義について述べる。第1章から第9章まで各章において明らかになった点について整理し、それを踏まえた本研究の結論について示す（第1節）。最後に、学術的・実践的・政策的面における本研究の意義について示し、本研究の限界と今後の課題について述べる（第2節）。

論文構成図



## 第1章 高齢者の生きがい及び高齢者と子ども・若者の交流に関する先行研究

### 第1節 高齢者の生きがい

#### 1. 高齢者の生きがいと類似概念

「生きがい」とは何か。生きがいという言葉は日常生活でもよく使われているが、その意味について簡単には説明できない。辞典で生きがい（生き甲斐）を調べてみると、広辞苑では「生きるはりあい。生きていてよかったと思えるようなこと」と表している。また、大辞林では「生きるに値するだけの価値、生きていることの喜びや幸福感」と説明している。長谷川ら（2001：147-148）は、「生きがいという言葉は日本独特の意味を持っており、外国語に翻訳する事が難しい言葉である。あえて英語で訳すならば self-actualization(自己実現)や meaning of life(人生の意味), purpose in life (人生の目的) となり、日本語の生きがいは様々な概念を包括している」とした。

石井（1996：94）は、生きがいについて、日常的用語で分かりやすいが、主観的幸福感と比較してその意を検討すると将来への指向性が強いとした。また、熊野（2003, 2006）は、生きがいの定義に関して学問的な合意はまだ至っていないと指摘し、生きがいと類似概念との構造検討を試みた。類似概念として QOL, 主観的幸福感, 心理的ウェルビーイングをとりあげ、生きがいと類似概念間の共通性と独自性を明らかにした。各概念の共通点として人生肯定があり、人生肯定を核とする多層的な構造に構成されていることを示した。具体的に、QOL は、人生肯定に加え、身体健康から構成されており、主観的幸福感は、人生肯定に加え、ポジティブ感情やネガティブ感情という感情の要素から構成される。また、心理的ウェルビーイングは、人生肯定に加え、目標・夢という生きがいの中心的な要素と、自己決定力、自己成長、環境対応力、他者との親密性から構成されている。つまり、QOL と主観的幸福感は、現在の状態に焦点を当てている概念である反面、生きがいは、未来に向かう気持ちや価値意識を重視している概念である。一方、心理的ウェルビーイングは、環境制御力等の次元からも捉えており、生きがいよりも幅広い内容を含む概念であることを明らかにしている。

生きがいの辞典的な意味とともに、類似概念との関係性について検討から、生きがいとは、人が生きていくことへの価値や肯定的意味を指すものであり、精神的な安定や安寧を求めるものである。特に、高齢者の生きがいは、高齢者個人に生きる価値や意味を与える意味として極めて重要な概念である（青木 2015）。生きる価値や意味は、高齢者が生きてきた過去から現在、そして少し先の未来まで、その影響を与えていると考えられる。

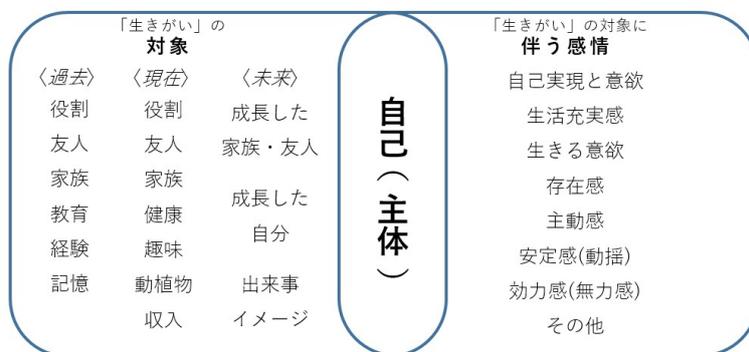
#### 2. 高齢者の生きがい構造

生きがいに関する研究の中で神谷（1966）による『生きがいについて』は最も体系化された研究のひとつであると評価され多くの研究者が神谷による生きがいの体系化を基に研究を取り組んでいる。神谷（1966）は、生きがいを生きがいの源泉や対象となるものを指している場合と、生きがいを感じている精神状態を意味するときの 2 つの要素に分けて考えている。その根底には次のような 7 つの欲求、すなわち①生存充実感への欲求、②変化への欲

求, ③未来性への欲求, ④反響への欲求, ⑤自由への欲求, ⑥自己実現への欲求, ⑦意味と価値への欲求があると論じていた。

こうした生きがいの源泉や対象, そして生きがい感という 2 つの要素を基に生きがいの概念を整理した長谷川 (2001, 2003) を中心とした研究により高齢者の生きがいの構造が提示された。長谷川ら (2001) は, 2001 年までに発表された国内外の高齢者の生きがい関連研究 50 余件の文献検討を通して, 研究の成果を整理し, 生きがいの定義について新たに概念要素を整理した。長谷川ら (2001) は, 生きがいとは, あなたの生きがいは何かと尋ねられた時に, その人が過去の経験, 現在の出来事, 未来のイメージといった「生きがいの対象」を心に思い浮かべ, 同時に伴って湧いてくる自己実現と意欲, 生活充実感, 生きる意欲, 存在感, 主動感といった種々の感情, つまり, 「生きがいの対象に伴う感情」を統合した自己の心の働きである。この生きがいの定義において自己すなわち主体が今ここに存在し, 生きがいが生じてくる対象, つまり「対象」とそこから生じる気持ちすなわち「伴う感情」を設定した。この定義の大きな特徴は, 生きがいを対象と伴う感情に分けて考え, 対象に時間軸を組み入れたことである。この対象での時間軸を入れた理由は, これまで生きてきた過去の対象や少し先の未来における事象という一連の時間経過の中にいるからである。このことが他の世代とは生きがいへの対象が異なってくると予想される (長谷川ら 2001:151-152)。

図 1-1 生きがい構成要素



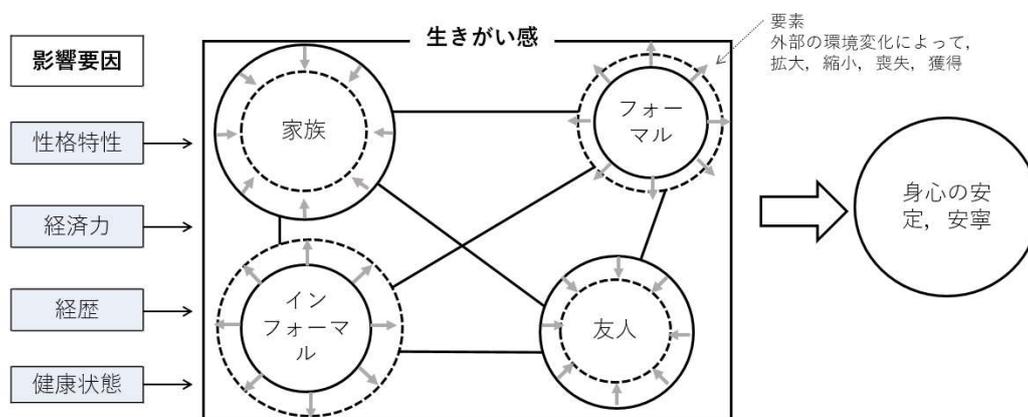
出所: 長谷川ら (2003:66) 「「生きがい」の構造—「生きがい」の対象と伴う感情の共分散構造分析—」

また, 高崎と日隈 (2008) の研究では, 高齢者の生きがいを身心の安定・安寧とし, 高齢者の生きがい感は家族, 友人, フォーマル活動 (仕事, 奉仕活動, 地域役員等), インフォーマル活動 (学習, 趣味, 娯楽等) という 4 つの要素から構成されるとした (図 1-2)。各要素は独立した存在ではなく, お互いに複雑に関係している。また, 各要素は要素同士の変化や外部の環境変化に伴って拡大, 縮小, 喪失, 獲得といった変化が行うとした。さらに高齢者の生きがい感の構造の形態に影響を与えている要因としては高齢者個人の性格特性や経済力, 経歴, 健康状態などがあげられるが, 多くの高齢者が生きがい感を家庭を中心とした比較的狭い日常生活圏内で感じている傾向が強いと指摘している (高崎・日隈 2008:255-256)。このような指摘は, 『平成 27 年 (2015) 度第 8 回高齢者の生活と意識に関する国際

比較調査』の結果から確認できる。調査項目の中で「生きがいを感じるのはどのような時か(複数回答の割合)」という質問に対し、「子どもや孫など家族との団らんの時(46.9%)」の割合が一番高く、次が「趣味に熱中している時(42.7%)」である。これは第6回(2005年)と第7回(2010年)の調査結果と同じである。その次に、「おいしい物を食べている時(41.3%)」や「友人や知人と食事、雑談している時(38.5%)」の順になっている。一方、「社会奉仕や地域活動をしている時(8.6%)」や「若い世代と交流している時(9.5%)」の項目に対しての割合は低い。

同項目に対してのアメリカの結果をみると、アメリカも「子どもや孫など家族との団らんの時(68.7%)」や「友人や知人と食事、雑談している時(58.5%)」における生きがいの割合が高く占めているが、「社会奉仕や地域活動をしている時(28.8%)」や「若い世代と交流している時(38.4%)」における割合も相当の割合で占めていることがみられる。この調査結果から、アメリカの高齢者は、家族や友人といった日常生活圏を中心に生きがいを感じながらも、その他、地域活動等のインフォーマルにおける生きがいも得られていることが見てとれる。一方、日本の高齢者は、家族や友人を中心とした生きがいのほか、地域活動や他人との交流等のインフォーマルにおける生きがいは、複数回答であることを鑑みると、その割合は非常に低いということが考えられる。また、家族や友人といった日常生活圏を中心とした生きがいの傾向は、根強い反面、5年前の第7回調査結果より減少している。

図 1-2 構造と機能からみた高齢者の生きがい感



出所：高崎と日隈(2008:255)「高齢化社会と地域福祉(15)―高齢者の生きがい研究の地平―」をもとに作成、点線の円、円の中の矢印は筆者による追加

以上のように、長谷川らによる生きがい構成要素の検討から高齢者の過去と現在、そして未来にわたる生きがいの対象及びそれに伴う生きがい感の具体的な要素が提示された。また、高崎と日隈の生きがい感は生きがい対象を家族、友人、フォーマル活動、インフォーマル活動に分けてみている。長谷川らが個人の日常生活圏を中心として生きがいをみている反面、高崎と日隈は、フォーマル活動、インフォーマル活動も高齢者の生きがいを得られる要素として取り上げている。高崎と日隈が指摘したように、従来の高齢者の生きがいは、高

高齢者の家族や身近の友人関係または健康づくりに注目していた。高齢者単身世代や高齢者夫婦世帯の増加など、家族形態が変化しているなか、既存の高齢者の生きがいの対象も大きく変化していくと予想される。図 1-2 の点線のように、家族や友人から得られた生きがい感は段々縮小していき、その代わりにフォーマル活動やインフォーマル活動が、もう家族から得られない生きがい感を補う機能が期待されると考えられる。とりわけ、地域における行事や講演会、あるいはボランティア活動、多世代の交流活動のような非定型であるが、もう少し意識的に踏み込んでいる活動（原田 2016：264-265）<sup>4)</sup>における生きがいへの期待が求められる。

### 3. 本研究における生きがい

従来、高齢者の生きがいの対象である家族の形態は縮小し、その機能は弱化しつつある。核家族、高齢者の単身や夫婦のみの世帯が増えている中で、高齢者は、日常生活において子どもや孫とのかかわりは減少し、家族から生きがいを感じることは、極めて難しくなっている。家族形態の変化に伴って高齢者と子ども・孫との交流の減少現状は、今後、さらに家族からの生きがい感を期待しがたくすると思われる。

家族を中心とした生きがいの縮小の代替として、公共圏において若い世代との交流を通して高齢者が祖父母のような役割を持ち、持たせることが考えられる。高齢者は、若い世代との交流を通して多様な感情を得られている。多数の研究から若い世代との交流による高齢者への効果や影響が検証されている。これについては、第2節で詳しく述べる。

以上、高齢者の生きがいと類似概念及び高齢者の生きがい構造の検討を踏まえ、本研究では、生きがいを得られる構造のなかで、公共圏に焦点を当てることにする。公共圏とは、上記に述べたように、制度にかかわる系統的、構造化されたフォーマル活動とインフォーマルの中でも家族や友人との関わりに密接している個人の日常生活圏との間に存在する非定型であるが、もう少し意識的に踏み込んだ他人や社会とのつながっている領域であるといえる。なお、本研究における高齢者の生きがいとは、現在の楽しみだけではなく、過去や現在を通して個人的かつ社会的に肯定的方向性、すなわち、次世代への関心や行動を持ち、共に生きていくことへの価値や志向であり、それに伴う生き方を含むものと定義する。

## 第2節 高齢者と子ども・若者との交流効果

### 1. 高齢者と子ども・若者の交流について

#### 1) 世代間交流の実践動向

少子高齢化、核家族化、家族形態の多様化などの社会変動により従来無意図的に育まれてきた高齢者と子ども・若者の交流が激減し、世代間の隔離や断絶が顕在化したことは、Intergeneration（世代間交流）という概念が成立・発展してきた社会的背景としてあげられる。この概念は、1960年代半ばに青少年と高齢者への意図的・社会政策的として教育的働きかけという意味合いを含め、米国から用いられるようになった（間野 2004）。

日本においては1960年代の産業構造の変化により都市化、過疎化、家族変態の変容に現

れたため、自然発生的な世代間交流が地方にも都市にも生まれてきた。1970年代に老人クラブの高齢者と保育園児や小学生との間に季節の行事や誕生会などを行われたもので、その数はまだそれほど多くはなかったが、その中には学校を中心とした取り組みも少しずつ実践されていた(草野ら 2004)。1980年になってから、一定の社会的意図をもった世代間交流という用語が使われるようになった。代表的に、社会福祉協議会によって、中学生が高齢者を友愛訪問する活動や児童館・老幼館などでの世代間交流事業があげられる。また、高齢者福祉施設と保育所の建物の合築による世代間交流という新たな試みも行われていた(草野 2004: 中野 2007: 柿沼 2010)。世代間交流の実践が全国的に拡大されたのは、1980年代後半、包括的高齢者対策としてあげられた「長寿社会対策大綱」に含まれてからである。当初、高齢者の世代間交流にかかわる事業は、長寿社会対策大綱の「学習・社会参加」に位置付けられ、生涯学習の一環として展開されたが(斉藤 1994)、2000年代になってからは、少子化対策として地域の子育て支援や学校の教育支援の中でも実施されるようになった。また、2010年代からは、高齢者や子ども・若者といった世代間の交流の断絶への社会的な関心が高まり、この問題を克服するため福祉、保育や教育、地域づくりなど様々な分野において世代間交流の実践が行われてきている。特に、近年では、地域における世代間の共生・共益を狙った世代間交流の機会や取り組みが注目され増えつつある(藤原 2010)。

## 2) 世代間交流の定義・概念

世代間交流に関する最初の定義は、アメリカの全国エイジング評議会によるもので、「二世代間の協力、相互作用または交流を促進する活動やプログラム」であった(Thorp 1985; カプラン 2004)。現在、日米においては、国際世代間交流協会(1999)による「高齢者と青少年の間で互いの能力や知識を意図的・継続的に交換し合う社会的媒介」という定義が多く用いられている(カプラン・ヘンケン・草野 2002)。なお、国際世代間交流協会の定義における「意図的・継続的に交換し合う社会的媒介」が意味するところについて、草野(2004)は、「自分周りの人々や社会に役に立つような健全な地域づくりを実践する活動で、一人一人が活動の主役になることである」としながら、世代間交流を通じた地域づくりを強調している。上記の国際世代間交流協会と草野による定義から、世代間交流は、異世代が主体的に互いの能力や知識を意図的・継続的に交流し、理解していくことであると整理できる。また、定義から世代間交流による効果や影響を鑑みると、参加者個人への影響とともに、地域への影響も考えられる。

## 3) 世代間交流の類型

世代間の交流とは、さまざまな活動を通してそれぞれの異なった歴史的体験を学び、心理的交流によって社会の幅をひろげ共通の文化を創造する営みといえよう(斎藤 1997)。世代間交流の定義自体が極めて幅広いものであるが、この幅広さが世代間交流の特徴である。世代間交流という名のもとに多種多様な研究・実践が行っているが、いくつかの観点からこれらを分類することができる(柿沼 2010: 37)。具体的に、①サービス提供者と対象者による分類、②子育てや学力向上、健康増進、生きがい、文化継承といった目的による分類、③遊びや話し合い、季節行事、授業支援、地域ボランティアといった活動内容による分類、④

行事参加や共同作業, 施設訪問, 体験といった形態による分類, ⑤保育園, 幼稚園, 学校(小・中・高), 大学, 施設といった実施主体による分類等である(柿沼 2010: 38)。その中でも, 世代間交流の活動・サービスの方向性による分類がよく言われている。交流活動やサービスの方向性からみると, 次の3つに類型化される。一つ目は, 高齢者が子どもや若者に行う活動・サービス, 二つ目は, 子どもや若者が高齢者に行う活動・サービス, 三つ目は, 両者が一緒になって行う活動・サービス(McCrea & Smith 1997:81-93;小笹 2004: 48)に分けられる。アメリカにおいてもそうだが, 日本においても高齢者と子ども・若者の両者が一緒になって行う活動・サービスが注目されている(小笹 2004: 49)。表 1-1 は, 世代間交流の活動・サービスの方向性による分類に該当する活動の例を挙げているものである。

表 1-1 世代間交流の活動・サービスの提供者と対象者

提供者 対象者	高齢者	若者	子ども	双方向
高齢者		施設・家訪問	施設訪問	おまつり 地域活動 伝承遊び
若者	ライフヒストリ			
子ども	読み聞かせ	授業支援		

出所：柿沼(2010: 37)『世代間交流学の創造』

具体的に高齢者が子どもや若者に行う活動・サービスとしては, ライフヒストリーや絵本などの読み聞かせ活動が挙げられる。次の類型として子どもや若者が高齢者に行う活動・サービスは, 施設訪問や家訪問などがある。最後に両者が一緒になって行う活動・サービスとしては, おまつり・地域活動・伝承遊びが挙げられる。どのような交流活動も大なり小なりこれら3つを要素として含んでいる(小笹 2004: 48)。

しかし, カプラン(2004)は, こうした3つの分類方法に傾倒してきたとし, 次のようなことを指摘した。ある集団がサービスの供給側と分類された場合でも, 他の年齢集団のメンバーから恩恵を受けることや誰かがサービスの与え手であるかに基づく区分は, もともと分類目的で関心を集めた人為的なものに過ぎないこと, また, コミュニケーションや関係形成の異なるレベルの機会を生み出すプログラムを十分に区別しえない課題があるとしている。彼は, 交流の中での互惠性を強調し, 世代間現象のもう一つの分類方法として「世代間関与の深さ」を提示した。「世代間関与の深さ」を1から7までの尺度から測定する方法である。「関与の深さ」の尺度はプログラムや事業を連続したものとしてとらえ, レベルの異なる世代間関与に対応するポイントが付けられる。ポイントは, 世代間で直接の接触が全く存在していない取り組み(尺度のポイント1)から親密度を深めるために頻繁な接触や継続的な機会を促進する取り組み(尺度のポイント7)まで変動する。

一方, もう一つの分類としては, 交流の方法による分類があげられる。世代間交流には,

直接対面での「直接交流」と、視覚や聴覚等を通した「間接交流」がある。直接交流は、交流への意図の有無によって「企画交流」と「自主交流」に分けられる。また、自主交流には、自然な出会いによる「偶発交流」と、偶発性のない能動的行動によって発生する「自発交流」に区分される（パク 2008 : 138 ; パク・アン 2012 : 74）。

世代間交流の多様な類型化の検討から気づいたことは、世代間交流をどのような目的や内容にするか、高齢者や子ども・若者の中でどちらをサービスの提供者あるいは対象者とするかが、世代間交流の支援側によって決まっていることである。もちろん、上記で示した自主交流の場合のように、高齢者と子ども・若者の間で自然に発生するものもある。

本研究では、高齢者や子ども・若者のある側が提供者になり、対象者となる関係性から脱し、提供者（する側）と対象者（される側）の関係ではない対等な位置の参加から双方向が想定される地域活動に注目する。

## 2. 高齢者と子ども・若者の交流の効果

### 1) 子ども・若者への効果

かつて子ども・親・祖父母といった多世代家族において世代間の交流は日常的に行われていたものであったが、都市化や核家族化への進展につれて、家族や社会において世代間の交流の機会は減りつつある。異世代間の交流が少なくなっている現状は、特に子どもにとって、世代の異なる人の気持ちを思いやり、社会性を育む機会が失われていることから、保育や教育領域において高齢者とのふれあいやかかわりが注目され、多く実施されている（村山 2009 ; 關戸 2006）。国内外においても高齢者とのかかわりが子ども・若者に与える効果や影響に関する研究は、数多く報告されている。その内容を未就学の子ども、小学生、中高生、大学生に分けて検討してみる。

まず、未就学の子どもへの影響については、高齢者の存在をありのまま認識・受容（關戸 2002 ; 王 2016）、知識や知恵の継承（關戸 2002）、他者への思いやりやコミュニケーションの発達（上村ら 2007）が報告された。次に、小学生における影響としては、高齢者への尊敬や老いの理解、支え合い、自尊心（中野 2007）が報告された。また、小学生の高齢者へのイメージは、自身の経験に影響され、成長とともに低下するが、高齢者との継続的な交流を通して肯定的なイメージが維持されるとした（藤原ら 2007）。中高生における影響としては、社会化のスキルの向上や高齢者への理解、対人関係の学習（Jones 2004）、高齢者に対するポジティブなイメージ向上（中村 2014）、青少年の自尊感情の向上や学業への関心向上（間野 2014）が報告された。大学生・院生への効果については、自己効力感の上昇（末田 2009）、黒人高齢者に対する差別の歴史を理解や友情関係（Fletcher 2007）、多様な人間関係の体験やコミュニケーション能力の向上、人と接することの大事さ、高齢者と交流の価値認識（加藤 2015）などが報告されている。

また、子どもの年齢による交流の目的をみると、小学生や中学生における交流の場合は、高齢社会での子どもの健全育成や社会性の発達が主な目的として挙げられており、高校生や大学生においては、看護、栄養、福祉、保育などの将来の職業に関係する人材育成の過程

として行われている。

また、子ども側の年齢層による子ども側の受け方や変化の違いについての検討は多数行われている。イ（2004）は、韓国における世代間交流プログラムを計画・実施するにあたって、適切な時期とともに、戦略的な方法を提案するため、中学生・高校生・大学生がそれぞれ高齢者に対するイメージの違いについて検討した。量的調査の結果、年齢が上がるにつれて高齢者に対するイメージは否定的な傾向があり、メディアや親との会話を通して高齢者に対する情報を習得していることが共通していた。具体的に、高齢者に対するイメージ形成に影響している要素は、中学生の場合はテレビによる影響が大きいこと、高校生は友たち同士の中で高齢者に対する問題への関心程度、大学生は高齢者と一緒にした経験や高齢者問題に対する関心程度があげられている。また、祖父母と親密な関係であった場合、肯定的なイメージを持っていることが示されている。

一方、柴田（2015）は、日本における小学生・中学生・高校生の高齢者に対する行為やイメージに関する調査を実施した。高齢者に対する行為への発達的变化は、小学生でやや否定的であったものが、年齢が上がるとともに肯定的になるとした。その背景には学校での高齢者とのかかわりや学習が影響しているとみている。また、高齢者に対するイメージは、いくつかの項目に分けて検討している。具体的に、高齢者の行動的・活動的な姿勢を表す項目では、中学生の方が小・高校生よりもやや肯定的に評価しているが、有能さ（内面）を表す項目と審美性（外面）を表す項目では、中学生の方が否定的に評価している。また、温和性（内面）を表す項目では、学年間の変化は示されていない。こうした結果から、学校は子ども側のそれぞれの発達段階において、人々との交流や様々な活動の機会を提供し、他者を尊重する態度や尊敬する気持ち、他人を思いやる心等を身に付けていくことが必要とされるとしている。

以上の諸研究の結果検討から、小学生・中学生・高校生・大学生によって高齢者に対するイメージは少し異なることはあるが、祖父母を含む高齢者との交流を通して高齢者へのイメージが肯定的に変わることが把握された。また、高齢者との交流による子ども・若者への影響は、子ども側の年齢層にかかわらず、同様の効果や影響がみられている。要するに、子ども・若者は、高齢者とのかかわりを通して、加齢や高齢者に対する理解、高齢者に対するイメージの改善、考え方や行動への影響、自信や自尊心の増加、社会的スキルの向上、他者への信頼の向上など（今井ら 2012：38-41）が効果として期待されている。

## 2) 高齢者への効果

優れた世代間交流はすべての世代、家族、コミュニティに恩恵をもたらすことができる。子ども・若者は、高齢者から特別の配慮や慈しみ、指導を受けることにより、幸福感、学業成績、登校率、快活さ、高齢者に対する態度などが向上するようになる。また、高齢者にとっては、将来を担う世代と自分のスキル、知識、経験を分かち合い、コミュニティとのつながりを保ち続ける機会を持つことにより、人生の満足度、社会的と孤立、全般的な健康に関してよい効果をもたらすことがある（ヘンケン 2004）。

村山ら（2017）は、保育所と認知症グループホームを合築した幼老複合施設における世代

間交流の効果について検討し、高齢者の行動や心理状態の安定に寄与していることを報告している。具体的に、高齢者は、子どもとの自然発生的な世代間交流を通して、自らの健康づくりの機会になる「自己充足感」、子どもから元気や刺激をもらう「高揚感」、子どもと一緒にいると安心する「和み・癒し」、自らの子どもの時代や自分の育児体験を振り返る「回想」機会になっていることを明らかにしている。

一方、Newman and Hatton-Yeo (2008) は、学校における世代間交流プログラムを強調し、高齢者が学校における子どもに対する学習支援や、子ども・若者と一緒にする学習プログラムに参加することは、現代の子ども・若者に対する理解を高め、子ども・若者の学習や成長を支援する役割を果たすことであるとしている。これらを通して生活への充実感や子どもの教育への関心が増加しているとした。さらに、社会における高齢者の価値を再確認することへつながるとした。また、Roodin et al. (2013) は、最近の研究結果を取り上げながら高齢者学習における世代間交流プログラムの効果について検討しているが、Newman and Hatton-Yeo の検討結果に似通っていることが分かる。高齢者は、交流を通して、子ども・若者に対し、肯定的な感情や刺激を受ける。青少年を理解する機会となり、高齢者と子ども・若者は、共同体の関係であり、その認識の必要性について気づいている。また、高齢者の生活の質が向上していると感じている。その他、国内外の多数の研究から子ども・若者との交流が高齢者にとって肯定的な効果や影響を及ぼすと報告されている。具体的に、主観的健康感、自己実現、有用感、役割の獲得、自尊心、QOLの向上、抑うつへの低減効果、生きがい感、世代継承性（ジェネラティヴィティ）の増加、若い世代への理解、人間関係の広がり及び地域共生意識の向上等があげられる（Friedman1997;藤原ら 2006;Cheng2009;Bostrom2009;亀井ら 2010;糸井ら 2012）。

世代間交流における高齢者の効果や影響に関する研究では、高齢者への効果や影響の検証に傾倒している。実際に行っている世代間交流には、シニアボランティアや福祉施設の入所者といった様々な立場の高齢者が参加している。また、子ども・若者の年齢層も幼児から小・中・高・大学生まで広がっている。特に、子ども・若者の年齢層による高齢者側への効果や影響に関する研究はほとんど見当たらず、子ども・若者の年齢層によって高齢者との交流の内容や方法等が異なり、高齢者が得られる効果や影響も少しずつ異なると思われる。上記の「1）子ども・若者への効果」において整理した内容から推察してみると、幼児のような低年齢層では「癒し」等の感情が得られる傾向があり、高校生や大学生といった高年齢層では「若い世代や若者文化への理解」等が得られる傾向がみられる。また、子ども・若者の年齢階層にかかわらず、「元気や刺激になる」ことや、「過去を回想する機会」になっていることは、共通していることがよみとれる。

### 第3節 高齢者と子ども・若者の交流の関連理論<sup>5)</sup>

#### 1. 理論に基づく方法論の必要性

前節において示したように、国内外の多数の研究から高齢者と子ども・若者との交流が両

世代にとって肯定的な効果や影響を及ぼすと報告されている。しかし、そうした効果を得るためにどのような交流の場を設定すれば良いかについては明らかにされていない。糸井ら (2012) は 2001 年から 2010 年に発表された文献レビューを通して地域において高齢者と子どもの交流に関する効果的な介入と効果を検討した。彼らは、世代間交流において対象者の年齢やニーズによって何が目的とされるべきかを明確にするとともに、異世代への理解を含めた接し方等の事前教育が重要であるとしながらも、根本的には理論に基づく方法論の確立が必要であるとしている。世代間交流において理論に基づいた方法論の不在については多数の研究者が指摘している (Fox et al. 1993; VenverVen 2004; Kuehne & Melville 2014)。なぜ、理論に基づいた方法論を求めているのか。その必要性について Kuehne and Melville (2014) は、世代間交流の企画・運営・評価にあたって理論を用いることはその方向性を導いてくれることから最も重要であり役立つと述べている。

Kuehne and Melville (2014) は、世代間交流研究においてどのような理論が用いられてきたかを検討するため、研究誌や学会誌などが蓄積されているデータベースを活用し、2003 年～2014 年過去 10 年間に於ける文献をレビューした。最初ヒットされた文献 1231 件のなかでは、理論的根拠が示されていないものも多く、論文のなかに理論的根拠が示され、研究の方法論においても理論に基づいて展開されている論文、56 件を最終対象論文とした。

Kuehne らは、文献レビューを 2 つの視点から大別している。第 1 に、個人と集団における相互作用の視点、第 2 に、個人発達に焦点をあてた視点である。まず、個人と集団における相互作用に焦点をあてた理論としては、接触理論やソーシャル・キャピタル理論、社会組織の視点とコミュニティ能力の枠組み、行動学習理論、関係理論、世代間交流のコミュニケーション理論、エンパワーメント理論、ヴィゴツキー理論が用いられていた。一方、個人の発達に焦点をあてた理論としては、人間発達理論や人格理論、プログラム評価を基盤とした概念化などが用いられていた。そして、56 件の論文のなかで、最も多く用いられていた理論は、Erikson (1950, 1963) による生涯発達理論である。生涯発達理論の中で世代の特定な概念や個人的な特質が検討されていた。次に、Allport (1954) の接触理論を基盤としたものであった。また、2 つの大別その他、2 つの理論を組合せた混合理論を用い、新しい理論的な可能性を試みているいくつかの研究 (de Souza 2007 ; Fruhauf et al. 2004 ; Heyman & Gutheil 2008) もみられていた。これについて、Kuehne and Melville は、2 つの理論を考えることは比較的容易ではなく、とくに、根本的に異なる価値を割り当てる理論の場合、葛藤に陥る可能性もあるとし、研究者や実践家は、これらを採用する前に、理論の前提を確認する必要があると指摘している。さらに、多くの研究において、コミュニティを基盤とした世代間交流のイニシアティブについて、理論を用いることの有用性を明らかにしていると評価しながら、世代間交流の研究者は、世代間交流という実践を発展するために、より広い理論的基盤が必要であり、批判的に探究しながら、理論的に取り組むことが求められるとしている。

また、日本における世代間交流の既存理論を分析した研究は少ないが、代表的なものとしては村山 (2011) が挙げられる。村山 (2011 : 86-93) は、研究テーマによってさまざまな

理論が使われてきたとし、世代間交流の理論を①個人の発達、②対人接触、③集団葛藤、④社会ネットワークに分けて概観している。まず、①個人の発達に焦点をあてた理論としては発達理論が使用されており、子ども・若者や高齢者といったそれぞれの年齢期における発達や適応に影響を与え、相互効果を検討するうえで有用であるとした。②対人接触に焦点をあてた理論としては、Allport (1954) の接触仮説に基づいており、子ども・若者と高齢者の集団同士の接触機会を増やし、相互理解を促進することが偏見の解消につながるという理論である。③集団葛藤に焦点をあてた理論としては、世代間交流を集団行動として捉えており、社会的アイデンティティ理論が採用されている。Tajfel and Turner (1979, 1986) の社会的アイデンティティは、「感情や価値観を伴うある集団に属することで獲得される自己概念の一部」と定義されており、社会的アイデンティティを得ようと動機付けられている個人が想定される。こうした②対人接触と③集団葛藤に焦点をあてた理論は、世代間の相違をとらえるうえで対人間・集団間の交流とその効果を検討するうえでは有効である反面、両視点とも世代の対立・葛藤が前提としているため、日本における子ども・若者と高齢者の実情とは異なり、理論の適用可能性を考える必要があると指摘している。最後に、④ネットワークに焦点をあてた理論として、ソーシャル・キャピタル理論を挙げられている。世代間交流を通じた住民同士のつながりによるコミュニティ再生への期待が指摘されており、地域間のネットワークに視点を向けてその協働の在り方や効果に焦点が当てられている点で、世代間交流が行われる地域特性を考えるうえで有効であると指摘している。村山は、これらの理論検討から個人・集団・社会のレベルをそれぞれ前提とした交流とその効果を明確にし、モデル化への必要性を主張した。しかし、アメリカ文献を中心とした世代間交流研究の理論と実証の現状の概観にとどまっており、日本の研究状況については十分に検討されていない。

## 2. 理論を踏まえた高齢者の世代間交流研究の実態

### 1) 文献調査の目的と方法

日本における世代間交流に関する先行研究を分析することにより、理論をふまえた高齢者の世代間交流研究の実態について検討する。

文献調査は、次のような方法とした。国立情報学研究所学術情報ナビゲータ(CiNii)を用い、「高齢者」「世代間交流」「異世代交流」をキーワードとし2018年7月に検索した。その結果、1981年12月から2018年7月までに270件の文献が検索された。270件のうち、重複や関係性の低い論文、書評や大会要旨、研究対象が高齢者ではないもの等127件を除外した。残された143件の論文のタイトルやキーワード、抄録を読み、理論をふまえて分析している6件を選定した。加えて6件の著者の他の文献のうち、理論を用いたもの4件をハンドサーチし、合計10件を本研究の最終分析対象とした。最終分析対象として選定した10件の論文は、Judith Garrard (2012) によるレビュー・マトリックス方式を参照し分析を行った。レビューは、「研究目的」「調査対象」「研究方法」「結果と考察」「用いている理論」との5つの項目に沿ってまとめた。

## 2) 結果

最終分析対象となった10件の論文のうち7件はErikson (1963) の心理社会発達理論のジェネラティビティに基づいて、2件はPutnam (1997) のソーシャル・キャピタル理論、1件はButler (1985) の高齢者のプロダクティビティ論を用いた研究であった。それぞれ3つの理論の概念を示し、理論を用いている研究がどのように展開しているか、どこまで明らかにしているかについて整理する。

### <高齢者個人への効果・影響をとらえた視点>

#### ① 心理社会発達における高齢期のジェネラティビティ

ジェネラティビティとは、Erikson (=1980) が提唱した人間の生涯の心理社会発達理論のなかで中年期・高齢期に必要な要素として「次世代を確立させ導くことへの関心」と定義した概念である。高齢期のジェネラティビティは、子育てを通じた家庭での親役割に関心をおいた中年期に比べ、親であることに加え、人類、私の種族への関心及び生産性・創造性といった包括的な意味を含む。ジェネラティビティは、老化による身体的な低下や責任ある公的地位からの退職により訪れる絶望感を乗り越える時に役立ち、死の受容にもつながることから高齢期に重要なものとされている。しかし、Erikson の定義は、抽象的で検証しにくいという指摘があった。ジェネラティビティの研究者のなかで、Erikson の定義に沿って実証研究に用いやすかったのがMcAdams and Aubin (1992) である。彼らは「関心を据え、次世代への関心が具体的な取り組みや行動へと導く」とし、具体的なジェネラティビティ行動を「次世代への世話と責任」「コミュニティや隣人への貢献」「次世代のための知識や技能の伝達」「永く記憶に残る貢献・遺産」「創造性」という5つの構成要素に整理した。多くの研究がMcAdams and Aubin (1992) の構成要素をもとに検証を行っている。

田淵を中心とした複数の研究グループは、高齢期のジェネラティビティは、中年期のジェネラティビティより拡張した概念であり、高齢者のジェネラティビティ行動は、ジェネラティビティを向上している。また、向上されたジェネラティビティは、次のジェネラティビティ行動を強化しており、高齢者のジェネラティビティ向上には、子ども・若者からのポジティブなフィードバックが媒介していることを明らかにしている。

#### ② 高齢者のライフコースを生産性からとらえたプロダクティビティ論

プロダクティビティとは、Butler (1985) が従来高齢者を非生産的存在として認識したことを批判し、高齢者を生産的な存在として捉える概念である。Butler がいう生産性とは、経済的な意味を超え有償無償の労働、ボランティア活動、家事・育児・介護などの相互扶助、セルフケアを含むものである。

藤原 (2014) は、本来の世代間交流とは長い人生の中で徐々に対象や形態を変えながら切れ目なく継続されていくべきであると指摘し、高齢者のライフコースに応じた世代間交流の枠組みと効果について検討した。ライフコースは生産性の側面から捉えたプロダクティビティ論に基づき、①就労、②ボランティア活動、③自己啓発(趣味・学習・保健)活動、④友人・隣人等とのインフォーマルな交流、⑤要介護期の通所サービス利用の5つのステージと定義している。5つのステージは、重層的であり、求められる生活機能(=健康度)に

より高次から低次へと階層構造をなすとした。藤原は10年以上かかわってきている、60歳以上の高齢者が小学生に絵本を読み聞かせる高齢者学校支援ボランティア REPRINTS プロジェクトの事例から5つのステージを概観した。第一の就労ステージの場合、熟練者から若輩者への技術・経験の継承という世代間交流は行われているが、職域における研究は見当たらずに今後求められるとした。また、各ステージに応じた社会参加・世代間交流の重要性は学術や実践の分野で認識はしているものの、高齢期の体力や認知機能等の心身の低下によって日常生活に支障が出てくる時期では次のステージへの円滑な移行が難しく、移行に失敗し、孤立・閉じこもりに陥る者も少なくないとした。その背景には高次から低次のステージへの移行を切れ目なく支援する重層的な体制が不十分であるというが、具体的に①就労支援、ボランティア支援、生涯学習支援、見守り・生活支援、介護サービスのように5つのステージと関連する施策の担当部署が自治体によって異なる点、②現状のステージでの社会参加が困難な場合、円滑に次のステージを紹介・勧奨できない点を指摘した。各ステージで参加・紹介・奨励できるコーディネートシステムの必要性や、支援者である社会資源間の交流・連携を促進する方策が必要であるという。

#### <個人への効果を超え社会への効果・影響をとらえた視点>

村山ら(2013)と佐々木ら(2015)はPutnam(1997)によるソーシャル・キャピタル論に基づき世代間交流を検討している。

Putnam(1997)によるソーシャル・キャピタルは、社会組織の特性を「信頼」「規範」「ネットワーク」ととらえ、これらの相互作用により社会システムや機能が円滑に運営されるという概念である。信頼・規範・ネットワークは、個人や集団の相互のつながりを通して醸成され、コミュニティにおける協調行動を促進させる。特に、社会全体の機能を促すためには、異なる組織間で異質なメンバー同士を結びつける「橋渡し型ソーシャル・キャピタル」が有効であるが、世代間交流とソーシャル・キャピタルとの関連を示唆する多くの研究は、社会全体に及ぼすポジティブな効果を想定するにとどまり、その検証はほとんどされていないと指摘した。

村山ら(2013)は、地域高齢者を対象に世代間交流型活動(学校支援・高齢者介護・育児支援のボランティア、地域の祭りのお手伝い、伝統継承活動)への参加群と不参加群に分け、それぞれを信頼・規範・ネットワークとの関連について調査した。その結果、すべての不参加群より参加群の世代間別ネットワークの得点が有意に高く、学校支援ボランティアへの参加は規範得点が高いが、高齢者介護ボランティアの参加では信頼得点が高いことが確認された。高齢者の世代間交流型地域活動への参加が地域全体のソーシャル・キャピタルの醸成につながる可能性を示した。

一方、佐々木ら(2015)は学校を中心としている。佐々木らは、信頼・規範・ネットワークの概念は、世代間交流の実践を進める上で、世代間交流の持つ水平的・互恵的な人間関係構築の基礎理論といえらるとし、ソーシャル・キャピタルの視点から学校教育における世代間交流を検討している。学校における学習指導要領に世代間交流にかかわる直接的な記述はみられないが、多くの学校は何らかの形で、地域に住む多世代、特に高齢者との結びつきを

深める授業を継続しており、学校で行われるこれまでの実践はソーシャル・キャピタルとしての地域との信頼性や街づくりとしての規範意識、人と人のネットワークを構築していく可能性が高いと述べている。

以上、世代間交流に関連した理論は様々な視点から用いられていることが分かった。特に、高齢者の立場からの視点は、ジェネラティヴィティに関するものが最も多く、高齢者にとってジェネラティヴィティは、高齢期をよく適応していくために、必要なものであることが想定される。子ども・若者とのかわりに高齢者の参加を促すために、高齢期のジェネラティヴィティ論が最も有力であるが、その重要性に比べ、その研究の蓄積は不十分である。次の第2章では、高齢者のジェネラティヴィティについて具体的に検討していきたい。

## 第2章 高齢者の生きがいにおけるジェネラティビティ及び研究課題

### 第1節 心理社会発達論におけるジェネラティビティ

#### 1. Erikson による心理社会発達論の概要

Erikson (1951, 1963) は、『幼児期と社会』において人間の心が健康に成長、発達するためには、生涯のそれぞれの時期に獲得すべき心理社会的課題があるとし、生涯を8段階にわけ、それぞれの段階における心理社会的課題と危機を示した(表2-1)。それぞれの発達段階には対立する2つの傾向、「同調傾向 (syntonic tendencies)」と「非同調傾向 (dystonic tendencies)」が存在し、この2つの対立傾向の緊張関係やバランスによって各段階が成り立つ。そして、これらの傾向とともに人間が本来持っている素養である「基本的強さ・徳目」がそれぞれの段階において設定されている。人間は、各々発達段階で要請される「基本的強さ・徳目」に準じた取り組みにより「同調傾向」を達成することで、心理社会的に適応的な発達を達成する(小澤2012)。また、人間は、諸段階において個人と社会との相互作用をとらえているが、人生の段階によってかかわりをもつ異世代、あるいは同世代との関係性の中から生じるものとみなしている。表2-1の「重要な関係の範囲」のことである。以下、心理社会的発達段階における「同調傾向」と「非同調傾向」、「基本的強さ・徳目」について簡潔にまとめる。

最初の乳児期における同調傾向と非同調傾向は、信頼と不信の感覚であり、この2つのバランスが人生に対するもっとも基本的な総括的な展望となる。すなわち、希望の土台を作り上げに役たち、これは母親的養育感によって目覚めさせるのである。

第2段階は幼児期とし、自律と恥・疑惑の傾向を形成する時期である。2つの傾向が一緒になって意志という基本的な強さ・徳目を確立することができる。

第3段階は遊戯期であり、物の世界から一連の理想化された目標が、さらには最終的な目的の力として出現する。目的とは、強制された罪悪感や懲罰の恐怖に妨げられることなく、大切な目標を心に描き、それを追及するための勇気である。それは原家族の中の相互作用的な例に発して、後に行動の理想像を明確にしていく。

第4段階は学童期であり、勤勉性と劣等感との間に生産的緊張を形成する時期である。この時期、非同調傾向である劣等感は、失敗の感覚という圧倒的な脅威を与えるが、次第に力が身についてくる。力とは、脅しにかかってくる劣等感に弱まらず、仕事を完成させるべく器用さと知性を自由に用いることができる適格(有能感)である。

次に、第5段階は青年期である。この段階は、心的社会的アイデンティティ(同一性)の発達とアイデンティティの混乱との緊張関係が生じる。この緊張が解消すると自然に出来る上がるその人自身のアイデンティティにも、また、理想的な世界像と自分のアイデンティティを融合させるのに役たつ総合的な方向付けにも、忠誠の感覚が現れる。忠誠とは、価値体系に矛盾が従うにもかかわらず、強制されず誓った忠義を支える能力のことである。これはアイデンティティの礎石であり、強固なイデオロギーと確かな仲間意識から感化を受ける。

第6段階の前成人期においては、親密と孤独の間の緊張が形成される。親密とは、仲良く交際するという意味以上のものであり、長続きする友情にかかわるための力量である。この段階で、重要な力は愛である。愛は、個人の親密性に広く浸み渡り、合併のパターンの中で練り上げられる倫理的関心の基礎となる。

第7段階の成人期では、生殖対停滞という重大な対立傾向が与えられる。ジェネラティビティは、子孫を生み出すという生産性、創造性を包含するものであり、(自分自身の)更なる同一性の開発にかかわる一種の自己一生殖も含めて、新しい存在や新しい制作物や新しい観念を生み出すことを表している。一方、停滞は、生殖的活動の活性を失った人たちの心全体を覆うものであるが、極めて生産的かつ創造的な人たちにも決して無縁なものではない。生殖対停滞という対立から現れる新たな徳目は、世話である。これまで大切にしてきた人や物、観念に面倒をみることへのより広範な関与である(Erikson, E. H. & Erikson, J. M. =2001)。

最後の第8段階の老年期(高齢期)は、統合対絶望という2つの対立傾向のバランスを追求するうえで支配的・同調的な性向を表す。統合とは、秩序を求め意味を探す自我の性向に対する、自我の中に蓄積された確信であり、自己を愛することではない人間の自我の愛である。世の中の秩序と精神的意義を伝えようとする経験としての愛でもある(Erikson=1997:345)。これをEriksonは自我の統合(ego-integrity)と示した。自我統合は、基本的徳目である英知(wisdom)に基づき、「統合された経験を他に伝える努力、次世代への遺物を遺すため、来るべき次世代の要求に応えること」である(小澤2012:50)。英知は、死を目前にして、人生そのものに対する超然とした関心を指し、身体的精神的機能の衰えにもかかわらず、経験の統合を保持し、それを次世代にどう伝えるか学ぶことを意味する。高齢者は、次世代への経験を伝える役割を果たすことで統合性をもった自己が確立され、目前に迫る自分自身の死の恐怖を乗り越え、心理社会的適応がもたらされる(小澤2012:50)。

以上のように、Eriksonが示した漸成的発達図式について概観してみた。この図式からEriksonが人や社会、人と社会の関係についてどのようにとらえているかがみられている。「人格は、原則として成長しつつある人間が、広がる社会的活動半径に向かってかりたてられ、あるいはその社会活動の拡大を認識し、そしてその中で相互に作用しあうというレディネス(Readiness)の、予め定められた歩みにしたがって発達する」とし、「社会は原則として、この相互作用の起る一連の可能性に遭遇し、あるいはそれらを招くように構成されている傾向があり、それらの展開が適切な割合と、適切な順序で進むように保護し、奨励しようとする。これは、すなわち「人間社会の維持」である」と述べている(Erikson=1997:348)。要するに、Eriksonは、人間を肯定的な観点からとらえ、人生のそれぞれの段階で直面する危機を乗り越えて発達していくとみている。また、漸成的発達図式は8段階に分けられているが、各段階は次の段階の土台となり、すべてがつながっていること、そして、家族や友人、社会環境との相互作用から影響を受けながら発達していくことを前提としている。

表 2-1 Erikson による漸成的発達図式 (epigenetic chart)

発達段階	心理・社会的危機 (同調傾向 対 失調傾向)	重要な関係の範囲	基本的強さ ・徳目
I 乳児期	基本的信頼 対 基本的不信	母親的人物	希望
II 幼児期初期	自律性 対 恥, 疑惑	親的人物	意志
III 遊戯期	自主性 対 罪悪感	基本家族	目的
IV 学童期	勤勉性 対 劣等感	近隣, 学校	適格 (有能感)
V 青年期	同一性 対 同一性の混乱	仲間集団と外集団	忠誠
VI 前成人期	親密 対 孤立	友情, 性愛, 競争, 協力の関係におけるパートナー	愛
VII 成人期	生殖性 対 停滞性	(分担する)労働と (共有する)家庭	世話
VIII 老年期	統合 対 絶望	「人類」「私の種族」	英知(賢さ)

出所：Erikson, E. H. & Erikson, J. M. 村瀬孝雄・近藤邦夫（訳）（2001）『ライフサイクル，その完結』みすず書房，34 頁図式 1 の B, C, D の項目を抜粋し作成

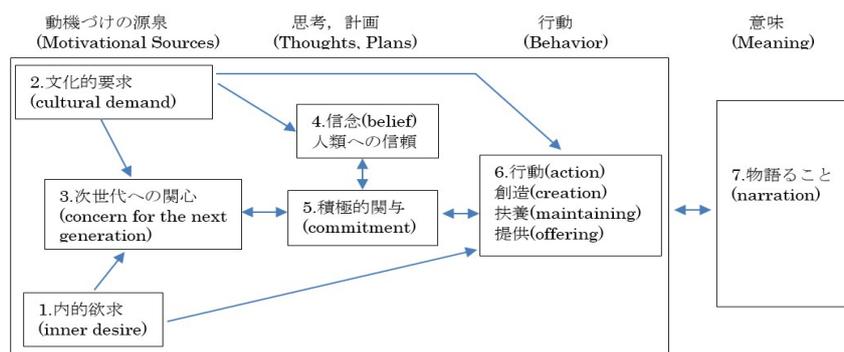
## 2. 高齢期におけるジェネラティヴィティ

ここでは，高齢期のジェネラティヴィティについて具体的に検討する．ジェネラティヴィティは，Erikson (1950, 1963) による造語<sup>6)</sup>であり，成人期における心理社会発達課題としてあげられているが，人間発達の行き着く先である高齢期の自我統合をうまく発達させるために，必要なものとしても強調されている．Erikson の一連の議論を結び合わせるなかには，ジェネラティヴィティに関する次世代を生き育てた無数の出来事を回想し人生の意味を統合すること，さらに統合的な人生の意味をジェネラティヴィティに基づいて次世代に伝え，それをより統合性をもつものにしていくこと，この 2 つが両輪となり自我統合の核を成すという，老年期のジェネラティヴィティの様相が浮かび上がってくる（小澤 2012:50）．

Erikson はジェネラティヴィティを「次世代を確立させ導くことへの関心 (primarily the concern in establishing and guiding the next generation (1963:267) 」<sup>7)</sup>と定義づけたが，これには「子どもを生き育てて世話することや，次世代さらに次々世代に役立つことを目的として人を育て，物，成果を生み出す意味」も含めている（岡本ら 2018:116）．ジェネラティヴィティ概念の誕生以降，概念が抽象的で検証しがたいという指摘があったが，1990 年代に McAdams and Aubin (1992, 1998, 2001) は，Erikson のジェネラティヴィティ概念に基づき，ジェネラティヴィティの概念整理と概念モデルの作成を行った．ジェネラティヴィティを構成する 5 つの側面，「次世代の世話と責任」「コミュニティや隣人への貢献」「次世代のための知識や技能の伝達」「永く記憶に残る貢献・遺産」「創造性」を設定し，ジェネラティヴィティを測定する尺度 (Loyola Generativity Scale) を開発した．この尺度の詳細については第 5 章で説明する．また，McAdams and Aubin は，ジェネラティヴ

ィティ の特質を 4つの展開過程と 7つの要素として提示した (図 2-1) . 『動機付けの源泉』『思考, 計画』『行動』『意味』という展開過程の中でジェネラティヴィティの 7つの要素である「内的欲求」「文化的要求」「次世代への関心」「信念」「積極的関与」「行動」「物語ること」を示している. まず, 『動機付けの源泉』におけるジェネラティヴィティは「次世代への関心」として現れる. 「次世代への関心」は個人の「内的欲求」と「文化的要求」から影響される. 「内的欲求」とは自己を主張し発達させ象徴的な永続性を求めて他者を愛し, ケアする意味を内包する. 「文化的要求」とは中年期以降年齢に応じて次世代に対し何ができるかという標準や期待を社会的に求めることである. 「内的欲求」と「文化的要求」により動機づけられれば, 高齢者は次世代への意識的な関心を表す. そして, 「次世代への関心」は『思考, 計画』における「積極的な関与」を通して次世代への「行動」につながる. 「積極的な関与」は肯定的な「信念」と相互関係であるが, 「信念」について McAdams and Aubin は Erikson が主張した人類への信頼という概念をあげる. 人類への信頼は人類の未来の希望を信じることであり, 関心を行動へ変換する時, 重要な支えになる. 『行動』におけるジェネラティヴィティの「行動」は多様であるが, 新しいものや人を生成する創造的なもの, 良いと思われるものを維持し世話する扶養的なもの, そしてスキルを教えたり, 息子や娘を大人の世界に送り出したりするような次世代に引き継ぐ提供的なものとしてあげている. 最後, 『意味』において, 高齢者は次世代への関心や行動を「物語ること」で意味づける. McAdams and Aubin はジェネラティヴィティを続けるために語ることを重視したが, 人々は自分の人生について語るにより, 意識的または無意識的に生きてきた人生について理解する. ライフストーリーを構築し内面化することは, 人生に統一感を与え, さらに今後の目的が提供できるとしている.

図 2-1 ジェネラティヴィティの 7つの要素



注: 日本語の表記は, 岡本裕子・上手由香・高野恵代編 (2018) 『世代間継承性研究の展開—アイデンティティから世代継承性へ—』 116 頁を参照した.

出所: McAdams & Aubin (1992: 1005) 「A Theory of generativity and Its Assessment Through Self-Report, Behavioral Acts, and Narrative Themes in Autobiography」

McAdams and Aubin は, ジェネラティヴィティを成人期以降の発達課題としてとられてお

り、ジェネラティヴィティには「世代連鎖的關係性」と「自己完結的個性性」の2つの特質を持つとしている。世代連鎖的關係性とは、自分が生み出したものをはぐくみ育て、次世代へ受け継いでいく営みである。自己完結的個性性とは、自分の人生において何ものかを創造する、一つの価値の高みを自ら示すことを意味する。いずれもジェネラティヴィティの重要な側面であり、両者が入れ子のように関連し合ってジェネラティヴィティは達成されていくのである（岡本 2018 : 5）。

### 3. ジェネラティヴィティを考える上で留意すること

ジェネラティヴィティは、一つの理論として評価されているが、IT 革命による高度情報化社会において、ジェネラティヴィティをどのように捉えたら適切なのか(岡本 2018 : 8)。現代社会における高齢者のジェネラティヴィティを考える上で留意すべきことについて考える必要がある。

まず、Erikson が漸成的発達図式を作り上げた 1950 年代の高齢者に対する社会の認識から大きく変わった。当時の人間の平均寿命はまだ短く、長寿する高齢者は社会の中で貴重な存在として、高齢者の有する経験や知恵を必要とされ、それに敬意を払われていた。しかし、今日における高齢者は、医療技術の発展により人間の平均寿命はますます延び、社会の希少な存在ではなくなった。さらに、従来、高齢者に求められた経験に基づく知恵は IT 発達により蓄積されて簡単に得られることができる（小澤 2012 : 51）。高齢者を老賢者として迎え入れる社会構造は変動し、機能していなくなったのである。

次に、Erikson が第 8 段階で描いている高齢者は、今日の多様な高齢者の姿を含まれることができるのかが問われる。『幼児期と社会』において第 8 段階の老年期を提示する際、どのような高齢者を対象としているかは明確にされていないが、1986 年発刊された『老年期生き生きしたかかわりあい (Vital Involvement in Old Age) 』において検証対象としている高齢者は、居住形態は異なるが、カリフォルニア州のバークリー市という地域は共通していた。当時にバークリー市は、カリフォルニア大学や児童福祉研究所等が設立され、アメリカでも教育的な面や市民の意識的な面に進歩的な地域であった。このような背景から鑑みると、Erikson が示している老年期の高齢者は、積極的な社会参加を行っている健康な高齢者やそのような意識を持っている高齢者に近いのではないかと考えられる。また、McAdams and Aubin の研究においてもボランティア活動に参加している高齢者を主な対象としている。この背景には、高齢者が現役引退の後、社会貢献を通して生きがいを探そうとするアメリカ社会の文化があると考えられる。かつてから社会貢献への意識が馴染まれているアメリカと異なると、日本や韓国のような家族内での役割から生きがいを探していた社会では、特に、今日において高まっている高齢者の社会貢献への期待に対する受け入れ方のギャップがあると考えられる。

また、ジェネラティヴィティの概念にジェンダー視点が不十分であることがあげられる。

1940 年代～1950 年代のアメリカは、第二次世界大戦後の経済的繁栄から豊かな産業社会における性別役割分業に基づく近代家族の価値が高まった時期であった（岩井 1997）<sup>8)</sup>。こ

ういた背景から Erikson の理論には、長年にわたって男性中心主義のバイアス (bias) を含んでいると指摘されている (Schwartz1994 ; 松高 2018) .

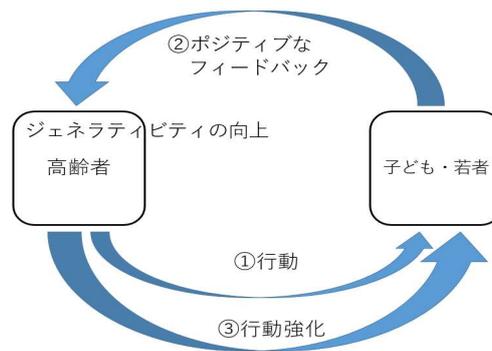
## 第2節 高齢者の生きがいと高齢期のジェネラティヴィティとの関係性<sup>9)</sup>

### 1. 高齢者と子ども・若者をつなぐ高齢者のジェネラティヴィティ

第1節にまとめたジェネラティヴィティの概念を踏まえ、本節では、第1章第3節で示した田渕を中心とした複数の研究をとりあげ、高齢者と子ども・若者の交流におけるジェネラティヴィティの作用について検討したい。

田渕を中心とした複数の研究グループは、高齢期のジェネラティヴィティとジェネラティヴィティ行動の関係性、そして交流から得られる若者の反応が高齢者のジェネラティヴィティへ与える影響について一連の関係性を明らかにしている。その内容を以下の4点に整理し、図2-2に表した。

図2-2 子ども・若者との交流のなかでのジェネラティヴィティ



※注：この図は以下4点の論文に基づき筆者が作成したものである。

- ①田渕恵・中川威・石岡良子・ほか (2012) 「高齢者の世代性及び世代性行動と心理的 Well-being の関係—若年者からのフィードバックに着目した検討—」日本世代間交流学会誌 2(1)19-24
- ②田渕恵・三浦麻子・中川威・ほか (2013) 「高齢者における世代性 (generativity) と次世代との関わり行動の因果関係—性差に着目した検討—」日本世代間交流学会誌 3 (1)35-40
- ③田渕恵・三浦麻子 (2014) 「高齢者の利他的行動場面における世代間相互作用の実験的検討」心理学研究 84(6)632-638
- ④伊藤ひとみ・亀井知子 (2015) 「都市部における高齢者と小学生の世代間交流プログラムで生じる両世代間の交流及び高齢者の generativity (世代継承性) についてのエスノグラフィー」日本世代間交流学会誌 5(1)37-45

第1に、高齢期のジェネラティヴィティは、中年期のジェネラティヴィティより拡張した概念である。ジェネラティヴィティは Erikson においては中高年期の発達課題とされ、年齢とともにジェネラティヴィティの概念範囲が拡大するとされている。しかし、国内ではそれを示した研究は少ないと指摘した田渕 (2009) は、中高年世代が若年世代を支援する活動から年齢によるジェネラティヴィティの相違を検証した。兵庫県 A 市の小・中・養護学校の合計 37 校の学校図書ボランティア活動 (主に生徒に本の読み聞かせや図書室の本整理等) から得られた関心について自由記述式の質問紙調査を実施した。回答者 404 名 (67%) はすべ

て女性であり、20代が21名(5.2%)、30代が86名(21.4%)、40代が217名(53.7%)、50代が47名(11.7%)、60代以上が33名(8.1%)であった。活動から得られた関心として4つのカテゴリー(「子どもへの関心」「仲間への関心」「環境への関心」「本への関心」)が抽出された。結果として30代は本人の成長感への関心を表した「本への関心」に対する記述が有意に多かったが、50代以上は子どもの読書環境の改善やそれに関連する教育の質の向上等の「環境への関心」に対する記述が多く認められ、子どもの将来的な発達にまで関心が向けられていることが確認された。つまり、30代に比べ50代以上の方が次世代や他者、それらを取り巻く環境等への関心の移行が認められており、日本の高齢者においても年齢に従ってジェネラティヴィティが拡大するという見解が支持されていた。

第2に、高齢者のジェネラティヴィティ行動はジェネラティヴィティを向上する。田渕ら(2013)は、McAdams and Aubinが提示したジェネラティヴィティとその行動に注目し、これらの因果関係を双方向から分析し、男女の差について検討した。彼らは交差遅れ効果モデルによる多母集団同時分析を用いた(適合度CFI=1.000, RMSEA=.000)。その結果、男性は1時点目のジェネラティヴィティと2時点目の行動の間( $\beta=.20, p<.01$ )と、1時点目の行動と2時点目のジェネラティヴィティの間( $\beta=.37, p<.01$ )に有意な標準化パス係数が確認され、ジェネラティヴィティとその行動の双方向から有意となる循環モデルが示された。一方、女性はジェネラティヴィティ行動からジェネラティヴィティへのパスのみが有意であった( $\beta=.26, p<.01$ )。この研究からジェネラティヴィティとその行動との双方の因果関係では男女の差はあったものの、高齢者男女ともに次世代と関わる行動からジェネラティヴィティへの影響があることが示された。

第3に、高齢者のジェネラティヴィティ向上には、若者からのポジティブなフィードバックが媒介している。田渕ら(2012)はジェネラティヴィティ及びその行動とポジティブ・ネガティブな心理的well-beingの両者の間を若年者のフィードバックが媒介するモデルを設定し検証した。その結果、ジェネラティヴィティ及びジェネラティヴィティ行動からポジティブ・ネガティブwell-beingへのパスは有意であったが、若年者のフィードバックからポジティブ・ネガティブwell-beingへのパス( $\beta=-.15, p<.10, \beta=.33, p<.01$ )は、ネガティブwell-being側面でのみ媒介要因となり、若年者のフィードバックの異なる働きが確認された。この結果から、ジェネラティヴィティが高くジェネラティヴィティ行動を積極的に行う高齢者は、ポジティブ感情は高いが、必ずしもネガティブ感情が低いとは言えず、ネガティブ感情の低減にはポジティブなフィードバックを受け取る必要があると示唆している。

伊藤ら(2015)はMcAdams and Aubinによる5つの構成要素の中で「次世代のための知識や技能の伝達」に着目し、参与観察と聞き取り調査を通して高齢者のジェネラティヴィティは異世代への関心の表れであり、高齢者の言動が子どもに受け入れられることで成立したという。しかし、ジェネラティヴィティを発揮しなかった高齢者は、認知症や虚弱等子どもへの関心や距離を縮める自身の力が弱く自然な世代間交流が起きにくい者と、子どもの大きな声が気になり何度も注意をするような子どもの行動を一方的に正そうとする者であっ

た．関心を 持っていても異世代との交流に発展しない場合は，支援者の適切な介入が必要であると述べている．

第 4 に，向上されたジェネラティヴィティは，次のジェネラティヴィティ行動を強化する．田渕と三浦(2014)は高齢者が若者に対し利他的行動をとる場面において，高齢者のジェネラティヴィティの向上及び行動に，若者からの反応がどのように影響するかを検討した．若者からのポジティブな反応が高齢者のジェネラティヴィティの向上と，将来的な利他的行動の誘発を同時にもたらす可能性を示唆している．

要するに，子ども・若者との交流の中で高齢者のジェネラティヴィティは，発揮され，子ども・若者からのポジティブなフィードバックからジェネラティヴィティが向上することが確認された．さらに，ジェネラティヴィティが向上した高齢者は子ども・若者と交流しようとするジェネラティヴィティ行動の強化につながるという循環が把握されている．

## 2. 高齢期のジェネラティヴィティと高齢者の生きがい

世代間交流研究において高齢期のジェネラティヴィティは，高齢者と子ども・若者を結びつける根拠として多くあげられている (Kuehne & Melville 2014 ; 村山 2011) ．

第 1 節で検討したように，ジェネラティヴィティは，過去に次世代を育んだことや現在も次世代の育成に関わっていることにより，今まで生きてきた人生の価値や意味を統合し，目前にある死の恐怖を受け入れ，高齢期を心理社会的に安定し適応するものであると整理できる．そして，ジェネラティヴィティは，心理社会的適応を表す諸概念と関係していることが報告されている．ジェネラティヴィティと心理社会的適応に関する諸研究から，①ジェネラティヴィティは調和性，人生満足度，幸福感，自尊心，目標性，精神的健康，well-being といった適応的な心理特性と正の相関をもち，②情緒不安定性や抑うつ性といった非適応的な心理特性と負の相関をもつことが明らかになっている (小澤 2012) ．これらの結果は，生きがいの概念や構成要素からみると，深く似通っていることが分かる．

第 1 章では生きがいの概念の特徴や生きがいの構成要素について検討した．生きがいは，将来への指向性を持ち，生きることの価値や意味である．そして，生きがいの構成要素には，過去と現在，そして未来にかけて生きがいの対象があり，その対象に伴う感情，例えば，生きる意欲，存在感，生活充実感，効力感，安定感などが生きがい感として得られる．

高齢期のジェネラティヴィティと高齢者の生きがいは，生きる価値や意味を見出し，将来への指向性を含むという核となる意味が共通しており，高齢期の適応的な心理特性を表す諸概念に影響を与えている点が同様である．高齢者の生きがいは複数の対象から得られるものと想定されるが，地域における高齢者と子ども・若者の交流活動の中で，肯定的な相互作用を通して高齢者のジェネラティヴィティは発揮する．ジェネラティヴィティの発揮は，さらに子ども・若者との活動へ積極的参加につながり，結果的に高齢者の生きがい感をより豊かにすると考えられる．したがって，本研究でとらえる高齢者の生きがい概念とジェネラティヴィティの概念の関係は，高齢者の生きがい概念の中にジェネラティヴィティが一部重なっており，子ども・若者との交流活動を通してジェネラティヴィティが発揮することで

重なる部分は大きくなり、高齢者の生きがいを豊かにする有機的な関係である。

なお、これらを踏まえて本研究における高齢者のジェネラティヴィティについて以下のように定義する。高齢者がもつ次世代への関心や行動であるが、そこには人生を先に歩んできた先輩として、次の時代を生きていく後輩に伝えて残したい価値が含まれている。例えば、子育てや若者の養育への関与、子ども・若者とのかかわり地域活動、地域文化の継承、より良い社会のための関心や関与等を通してジェネラティヴィティは発揮される。また、子ども・若者による高齢者の生きがいに役立つ。

### 第3節 本研究における研究課題

高齢者のジェネラティヴィティの発揮や向上は、高齢期に適応し生きていくために有用なものであり、子ども・若者との交流を通して発揮できると主張されているが、ジェネラティヴィティやジェネラティヴィティ行動が世代間交流のなかで発揮されるために、どのようなアプローチで交流の場を設定すべきかについては十分に検討されていない。

高齢者のジェネラティヴィティやジェネラティヴィティの行動が世代間交流のなかで発揮されるために、どのようなアプローチが必要なのか、Eriksonの心理社会発達論で前提としている相互作用に注目する必要がある。高齢者のジェネラティヴィティ向上やジェネラティヴィティ行動の強化は、「子ども・若者とのふれあいやかかわり」の中で「相互作用」が行われ、「相互関係が構築」されるというプロセスが予想される。このようなプロセスの中で高齢者はジェネラティヴィティを発揮し、子ども・若者から肯定的なフィードバックを受けると、ジェネラティヴィティはさらに向上、次のジェネラティヴィティ行動に移ると想定される。具体的に「子ども・若者とのふれあいやかかわり」は共通の関心や目標を持って何かをする継続的なふれあいであることが条件となる。「相互作用」では、対話や行為を通して相互作用を促し、相手の事を受け入れる関係性が構築される。また、「相互関係の構築」からは相手に対する役割が与えられる可能性が考えられる。こうしたプロセスは、理論検討と世代間交流が高齢者に与える効果や影響を総合的に見た上での研究仮説であり、適切な調査や分析を通して検証することが求められる。

したがって、本研究では、子ども・若者とかかわる地域活動が高齢者の生きがいに与える影響を明らかにすることを目指し、子ども・若者とかかわる地域活動に積極的に参加している高齢者を対象にインタビュー調査を実施し、ジェネラティヴィティの視点から、子ども・若者とかかわりが高齢者の生きがいへ及ぼす影響を明らかにすることを一つの研究課題として設定する（研究課題1）。

また、地域において高齢者と子ども・若者がかかわる活動を提供する機関や団体が存在する。こうした機関や団体における支援者が、高齢者と子ども・若者がかかわる場の設定をどのように取り組んでいるかによって、高齢者と子ども・若者との相互作用や相互関係性に影響があると想定される。そこで、もう一つの研究課題は、高齢者と子ども・若者のかかわる地域活動を行う機関や団体の支援者を対象にインタビュー調査を実施し、子ども・若者のか

かわる地域活動が高齢者にもたらす生きがいを促すために、どのような役割を果たしているかについて明らかにすることとする（研究課題2）。

さらに、地域における高齢者と子ども・若者とのかかわりの拡大には、高齢者の生きがい対策と深く関係している。地域における高齢者と子ども・若者のかかわり活動は、高齢者の生きがい対策の展開の中でどのような脈絡から出現し、どのように捉えられてきたかについて検討し、明らかにすることを最後の研究課題とする（研究課題3）。

## 第3章 交流の場の類型化と調査対象

### 第1節 類型化の必要性及び方法

#### 1. 既存の類型化の限界

第1章における世代間交流の類型に関する先行研究の検討から、既存の類型化では、高齢者と子ども・若者との世代間関与の深さ、すなわち、かかわりの質や程度が注目されていないこと、そして高齢者と子ども・若者をつなぐ人の存在が欠けていることが把握された。

既存の類型化から高齢者と子ども・若者のかかわりの程度に基づく高齢者への効果や影響を検討することは難しいと思われる。特に、支援者による高齢者と子ども・若者のかかわり支援について明らかにするには既存の類型では適切ではないと判断した。高齢者と子ども・若者をつなぐ支援者の視点をふまえた類型化を新しく作成することにした。

#### 2. 本研究における類型化の方法

本研究における類型化の作成には、修士課程から行ってきた筆者の関連調査や参与観察から見出された、高齢者の影響には支援者によるかかわり支援が影響しているという結果に基づいているが、一部の研究結果による類型化ではなくより普遍的かつ客観的な類型化を作成することを目指す。まず、類型化のためのいくつかの方法の検討を踏まえ、本研究の類型化で用いる方法について説明する。

類型化する方法には多様な手法が用いられているが、大きく2つに整理することができた。一つ目は、対象地域や機関等を選定し、そこでの質的調査または量的調査の分析から類型化する手法である(海道・村山2005)。二つ目は、先行研究の既存類型について検討したうえで、研究者の視点を加えて類型化を行い、類型に適切な代表的な事例を取り上げて検証する手法である(坂倉・保井ほか2015;中島・岡本2014;石山2014)。前者は、調査分析から類型化を行うため、多くの事例の確保を前提としている。類型研究が行われていないまたは不十分な分野では適切だと思われる。一方、後者は、既存の類型化の検討に基づき、新しい視点を加えて類型化を行い、作成した類型化の妥当性を調査から検証するため、既存の類型研究がいくつか報告されている分野において、新しい視点への拡大を試みる研究に適切だと思われる。

本研究における類型化は、既存の類型の限界から新しい視点を加えた類型の作成が求められることから、上記の類型化の方法の検討を踏まえ、関連した先行研究を検討から新しい視点を加えて類型化を試みる。山口(2001)は、類型論に関する研究において恣意性を免れ、客観性を確保するために、類型化の根拠は、原理に基づくべきであるとした。この点を念頭におきながら、具体的な手法としては、アメリカ、韓国、日本における地域における交流の場を検討し、交流の場を構成する基本的な要素を見出し、類型化を行う。

次の第2節から第4節はアメリカ、韓国、日本のそれぞれ国における交流の場の展開や特徴について検討し、それに基づいて第5節では本研究の類型化及び調査対象の選定を行う。

## 第2節 アメリカの交流の場

産業発達や少子高齢化への社会変容は、核家族化を促進させ、家族内外の世代間の隔離とともにエイジズムによる断絶が顕在化したことにより、世代間交流(intergeneration)という概念が出現し発展してきた。とくに、こうした考え方は、青少年と高齢者への意図的、社会政策的として米国で用いられるようになった(間野 2004)。過去 40 年以上にわたって、異なる世代の人々を意図的に一緒にするプログラムが、米国中で開発し、発展してきている(Newman 1997 ; 草野 2004)。第1節では、米国における世代間交流プログラムを中心とした発展は、どのような社会状況のもとで成立し、どのように展開されてきたか、そして、その特徴は何か、について検討する。

米国における世代間交流プログラムの歴史的展開は 2 つの局面に関わるという。その最初の局面は、1960 年代の終わりから 1970 年代に生じ、主に世代間分離(generation separation)に取り組むプログラムである。第二の局面は、1980 年代及び 1990 年代で、社会問題に取り組んだ内容を持っている(Newman 1997 ; 草野 2004)。

### 1. 1960～1970 年代：世代間分離への対応プログラム

世代間交流プログラムの成立と発展は自発的なものではなかった。第 2 次世界大戦が終わった後、何年間にかけて力動的に変化していく社会のなかであらわれたものである(Newman 1997 : 35) 米国人口の規模とその形態は 1950 年以降急激に変化してきた。その間総人口は、1 億人が増加しており、その中で高齢化は進んでいた。1950 年の高齢化率は 8.5% であったが、10 年後 1960 年には 9.2% に増加した。1960 年代の増加傾向は鈍化していたが、1970 年には再び増加傾向がみられるようになった。人口増加や高齢化とともに、社会内での移動の増加、少数民族や人種、女性、障害者といった社会的弱者の権利保障に対する関心が高まっていた(Newman 1997:21)。こうしたアメリカの大きな社会変化は世代間交流と深く関連している。世代間交流プログラムの創始は、この時代、家族移動による高齢世代と若い世代の両世代に不定的な影響を及ぼし、多くの家庭において、高齢世代と若い世代の地理的分離という認識が根底にある。高齢世代と若い世代との地理的分離は、お互い異なる見解を増大させ、世代間のかかわりを弱化し欠如する結果を招いた。家族構成員間のかかわりの不足は、高齢者にとって家庭での役割がなくなり、無気力感や孤立感をもたらした。また、若い世代にも、特に祖父母の肯定的なロールモデルや養育が受けられないことなど、影響を及ぼしていたのである。そこで、保育・養育に関わる実践家たちは、家族間のかかわりが欠如されている高齢者と子どもに介入した。それが、世代間交流プログラムの始まりである(Newman 1997:56)。

1960 年代～1970 年代、これらのプログラムの多部分は、年齢に関する固定観念を一掃し、低所得の高齢者にたいして金銭的援助を提供するだけでなく、若者と高齢者の間の理解を育むことに焦点を置いたものであった。これらの大部分が、里祖父母と退職高齢者ボランティア(Foster Grandparent and Retired and Senior Volunteer)プログラムであった。かつて世代間交流プログラムが連邦政府によって公的に開始され、体系的となったのは、

1965年に始められた「里親祖父母プログラム：the Foster Grandparents Program (FGP)」を起源としている。1969年には「退職シニアボランティアプログラム：the Retired Senior Volunteer Program (RSVP)」及び「国立サービスラーニングセンター：the National Center for Service Learning」が始まった。里祖父母は、低所得の高齢者と特殊なニーズを持つ子どもを引き合わせ、また退職高齢者ボランティアプログラムは、何百万人もの高齢者をさまざまな施設や組織に配属してきたのである(Newman 1999；ヘンケンら 2008)。

## 2. 1980～1990年代：社会問題への対応プログラム

1980年代から1990年には、プログラムの焦点は、世代間の分離をなくしていく方向から、地域共同体の問題と取り組むことへと移っていた(Newman 1999, ナンシー・ヘンケンら 2008)。世代間交流プログラムは、読み書き能力及び教育、家族支援、高齢者及び児童ケア、健康、異文化間の理解といったような問題と取り組むために開発されてきたのである。1986年には、公的政策とプログラムに関する世代間の協同を育むために、全国的な団体、「エイジングに関する全国委員会」、「全米児童福祉連盟」、「全米退職者協会」、「児童保護基金」が協力して、子ども、青少年、加齢組織の全国的連合である諸世代連合(Generations United)が結成された。この連合は世代間を結ぶシステムの結合と、連邦法の制定を主張している。過去10年にわたって、諸世代連合は、州と地方の世代間ネットワークを創り上げ、中央情報照会源として役立ってきている(Newman 1999；草野ら 2009)。

プログラムの領域では、これらのプログラムは、学校、シニア・センター、長期ケア施設、チャイルド・ケア・センター、図書館、レクリエーション・センター、その他地域共同体をベースとした組織において実践されている。これらのプログラムは、技術、ニーズ、経験を有する高齢者と子どもとを巻き込んで行われている。成功しているプログラムは、①地域共同体の特定ニーズと取組、②異なる年齢グループに奉仕する組織間のパートナーシップを代表し、③個人間の互惠主義を育み、④個人の成長と学習のための機会を提供し、⑤ボランティアを募り、訓練し、支援するしっかりとした基盤を持っている(ヘンケン・バッツ 2008)。

## 3. 世代間交流プログラムの展開における特徴

1960年から1970年、1980年から1990年の間、世代間交流の重視している観点の変化は、世代間交流プログラムの社会的価値への認識を国全体に拡散する結果をもたらした。社会課題をとりあげる媒介としての世代間交流プログラムは、コミュニティにおいて直面する問題とその重要性を人々に気付かせた。その結果、世代間交流は、多くの領域にわたりシステム化し、拡張されたのである(Newman1997:56)。人々は、世代間交流のシステム化及び拡張のために、何を行ってきたのか。多方面からの動きが同時に行われていたが、大きく次の4点をとりあげる。

一つ目、世代間交流に関する情報や資料の共有を積極的に行っていた。世代間交流プログラムに関する調査や報告書、教育用のマニュアルや視聴覚の資料といった情報を専門家のみならず、一般の人々に向けても提供していた。関連情報の収集と発信は、世代間交流プロ

プログラムの開発や維持、拡大を支援するための取り組みであったが、支援者は、世代間交流の実践について学ぶことができる一方で、プログラムのプロセスを詳細に表現することもできた。こうした努力により資料や情報の内容は具体化し、複合化していた。

二つ目、世代間交流にコミュニティの直面する課題を取り組むようになってから、フォーマル及びインフォーマルの領域に関係なく、ネットワークを構築し、世代間交流プログラムを強化・支援することが求められていた。1960年後半から1970年代の間には、地方機関や関係部署、民間機関における連携・協力が促進されていたが、1986年の「世代連合」の設立がきっかけで、州全体にわたる世代間交流のネットワークに拡大された。州全体にわかるネットワークでは、社会サービスの機関と協力し、世代間交流の拡大支援や、関連した公共または個別ファンディング募金、活動支援に関わっていた。一方、世代連合は、世代間交流に関するシステムの連携及び、州及び地域において世代間交流への協力環境を醸成する法制定にも働きかけていた。

三つ目、世代間交流プログラムに関する専門的な支援者の養成に取り組んでいた。世代間交流の拡大により、世代間交流プログラムにおける専門的な支援者の役割が求められていた。福祉サービスに関わっている実践家は、世代間交流プログラムを理解し、プログラムの効果を促すスキルや、その効果を測定できるプログラムの評価方法についての関心が寄せられていた。また、世代間交流の専門家や関連機関においても、世代間交流に関する知識とスキルの蓄積の必要性が認識されつつあった。1990年代に世代間交流プログラムに関わる人々はますます増加し、専門的なスキルを伝えるための世代間交流ワークショップや研修などが開かれた。さらに、大学に世代間交流のコースを設置、履修単位に世代間交流の科目を含む等、専門家を育成するための動きが多発的に行われていた。

四つ目、世代間交流が拡大し、維持されてきたのは、安定的な資金支援にかかわっている。世代間交流プログラムに関する資金は、公的部分と民間部分から支援を受けた。1960年代後半、連邦政府による資金は、世代間交流プログラムの発展に大きな影響を与えた、3大の世代間交流プログラムの創設に使われており、1970年代からは、民間の多様な世代間交流の資金支援が可能となった。

### 第3節 韓国の交流の場

韓国においても人口構造の少子高齢化が急速に進み、高齢者の居住形態も変化している。老人実態調査によれば、2004年、2014年、2017年を比較すると、高齢夫婦世帯の増加(34.4%→44.5%→48.4%)、高齢単身世帯の増加(20.6%→23.0%→23.6%)がみられるとともに、子どもや孫、親戚との接触頻度が低下している(韓国保健福祉部・韓国保健社会研究院2017)。さらに、「少子高齢化と同時に経済不況が長期化するなか、就労、年金、住宅等をめぐる問題は高齢世代と若年世代を対立させ、世代間葛藤を招く主な要因(ソ2014)」として指摘されている。韓国では、高齢世代の雇用年齢延長と若年世代の失業率の増加により就労確保の問題が発生している。既成世代は正規で若年世代は非正規になる状況から就労をめぐる

世代間の両極化も深刻といえる。また、後期高齢者の増加による若年世代の負担増加や、年金財政の枯渇に対する若年世代の不安感の増加等から年金をめぐる問題がある。さらに、住宅の価値は急落しているものの賃貸は高騰する状況にあり、若年世代は高い賃貸のため住宅難に直面しているのである（ソ 2014）。このように、生活に関わる社会構造的対立から生じる世代間葛藤は、今日の家族形態の変化においてその間隙を広げている。家庭内での世代間の交流を通して相互理解を求めるのは極めて難しい。そのため、政策による根本的な対策とともに、世代間の間隙が深化しないように、社会的・人為的な介入による世代間交流の必要性が非常に高まってきている。

こうした社会的な要請から韓国においては、主に、地域に存在し福祉サービスを提供する社会福祉館<sup>10)</sup>や老人福祉館<sup>11)</sup>において社会福祉士が人為的・意図的に多様な世代間交流プログラムを実施するのが代表的である<sup>12)</sup>。そのほかに、国による老人就労事業<sup>13)</sup>の一環として高齢者を保育・教育機関へ派遣し伝統文化や礼の指導等を行うものがあるが、高齢者一人に多数の子どもを対象とするため、「世代間交流プログラムというよりは、教育プログラムや就労プログラムに近い（パク・アン 2012 : 74)」。ここでは、社会福祉館における世代間交流プログラムを中心に検討する。

韓国における世代間交流プログラムの目的は、ハン・ジョンラン（2002）の定義に最もよく示されているが、「多世代または多様な年齢層がある教育的な目的のために、ひとつの共同体のなかで共に活動することである」とし、多様な世代間の相互作用を通して相互に対する知識を増大し、誤解や偏見を減らし、世代間の差異よりも世代間の共感と理解を拡大することであるとした。つまり、家族形態の急激な変化による世代間の断絶、そしてお互い異なる世代への偏見などが社会問題として認識されていることから、異なる世代間の交流を通じて、世代間の相違や高齢者に対する偏見を減らし、相互理解を求めることを重視しているのである。

かつて世代間交流のようなものはみられたが、世代間の断絶を予想し、世代間の統合を目指したプログラムの重要性が浮上したのは、1990年代半ば頃であるが、学術的領域にとどまっており<sup>14)</sup>、実践領域への拡散は、2000年度前後から本格的な世代間交流プログラムが多様な機関を通して取り組まれるようになった（ハンら 2000 : イ・クムリョン 2004）。近年では、社会福祉学、保育学や教育学、老年学、建築学等多様な学問分野に渡って行われている。しかしながら、社会福祉分野における研究の蓄積は浅く、一部の社会福祉館では、世代間交流プログラムに関する情報や資料が不十分なまま、世代間交流プログラムに取り組んでいるため、その方向性が正確にされていない（キム・ソジン 2006 : 112）と指摘されている。さて、社会福祉館において実施される世代間交流プログラムは、どのように企画し、運営されているのか。

パクとアン（2012）は、地域における世代間交流プログラムの実態を把握するため、ソウル市に近接している京畿道の総合福祉館及び老人福祉館における世代間交流プログラムの実務担当者を対象に、アンケート調査を実施した。110か所のうち、64か所が分析対象となった。そのうち、社会福祉館は40か所であり、老人福祉館は24か所である。調査分析か

ら、①分析対象機関のうち、半数以上が世代間交流プログラムを実施しており、老人就労事業や自主プログラムの形であった。②支援者は、世代間交流プログラムへの必要性を認識しているが、プログラムの予算不足、多様なプログラムの開発の難しさ、プログラムの参加率の低下のような困難に直面している。③高齢者と子ども・若者は、世代間交流プログラムへの参加以外、社会福祉館内で接触や交流が行われる場合は少なかった、ということが明らかにした。また、崔（2018）は、大田市における社会福祉館の支援者を対象に世代間交流プログラムの企画と運営について質的調査を行った結果、社会福祉館における世代間交流プログラムは、プログラムの支援者である社会福祉士に、その企画から運営、評価まで委ねられる傾向があり、異世代の「交流」を意識した支援者は、高齢者と子ども・若者が交流しやすい交流形態に取り組んでおり、活発・密接な交流ができた高齢者は、交流から得られる効果が豊かであったとしている。

要するに、韓国社会福祉館における世代間交流プログラムは、世代間の断絶や葛藤を背景に注目し、高齢者と子ども・若者との交流や理解を得るために、プログラムを企画・運営しているが、社会福祉館の自主事業が多く、その具体的内容では、担当の社会福祉士の経験値に委ねられている傾向があることが見てとれる。

#### 第4節 日本の交流の場

日本では、第2次世界大戦の終わりとともに、家制度は家族法でほぼ廃止されたものの、道徳上あるいは生活基盤として、少なからず維持されることになった。しかし、都市化・産業化が進むなか、小規模化した家族の生活基盤の弱体化と家族問題の深刻化が進行した（後藤 2012 : 114）。

家族形態の変容によって、家族の機能に大きく変化が生じ、家族の教育力の低下が叫ばれるようになった。1970年代に①日本の伝統や文化を次世代に伝承すること、②高齢者の社会的孤立を防ぐことなどを主な目的とした自然発生的な世代間交流が地方にも都市にも生まれてきた。老人クラブの高齢者と保育園児や小学生との間に季節の行事や誕生会などを中心とした活動が開始されていたが、その数はまだそれほど多くはなかった（草野ら 2004 : 36）。一方、社会福祉協議会による養護施設の子どものための「心の里親運動」などが全国的に広がった。その他、子ども文庫、病院に入院中の子どもとの世代間交流、学習指導や、この頃社会問題として浮上した高齢者の自殺や孤独死を予防するための高齢者と主婦の交流もみられるようになった（宮里・土志田 1994 ; 青井 1994）。1990年代以降、従来の施設での高齢者ケアから在宅ケアを重視する施策が政府によって打ち出された。一方、少子高齢化の少子化に対する対処すべく、国や地方自治体によって子育て支援策も打ち出された。政府の後押しから「子育て支援NPOが数多くつくられる一方で、高齢者施設と保育園・幼稚園等子どもの施設とを合築または併設し、そこで統合ケアを行う動向が増し、全国の21.9%の市町村で実施されていた（林 1999 ; 草野 2004, 2006, 2009）」。しかし、その合築、併設施設における世代間交流の実施率は45.9%と、空間的統合が行われている施設の多数に及ん

でない。このようなことによって明らかになったことは、建物という「ハード・ウェア」が徐々に整備されてきている一方で、それぞれの施設に世代間交流を計画、立案、施設、評価するスタッフ、コーディネーターなどがまだ配置されていないことと、その必要性をいまだ行政、民間ともに認識していないといった実情がある。そのことは施設の統合が、世代間交流の理念からスタートしているのではなく、単に財政的支出をおさえ土地不足を解消するといった便宜的な理由から実施されている結果なのであろう(草野 2004, 2006, 2009)と批判されている。

この時代、高齢社会対策の中で世代間交流が用いられるようになる。内閣府の高齢社会対策室を中心に世代間の交流活動を促進させるための事業が実施されており、全国で成功した活動事例集を発表するなど世代間の交流の重要性が認識されていた(高齢社会対策室 1999)。1993年総務庁老人対策室では、『世代間交流に関する調査研究』を発表し、全国から集められた302事例の交流内容を分析し、①季節の行事やスポーツなど(合同で行事を開催、または一方の行事に他方を招待)、②訪問(友愛訪問、電話訪問、郵便など)、③文化、技能の伝承、④高齢者による子どもの世話、⑤地域おこし等、多岐にわたっていることを明らかにした。

そして、1994年の「21世紀福祉ビジョン」や1997年の中教審答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方」等の政府の公式文書に世代間交流の必要性が唱えられるようになる。地域において高齢者福祉施設と学校との連携を通じた世代間交流がみられた。築山ら(2006)による京都市と神戸市における社会福祉施設と小中学校に対し行った実態調査では、分析対象となった337か所のうち、62.9%が世代間交流を取り組んでいたが、その内容は、年数回の単発・イベント的な取り組みが多く、交流の内容は、娯楽活動や発表会などの表現活動、文化活動がよく行われていた。この世代間交流の主な計画者は、子ども施設の職員や両方の職員であった。世代間交流活動の意味について施設と地域とのつながりという回答が多く、世代間交流は高齢化の問題や世代間分離の問題に対するアプローチだけでなく、施設の地域化への機会として活用されていることが確認された。また、菅谷(2014)は、近畿2府4県における老人福祉施設の実態調査を行った。回答があった385か所のうち、281か所(73%)において交流が実施されていた。交流実施のきっかけとして、子どもの施設や学校側からの申し入れが多かった。交流の頻度は、年1~3回であった。交流の内容は、歌や合唱、楽器演奏、踊りなどが主流であった。こうした結果から、老人福祉施設の交流は全体にイベント的な性格が色濃い。多くの施設にとっては、交流とは、いまだ季節の催しや年中行事の一部にすぎず、このような交流のとらえ方が回数の少なさや参加人数の多さに反映されているとしている。交流の質的改善を図ることを求めている。地域における福祉施設で行われる世代間交流は、交流の形式をとっているものの、年に数回の単発的なものが多く、そのため、娯楽の内容が中心となっている。また、施設の職員によって企画されるため、普段の多忙な業務にさらに世代間交流は負担となり、交流の質を高める企画をすることが現実上難しいことが確認された。

一方、高齢者の介護予防や社会参加、子育て支援等から、それぞれに行っていた集まりの

場（サロン）を共に行う共生型サロンが増えつつある。名古屋市社協（2019）による『高齢者・共生型サロン実態把握調査』では、共生型サロンは設置が開始された平成17年は15か所であったが、平成30年では420か所に増加し、多くの所で異世代の共生型サロンが行われていることが分かる。共生型サロンは、住民主体の交流活動となっているため、社協からの研修や交流会などのサポートはあるが、交流の質を高めるような内容的な支援は行っていない。

幾つかの実態調査の検討から、日本における世代間交流の拡大は、少子高齢化における諸問題に対する政府の対策の方針の下で用いられていることが確認された。また、日本の場合、世代間交流の社会背景のとらえ方を見ると、アメリカや韓国のような世代間の葛藤という用語よりも、「世代間の分離・断絶」の用語でよく表現されている。世代間の分離・断絶が強調されていることから、世代間のつながりを重視する世代間交流の場が多く展開されてきたのではないかと考えられる。

## 第5節 本研究における交流の場の類型化及び調査対象選定

### 1. 交流の場の類型化

第2節から第4節にわたり、アメリカと韓国、日本における高齢者と子ども・若者のかかわりの場（以下、交流の場）について検討した。アメリカと韓国は主に意図的・介入的な世代間交流プログラムを用いて展開されているが、アメリカの場合、政府や民間団体、専門家などのそれぞれの連携・協力により、全国的な拡大とともに、プログラムの内容面や交流の質をも充実することができた。その一方、韓国は社会福祉館の自主事業として世代間交流プログラムを用いることが多く、プログラムの企画と運営は、社会福祉士に委ねられている傾向がみられる。一方、日本ではアメリカや韓国のような意図的・介入的な世代間交流プログラムによる展開は限られており、高齢者と子ども・若者がつながる機会を提供し、自然な交流を志向する傾向が確認された。

以上の内容を踏まえ、地域における高齢者と子ども・若者のかかわりの場を構成する要素を考える際、かかわりのできる空間や共有できる時間とともに、参加者である高齢者と子ども・若者の存在があげられる。かかわりのできる空間や共有できる時間は、少なくとも高齢者と子ども・若者とのかかわりの機会を提供したいと思う支援側からの設定であろう。そこに、高齢者と子ども・若者の間に円滑なかかわりを促す支援をするか否かが加わることで、高齢者と子ども・若者のかかわりの場が構成されていると考えられる。すなわち、支援者による高齢者と子ども・若者のかかわり支援によって、両世代のかかわりの質に影響を及ぼすものと考えられる。

したがって、高齢者と子ども・若者のかかわりの場を構成するハード面の要素、すなわち「時間の共有」と、ソフト面の要素、「支援者によるかかわり支援」を軸とし、交流の場の類型化を図る。「時間の共有」と「支援者によるかかわり支援」という両軸の多少により、4つの類型に分類される（図3-1）。ただし、ここで言う「時間の共有」とは、高齢者と子

ども・若者がかかわる時間を意味するが、「かかわる」ことは何かの活動を通して交わることである。この時間の共有のなかには同じ空間で一緒に居るという意味も含まれている。また、両軸における「多少」の意味は、時間の共有の場合、決まったかかわりの時間の他、自由にふれあう時間の有無から多少と判断し、支援者によるかかわり支援の場合は、かかわりの空間や時間の提供とともに、高齢者と子ども・若者の相互作用を意識した仕掛けの有無によって多少と判断する。

具体的に、両軸の多少から分類される4つの類型について説明する。図3-1のように、横軸は「時間の共有」とし、縦軸は「支援者によるかかわり支援」とする。類型Ⅰは、「時間の共有」と「支援者によるかかわり支援」が多い型である。高齢者と子ども・若者が交流できる「時間の共有」が多く、そこに相互作用を意識した適切な支援者のかかわり支援も多い形である。高齢者と子ども・若者の相互作用を意識した支援者によるかかわり支援は、高齢者と子ども・若者の相互関係性の形成に肯定的な影響を及ぼすと考えられる。また、類型Ⅰに参加している高齢者は、子ども・若者との円滑な相互作用や相互関係性から、かかわっている子ども・若者への関心や行動が増進され、子ども・若者とのかかわりによる高齢者の生きがい感が得られると想定される。

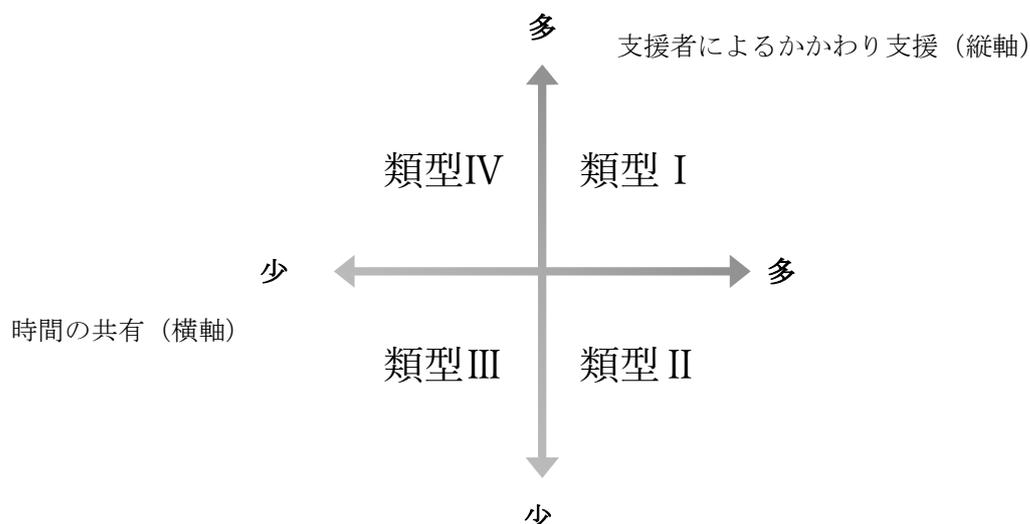
類型Ⅱは、「時間の共有」は多いが、「支援者によるかかわり支援」は少ない型である。高齢者と子ども・若者が交流できる場は設定され、時間の共有は多いが、そこに意図的な支援者によるかかわり支援は少ない形である。高齢者と子ども・若者とのふれあいや、かかわる時間が多いことから、何らかのきっかけを通して自然にかかわっていくこと、もしくは、かかわり活動に至らず、ふれあい程度にとどまる、二極の様相が考えられる。支援者による意図的なかかわり支援は行わないため、高齢者と子ども・若者との相互作用や相互関係性の形成には制約があると想定される。類型Ⅱに参加している高齢者は、何らかのきっかけから子ども・若者とかがわりができて円滑な相互作用や相互関係性が形成された場合には、類型Ⅰの高齢者のような子ども・若者への関心や行動が増進されると考えられるが、後者のように、子ども・若者とのかかわり活動につながらない場合は、子ども・若者による高齢者の生きがいは期待できないと考えられる。

次いで、類型Ⅲは「時間の共有」と「支援者によるかかわり支援」の両方が少ない型である。高齢者と子ども・若者が同じ空間で一緒に活動しかかわる共有時間が少なく、さらに支援者によるかかわり支援も少ない形である。高齢者と子ども・若者とのふれあいや、かかわる活動の時間が少なく、支援者によるかかわり支援も行わないため、両世代の間に相互作用や相互関係性の形成に制約が生じると考えられる。類型Ⅲに参加している高齢者は、子ども・若者との円滑な相互作用や相互関係性に制約があるため、子ども・若者への関心や行動の増進は期待しにくく、子ども・若者による高齢者の生きがい感も限定されると考えられる。

類型Ⅳは、「時間の共有」は少ないが、「支援者によるかかわり支援」は多い型である。限定された時間の中で高齢者と子ども・若者のかかわりであるが、そこには支援者の意図的なかかわり支援が多く入っている形である。限られたかかわりの時間での支援者による意図的なかかわり支援は、高齢者と子ども・若者との相互作用を促すための効果的なかかわり

支援を行うと考えられる。多様なかかわり支援は、高齢者と子ども・若者との相互作用や相互関係性の形成を促進し、高齢者の子ども・若者への関心や行動が強化され、子ども・若者とのかかわりによる高齢者の生きがい感が期待できると想定される。

図 3-1 交流の場の類型化 (筆者作成)



## 2. 調査対象の選定条件

4つの類型に該当する調査対象を選定するために、共通項目として「交流の場に対する条件」と「参加者に対する条件」を示す。

### 1) 交流の場に対する条件

交流の場に対する共通条件として、以下のように5点があげられる。

- ① 高齢者と子ども・若者のかかわりが定期的に提供され、1年以上行われていること
- ② 交流の場を提供する支援者が存在し、この支援者は参加者ではないこと
- ③ 交流の場の設ける地域は低・中所得層の住民が多い所であること
- ④ 地域住民である高齢者や子ども・若者等を対象にしていること
- ⑤ 高齢者と子ども・若者の対面交流が行われていること

### 2) 参加者に対する条件

<高齢者>

調査対象となる高齢者の共通条件として、次の5点があげられる。

- ① 低・中所得層の在宅に住む70代に近い高齢者であること
- ② 孫と同居していない方で、日常生活で子ども・孫とのかかわりは少ないこと
- ③ 介護保険制度による要支援サービスを利用している方、または要支援の認定はされていないが、要支援に近い健康状態である方
- ④ 体力や社会関係が乏しいため、ボランティア活動や地域活動への参加機会が少ない方

⑤子どもや若者と交流したいという本人の意思がある方

＜子ども・若者＞

本研究における「子ども・若者」は、幼児、小学生、高校生、大学生といった年齢層が異なる若い世代の全体を指している。交流の場に参加している子ども・若者の年齢層は統制しないこととする。

子ども・若者が特定年齢層で統制できなかった大きな理由としては、2点あげられる。

一点目は、第1章第2節に示したように、先行研究において子ども・若者の年齢階層によって高齢者への効果や影響に違いがあるのかについては、ほとんど検討されておらず、確立されていないため、影響があることを前提として統制する判断は難しいと考えた。二点目は、類型化した4つの類型に当てはまると同時に、子ども・若者側の年齢層を統一しようと検討したが、両方の条件を満たす事例は見当たらず、現実的に限界があった。

したがって、本研究のねらいは、子ども・若者という異なる年齢層とのかかわりによって高齢者の生きがいを検討することではなく、高齢者と子ども・若者との相互作用と相互関係性が生じていることを前提として、高齢者が得られる諸感情及びそのプロセスを明確にすることに焦点を当てていることを改めて強調する。

### 3. 調査対象の選定過程

地域において開催されている高齢者と子ども・若者の交流の場において上記で示した4点の条件を満たす所を探索した結果、H県N市でモデル事業として実施されている多世代交流拠点事業に着目し、モデル事業の試行機関として委託された3か所を対象に、予備調査を行い、本研究における条件が揃っているかを検討した。予備調査は、支援者へのインタビュー及び交流の場の参与観察とした。予備調査を行った3か所のうち、2か所は類型ⅠとⅡの条件に当てはまると判断したが、他の1か所は、地域の高齢者と子ども・若者との協力関係ではあったが、条件のうち、最も重要である⑤と②が満たしていなかった。

一方、A県N市では、高齢者や子ども、障害者といった地域における多様な人々の集まりの場を設置、推進しているが、近年、共生型サロンが急増している実態から、平成28年度高齢者・共生型サロン実態把握調査報告書を検討し、また、N市社会福祉協議会の職員の協力を得て、交流の場の条件に当てはまる共生型サロンを見つけた。上記と同じく予備調査を行い、類型Ⅲに当てはまると判断した。

H県N市とA県N市で交流の場を探し検討しながら、類型Ⅳの条件に該当するプログラム型の事例も探索したが、適切な事例は見当たらなかった。高齢者ボランティア団体と小中学校と連携し、高齢者の経験を伝える事例はみられるが、本研究が前提としている高齢者と子ども・若者が対等な関係でかかわることではなかった。検討の末、類型Ⅳは、韓国における世代間交流プログラムを取り上げることと判断した。判断に至った主な理由として、韓国の世代間交流は、アメリカのようにプログラムを中心に展開されているが、アメリカと異なる点が多くみられる。韓国の事例検討は、日本や韓国に意味のある示唆が得られると考えられる。また、筆者の韓国社会福祉館における実務経験や韓国世代間交流プログラムを対象とし

た修士論文の執筆から、韓国社会福祉館における世代間交流プログラムをもっと明確にしたいという強い思いもあった。

#### 4. 調査対象先

##### 1) 調査対象先の基本情報

類型Ⅰ～Ⅳに該当する調査対象先について紹介する。各調査対象先における設立年、運営機関・団体、主な事業、開館日時について以下表 3-1 のようにまとめた。なお、高齢者と子ども・若者のかかわる地域活動を行う機関や団体を示す際には、A, B, C, D に区分する。

A (類型Ⅰ) は 2014 年から特別非営利活動法人を設立し、運営している。主な事業としては、「N 市地域づくり支援事業」という市の委託・補助事業、夕食会や地域のがっこうといった自主事業、地元の大学生と連携した地域資源調査、現場実習のような連携事業を行っている。

B (類型Ⅱ) は 2016 年に社会福祉協議会が設立し、運営しているところである。主な事業は、「N 市地域づくり支援事業」と「障害者通所活動センター」を市の委託・補助事業を実施しており、フリースペース、自立生活準備プログラムといった自主事業も行っている。

A (類型Ⅰ) と B (類型Ⅱ) は H 県 N 市に位置しており、N 市の地域づくり支援事業を委託され実施している。N 市は、かつて高齢者や障害者といった社会の弱者と共に暮らしていこうという共生の地域づくりへの意識や動きがあった。N 市では 2014 年度から共生型地域交流拠点モデル事業を市内 3 か所における委託運営を取り入れている。共生型地域交流拠点は世代にかかわらず、誰もが利用し、地域住民のつながりと共生を目的に様々な活動に取り組んでいる。このモデル事業の成果により、今後 N 市における共生型地域交流拠点を拡大し展開していこうとするところである。

C (類型Ⅲ) は社会福祉協議会の第 3 次地域福祉活動計画により実践した共生型サロンプロジェクトである。世代や立場・障害の有無を超えた多くのつながりをつくることを目的とし、2015 年に開設された。空き家であった古民家を活用し、月曜日から金曜日までは特別非営利活動法人による地域子育て支援拠点を運営し、火曜日と木曜日は高齢者や障害者など誰もが利用可能な共生型サロンとして運営している。実際は高齢者が多く集まるため、高齢者を中心とした活動が多く実施されている。

D (類型Ⅳ) は、世代間交流プログラムを運営している韓国 T 市における社会福祉館 3 か所である。社会福祉館とは、地域社会を基盤とし専門職を揃え、地域住民の参与と協力を通して地域社会の福祉問題を予防し解決するために総合的な福祉サービスを提供する所である(社会福祉事業法社会福祉館設置・運営規定第 5 条)。社会福祉館では、様々な事業やプログラムが行われているが、近年、世代間の葛藤といった新しく浮上する社会問題を解決するため、自主事業として世代間交流プログラムを企画・運営し対応している。世代間交流プログラムは、社会福祉館において高齢者と子ども・若者に世代間交流の機会を提供し、世代間の交流を促進するために、社会福祉士が人為的・意図的に支援するものである。

表 3-1 調査対象施設における基本情報

区分	設立年	運営主体 機関・団体	主な事業	開館日時
A (類型Ⅰ)	2014年	特別非営利活動法人	<p>委託・補助事業：地域づくり支援事業（つどい場カフェ，見守り会議，介護予防講座・体操，個別相談）</p> <p>自主事業：夕食会，地域のがっこう，地域つどい場ネットワーク</p> <p>連携事業：地域資源調査，地域新聞の発行，大学生の現場実習，地元野菜の販売，就労訓練の実施等</p>	月曜日～土曜日 9時～16時
B (類型Ⅱ)	2016年	社会福祉協議会	<p>委託・補助事業：地域づくり支援事業（つどい場カフェ，見守り会議，介護予防講座・体操，個別相談），障害者通所活動センター</p> <p>自主事業：フリースペース，ガーデニング，自立生活準備プログラム</p>	月曜日～金曜日 9時～17時30分
C (類型Ⅲ)	2015年	社会福祉協議会	<p>共生型サロン（高齢者サロン）</p> <p>回想法，いきいき支援センター，体操，介護相談，防災訓練，季節イベント等</p> <p>地域学生との連携</p>	火曜日・木曜日 10時～15時
		特別非営利活動法人	<p>地域子育て支援拠点</p> <p>乳幼児をもつ親とその子どもの交流，育児相談，プチ講座，リフレッシュヨガ，収穫体験，おやつ作り，おもちゃ作りなど随時開催</p>	月曜日～金曜日 10時～15時
D (類型Ⅳ)	a	1992年	総合社会福祉館	月曜日～金曜日 9時～18時
	b	1992年	社会福祉館*	
	c	1997年	総合社会福祉館	

\*社会福祉館は，施設の規模によって2つに分類される．500㎡以上1,000㎡未満の場合は社会福祉館とし，1,000㎡以上は総合社会福祉館としている．

## 2) 高齢者と子ども・若者のかかわり内容

類型Ⅰ～Ⅳにおいて行っている高齢者と子ども・若者のかかわりの具体的な内容について紹介する（表3-2）．

A（類型Ⅰ）は2014年から赤ちゃんスペースや夕食会等の高齢者と子ども・若者のかかわる活動を実施してきている．赤ちゃんスペースは，N市地域づくり支援事業・委託事業であり，毎週月曜日と土日にAの片方に畳を引き，乳幼児期の子育て親子が自由に過ごせる場を提供している．Aは，普段，高齢者や地域住民のつどい場の地域カフェを運営しているので，赤ちゃんスペースの実施日は，地域カフェを利用する高齢者と赤ちゃんスペースを利用する乳幼児期の子育て親子の様子が同時にみられる．また，高齢者や地域住民，地元の大学生のつながり活動として夕食会を月3回以上実施している．夕食会は，自主事業であり，食事代として参加費がある．食事準備から食事後の片づけまで参加者が皆で行っている．参加人数は平均15～20人程度であり，高齢者と大学生等の参加者が交わるように座席配置等が工夫されている．参加者は，食事をしながらテーブルの周りの人と自由に話し合い，食事後は

皆で楽しめるゲーム等も行う。

B（類型Ⅱ）は、設立の当時から2階一室を誰もが自由に使える自由スペースとして提供している。平日の昼間の利用者は、高齢者と小学生が多い。高齢者は将棋や囲碁、折り紙などを、小学生は宿題やゲーム等をしているが、高齢者と小学生と一緒に将棋や囲碁、物づくりをする様子も見られる。

C（類型Ⅲ）は、2015年から空き家であった古民家を利用し、高齢者サロンと子育てサロンを一つの屋根の下で運営している。古民家は大きな部屋と小さい部屋があり、二つの部屋は廊下でつながっている。大きな部屋は毎週火曜日と木曜日に高齢者サロンとして運営しているが、高齢者サロンの開催日は、体操やお昼を子育てサロンに参加している幼児期の親子と一緒にしている。音楽会や季節のイベントも一緒に行う。また、夏や冬の休みの時は地域の高校生が訪問してかかわる機会を取り組んだり、2017年からは、子ども食堂も実施し、小学生や中学生が訪れ、高齢者と子ども・若者がかかわる機会を沢山提供している。

D（類型Ⅳ）は、韓国T市における社会福祉館3か所で実施されている世代間交流プログラムである。aプログラムは2007年から開始しており、高齢者1人に対し高校生2人を縁組に結び、高齢者のお宅に訪問して対話、散歩、買い物、料理といった活動を一緒に行うものである。次に、bプログラムは、2008年から始まっており、地域の高齢者と幼稚園の子どもと一緒に地域の掃除をしたり、チームを組んでミニトマト収穫や天然染色などの体験活動を行うものである。cプログラムは、2011年から開始しており、高齢者と大学生で構成した合唱団を結成し、合唱練習とともに文化体験や発表会などを行うものである。

表 3-2 調査対象施設における高齢者と子ども・若者のかかわり内容

区分	開始年	子ども・若者のかかわり内容	参加者	実施頻度
A (類型Ⅰ)	2014年	つどい場カフェの赤ちゃんスペース ：N市地域づくり支援事業・委託事業	高齢者・ 乳幼児期の 親子	週2回 (月・土)
		夕食会 ：住民同士と一緒に食事をしてつながることを目的 とした自主事業 食事準備, 自己紹介, 隣の人と話し合いながら食事, 一緒に楽しめるゲーム等	高齢者・ 大学生	月3回 以上
B (類型Ⅱ)	2016年	自由スペースを高齢者と子ども・若者等が自由に 利用している。高齢者と子どもは将棋・囲碁・物づく りなどを一緒にやる	高齢者・ 小学生	月曜日～ 金曜日
C (類型Ⅲ)	2015年	古民家で高齢者サロンと子育て地域拠点を運営し ている。体操やお昼と一緒に食べる等、音楽会や季 節のイベントを実施	高齢者・幼 児期の親子	週2回 (火・木)
		夏・冬休みは地域の高校生と交流及び子ども食堂実 施	小・中・高 の学生	一時的
D (類型Ⅳ)	a 2007年	高齢者1人に対し高校生2人を縁組に結び祖父母と 孫のような役割としての活動 例：話し相手, 散歩, 買い物, 料理, 将棋, 囲碁等	高齢者・高 校生	月1～2回
	b 2008年	地域の掃除や体験活動 例：ミニトマト収穫体験・天然染色, リサイクルで 物づくり, クイズ大会, 運動会等	高齢者・幼 児	月1回
	c 2011年	1・3世代に構成する合唱団活動 合唱練習(月3回) 団体練習, 重唱練習 特別活動(月1回)：文化体験 発表会(年2-3回)	高齢者・大 学生	週1回

## 第4章 高齢者インタビュー調査の概要と結果

### 第1節 調査概要

#### 1. 調査目的

本章では、研究課題1の子ども・若者とのかかわる地域活動に積極的に参加している高齢者を対象にインタビュー調査を実施し、子ども・若者とのかかわりを通してジェネラティヴィティを含む高齢者の生きがいへの影響を明らかにする。

#### 2. 調査対象及び調査内容

類型Ⅰ～Ⅳを利用している高齢者の中で、子ども・若者との交流がある高齢者を条件とし、支援者から推薦された方々に調査協力を依頼した。調査協力を得た合計26名(類型Ⅰ:5名, 類型Ⅱ:9名, 類型Ⅲ:8名, 類型Ⅳ:4名)を対象に半構造化インタビューを実施した。インタビュー時間は平均60～80分程度で1～2回であり、質問内容は、今井ら(2012)の「生きがい意識尺度」と田渕ら(2012)の「短縮版 generativity の尺度」の質問事項を参照した。参加経緯、子ども・若者とのかかわりについて(過去と現在)、具体的な活動の様子と感想、現在の生きがいと今後の生き方、望む地域の姿等とした。実施期間は2018年3月～7月中に行った。ただし、類型Ⅳにおける高齢者インタビュー調査は、筆者の修士論文「韓国における高齢者の世代間交流がサクセスフル・エイジングに与える影響に関する研究」で収集された調査データを用いる。調査は2014年7月に実施したものである。

なお、高齢者と子ども・若者のかかわりに対するイメージを深めるため、各類型に参加している子ども・若者の感想の声を聞き取った。聞き取りは、類型毎に協力を得た1～2名を対象に2019年1月～2月に行った。聞き取りの内容は、各節の導入部において示す。

#### 3. 分析方法

##### 1) M-GTA 分析の妥当性

高齢者のインタビュー調査の分析は、木下(1999, 2003, 2007, 2009)が提案したグラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified Grounded Theory Approach: 以下M-GTA)を参照することとした。木下(2007: 66-68)によれば、M-GTAに適した研究は、実践的な領域において①サービスが行為として提供され、利用者も行為で反応する直接的なやり取り(社会的相互作用)のレベルであること、②現実に問題となっている現象で、研究結果がその解決や改善に向けて実践的に活用されることが期待されている場合、③研究対象自体がプロセス的特徴を持っている場合、のような特徴を持っているヒューマンサービス領域が最適であると述べている。本研究は、地域において福祉施設が高齢者と子ども・若者とのかかわりの場を設定・運営・支援し、その中で利用者である高齢者と子ども・若者は支援側とのやり取りに加えて、利用者間の相互作用が行われているという点は上記の①に該当しているといえる。こうした高齢者と子ども・若者のかかわりの場は、地域において世代間のつながりの希薄化という懸念から多く実施されているが、高齢者への効果・影響については注目さ

れ研究業績が見られる一方で、そのプロセスについては明らかにされていないという点がある。高齢者への効果・影響をもたらす支援を提供するために、子ども・若者とのかかわりから得られる効果・影響までのプロセスを検討することは、支援が必要な時に支援ができること等の実践に活用できる改善が提案できるという点から上記の②と③に該当すると考えた。したがって、高齢者のインタビュー調査に関する分析は、木下（2007, 2009）のM-GTA分析方法を参考に行った。

## 2) 分析テーマと手順

分析に当たり、分析テーマは「高齢者が子ども・若者とのかかわりから得られる影響のプロセスを明らかにする」こととし、分析焦点者は「子ども・若者とのかかわる地域活動に参加している高齢者」である。分析手順としては、録音データを文字化し、文字化したデータ（生データ）を基に概念化作業・ワークシート作成を行った。ワークシートは、概念-定義-バリエーション（具体例）-理論的メモに構成した。概念リストを作成し、概念同士の関係性（方向性、対立、共通）を探す。必要な場合、類似した概念同士の統合、削除、生成を行った。概念同士の関係性からカテゴリーを抽出した。カテゴリー同士の関係性（うごき）から一連のプロセスを明らかにし、ストーリーラインを作成した。

## 4. 倫理的配慮

日本福祉大学大学院の倫理ガイドライン（改定版）に沿って倫理的配慮を行った。調査対象者に対して、研究の目的・方法及び調査への協力について「インタビュー調査へのご協力をお願い」、「インタビュー調査の概要と内容」という文書を用い説明した。

インタビュー調査への概要と内容については、①予定するインタビュー時間、②調査協力は対象者の自由意思によるものであり、いつでも協力を中止・撤回できること、③話したくない内容は話さなくてもよいこと、④インタビューは録音すること、⑤インタビュー内容は説明した研究目的以外には使用しないこと、⑥個人の特定を防ぐため対象者はIDで表記・管理すること、以上6点を説明した。高齢者のインタビュー調査の場合は、体調を配慮し、面接時間は90分以内で終了した。

分析する際、調査施設名はアルファベットの大文字と表記し、高齢者はアルファベットの小文字と表記している。

## 第2節 類型Ⅰの参加高齢者の生きがい

類型Ⅰの参加高齢者のインタビュー調査結果を報告する前に、参加大学生と参加高齢者g氏の語りを紹介する。大学生と高齢者は、どのような経緯で施設を利用し、高齢者と子ども・若者がかかわる活動に参加しているのか、そして、この活動をどのように捉えているのかについてイメージして頂きたい。なお、語りの中で（ ）は文脈を変えない範囲での筆者による補足である。

### 《夕食会に参加している大学生の語りから》

私の大学の先輩が、ここで、高齢者と学生の研究みたいのをずっとして、その付き合いで紹介してもらった。ちょうど4年生の時に参加して3年くらい参加している。実家で父方の祖父母と一緒に住んでいるのでお年寄りへの違和感は別になかった。

家でごはん食べているって、テレビを見てしまったりまた、何かしないといけないことがあったりしてちょっと早めに食べてしまうことがやっぱり多い。ここであつたら、おしゃべりを楽しむことができるのが、すごく魅力だ。お年寄りと話していると、結構、話が違う話にポンといきなり変わったりするのがあって、明るい話とかもいっぱい聞けたり、自分が全然知らないようなこととか、聞いていてすごい楽しいなと思う。同じ立場の友たちだったら、同じ立場の話を深めてしまう。それ以外の話とかはあまりしなくなったりする。お年寄りの方は、体の調子や病気の話とかをしても、それ対しての受け止め方も全然違うからそれも面白い。ここに来られる方って、新しいものを色々積極的に取り入れる方の気がする。私の祖父母がすごいアナログの人で、他のお祖父さんと色々話してみても、普通にスマホとかを使いこなしていたりとか、何か新しいものに取り入れることに対して、あまり抵抗がない人がやっぱりいるんだなとか、私の周りにたまたまそういう人がいなかったんで、なんとか消極的なイメージだったのが、いっぺんしたなと思う。やっぱり今まで、お祖父さん、お祖母さんという感じは、自分と違う存在と感じていたのが、グッと親近感を感じたり、年齢の差があってもそんなに関係ないんだなと思った。お年寄りをみて、どんなふうには自分は年を重ねていくのかなとか、漠然だけど、思ったことはある。こんな方になりたいなって明るい感じで。何度か行ってから、〇〇ちゃんって言うてくれたりとか、名前はあまり覚えていただけてないけど、顔とかは覚えているなど、うれしい。気にかけてもらっているなという感じはある。そういう気持ちをわかるから、これからの就職も頑張っていこうと思ったりする。夕食会がまた3月なので3月に参加して終わりにしたい。

### 《赤ちゃんスペース及び夕食会にかかわっているg氏の語りから》

最初は地域のチラシだったと思います。チラシをみて入ってみたという感じですね。地域での交流、お年寄りがね、気楽にきてお茶をいただけて、安くて頂いて居られるということ自体ありがたいですね。ここは、毎日いくらでも行きたい時にきて、また、用事があつたり、しんどくて横になりたい時は、別に来なくても関係ないし、気楽にね。ここではね、月曜日と土曜日に子育てのお母さんに開放して、昼を引いて、お母さんたちが気楽にしゃべりできるし、ランチも安くて子どもつれていって食べれてね、そういうのも考えてされたりしますね。

子どもを見るだけでも可愛いなって、先も抱っこしてあったりしているのを見てたりしたんだけど、やっぱり可愛いですよ。

安心してお母さんも自分の話もできるし、同じ人たちとの話し合いもできるしね。それをみてるだけでも私たちお年寄りはいいいですね。孫はもう（子育て中の）お母さんくらい。4人いるからね。4人とも。だから大変でした。働きながら孫も子育てしながら、上の子が一緒に住んでいたから、配偶者が他界して。今はみんな、一緒に居た（孫）子も家を出て働いている。お祖母ちゃんとしてのしてあげる役目はある程度外れてしまった。それは寂しいけどね。寂しいけど、しょうがないなというね、その子はその子の人生があるから。そう思うと、こういう人たち見ていたらね、あーよく頑張ってるからね。あの子たちがどんな子になるのかなって楽しみ。昔の孫の子育ても思い出しながら、今ふりかえたら、その時背いっぱい頑張ったなって。

（夕食会は）いい感じ。やっぱり、そういう学生さんと一緒に食べられるということは、色んなことも聞けるし、普通の話の聞いたりね。‘将来どうするの?’とか。でも、なかなか深い話まではね。ちょっとの時間だからさ。そのあとまた、店長（支援者）が中心になって色んなゲームとか楽しむことをやってるから。グループで若い人とお年寄りと関係なくてね。だから、その時、その時にアイデアを考えてくれてね。店長はすごいなって思うね。そういうことも普通はできないでしょう。お年寄りってずっとテレビみてるからね。たまにゲームとかしてると、喜びが全然違うね。学生さんとかね。楽しいですね。若い方、アレルギーをいただいて、元気を頂きます。やっぱり、同じ年齢の人とのふれあいと、学生さんとのふれあいは違いますね。若い方の意見も、今の若い方こんなことを、私たちとは全然違うでしょう、年齢の差で。こんな考え方でいらっしゃるんだなって。いい勉強になります。それも楽しみにしています。

（学生さんに与える影響）その辺はどうなんだろうね。でも、考えたら、やっぱり社会人になっていて、大学4年間は、同じ子どもさん同士の付き合いでしょう。その中でこのお年寄り、そういう考えもあるのかな、そういう時代もあったんやとか、色んな参考にはなると思うよね。昔の時代の話とか、生の話だから参考になるかもね。

## 1. 高齢者の基本属性

インタビュー調査の協力を得た高齢者は合計9名（男性3名、女性6名）であり、基本属性を表4-1で示す。基本属性の項目は、年齢代、世帯形態、子・孫の有無、介護保険利用の有無、施設利用頻度とした。個人の特定されることを防ぐため、表4-1での性別表記は控える。高齢者の年齢代は60代～80代までで、60代は1名、70代は6名、80代は2名である。平均年齢は75歳である。また、世帯形態は、単身世帯（4名）が多く、夫婦世帯（2名）、未婚や既婚の子と同居（3名）であった。すべての高齢者は子はいたが、遠距離で暮らしていることや、近距離で暮らしていても子の家庭事情、あるいは仕事事情により子や孫との集まりは平均年に1～3回程度であった。高齢者は老いによる持病や体力の弱化などは感じているが、介護保険制度の対象になり、デイサービス等を利用している方は2名のみで、生活支障のない程度の健康を保っている。施設の利用頻度は月3回～週6回まで頻度の範囲は

広く個人差があったものの、1年以上利用している。

表 4-1 類型 I の参加高齢者の基本属性

区分	ID	年齢代	世帯形態	子・孫の有無	介護保険利用有無	利用頻度
A 類型 I	a	70代	夫婦	有・有	無	週6回
	b	80代	単身	有・有	無	週6回
	c	70代	単身	有・有	有	週2回
	d	70代	子夫婦と同居	有・無	無	週6回
	e	60代	子と同居(2人)	有・無	無	週2回
	f	70代	子と同居(2人)	有・有	有	週6回
	g	80代	単身	有・無	無	週2回
	h	70代	夫婦	有・有	無	月3回
	i	70代	単身	有・有	無	週1回

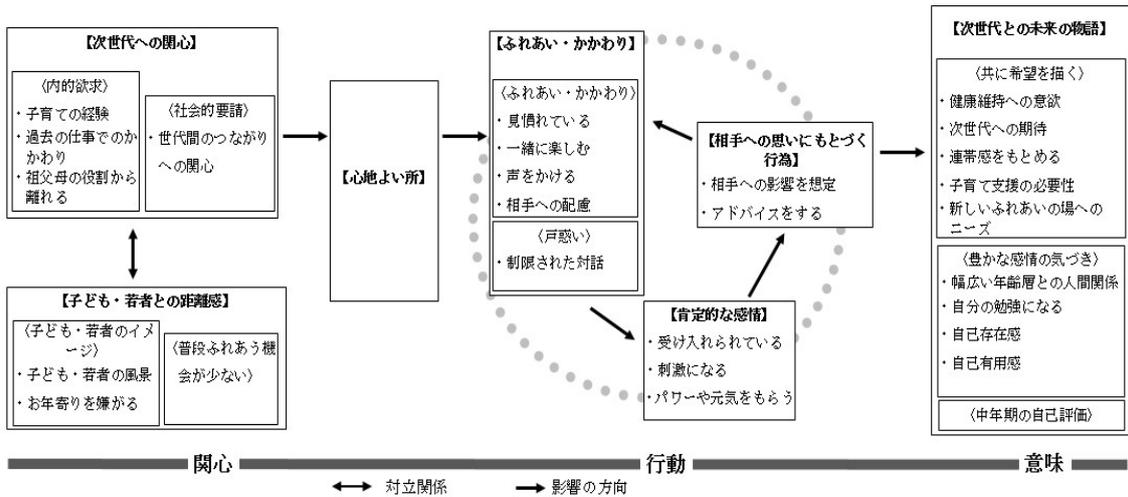
## 2. プロセス全体像

分析により、7つのカテゴリーと12つのサブカテゴリー、28つの概念が生成された。生成したカテゴリーは【 】, サブカテゴリーは〈 〉, 概念は「 」, 語りの具体例は『斜体』で表記する。なお、語りの具体例での( )は文脈を変えない範囲での筆者による補足である。結果の全体像は図6-1に、概念の一覧は表4-2に表す。

まず、若い世代とのかかわりを通して得られる高齢者の影響のプロセスの全体像を概観し、次に「関心」「行動」「意味」の段階におけるカテゴリー及び概念について説明する。

地域における子ども・若者とのかかわりに参加している高齢者は、参加する前の「関心」段階において【次世代への関心】とともに【子ども・若者との距離感】を抱えている。【次世代への関心】が次世代への行動に移るためには、高齢者と子ども・若者の交わる所が必要であるが、高齢者はその場所を【心地よい所】として受け入れ、【次世代への関心】から次世代との【ふれあい・かかわり】に気軽に参加している。「行動」段階で高齢者は、子ども・若者との【ふれあい・かかわり】から【肯定的な感情】を感じる。【ふれあい・かかわり】の中には子ども・若者とのかかわりに対する〈戸惑い〉もあるが、継続的な【ふれあい・かかわり】により【肯定的な感情】を築き、相互関係性を構築する。さらに、かかわっている【相手への思いにもとづく行為】が生まれ、次の【ふれあい・かかわり】への参加を一層強化する。このような【ふれあい・かかわり】→【肯定的な感情】→【相手への思いにもとづく行為】の一連の過程は循環し、次の過程の強化につながる。重なる一連の行動過程を通じて高齢者は、現在の〈豊かな感情の気づき〉だけではなく、自身の中年期を肯定的に評価とともに、今後の生き方について【次世代との未来の物語】を描く意味づけに至る。

図 4-1 類型 I の分析結果図



### 3. 各段階におけるカテゴリー及び概念の関係

#### 1) 関心段階

関心段階は高齢者と子ども・若者とがかかわる活動に参加する前の段階を意味し、【次世代への関心】【子ども・若者との距離感】という2つのカテゴリーから構成される。

##### ①【次世代への関心】

高齢者の【次世代への関心】は、子ども・若者とふれあい・かかわりたいと思うようにする諸起因を意味し、高齢者〈内的欲求〉と〈社会的要請〉という2つのサブカテゴリーから構成される。〈内的欲求〉は中年期・高齢期における経験や現在の生活環境から求められることを意味し、「子育ての経験」「過去の仕事でのかかわり」「祖父母の役割から離れる」の3つの概念から構成される。

##### ◎「子育ての経験」

「子育ての経験」の概念は、中年期において子どもを扶養するため、共働きと子育てを両立してきたことを意味する。『自分も働きながら子育てしながら、今時期になったら遊びにつれていて夏休みに入ったら、毎年そういうこと考えてしてきました』などの語りから生成された。

##### ◎「過去の仕事でのかかわり」

「過去の仕事でのかかわり」の概念は、過去、子どもに接する職業に携わったことや職場で若者を教えた経験のことである。『自分の下で働いていた人も若かったから、教えたりもするし、働いた後の色々話も聞くし。皆ね、結局大学出て親もと離れてきている。そうするとやっぱりいろんな悩み持っているでしょう。そういうのを聞いたりね』などの語りから生成された。

##### ◎「祖父母の役割から離れる」

「祖父母の役割から離れる」という概念は、孫が幼い時は子育ての補助的な役割を担っていたが、孫の成長につれてその役割が少なくなることである。『今みんな大学に出て、働い

たり、女の子は就職して大阪にいて、男の子は大学卒業して外国で働きながらしている。お祖母ちゃんとしてのしてあげる役目はある程度外れてしまった。それは寂しいけどね』などの語りから生成された。

高齢者の〈内的欲求〉は、中年期における自身の子育ての経験や仕事での若い世代とかかわった経験がその背景にある。また、高齢者と一緒に住む3世代の家族形態は少なく、別居の多い現状のなかで、本来祖父母として果たしてきた役割は期待できない。孫が幼い時は別居であっても子育ての補助的な役割が求められてきたが、孫の成長とともに担っていたことも減っていく。さらに、ますます子家族との交流頻度も減り、物理的距離とともに、心理的距離も遠ざかる。要するに、高齢者は過去中年期の子育てや仕事での経験から次世代に対する本能的な欲求を内在しているにも関わらず、血縁関係である子家族との物理的・心理的距離などにより、その欲求が充足されない状態であることが分かる。

次に、もうひとつのサブカテゴリーである〈社会的要請〉とは、社会から期待されていることを意味し、「世代間のつながりへの関心」という一つ概念から構成される。

#### ◎「世代間のつながりへの関心」

この概念は、近年、家族や社会において若い世代との付き合いは難しくなっていることから人々のつながりの必要性を感じることを意味する。『今はもう隣の家とは関係ないのが普通は普通ですよ。また、そういうことも何も助けてくださいなんて求められる状態でもない。やっぱり今は社会の人間関係というのは昔と比べて、薄くなっていますね。基本的には』などの語りから生成される。かつて日本では家族や社会における人々とのつながりへの希薄化が懸念されてきたが、高齢者も生活のなかで、身近に感じられる問題であり、高齢者同世代のつながりのみならず、全世代に渡る人々のつながりへの必要性について共感している。

#### ②【子ども・若者との距離感】

【子ども・若者との距離感】は、高齢者が子ども・若者に対し感じる心理的距離を意味し、〈子ども・若者のイメージ〉〈普段ふれあう機会が少ない〉という2つのサブカテゴリーから構成される。〈子ども・若者のイメージ〉は、高齢者の経験に基づき思い浮かぶ子ども・若者に対する考え方を意味し、「子ども・若者の風景」「お年寄りを嫌がる」という2つの概念から構成される。

#### ◎「子ども・若者の風景」

「子ども・若者の風景」の概念は、町でよくみかける、携帯電話を持って夢中に何かをやる子ども・若者の様子を意味する。『みんな携帯電話もってるから、今みんな色んな何かをゲームとかするからな。あまりな。何をやってるのかあまり分からない。ちょっと、何をあれにしてやってるのかなって』の語りから生成される。

#### ◎「お年寄りを嫌がる」

「お年寄りを嫌がる」概念は、子ども・若者は高齢者の言動や老化による特性・変化等を不快と思い、ふれあいを望まないと感じることを意味する。『ふつう嫌、嫌じゃないですか。年上を相手に。(中略)お風呂なんかにも年寄入るのもなんか嫌がる人いるでしょう、若い

方は、なんかそういうのを聞いたりしているから、今の子はね、お年よりが汚いからって思うんです』などの語りから生成される。

また、もうひとつのサブカテゴリーである〈普段ふれあう機会が少ない〉は、同様の概念から生成される。

### ◎「普段ふれあう機会が少ない」

この概念は、血縁関係以外、地域で自然的もしくは意図的に子ども・若者とふれあう機会が得られないことを意味する。『色んな年齢層との関わりがあった方が良いと思いますね。そういう機会があまり、私よく外に出る人ではないからここ以外にはないですね。孫があったらそういう機会があるかも知れないけど、全然そういう機会がない』などの語りにより生成される。

高齢者が描く子ども・若者のイメージは、町でよく見かける子ども・若者の様子や若い世代とかかわった経験談の共有から形成されている。高齢者は町でよく見かけるスマートフォンなどの機械に夢中している若い世代の様子から文化的な異質を感じる一方で、人からの接近を遮断するような印象として受け止めている。また、高齢者同士の話題の中には、孫を含む若い世代とのかかわりで困った話を共有しながら老化による身体変化を理解してくれない‘今の子’のイメージを形成している。日常生活のなかで高齢者と若い世代が対立する状況は常に存在しており、普段高齢者と若い世代とのふれあいやかかわりの少ない現状では、高齢者の感じる子ども・若者への偏ったイメージを固着し、さらに子ども・若者との距離感をより感じさせると考えられる。

以上、関心段階では〈内的欲求〉と〈社会的要請〉から影響を受ける【次世代への関心】とともに、【子ども・若者との距離感】の存在が確認された。【子ども・若者との距離感】は【次世代への関心】と対立している。家族形態の変化に加え、IT 発達などによる世代間の置かれている環境の違いは、高齢者と若い世代との物理的・心理的距離感を深化すると考えられる。

## 2) 行動段階

高齢者が子ども・若者とかかわりを行う‘行動’の段階は、【心地よい所】【ふれあいかかわり】【肯定的な感情】【相手への思いにもとづく役割】という4つのカテゴリーから構成される。

### ①【心地よい所】

【心地よい所】というカテゴリーは、図6-1に示したように、次世代への関心から行動に移る局面、つまり関心段階と行動段階の間に位置づけられる。このカテゴリーは同様の単一概念により生成される。【心地よい所】とは、高齢者にとって気楽にきて自由に居られる場所のことを意味する。『気安く、あまり難しくないな。来てもいつも気楽にこられるかな』『地域での交流、どっちかというとな、お年寄りがね、気楽に来られて、お茶をいただけて居られるということ自体ありがたいですね』などの語りのように、この場所は高齢者に心理的安定感を与える居場所のような所である。そこで行う子ども・若者とかかわりは、関心段階で示した【子ども・若者との距離感】からの影響を受けず、参加できると

考えられる。

## ②【ふれあい・かかわり】

【ふれあい・かかわり】の категорияは、〈ふれあい・かかわり〉〈戸惑い〉という2つのサブカテゴリーから構成される。〈ふれあい・かかわり〉は類型Ⅰを利用することで、得られる子ども・若者とのふれあいやかかわりのことを意味する。「見慣れている」「一緒に楽しむ」「声をかける」「相手への配慮」という4つの概念から構成される。ここでの‘ふれあい’とは空間と時間を共有するが、直接的な相互作用のないことを意味し、‘かかわり’とは空間と時間の共有するなかで直接的な相互作用のある活動のことを指す。

### ◎「見慣れている」

「見慣れている」という概念は、同じ空間を利用することから若い世代と一緒にいる環境に適応していることを意味する。『お年寄りもいるし、学生さんもいるし、また、小さいお子さんもいらっしゃいますね。小さいお子さんの声を聴くとね、ちょっとしたところにぱつと話たり、子どもだから好きなこと言うでしょう。それを聞くとすごく楽しいですね』などの語りから生成される。

### ◎「一緒に楽しむ」

「一緒に楽しむ」という概念は、高齢者と若者の両方が興味を持ち、対等な関係で一緒に楽しめる活動を意味する。『そのあとまた、店長が中心になって色んなゲームとか楽しむことをやってるから、グループで若い人とお年寄りと関係なくてね。だから、その時、その時にアイデアを考えてくれてね。店長はすごいなって思うね。この前もまわりの人の名前とか、色んな入口から考えて、3人とか4人とかグループになって、そういう遊びをするとかね』などの語りにより生成される。

### ◎「声をかける」

「声をかける」という概念は、高齢者が子ども・若者に関連した学校や部活、趣味等の話から声をかけ気軽にかかわっていくことを意味する。『‘何やってるの?’からはじまってね。どんなこと考えてるかなとね。聞きながら、こんなこと考えてるんだとか』『私は私から話をかけているけど、この前は〇〇中学校の子が来て、私の母校よって言って、話したりね』などの語りから生成される。

### ◎「相手への配慮」

「相手への配慮」とは、若者が嫌な気持ちにならず、興味を持ってかかわるよう気をつけることである。『前会った人がこんな人だったって覚えておかないとあかんね。同じことを2度目3度目聞いたらね、なんやこのおっさん、何も分からん。覚えてへんだって。覚えておかないと話にならない』などの語りから生成される。

類型Ⅰは年齢関係なく誰もが利用できる所である。幼児期の赤ちゃんから90代の高齢者まで利用しており、赤ちゃんの泣き声や子どもの大きい声、高齢者の声などが混ざって聞こえる。高齢者はこの機関を利用することで若い世代と一緒にいる環境に自然と馴染んでおり、また、夕食会に参加している高齢者は隣に居る若者の存在を意識して先に声をかけるなど、気軽にかかわろうとする。さらに、かかわっている若者に嫌な気持ちをさせないように、

気を付けて接していることもみてとれる。

一方、高齢者は子ども・若者との【ふれあい・かかわり】の中で〈戸惑い〉を感じる。〈戸惑い〉は、若者とのかかわりのなかで躊躇ったことを意味し、「制限された対話」という一つ概念から構成される。

#### ◎「制限された対話」

「制限される対話」とは、置かれている生活環境や主な関心事が異なることから高齢者と若者の間で通じる話の内容が限られていることを意味する。『色々ね、自分の出身地とか地域の話とか、知らないことがわかるから、学生さんの話からも知らないことをわかるようになったりもする。でも話の内容も違うし、深い話まではできないですね』の語りから生成される。高齢者は、若者に先に声をかけることや若者に合わせて接する行動もみられる一方で、主に対話を媒介とするかかわりでは、両世代が置かれている環境や課題の違いから話題が限定されることを感じる。

#### ③【肯定的な感情】

子ども・若者との【ふれあい・かかわり】は高齢者に【肯定的な感情】をもたらす。【肯定的な感情】のカテゴリーは、子ども・若者のかかわりを通じて一次的に感じられる肯定的な感情を意味する。「受け入れられている」「刺激になる」「パワーや元気をもらおう」という3つの概念で構成される。

#### ◎「受け入れられている」

「受け入れられている」という概念は、かかわりのなかで相手の笑顔や喜びの言葉などの返ってくる表現や反応から感じることを意味する。『皆のね、笑顔、笑顔がいいし、話かけたら、必ず答えてくださいますので、いやな顔しないで、みなさん笑顔で』などの語りから生成された。

#### ◎「刺激になる」

「刺激になる」という概念は、同世代との話題はある程度決まっている反面、若い世代とのかかわりでは新しい話や自由な考え方などがあり、興味を起こさせることを意味する。『話が、年いった人ばかりのどうでもいい話ではなくて違う話が出てくるでしょう。そういうのはやっぱり面白いよね』などの語りから生成された。

#### ◎「パワーや元気をもらおう」

「パワーや元気をもらおう」という概念は、子ども・若者と一緒にいるだけで明るい雰囲気になり、話したり笑ったり、頑張っている姿からエネルギーが感じられることを意味する。『若い人の元気をもらおうのかな。私たち若い人からパワーをもらって元気になる。深い話をしなくても一緒にいて話したり、笑ったりするだけでも、元気をもらおう』『パワーっていうのはね、元気が出ますね。元気を頂けるような感じがしてね。だからお食事しても美味しく食べてね、嬉しくなるんですよ。若い人がいらっしゃって美味しくように食べて、(私も)もっと食べないといけないとか、そういうような感じで』などの語りから生成された。

高齢者は、子ども・若者とのかかわりをしながら、子ども・若者の笑顔や喜びの言葉といった反応を受け、自分の言葉や行動が相手に伝わっていると感じると同時に、受け入れられて

いると認識する。また、子ども・若者との対話では新しい話題や若者の自由な考え方がみられることから、高齢者の普段の生活に刺激になり、子ども・若者への興味を起こさせる。高齢者は、子ども・若者と一緒にいるだけで、明るい雰囲気を感じ、若さからのエネルギーや活力を感じる。

#### ④【相手への思いにもとづく行為】

子ども・若者とのかかわりは、高齢者に【肯定的な感情】をもたらし、【肯定的な感情】はかかっている相手に向かい、親密感を形成する。そのうえ、高齢者は子ども・若者のために何かをやってあげたいという気持ちからが行動する。こうした意味を示すのが【相手への思いにもとづく行為】の категорияであり、「相手への影響を想定」「アドバイスをする」という2つの概念により構成される。

##### ◎「相手への影響を想定」

「相手への影響を想定」とは、高齢者とのかかわりは、若者に良い影響を与えると考えていることを意味する。『そやな、向こうはどうなんだろう。けど、お祖母ちゃん居ることね、やっぱりお母さんと兄弟だけ居る子とは違うな。うん、違う。学生さんでも、気配りがあるの。年いったものに対してな、‘大丈夫ですか’ってしてくれたりな。この子は、ひよっとしたらお祖母ちゃんが誰かいるん違うかなと思ったら、居る。居る。平均的にここだけじゃなくて、他所の所行ってもな。ぱっとしてくれる子いるからな。男でも』『学生さんにとってもやっぱり、思いやりのあるお付き合いができるかな。たぶんね。まあ、老人の気持ちをね。こっちもいいんだけど、学生さんにとってもいいことではないかなと思う』などの語りから生成される。

##### ◎「アドバイスをする」

「アドバイスをする」概念は、若者に対し、祖父母のような立場から生活面での助言をすることを意味する。『身内に言えないようなことでも我々だったら言ってあげれる。大体、身内の言うことって誰も聞かない。他人に言われて初めて分かるみたい。学生が、食事の場で会って話した時に、うちの親はもう学費しか出してくれないから、それ以外はアルバイトしないといけないとか色々言ってるから、贅言言うなって。結局何でもやってもらうのを当たり前だと思っているのを、そうじゃないよ。学生さんに実際言うよ。うちも子どももね。職場で言われて初めて大事に育てられたなって分かったと言うからさ。うるさいなと思われても、言ってあげないとあかんって。それもね、我々の役目の一つかなと思ってるね』などの語りから生成される。

かかわった時間の積み重ねとともに、高齢者と子ども・若者の間には親密な関係性が構築される。高齢者は自らの経験から他人の一言は子ども・若者に対し考え直す機会を与えると信じ、子ども・若者のために、他人という立場からアドバイスをを行う。その内容は生活面の態度や考え方に関するものである。ここでの「アドバイスをする」ことは、【ふれあい・かかわり】の「相手への配慮」と比較して子ども・若者に対し思い込めた行為である点は共通しているが、高齢者と子ども・若者の間に相互関係性が構築されていることに基づき、アドバイスを受ける瞬間の子ども・若者の気持ちより、相手の将来を考慮したうえで行為である

点が異なる。

以上、行動段階では、【心地よい所】における子ども・若者との【ふれあい・かかわり】は高齢者に【肯定的な感情】を与えるとともに、子ども・若者への親密感を感じさせる。その上【相手への思いにもとづく行為】が生じるという一連の過程が確認された。こうした過程は重なるかかわりを通して、次の子ども・若者とのかかわりへの参加や行動を一層強化すると考えられる。一方、高齢者は子ども・若者との【ふれあい・かかわり】のなかで世代間の対話の限定から〈戸惑い〉を感じるが、【ふれあい・かかわり】を妨げるものではなく、子ども・若者とのかかわりを続けたい、または深くかかわりたいという気持ちからみられる限界であると思われる。

### 3) 意味段階

高齢者は、継続的・定期的な子ども・若者とのかかわりを通して行動段階の一連の過程を繰り返す、これらの意味付けに至る。意味段階は【次世代との未来の物語】の一つのカテゴリーであり、〈中年期の自己評価〉〈豊かな感情の気づき〉〈共に希望を描く〉という3つのサブカテゴリーから構成される。

#### ◎「中年期の自己評価」

〈中年期の自己評価〉は、同様の概念から構成される。この概念は、子育てを頑張っている親御さんとのふれあいから自分の子育ての時を回想し、一生懸命頑張ってきたと肯定的にとらえることを意味する。また、『昔の子育ても思い出しながらね、その時私も背いっばい頑張ったなって。大変だったからね。だからその時は必至で生活していたから、もうね。今振り替えたなら、あの時頑張っていた』などの語りから生成される。高齢者は子ども・若者とのふれあいやかかわりを通して中年期の子育てを回想する。生きてきた人生を振りかえ過去の自己を肯定的にとらえることは、生きてきた人生が価値のあるものとして自ら自覚することであり、高齢者の自尊心につながると思われる。

次に、〈豊かな感情の気づき〉のサブカテゴリーは子ども・若者とのかかわりを通して得られる多様な感情や満足感を意味する。「幅広い年齢層との人間関係」「自分の勉強になる」「自己存在感」「自己有用感」という4つの概念により構成される。

#### ◎「幅広い年齢層との人間関係」

「幅広い年齢層との人間関係」の概念は、子ども・若者・同年齢などのすべての年齢層とかがわっていることを意味する。『初めて会うチャンスも多いですからね。結構どんな時でも楽しいかな。出会いは。赤ちゃんから90歳までまんべんなく付き合っているから、赤ちゃんも好きだからね』などの語りから生成される。

#### ◎「自分の勉強になる」

「自分の勉強になる」という概念は、若者とのかかわりから新しい事や文化に接することを意味する。『やっぱり、違いますね。若い方の意見も、今の若い方こんなことを、私たちとは全然違いますでしょう、年齢の差で。こんな考え方でいらっしゃるんだなって。いい勉強になります』などの語りから生成される。

#### ◎「自己存在感」

「自己存在感」の概念は、若者から大事にされていると感じることを意味する。『パッと声かけてくれたり、先の公園でもね。この前に来た子はもうすぐ結婚するって。あまり会えないからお祝いのビデオおくってよって言って。(中略)そういうのもありますね。全部が全部じゃないけどね、何人かは覚えてくれているけど。どこかで大事にされているかもしれないね。嬉しいことだね』などの語りから生成される。

#### ◎「自己有用感」

「自己有用感」とは、高齢者の経験談やかかわりが若者の成長や将来の仕事に役に立つと感じることを意味する。『(将来の仕事に)すごい活かされたらと思いつつながら、食事会の際は思ってるんですけど、学生さん、そういう年寄を大事にする、年寄の相手になってほしい。優しい気持ちを持って接してほしいなと思いつつながら、出席してますけど』という語りから生成される。子ども・若者と関係性を持っていることは、高齢期における人間関係が広がり、高齢者の生活をより豊かにする。子ども・若者とのかかわりは、高齢者にとって自身の経験を伝えることもあり、逆に若者から新しい事や文化を接し、学べることもある。また、子ども・若者が高齢者の自分のことを忘れず覚えてくれることや、自分の行為が子ども・若者に役立ち、有用な人であると認識することは、高齢者の自尊心につながると考えられる。

最後に、〈共に希望を描く〉のサブカテゴリーは、今後の生活や望む社会の様子に子ども・若者への意識が含まれていることを意味し、「健康維持への意欲」「次世代への期待」「連帯感をもとめる」「子育て支援の必要性」「新しいふれあいの場へのニーズ」の5つの概念から構成される。

#### ◎「健康維持への意欲」

「健康維持への意欲」とは、体力や身体機能の低下を感じながらも現在参加している活動や生活様式を維持するため、健康に気をつけることを意味する。『このままずっと生きれたらいいです。元気で。このまま生活で。今の生活を維持しながら、ここで自由な時間もとって生活したい』『毎日を充実しながら自分なりに楽しく生きていける、何回も倒れてるからね。生かされている喜びを感じながら人生を送っていききたいというのが願い。ここで色々な人と出会いながらということ。自分が参加できる範囲で』などの語りから生成される。

#### ◎「次世代への期待」

「次世代への期待」の概念は、若者を未来の担い手と思い、どのような考え方をしているかが気になり、それを知っていくことが楽しみと思うことである。『そこに来ている学生はみんな大学生。それは時代を担っていく人たち、そんな子たちがどんなことを考えているのかを考えたら楽しい。斬新さもあるし、一生懸命さも感じるところもね』などの語りから生成される。

#### ◎「連帯感をもとめる」

「連帯感をもとめる」という概念は、近年の若者には皆つながっているという意識が不足しているが、一人ひとりの意識変化によって社会全体が変わることを意味する。『やっぱり、困るときは助け合いで、皆つながってるんですよ。若い人たちもそういう気持ちをわかってほしい。若い人は、子どもさんがいる人は自分のことで背いっぱいでしょうけどね。できる

範囲でね、そうだったら、社会全体が変わるんでしょ』などの語りにより生成される。

#### ◎「子育て支援の必要性」

「子育て支援の必要性」とは、中年期の子育て経験や子育て親子とのふれあいから地域における子育て支援への共感を意味する。『子育ての子どもをね、子どもを預かってくださって、お母さんがね、もっと仕事が、子どもを安心して預けてお仕事ができるような、地域になってほしい。そういうところになったらいいなと。お母さんの方々がね、安心して働けるし』などの語りから生成される。

#### ◎「新しいふれあいの場へのニーズ」

「新しいふれあいの場へのニーズ」という概念は、既存の対象別に分ける場とは異なる、身近な所で誰もが自由に利用できる場を求めることを意味する。『だから、こういう所をね、〇〇(地域名)にもっと多く作ってほしいね。ここがなかった時は学生さんとかの交流はなかったもんね。だから、ない時は公民館とかに行行って色んな話を聞いたりくらいだよ。この辺は大学とかあるけど、身近なところでの交流はなかったもので、こういう所がもっとたくさんできてほしいですね』などの語りから生成される。

高齢者は、ますます体力や身体機能の低下を感じながらも、現在の活動を今後も維持したいという気持ちから、主体的な生活様式を立てている。また、若者とのかかわりを通じて若者の考え方に興味を持ち、この国の未来を担う者として期待する一方で、近年子ども・若者における連帯意識の不足を懸念している。子ども・若者が地域で多様な人とかかわりながら連帯意識を育て、社会を学んでほしいという願いから、高齢者や子ども・若者が共に利用できる新しいふれあい・かかわり場の拡大を求めている。そこには、自らの経験から子育てと仕事の両立の大変さの共感が含まれている。

以上、意味段階の【次世代との未来の物語】の 카테고리を構成する〈中年期の自己評価〉〈豊かな感情の気づき〉〈共に希望を描く〉という3つのサブカテゴリーの間には次のような特徴がみられる。〈中年期の自己評価〉と〈豊かな感情の気づき〉を構成する概念は、高齢者個人に向かう意味を示している反面、〈共に希望を描く〉を構成する概念は、高齢者個人への意味に加え、かかわっている子ども・若者への期待、さらに地域へのニーズまでその範囲が広がっていることがみてとれる。

表 4-2 類型 I の概念一覧

段階	【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉	「概念」	定義	
感 心	【次世代への 関心】	〈内的欲求〉	「子育ての経験」	子どもを扶養するため、共働きと子育てを両立してきたこと	
			「過去の仕事でのか かわり」	過去、子どもに接する職業に携わったことや職場で若者を 教えた経験	
			「祖父母の役割から 離れる」	孫が幼い時は子育ての補助的な役割を担っていたが、孫 の成長につれてその役割が少なくなる	
	【子ども・若者 との距離感】	〈社会的要請〉	「世代間のつながりへ の関心」	近年、家族や社会における若い世代との付き合いは難しく なってきたため、人々のつながりの必要性を感じる	
			〈子ども・若者の イメージ〉	「子ども・若者の風 景」	町でよくみかける、携帯電話を持って夢中に何かをやる子 ども・若者の様子
			「お年寄りを嫌がる」	子ども・若者は高齢者の言動や老化による特性・変化等を 不快と思い、ふれあいを望まないと感じる	
	〈普段ふれあう 機会が少ない〉	「普段ふれあう機会が 少ない」	地域で自然的もしくは意図的に子ども・若者とふれあう機会 が得られないこと		
行 動	【心地よい所】	〈心地よい所〉	「心地よい所」	高齢者にとって気楽にきて自由に居られる場所	
	【ふれあい・か かわり】	〈ふれあい・か かわり〉	「見慣れている」	同じ空間を利用することから子ども・若者と一緒にいる環境 に適応していること	
			「一緒に楽しむ」	高齢者と若者の両方が興味を持ち、対等な関係で一緒に 楽しめる活動	
			「声をかける」	高齢者が子ども・若者に関連した学校や部活、趣味等の話 から声をかけ気軽にかかわっていくこと	
			「相手への配慮」	若者が嫌な気持ちにならず、興味を持ってかかわるよう気 をつかうこと	
		〈戸惑い〉	「制限された対話」	置かれている生活環境や主な関心事が異なることから高齢 者と若者の間には通じる話の内容が限られている	
	【肯定的な感 情】	〈肯定的な感 情〉	「受け入れられている」	かわりのなかで相手の笑顔や喜びの言葉などの返ってくる 表現や反応から感じる	
			「刺激になる」	同世代との話題はある程度決まっている反面、若者とのか かわりは新しい話や自由な考え方がみられ、興味を起こさ せる	
			「パワーや元気をもら う」	子ども・若者と一緒にいるだけで明るい雰囲気になり、話し たり笑ったり、頑張っている姿からエネルギーが感じられる	
	【相手への思 いにもとづく 行為】	〈相手への思い にもとづく行為〉	「相手への影響を想 定」	高齢者とのかわりは、若者に良い影響を与えると考えて いる	
「アドバイスをする」			若者に祖父母のような立場から生活面での助言をすること		
意 味	【次世代との 未来の物語】	〈中年期の自己 評価〉	「中年期の自己評価」	子育て中の親御さんとのふれあいから自分の子育ての時 を回想し、一生懸命頑張ってきたと肯定的にとらえること	
		〈豊かな感情の 気づき〉	「幅広い年齢層との 人間関係」	子ども・若者・同年齢などのすべての年齢層とかかわって いること	
			「自分の勉強になる」	若者とのかわりから新しい事や文化に接すること	
			「自己存在感」	若者から大事にされていると感じること	
			「自己有用感」	高齢者の経験談やかわりが若者の成長や将来の仕事に 役に立つと感じること	
		〈共に希望を描 く〉	「健康維持への意欲」	体力や身体機能の低下を感じながらも現在参加している 活動や生活様式を維持するため、健康に気をつけること	
			「次世代への期待」	若者を未来の担い手と思い、どのような考え方を持ってい るかが気になり、それを知っていくことが楽しみである	
			「連帯感をもとめる」	若者には皆つながっているという意識が不足しているが、 一人ひとりの意識変化によって社会全体の変化への期待	
			「子育て支援の必要 性」	中年期の子育て経験や子育て親子とのふれあいから地域 における子育て支援への共感	
			「新しいふれあいの場 へのニーズ」	既存の対象別に分ける場とは異なる、身近な所で誰もが自 由に利用できる場を求める	

### 第3節 類型Ⅱの参加高齢者の生きがい

類型Ⅱの参加高齢者のインタビュー調査結果を報告する前に、参加学生と参加高齢者m氏の語りを紹介する。学生と高齢者は、どのような経緯で施設を利用し、高齢者と子ども・若者のかかわりに参加しているか、そして、この活動をどのように捉えているかについてイメージして頂きたい。なお、高齢者の語りの中で（ ）は文脈を変えない範囲での筆者による語りデータの補足である。

#### 《フリースペースを利用している学生の語りから》

私は、お母さんが行き始めていて、お母さんが‘行ってみたら’ということで、行くようになった。最初は、知らない人としゃべったりしたことがあまりなかったので、緊張していた。どういうふうに話しすればいいか分からなくて、お年寄りについて怖いイメージがあったから、近づけなくて、‘声かけてもいいのかな’と思っていた。どんどん行くうちに、慣れてきて、高齢者から声かけてくれてしゃべるようになった。ここは、率直に、落ち着けるところでここだけの独特な感じがある。ほわっとした感じ。沢山の世代の人と話せることから別の視点が学べる。特にお年寄りの世代とかかわる機会は少ないが、ここに来たら気楽にふれあえる。

また、子どもたちが中心になって企画するものがあるが、この間、3周年記念のとき、お祭りみたいなものがあった。あの時、私がインタビューをして、例えば、車いすに乗っている方や参加してくれているお祖父さん、小さい小学校の子どもたち、色んな人に‘ここでの生活を楽しんでいますか’と聞いた。高齢者の方から‘憩いの場’という答えを頂いた。お祖父さん、お祖母さんの憩いの場ってこういうことなんだろうなと思った。うまくは言えないが、いいなと思った。みんなが楽しめることがいいなと。

今は、お年寄りとしゃべるときに特に気を付けていることはない。最初、怖かったイメージもいい人とか、優しい人というイメージが変わった。お年寄りは先生に近い感じである。お年寄りから、紙芝居をしてくれたり、教えてもらったことがあった。学べるところがたくさんある。その中には、英語のうまい方もいて、「格好いい」と思った。そのお年寄りみたいに、私も英語のうまい人になりたい。憧れている。

#### 《フリースペースを利用しているm氏の語りから》

幼稚園をやったのね。だから子どもたちの集団だったのね。でも、ここにきてこのフリースペースに来て、子どもとそれからシニアの方がね、一緒にこうここで交っているというのがすごく新鮮で、すごくいいなと思ったの。

こういう場がね。福祉事務所から紹介してもらった。私そういうことしてたから、なんかボランティアしたいって。子どもにふれあいたいって。ここ紹介していただいて、来れる時は毎日きてるし、来れない時は1回かもしれないし。それは、私の都合によって。私もリズムを生活のなかで作りたいので、できるだけ午後はここで、午前の月水金はここ、火木はあっちのように一応、私としてリズムをつくっておかないとね。

幼稚園をやったので、お祖母ちゃん、お祖父ちゃん時々お孫さん見にいっちゃるでしょう。

その時はお会いしているけれども、一緒に交わって何かをするというのはなかった。経験なかった。ここに来て一緒に将棋をしたり、それから、なんか‘どうしてる’とか、‘やらない?’とか、お互い接点があったりしてね、すごくいいなと思った。シニアの方は子どもたちからエネルギーをもらう。元気なエネルギーをもらう。それから、子どもたちはシニアたちから学ぶところが、それぞれにある。今もこうやって将棋の打ち方も学ぶでしょう。それから、あいさつ、あいさつお互いするんじゃない。お祖父ちゃんが‘あの子今日きてないね’とか、‘どうしたんだろう’って。いつも将棋している相手ね。子どもも‘今日はお祖父ちゃんいないね’とかね。それがお一人の暮らしてる方の見守りもなるんじゃない。だから、そういう意味ではすごいいいなって。

私からこういうの作れるよって、これ全部廃材だから、トイレットペーパーの芯とか、ふたとか、廃材でしたのね。ここにきてこれやろうかって言った時に、一緒にやろうって話ができたり、遊んだりすると、今日嬉しかったなと思うし、全然来ても、一生懸命子どもがゲームをやっけて、こうやって声かけても一生懸命で反応ない時もあるね、そうすると、今日一日あまり、楽しくなかったなと、そう思いますね。でも、こうして今日もやろうかって言って、うん一緒にできたら、そうね。生きがいまではあれなんだけど、楽しいね。自分の居場所がここにあるっていう。ここに居るっていう。だからかかわっているっていうことだね。

色々な人との出会いをするから、一人小さい子どもがいて、2時頃にくるのかね、幼稚園の子どもが、すごく、なんか知らないけど、みはたさん、みはたさんっておうちに帰ってもmさん、mさんって言う程好きになって、すごく好きになってくれて、下の妹さんも居るんだけど、その子も最初にあった時からすごい人見知りの強い子で、ほかの所では泣くんだけど、みはたには全然泣かないんですよって。その子が今すごく懐いてくれて、来たら、mさんいるって聞いてくれるもんね。そうすると、嬉しいなって。そういう子もいる、全然反応ない子もいるし。でもだんだん、少しずつ、子どもが、それは幼稚園でもどこでも初めての人には警戒するし、でもここは自分の気持ちを全部。預けても大丈夫な所だ、大丈夫な人だということがわかると、ちゃんと接してくれる。よく話を聞いてくれると、向こうがずっと話だすから、話し出したら、やっぱりそれに答えてあげると、どんどん深まっていくよね。絆が深まっていくね。あまり自分のことを喋らなかった子が自分の話を、だんだんと心を許してくれてるなって思うね。

## 1. 高齢者の基本属性

インタビュー調査の協力を得た高齢者は5名であり、基本属性を表4-3で示す。基本属性の項目は、「年齢代」「世帯形態」「子・孫の有無」「介護保険利用有無」「施設利用頻度」とした。

個人の特定されることを防ぐため、表4-3で性別の表記は控えるが、高齢者5名のうち、男4名、女1名で構成されている。参加高齢者の年齢代は60代～80代までで、60代は1名、70代は2名、80代2名であり、平均年齢75歳である。高齢者の世帯形態は、単身(2名)や夫婦(2名)世帯、親と同居(1名)であった。5名のうち、4名の方は子と孫があっ

たが、遠距離で暮らしており、子の家庭のことや仕事で家族との集まりは平均的に1～2回程度であった。参加高齢者は老いによる持病や体力の弱化などは感じていたが、介護保険制度の対象になり、デイサービス等を利用している方は1名のみで、生活支障のない程度の健康を保っている。施設の利用頻度は、月1回～週5回まで頻度の範囲が広く個人差があったものの、1年以上施設を利用している。

表 4-3 類型Ⅱの高齢者の基本属性

区分	ID	年齢代	世帯形態	子・孫の有無	介護保険利用有無	利用頻度
B 類型	j	80代	夫婦	有・有	有	週3回
	k	80代	単身	有・有	無	週3回
	l	60代	親と同居	無・無	無	週2回～ 月1回
Ⅱ	m	70代	夫婦	有・有	無	週5回～ 月1回
	n	70代	単身	有・有	無	月2～3回

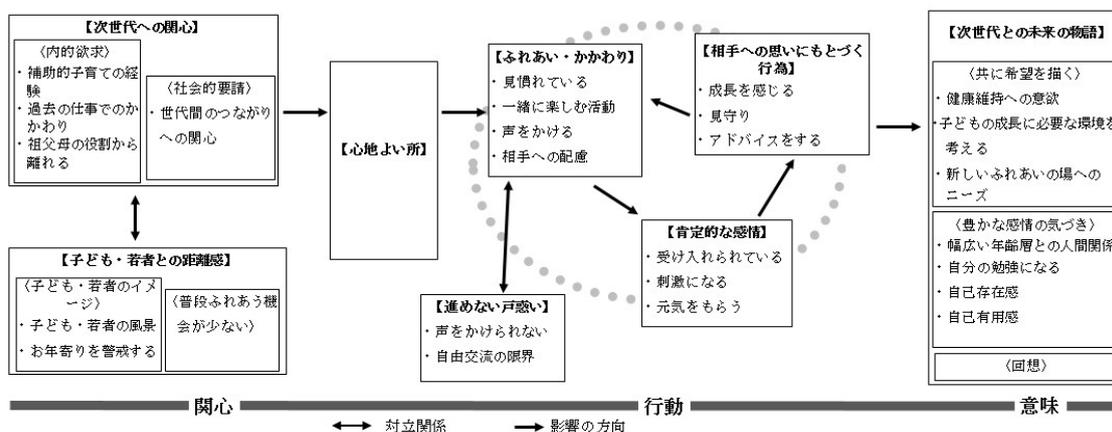
## 2. プロセス全体像

分析により、8つのカテゴリーと12つのサブカテゴリー、28つの概念が生成された。生成したカテゴリーは【 】, サブカテゴリーは〈 〉, 概念は「 」, 語りの具体例は『斜体』で表記する。なお、語りの具体例での( )は文脈を変えない範囲での筆者による補足である。結果の全体像を図4-2に示し、概念の一覧は表4-4に表した。まず、若い世代とのかかわりを通して得られる高齢者の影響のプロセスの全体像を概観し、次に「関心」「行動」「意味」の段階におけるカテゴリー及び概念について説明する。

地域における子ども・若者とのかかわりに参加している高齢者は、参加する前の「関心」段階において【次世代への関心】とともに【子ども・若者との距離感】を持っている。【次世代への関心】が次世代への行動に移行するには高齢者と子ども・若者の交わる場所が必要であるが、高齢者はその場所を【心地よい所】として受け入れ、そこで行われる次世代との【ふれあい・かかわり】に気軽に参加している。「行動」段階において高齢者は子ども・若者との【ふれあい・かかわり】により【肯定的な感情】を感じる。継続的な【ふれあい・かかわり】と【肯定的な感情】に基づき相互関係性を築き、かかわっている【相手への思いにもとづく行為】があらわれる。これは次の【ふれあい・かかわり】への参加を一層強化する。このような「行動」段階における【ふれあい・かかわり】→【肯定的な感情】→【相手への思いにもとづく行為】の一連の過程は循環し、次の過程の強化につながる。しかし、類型Ⅱは支援者のかかわりが少なく高齢者と子ども・若者の主体的な自由交流という特徴から最初の【ふれあい・かかわり】に対する壁が高いことや持続的な交流の困難という【進めない戸惑い】に直面し、子ども・若者との【ふれあい・かかわり】に移行できず、行動段階に入らない場合もみられる。重なる一連の行動過程を通じて高齢者は、現在の〈豊かな感情の気づき〉のみならず、自身の子どもの幼い頃を〈回想〉するとともに、今後、高齢者自身の生き

方やかかわっている子ども世代と〈共に希望を描く〉【次世代との未来の物語】という意味づけに至る。

図 4-2 類型Ⅱの分析結果図



### 3. 各段階におけるカテゴリー・概念の関係

#### 1) 関心段階

関心段階は子ども・若者とかわる行動の前段階であり、【次世代への関心】【子ども・若者との距離感】という2つのカテゴリーにより成り立つ。

##### ① 【次世代への関心】

高齢者の【次世代への関心】のカテゴリーは、子ども・若者とふれあい・かかわりたいと思うようにする諸起因を意味し、高齢者〈内的欲求〉と社会的期待を意味する〈社会的要請〉という2つのサブカテゴリーから構成される。〈内的欲求〉は中年期・高齢期における経験から求められるものを意味し、「補助的子育ての経験」「過去の仕事でのかかわり」「祖父母の役割から離れる」の3つの概念から構成される。

##### ◎ 「補助的子育ての経験」

「補助的子育ての経験」の概念は、男性高齢者の場合、家族を扶養するため、主に経済活動に専念し、子育てでは補助的な役割を果たしていたことを意味する。『(子育ては) してない。僕は会社務めしとったから。自分の会社もって、友たちと二人で経営してやってきたけど』『あ、教育の、それがね。うちはちょっと変わったんですよ。親がいくら言っても外向いてね、何もしなかった(中略) 私とはあまり、突っ込んで話はあまりなかったな』などの語りから生成される。

##### ◎ 「過去の仕事でのかかわり」

「過去の仕事でのかかわり」という概念は、過去、子どもに接する職業に務めたことや、職場で若者を教えた経験を意味し、『幼稚園の先生をやったんですね。ずっと子どもにかかわることをしてたから、子どものいない、自分のまわりにはいないってことは考えられな

った。それで、また子どものところに帰りたいと思って』などの語りから生成される。

#### ◎「祖父母の役割から離れる」

「祖父母の役割から離れる」という概念は、子家族と別居している状況においても、孫の幼い時は頻繁に交流し、祖父母としての役割を果たしていたが、孫の成長につれて交流頻度は減り、祖父母としての役割から外されることを意味する。『孫ももう大学生だから。小さい時はよく来ていたよ。それぞれ忙しいから。大学入ったばかりだから、忙しいから。お盆とか、連休が続いた時とかそういう時は親と一緒に食事したり（中略）娘は一人子。忙しいから。なかなか会えないよ。仕事がバラバラだから、お盆とか、お正月とか出勤あるよ。平日に休みとか。そんな調子でね。本人は忙しいから。食事しようとなかなか言えないな。向こうの都合がよくて言ってくれるから。そういうとこですわ』などの語りにより生成される。

高齢者の〈内的欲求〉は、中年期における補助的な子育ての経験や職場で子ども・若者とかかわった経験など過去の関連経験が背景に存在する。そして、現在、子家族との物理的・心理的な距離があり、孫に対し祖父母としての役割は果たせない状況に置かれている。子ども・若者とかかわる中年期の経験や高齢期における子家族・孫とのかかわることで、高齢者のもつ次世代への関心が維持され、高齢者の内的欲求は充足されてきた。しかし、子家族・孫との物理的・心理的な距離感が生じる環境では、高齢者の次世代への関心という欲求が充足されない状態といえる。

一方、もうひとつのサブカテゴリーである〈社会的要請〉は、社会から期待されていることを意味し、「世代間のつながりへの関心」という一つの概念から構成される。

#### ◎「世代間のつながりへの関心」

「世代間のつながりへの関心」とは、近年、家族や会社において子ども・若者との付き合いは難しくなり、人々のつながりの必要性を感じることを意味する。『今はもう隣の家とは関係ないのが普通は普通ですよ。また、そういうことも何も助けてくださいなんて求められる状態でもない。やっぱり今は社会の人間関係というのは昔と比べて、薄くなっていますね。基本的には』などの語りから生成された。産業発達、急激な都市化などにより核家族や単身世帯が増加し、そのなかで家族または社会内の構成員間の交流はますます減少しつづけ、人々とのつながりの希薄が重要問題として指摘されている。高齢者も同世代のつながりのみならず、全世代にわたる人々のつながりの欠如を日常生活で実感し、必要時に助け合いを求められない今日の社会への懸念とつながりの必要性を認識している。

#### ②【子ども・若者との距離感】

関心段階におけるもう一つのカテゴリーとして【子ども・若者との距離感】があり、【次世代への関心】と対立する。このカテゴリーは、高齢者が子ども・若者に対し感じる心理的距離を意味し、〈子ども・若者のイメージ〉〈普段ふれあう機会が少ない〉という2つのサブカテゴリーにより構成される。まず、〈子ども・若者のイメージ〉は「子ども・若者の風景」「お年寄りを警戒する」という2つの概念から構成される。

#### ◎「子ども・若者の風景」

「子ども・若者の風景」という概念は、町でよくみかける携帯電話などの機械に夢中になっている子ども・若者の様子のことである。『バスとか電車とかも若い人なんかは、携帯をずっとみてるし、横断報道でもね、歩きながら下向いてみてるね、危ないのに』などの語りにより生成される。

### ◎「お年寄りを警戒する」

「お年寄りを警戒する」という概念は、隣近所の交流のないなかで、特に男性高齢者は、子どもに声をかけると、子どもの親から不審者のように扱われる経験から感じることである。『親に追われちゃったんで、隣に警戒している人も中にはおられる。‘お子さんがちょっと呼んだのでそちらに行ったんですけれども’っていったら…。そういう社会です。私もそこまで突っ込んで言われたら、行かなかったと思うんですけど』などの語りにより生成される。

高齢者は、町や交通機関の中で周りの安全を気にせず、スマートフォンやゲーム機といった電子機器に夢中になっている子ども・若者の様子から、そうした子ども・若者の行動は理解できないとともに文化的な差も感じる。また、大都市のような近所付き合いの少ない地域では高齢者が子どもに声をかける行動は、不審者と誤解される場合もある。子どもに声をかける高齢者を警戒する子どもの親の行動の背景には子どもを目当てとした事件の恐れがある一方で、知らない人は信頼できないという人々への信頼感の低下が蔓延していることをあらわしている。

一方、〈普段ふれあう機会が少ない〉というサブカテゴリーは同一の概念から構成される。

### ◎「普段ふれあう機会が少ない」

「普段ふれあう機会が少ない」という概念は、地域で血縁関係以外、自然的もしくは意図的に子ども・若者とかがかわる機会を殆ど設けていないことを意味する。『近所でね。あまり付き合いしないの。近所は年寄ばかりでね。(中略)あまりいないね。小学校の5年生(将棋の)強い子がいる。5年生6年生兄弟だけど。それもやるしね。子どもや一緒になってやるからね』などの語りにより生成される。地域において血縁関係ではない高齢者と子ども・若者のふれあいの機会は殆ど得られていないことがみてとれる。近所の付き合いが行われていない現状では、地域での子ども・若者との自然なふれあいやかかわりが期待しがたい。また、意図的に提供される機会も中々得られていないことから、高齢者の子ども・若者への隔たりは強まる。

以上、関心段階では〈内的欲求〉と〈社会的要請〉から構成される【次世代への関心】とともに、【子ども・若者との距離感】を検討した。2つのカテゴリーは対立関係にある。今後、高齢夫婦世帯や単身世帯はより増加に加え、急速するIT産業発達は、高齢者と子ども・若者の世代間の文化的な差を広げると同時に、高齢者の警戒する子ども・若者の行動は、高齢者のもつ子ども・若者への心理的距離感を強ませると考えられる。

## 2) 行動段階

高齢者が子ども・若者とのかかわりを行う‘行動’の段階は、【心地よい所】【ふれあい・かかわり】【進めない戸惑い】【肯定的な感情】【相手への思いにもとづく行為】という5

つのカテゴリーにより構成される。

### ①【心地よい所】

【心地よい所】のカテゴリーは、図 6-2 に示したように、関心段階から‘行動’に移る局面に位置し、同様の単一の概念から構成される。この概念は、高齢者にとって気楽に出入りし、自由に居られる所を意味し、『気安く、あまり難しくないな。来てもいつも気楽にこられるかな』などの語りから生成される。高齢者にとって B（類型Ⅱ）機関は心理的安定感を与える居場所のような所である。そこで提供される子ども・若者とのふれあいやかかわりに高齢者は、関心段階で示した【子ども・若者との距離感】からの影響を受けず、参加していると考えられる。

### ②【ふれあい・かかわり】

【ふれあい・かかわり】のカテゴリーは、同様のサブカテゴリーにより構成されており、類型Ⅱを利用することから得られる子ども・若者とのふれあいやかかわりを意味する。「見慣れている」「一緒に楽しむ活動」「声をかける」「相手への配慮」の4つの概念から構成される。それぞれの概念について説明する。

#### ◎「見慣れている」

「見慣れている」という概念は、同じ空間を高齢者、子ども・若者が使うことから、子どもの声や様子に適応していることである。『2階に上がったら、よくきつとるわけよ。本読んだりしてね。半年前そのくらいね。本を読んだり宿題やら、なんやらにね。子どももよくやっている』『別にやかましくてもにぎやかでいいよ。自分は気にならない』などの語りにより生成される。

#### ◎「一緒に楽しむ活動」

「一緒に楽しむ活動」という概念は、高齢者と子ども両方が興味をもち、対等な関係で一緒に楽しめる活動を意味する。『いろんなことを、テジナとか折り紙とか、遊びを教えたり一緒にやったりして作る喜びをね。作る喜びが大事だよね』などの語りから生成される。

#### ◎「声をかける」

「声をかける」という概念は、一緒に楽しめる活動への誘いを意味する。『勝手に向こうから、最初、子どもが見ているからな。将棋するかいって言ったらよいって言って』『私からこういうの作れるよって、これ全部廃材だから、トイレトペーパーの芯とか、ふたとか、廃材でしたのね』などの語りから生成される。

#### ◎「相手への配慮」

「相手への配慮」とは、子ども・若者が嫌な気持ちにならず、興味を持って参加できるよう相手に合わせた接し方を意味する。『大きな小判だと、最後までするのに時間かかりますよね。子どもさんってもういいやって言い出すから、一番小さな9路の小判でやると、とりあえず15分くらいで、最後まで打ってやるから、飽きていやっていいことはないだろうし、適当に子どもに華をもたせることも可能だろうし』などの語りから生成される。

類型Ⅱの場合は高齢者と子どもの自由交流という形である。高齢者は、将棋や囲碁といった活動に子どもが関心をあらわすと、声をかける。また、子どもと一緒に楽しめる工作活動

を考え、先に声をかけて誘う。高齢者と子どもの‘一緒に活動したい’という意思が合致した時にかかわりは始まる。そのため、高齢者が先に声をかけて誘っても子どもの方から拒否する場合もあり、とりわけ、子どもは、活動の内容に興味を持たせるかどうかによってかかわりの成立が左右される。かかわりの中で高齢者は、興味を無くすと活動を続けられないという子どもの特徴を把握・理解し、子どもの興味を維持させるため、子どもの目線に合わせて接する。そこには、高齢者は、活動自体への興味よりは、子どもと一緒に活動したいというかかわりへの関心の方がより高いことがうかがえる。

### ③【進めない戸惑い】

【進めない戸惑い】の категорияは、同じ空間を共有しながらも子どもとのかかわりには展開されない状況を意味する。「声をかけられない」「自由交流の限界」という2つの概念により構成される。

#### ◎「声をかけられない」

「声をかけられない」という概念は、子どもからネガティブな反応を受けた経験から、先に声をかける行動に躊躇することを意味する。『子どもが興味もって何してきてるんよと言ってくれば、いくらでもなんとかしてあげるんだけど、そこらへんでテレビゲーム、パソコンゲームかな、一生懸命に声かけても全然振り向かわないからね』などの語りにより生成される。子どもに声をかけて無反応というフィードバックを受けた経験から、高齢者は、子どもが興味を見せない雰囲気では自ら先に声をかけることは難しく、同じ空間を共有しても単なるふれあいにとどまってしまう可能性がみてとれる。

#### ◎「自由交流の限界」

「自由交流の限界」の概念は、決定した活動の日時や参加者などの縛りがないため、単発のかかわりにとどまりやすく、継続なかわりにはつながらないことである。『ここに来てまたその子がきているとは限らない。例えば、週の月曜日は必ずここに来て、囲碁するようになっていますか、という風にすればいいのか分からないけど、そういう縛りが何もないから、もしボランティアでやってくれる人が囲碁でも将棋でもたくさんいて、例えば金曜日だったら将棋の人も囲碁の人も必ず誰か来ていますよということになればね』などの語りから生成される。単発なふれあいにとどまらず、継続的なかわりにつながるためには、ある程度の縛りは必要である。高齢者は、時間、曜日などを決め、活動をリードすることに高いハードルを感じており、支援者の方から、活動に関する最低限の縛りを設定してほしいという希望を持っている。

【進めない戸惑い】における2つの概念は、自由交流型の高齢者と子どもとのかかわりに大きな限界点であると考えられる。また、【進めない戸惑い】は、高齢者と子どものふれあいは成立してもかかわりにつながらないという点から、行動段階に進入できず、【ふれあい・かかわり】と対立関係にある。

### ④【肯定的な感情】

子ども・若者とのふれあい・かかわりは、高齢者に【肯定的な感情】をもたらす。【肯定的な感情】の категорияは「受け入れられている」「刺激になる」「元気をもらう」という

3つの概念により構成される。

#### ◎「受け入れられている」

「受け入れられている」という概念は、一緒に活動をしながらか、子どもの笑顔や喜びの言葉などの返ってくる反応から感じることを意味する。『その子が今すごく懐いてくれて、来たら、‘〇〇さんいる?’って聞いてくれるもんね。そうすると、嬉しいなって。そういう子もいる、全然反応ない子もいるし。でも、だんだん、少しずつ、子どもが、それはどこでも初めての人には警戒するし、でもここは自分の気持ちを全部預けても大丈夫な所だ。大丈夫なだっということがわかると、ちゃんと接してくれる』などの語りから生成された。

#### ◎「刺激になる」

「刺激になる」という概念は、予想できない子ども特有の発想に対し新鮮に受け止めることを意味する。『やっぱり思い浮かべないというか、子どもの発想って自由じゃないですか。こっちが教えた通り必ずやるとは限らない。色んなことも自分で勝手にこんなことしたら面白いやとか、あんなことしたら面白いとか。あの色々、大人から見たらそれは何やろうということも勝手に発想してやっちゃいますよね』などの語りから生成される。

#### ◎「元気をもらおう」

「元気をもらおう」という概念は、一緒にいるだけで明るい雰囲気になり、子どもの元気な姿からパワーやエネルギーが伝えられることを意味する。『若い人の元気をもらおうのかな。私たち若い人からパワーをもらって元気になる。深い話をしなくても一緒にいて話したり、笑ったりするだけでも、元気をもらおう』などの語りにより生成される。

高齢者は、子どもと一緒にいるだけで、子どもの声や様子から明るい雰囲気となり元気をもらっていると感じる。子どものパワーフルなエネルギーや活力が伝わり、高齢者も普段と違う、明るい気持ちになる。また、かかわりのなかで、子どもの笑顔や喜びの言葉といった反応を受け、自分の言葉や行動が伝わっていると感じる。子どもと相互作用しているという感覚から喜びを感じる。さらに、子どもの特有の自由な考え方は、新しく魅力的なものとして肯定的にとらえている。これらの肯定的な感情は、子どもとのかかわりにおいて最初の段階で感じられる感情であると考えられる。

#### ⑤【相手への思いにもとづく行為】

子ども・若者とのかかわりは高齢者に【肯定的な感情】をもたらし、【肯定的な感情】はかかわっている相手に向かい、【相手への思いにもとづく行為】に促す。【相手への思いにもとづく行為】のカテゴリーは、かかわっている子どものために行う行動を意味し、「成長を感じる」「見守り」「アドバイスをする」という3つの概念から構成される。

#### ◎「成長を感じる」

「成長を感じる」という概念は、継続的なかかわりを通して最初と比べ、今の子どもの心身の変化に気づくことである。『最初は、まるでなんていうの。駒しかわからなかった。それがだんだんね。勝つところまでは行かんけど、成長してるよ。見たらわかる。子どもはここで将棋はここでやるようになったんだろう。来た時は全然やってなかった。強くなってるね。たしかに分かるわ』などの語りにより生成される。

### ◎「見守り」

「見守り」とは、重なるかかわりから相手である子どもが気になり、普段と違う様子を感知し、周りに確認することを意味する。『お祖父ちゃんが‘あの子今日きてないね’とか、‘どうしたんだろう’って。いつも将棋している相手ね。で、子どもも‘今日はお祖父ちゃんいないね’とかね。それがお一人の暮らしてる方の見守りもなるんじゃない。だから、そういう意味ではすごいいいなって』などの語りにより生成される。

### ◎「アドバイスをする」

「アドバイスをする」という概念は、子どもに対し、祖父母のような立場から生活面での助言をすることを意味する。『私の言っていることがすべて正しいとは言わないけれども、それ、間違っているよってあるんじゃないですか。子どもがやっていることでもズルしたりとか、投げ出して適当にするとか、だから、囲碁教えるわりには生活態度をちょっと何とかせんということが多いかも分からない。やる気がないんだったら、こうやっていくら丁寧に教えだつてやる気がないんだたらダメですよ。そんなもん。‘もうちょっと真面目にやらんと負けるや。そんなズルしたら負けるや’ってそういうものの言い方ははっきり言わないとしょうがないのかなと』などの語りから生成される。

高齢者は、子どもとのかかわりを重ねながら、当初より子どもの身体の発達を感じている。子どもの成長が感じられるということは、これまでかかわった時間の経過とともに、高齢者と子どもの間には構築された親密な関係性により、相手である子どものことが意識されていることである。高齢者は、子どものことが気になり、普段と違う子どもの様子に気づき、周りの人や職員に確認するなどの子どもへの見守りを行う。また、かかわりの中でみられる子どものわがままな態度に対し、適切な一言を伝え、子どもに考え直す機会を与えている。アドバイスの内容は相手への思いに基づく生活面での態度に関するものもある。

この「アドバイスをする」という概念は、【ふれあい・かかわり】でみられる「相手への配慮」の概念と比べ、子どもへ思いを込めた高齢者の行動である点は似通っているが、「相手への配慮」は、かかわりの最初の段階で高齢者とのかかわりに相手の興味を持たせてかかわりを維持するために、子どもの気持ちを配慮した行動である反面、「アドバイスをする」という概念は、アドバイスを受ける時の子どもの気持ちより、将来の子どものことを考えたうえで行う行動である点が異なる。そして、継続的な高齢者と子どものかかわりを通した相互関係性が構築されているうえでの行動であるという点が大きく異なる。

以上、行動段階では【心地よい所】で行われる子どもとの【ふれあい・かかわり】は高齢者に【肯定的な感情】を与え、さらに【相手への思いにもとづく行為】を生み出すという一連の過程が確認された。この過程は循環しており、次の【ふれあい・かかわり】への参加や行動を促し強化すると考えられる。一方、一連の過程に入らず【ふれあい・かかわり】と対立するものとして【進めない戸惑い】が存在する。

### 3) 意味段階

高齢者は、継続的・定期的な子ども・若者とのかかわりを通して行動段階のプロセスを繰り返す、次のような意味付けに至る。意味段階は【次世代との未来の物語】の単一カテゴリ

一であり、〈回想〉〈豊かな感情の気づき〉〈共に希望を描く〉という3つのサブカテゴリーにより構成される。

#### ◎ 〈回想〉

〈回想〉のサブカテゴリーは、同様の一つ概念から生成される。子どもをみて高齢者自分の子どもの幼い頃を思い出し、懐かしく感じることである。『ここでよく子どもたちがきて遊んでいるから、子どもたちが遊んでるのをみるとね、我が子の小さい頃が思い浮かんでね。小さい頃可愛かったなって。今はもう40代だけど』などの語りから生成された。

次に、〈豊かな感情の気づき〉というサブカテゴリーは「幅広い年齢層との人間関係」「自分の勉強になる」「自己存在感」「自己有用感」という4つの概念により構成される。

#### ◎ 「幅広い年齢層との人間関係」

「幅広い年齢層との人間関係」という概念は、機関を利用するうちに、子ども・若者・同年代のすべての年齢層とかかわっていることを意味する。『ここ(1階)でお茶飲んでそれから30分したら皆2階に上がるんや。そんでね、6-7人ここに来るんだけど、大人ね。これ(将棋)は二人でしょ。三択今できるんだけど。子どもがよくくるわけ。勉強したり色々ね。その中で幼稚園の子で好きな子がおって、(将棋を)‘やらしてやらして’って言って、大人と交代で子どもとやったり、幼稚園の子でね。後、小学生は2人、3人おるよ。上手な子がね』などの語りから生成された。

#### ◎ 「自分の勉強になる」

「自分の勉強になる」という概念は、子どもに説明するための事前学習またはかわりを通して知る新しい事は、知識の再確認や習得に役立つという意味である。『半分は自分のためもあるかも分からない。きちんと理解できる、説明できるものがないと、自分も理解できるとは言えない。教えるためには自分がきちんとできないと、子どもから何言われてもこれはこうです、これはこうですというくらいは言えないと、子どもは相手にしてくれないですよ』などの語りから生成される。

#### ◎ 「自己存在感」

「自己存在感」の概念は、高齢者のことが子どもに受け入れられ、子どもとの相互作用から、大事にされていると感じることを意味する。『こうして今日も‘やろうか’って言って、一緒にできたら、楽しいね。自分の居場所がここにあるっていう。ここに居るっていう。だからかかわっているっていうことだね』などの語りから生成される。

#### ◎ 「自己有用感」

「自己有用感」の概念は、子どもに何かを教える行動や教えを頼まれたことから、子どもに役に立っていると感じることである。『あのね、それはね、ありがとうございますって言うけどね。その時だけど、最後にありがとうございますって言ってくると嬉しいね。行ったかいがあるわ。全部は言わないけど、でもありがとう、言ってくれてだけで』の語りにより生成される。

高齢者は、子どもとのかかわりを通して多様な感情や満足感を得ている。年齢関係なく誰でも自由に利用できる所は、同世代の人間関係とともに、子どものような若い世代との

関係も形成され、高齢期における人間関係の範囲は広がって豊かになる。高齢者は、子どもとのかかわりのなかで、子ども世代の新しい文化を学ぶ機会にもなるが、何かを教えたり説明する立場になると、その責任感から事前学習のような積極的な行動をする。子どもとのかかわりは、新しいことや既存のことを改めて学ぶ機会にもなり、高齢者の学習の向上心に刺激になっていると思われる。高齢者は、子どもとの時間や関係性の蓄積から、自分は子どもに大事にされていると感じ、自己の存在感を確認し認識する。これは、上記の行動段階に示された相手に「受けられている」という概念よりは、深い意味である。さらに、高齢者の行為が、子どもには役に立っていると認識することは、自己有用感を感じさせる。以上のような緒感情は、高齢者の自尊心につながると考えられる。

最後に、〈共に希望を描く〉のサブカテゴリーは、子どもを意識した今後の生活や社会のことを意味する。「健康維持への意欲」「子どもの成長に必要な環境を考える」「新しいふれあいの場へのニーズ」という3つの概念から構成される。

#### ◎「健康維持への意欲」

「健康維持への意欲」という概念は、ますます体力や身体機能の低下を感じながらも、現在参加している活動を今後も維持するために、食や運動に気をつける生活様式を立てる意味である。『僕は月・水・金で1時から(きている)。午前中は自分の用事したり、一人もんだから食事の段取りしたり、洗濯したりな。ここに来ない時は大体家におる。しんどいから、体が弱いから、横になったりテレビみたり。(運動は)もう歩くくらい。ここに来るのにかなり歩くからね。ここまでね、あそこの市役所からここまでバスに乗ったり下りたりな。家に帰る時に歩くとか、1日40分歩くかな。そのくらい歩くよ。これが運動かな。(中略)自分で考えて、こうやって食べたり、時々テレビの番組を見て作って食べたり、適当に食べているけどな。朝昼晩食べている』などの語りから生成される。

#### ◎「子どもの成長に必要な環境を考える」

「子どもの成長に必要な環境を考える」とは、子どもの成長にあたって社会とのかかわりは重要であるため、子どもが地域で安心安全に社会とつながる所が求められるという意味である。『子どもとのかかわりあうというのは、社会とのかかわりとまったく切り離して何かできるかといったら、たぶんないような気がするんですけどね。たぶんここに来ているお子さんは家に帰っても誰もいないからだと思いますよ。基本的に。家帰って誰か保護者の方、お兄ちゃん、お姉ちゃんいるんだったら、たぶんここには来てないような気がするんですけど。学童じゃなくてこういう所で安全に過ごすことはいいと思うけれども、でも、市全体からいったらこんなもん全然足りない』などの語りにより生成される。

#### ◎「新しいふれあいの場へのニーズ」

「新しいふれあいの場へのニーズ」の概念は、既存の対象別のふれあい場とは異なる、身近な所で、誰もが自由に好きなことができる場の拡充を意味する。『ここへきて、そして一緒に交わって遊んでいることをみるわね。やっぱりすごいなって。こういうところ、多いにしてほしいね。いらっしゃる方もね。いろんな方と、地域の方とのふれあいができたらいいなと思うね』などの語りから生成される。

子どもとのかかわりを通して高齢者は、子どもの問題を身近なものとして捉えている。特に、今日の地域の姿は、子どもの健全な成長や発達に適切な環境になっていないことを気づき、高齢者など多様な人とふれあいながら、社会を学べる新しいふれあい場の必要性を感じることから、高齢者が描く未来は、高齢者自身の安寧を超えて子どもという次世代の安寧が含まれていると推察できる。

以上のように、意味段階では、【次世代との未来の物語】のカテゴリーを構成する〈回想〉〈豊かな感情の気づき〉〈共に希望を描く〉というサブカテゴリーが見出された。3つのサブカテゴリーの間には次のような特徴がみられる。子どもとのふれあいやかかわりは、高齢者の子どもの幼い頃を思い出し、過去〈回想〉のきっかけになるが、自己を評価するようなところまでは至っていない。その理由の一つとして、インタビュー協力者の中で男性が多かったが、中年期の補助的な子育てが影響するのではないかと考えられる。

また、〈豊かな感情の気づき〉は子どもとのかかわりを通して感じる現在の感情であり、高齢者個人に向かう意味を示す。一方、〈共に希望を描く〉は現在の意味づけに加え、かかわっている子どもの未来が含まれていることである。

表 4-4 類型Ⅱの概念一覧

段階	【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉	「概念」	定義	
感 心	【次世代への関心】	〈内的欲求〉	「補助的子育ての経験」	男性高齢者の場合、家族を扶養するため、主に経済活動に専念し、子育ては補助的な役割を果たしていたこと	
			「過去の仕事でのかかわり」	過去、子どもに接する職業に務めたことや、職場で若者を教えた経験	
			「祖父母の役割から離れる」	孫の幼い時は頻繁に交流し、祖父母としての役割を果たしていたが、孫の成長につれて交流頻度は減り、祖父母としての役割から外されること	
	【子ども・若者との距離感】	〈社会的要請〉	「世代間のつながりへの関心」	近年、家族や会社において子ども・若者との付き合いは難しくなり、人々のつながりの必要性を感じる	
			〈子ども・若者のイメージ〉	「子ども・若者の風景」	町でよくみかける携帯電話などの機械に夢中になっている子ども・若者の様子
			「お年寄りを警戒する」	隣近所の交流のないなかで、特に男性高齢者は、子どもに声をかけると、子どもの親から不審者のように扱われる経験から感じる	
		〈普段ふれあう機会が少ない〉	「普段ふれあう機会が少ない」	地域で血縁関係以外、自然的もしくは意図的に子ども・若者とかわる機会を殆ど設けていない	
行 動	【心地よい所】	〈心地よい所〉	「心地よい所」	高齢者にとって気楽に出入りし、自由に居られる所	
	【ふれあい・かかわり】	〈ふれあい・かかわり〉	「見慣れている」	同じ空間を高齢者、子ども・若者が使うことから、子どもの声や様子に適應している	
			「一緒に楽しむ活動」	高齢者と子ども両方が興味をもち、対等な関係で一緒に楽しめる活動	
			「声をかける」	一緒に楽しめる活動への誘い	
	【進めない戸惑い】	〈進めない戸惑い〉	「相手への配慮」	子ども・若者が嫌な気持ちにならず、興味を持って参加できるよう相手に合わせた接し方	
			「声をかけられない」	子どもからネガティブな反応を受けた経験から、先に声をかける行動に躊躇すること	
	【肯定的な感情】	〈肯定的な感情〉	「自由交流の限界」	活動の日時や参加者などの縛りが無いため、単発的にかかわりごとどまりやすく、継続なかわりにはつながらない	
			「受け入れられている」	一緒に活動しながら、子どもの笑顔や喜びの言葉などの返ってくる反応から感じる	
			「刺激になる」	予想できない子ども特有の発想に対し新鮮に受け止める	
	【相手への思いにもとづく行為】	〈相手への思いにもとづく行為〉	「元気をもらう」	一緒にいるだけで明るい雰囲気になり、子どもの元気な姿からパワーやエネルギーが伝えられる	
			「成長を感じる」	継続的なかわりを通して最初と比べ、今の子どもの心身の変化に気づく	
			「見守り」	重なるかわりから相手である子どもが気になり、普段と違う様子を感じ、周りに確認すること	
意 味	【次世代と未来の物語】	〈回想〉	「アドバイスをする」	子どもに対し、祖父母のような立場から生活面での助言をすること	
			〈豊かな感情の気づき〉	「回想」	子どもをみて高齢者自分の子どもの幼い頃を思い出、懐かしさを感じる
			「幅広い年齢層との人間関係」	機関を利用するうちに、子ども・若者・同年代のすべての年齢層とかわっている	
		〈共に希望を描く〉	「自分の勉強になる」	子どもに説明するための事前学習またはかわりを通して知る新しい事は、知識の再確認や習得に役立つ	
			「自己存在感」	高齢者のことが子どもに受け入れられ、子どもとの相互作用から、大事にされていると感じる	
			「自己有用感」	子どもに何かを教える行動や教えを頼まれたことから、子どもに役に立っていると感じる	
「健康維持への意欲」	体力や身体機能の低下を感じながらも、現在参加している活動を今後も維持するために、食や運動に気をつける生活様式を立てること				
「子どもの成長に必要な環境を考える」	子どもの成長に社会とのかかわりは重要であるため、地域で安心安全に社会とつながる所が求められる				
「新しいふれあいの場へのニーズ」	既存の対象別のふれあいの場とは異なる、身近な所で、誰もが自由に好きなことができる場の拡充				

#### 第4節 類型Ⅲの参加高齢者の生きがい

類型Ⅲの参加高齢者のインタビュー調査結果を報告する前に、参加高齢者q氏の語りを紹介する。高齢者は、どのような経緯で施設を利用し、高齢者と子ども・若者のかかわりに参加しているか、そして、この活動をどのように捉えているかについてイメージして頂きたい。なお、高齢者の語りの中で（ ）は文脈を変えない範囲での筆者による語りデータの補足である<sup>15)</sup>。

##### 《共生型サロンに参加しているq氏の語りから》

ここはね、たまたま知り合いの人が‘カラオケもやれるからおいで’って誘ってくれたの。ほんで、たまたま去年の5月ぐらいからコミセンへ行くようになって。〇〇さんが、‘ここも来て’って言われて。でもすごく抵抗があったの。私、今までよそへみんなと接したことなく。うち商売で仕事一本ね、若い時からしてきて。ほんでやったと思うけど。来てみたら、何か楽しいし。何十年の昔の人たちと再会できて、何人もね。病院行く日じゃなかったらここへ2回来る。もう朝から、‘あ、今日は行けるな’とか思って。近所ではあんまりしゃべる人もそれぞれにあって。でもここへ来ると、なんか気楽に冗談まぎれでお話ができて。うん、元気もらえるの。みんな年いって、みんな同じ年でも違った生活した人がいっぱいおるでしょう。‘あ、そういう生活もあったんだ’そういう見目を持ってな。思ってやっとなる。

今日、昼ご飯みんな一緒に食べて美味しかった。うちだとひとりでしょう。いつも、でも、私ひとりでね、主人がいるときもふたりで食べてたから、毎日ひとりなんです。今日は子どもさんもいたし、学生さんも。子ども好きなの。私もうこうやっときたい。来とる子に頭触りたい。子どもをみたら元気ももらえるね。子どももいっぱいいて、学生さんもいっぱいいて。こういうところが、好き。うれしい。大人ばかりやったらつまらんじゃん。なんか雰囲気違うね、やっぱり。体操とかやってて、押す（動作）ってやるでしょ。それがなんとも言えないの、可愛くて涙が出るぐらい可愛い。子どもさんみんな小さい子、もううちもみんな孫が大きくなっちゃっとなるでしょう。やっぱ可愛いね。触りたいけど、泣くと困ると思って、親がおるときに声をかけて、ちょっと触らせてもらうよね。こう自分の手に感じて、‘あ、子ども小さいときそうだったなあ’とか思いが頭に浮かんでくるでしょう。ボケ防止にいいなあと思って。

不思議だけど、今はね。こうやって、みんなが‘おばあちゃん、おばあちゃん’言ってくれるし。うちの孫たちもやさしいし。ああ、よかったって感じです。これから短い人生だけでも、なるべくこの世に罪を少しにして終えたいと思ってる。で、‘人には親切に’っていうのを心掛ける。

#### 1. 高齢者の基本属性

インタビュー調査の協力を得た高齢者は、すべて女性であり、合計8名である。高齢者の基本属性を下の表4-5に示す。基本属性の項目は、「年齢代」「世帯形態」「子・孫の有無」「介護保険利用有無」「施設利用頻度」とした。

参加高齢者の年齢代は70代～90代で、8名のうち、70代は6名、80代と90代は各々1名である。平均年齢は76歳である。高齢者の世帯形態は、単身（4名）と子家族や子と同居（4名）で暮らしていた。すべての高齢者は子があり、孫の有無については8名のうち2人がいない、6人は孫がいた。単身高齢者は、子が遠距離で暮らしているなど、県内に暮らしても家族との交流は平均的に年に2～3回程度であった。参加高齢者は持病を持っているなど老いによる体力の弱化を感じていたが、介護保険制度の対象になり、デイサービス等を利用してはいる方は1名のみで、生活支障のない程度の健康を保っている。C(類型Ⅲ)機関の利用頻度は、週1回～週2回の頻度でほとんどの方が開催日に参加している。また、多くの方が1年以上続けて利用している。

表 4-5 類型Ⅲの高齢者の基本属性

区分	ID	年齢代	世帯形態	子・孫の有無	介護保険利用有無	利用頻度
C 類型 Ⅲ	o	70代	単身	有・有	無	週2回
	p	70代	子夫婦と同居(3人)	有・無	無	週1回
	q	80代	子夫婦と同居(3人)	有・有	無	週2回
	r	70代	子と同居	有・有	無	週2回
	s	70代	単身	有・有	無	週2回
	t	90代	子家族と同居	有・有	無	週2回
	u	70代	単身	有・無	無	週2回
	v	70代	単身	有・有	有	週2回

## 2. プロセス全体像

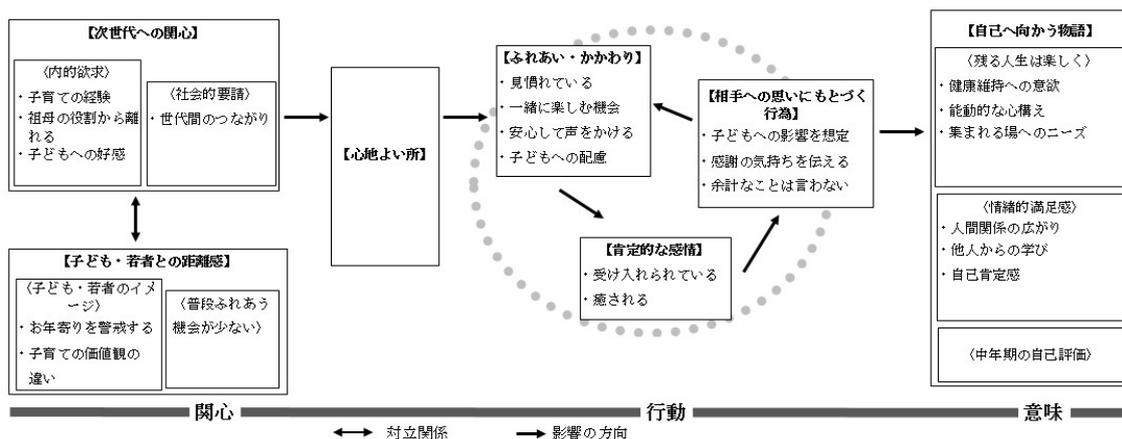
分析により、7つのカテゴリーと11つのサブカテゴリー、24つの概念が生成された。生成されたカテゴリーは【 】, サブカテゴリーは〈 〉, 概念は「 」, 語りの具体例は『斜体』で表記する。分析結果の全体像を図4-3に表し、概念の一覧を表4-6に示した。まず、全体のプロセスを概観し、次いで関心、行動、意味段階において見出したカテゴリーと関連概念について説明する。

地域においてC(類型Ⅲ)に参加しており、子ども・若者とかかわっている高齢者は、子ども・若者とかかわりの前から個人の〈内的欲求〉と〈社会的要請〉から構成される【次世代への関心】が潜在している。この関心領域には【次世代への関心】のみではなく、対立の意味である【子ども・若者との距離感】も含まれている。【次世代への関心】から次世代との【ふれあい・かかわり】という行動に移るためには、高齢者と子ども・若者の交わる場所が必要であるが、高齢者のその場所を【心地よい所】として愛着をもっており、【次世代への関心】から次世代との【ふれあい・かかわり】への参加に影響を与えている。つまり、関心領域から行動領域に向かう入り口のような役割を果たしている。

子ども・若者との【ふれあい・かかわり】を経験した高齢者は、その活動から【肯定的な

感情】を感じる。継続・定期的な交流により【肯定的な感情】は蓄積し、かかわっている【相手への思いにもとづく行為】が生まれ、次の【ふれあい・かかわり】への参加を強化する。行動領域の中で、【ふれあい・かかわり】、【肯定的な感情】、【相手への思いにもとづく行為】という3つのカテゴリーはその順で循環している。重なる一連の行動過程を通じて高齢者は、〈現在〉の満足だけではなく、自分自身の〈過去〉と〈未来〉について認識する【自己へ向かう物語】に至る。

図 4-3 類型Ⅲの分析結果図



### 3. 各段階におけるカテゴリー・概念の関係

#### 1) 関心段階

関心段階は行動段階に移行する前の段階として【次世代への関心】と【子ども・若者との距離感】という2つのカテゴリーにより構成される。

##### ① 【次世代への関心】

高齢者の【次世代への関心】は、子ども・若者とふれあい・かかわりたいという気持ちに影響を与える諸起因を意味する。高齢者の〈内的欲求〉と〈社会的要請〉というサブカテゴリーにより構成される。〈内的欲求〉とは、中年期・高齢期における経験や現在の生活環境から求められることを意味し、「子育ての経験」「祖母の役割から離れる」「子どもへの好感」から構成される。

##### ◎ 「子育ての経験」

「子育ての経験」の概念は、中年期において子どもを扶養するため、共働きしながら子育てを行ってきたことを意味する。『子どもが小さいときはうちの主人が、腕時計のこのバンド作った。私は事務をやったのね、帳簿付けたりなんかして。だから、税務署も行きましたよ、そのころは(笑) (中略) ‘立派な子にならんでもいいんで、とにかく人に迷惑のかからん、自分で自分のことはできる子になれよ’ っていうふうには育ててきました』のような語りにより生成される。

### ◎「祖母の役割から離れる」

「祖母の役割から離れる」という概念は、孫の幼い時には子育ての補助的な役割を担っていたが、孫が大きくなるにつれ会える頻度も減り、その役割は少なくなっていることである。『子ども好きなの。孫10人。ひ孫が7人。みんなかわいい。私もうこうやっときたい。来とる子に、頭触りたい。(子どもを見たら)もう元気もらえる。多いときは孫たち4人ぐらい、夏なんかだったらお風呂入れてたの。お風呂とか。お盆とか集まるでしょう?1年に2回は必ず全員が集まって。お父さんがいるまでは。だけど、たまたまお嫁さんが、私もお父さんいなくなっても、何年間やったんだけども、お嫁さんがあんまり好きじゃないから、掃除とか汚したりとか。そういうことを耳にしたから、もう誰も呼ばない』などの語りから生成される。

### ◎「子どもへの好感」

「子どもへの好感」は、幼児に対して好ましい、可愛いという感情が自然的に湧き、小さい子どもがいるとかかわりたくなる感情を意味する。『また、子どももいるし。そうです。私、子ども好きでね(笑)。見るだけでもいやされますもんね。なんか、かわいいなと思いますよ(笑)』などの語りから生成される。

高齢者は、過去中年期において精力的に子育てを行ってきた。子孫を愛し、育て、ケアする行動は、本能的なものであり、存分発揮できた。高齢期において、中年期のような子孫への関心や行動はできず、減っていくのは当然であるが、孫の成長につれ、補助的に行ってきた役割も減り、特に、別居の多い今日では祖父母としての役割は果たせない環境といえる。こうした子孫への関心や行動という欲求は家庭内で解消されない状況であるが、血液関係の子孫のみならず、一般の子どもへその関心や行動の欲求が向かっていることがみられる。

次に、もうひとつのサブカテゴリーである〈社会的要請〉は、社会から期待されている役割を意味し、「世代間のつながり」という一つ概念により構成される。

### ◎「世代間のつながり」

「世代間のつながり」とは、近年、生活において高齢者と子ども・若者の付き合いは非常に難しくなったことを実感し、世代間のつながりへの回復を求める意味である。『スーパーなんかに行っても知ってる人だったら、‘こんにちは’しても知らん顔してるね。だから、親が教えないからか子どもが当たり前になってしまって、そうってしまったことに寂しいよね。色んな面ではつながってたけど、だんだん難しくなっている。だから色んな形でよくなっていけばいいなと思う』などの語りにより生成される。人と人のつながりは、人間の成長に最も重要視されるものであるが、特に、子ども・若者世代につながるの重要性が欠如しており、それを伝える大人の役割が求められていることを感じている。

高齢者の【次世代への関心】は、個人の経験や状況による子ども・若者への関心、つまり個人の内面欲求に限らず、地域における子ども・若者とのつながりの難しさを実感していることから、子ども・若者に対する大人の役割が求められることを認識している。

### ②【子ども・若者との距離感】

関心段階におけるもう一つのカテゴリーである【子ども・若者との距離感】は、高齢者が、

子ども・若者に対し感じる心理的距離感を意味し、〈子ども・若者のイメージ〉〈普段ふれあう機会が少ない〉という2つのサブカテゴリーから構成される。〈子ども・若者のイメージ〉は、高齢者の経験に基づき形成された子ども・若者に対する考え方である。「お年寄りを警戒する」「子育ての価値観の違い」という2つの概念から構成される。

#### ◎「お年寄りを警戒する」

「お年寄りを警戒する」という概念は、普段の生活の中で子どもに声をかけると、子どもやその親から警戒するような対応を受けることを意味する。『なかなかね、普通のとくにちっちゃな子に話かけても‘このお祖母さん、何か知らん’と思われるんじゃない。お母さんも嫌な顔して』などの語りから生成される。

#### ◎「子育ての価値観の違い」

「子育ての価値観の違い」とは、高齢世代の子育て観は、‘他人に迷惑をかけない’ことが何より大事であったが、今の若い世代の母親には通用せず、隔たりを感じることを意味する。『本当に外に出ていても何も言わない。電車に乗ったらしてもね、靴のまま椅子に上がっても何も言わない。私たちは靴抜かして上にあげたのに、そういうこと全然しないねって。時代かなって言って。でも悪いことは悪いってしてほしいね』などの語りから生成される。

次に、もう一つのカテゴリーである〈普段ふれあう機会が少ない〉は、同様の一つ概念により構成される。

#### ◎「普段ふれあう機会が少ない」

「普段ふれあう機会が少ない」という概念は、日常生活において自然に子どもと接する機会は得られないことを意味し、『近所ではないね、お付き合い。ないないない。今はほとんど何？若い人たちは別に生活されるでしょ？ね？ほっとやっぱり、仕事の関係で遠かったりするとやっぱり別居になったりするしね。うちはだからはつきり、もう孫も一人きり、今大学4年生だから。忙しいし』などの語りから生成される。

これらの概念から、多くの高齢者は子家族別居しており、近隣同士の交流も減っているなかで、子どもとふれあう機会はほとんど得られていない。たまに、子どもへの好感から声をかけると、不審者のように扱われた経験や、町でよくみかける若い世代の母親の養育様子は、高齢者の考え方と大きく異なると感じることから、子ども・若者への物理的・心理的距離感を形成していると考えられる。

以上、関心段階では、高齢者の〈内的欲求〉と〈社会的要請〉により構成される【次世代への関心】とともに、高齢者の経験や置かれている環境から感じる【子ども・若者との距離感】が確認された。【次世代への関心】に対し、【子ども・若者との距離感】は、相反する意味を持つ。

### 2) 行動段階

高齢者と子どもとの直接的かかわりを行う‘行動’の段階は、【心地よい所】【ふれあい・かかわり】【肯定的な感情】【相手への思いにもとづく行為】という4つのカテゴリーにより構成される。

#### ①【心地よい所】

図6-3をみると、【心地よい所】は関心段階と行動段階の間に、つまり、次世代への関心から行動に移る局面に位置している。【心地よい所】とは、出入りが自由で決められたことが少なく、話の通じる仲間と自由に居られる所を意味する。『近所ではあんまりしゃべる人も、ねえ？それぞれにあって。でもここへ来ると、なんか気楽に冗談まぎれでお話できて。うん、元気もらえるの』『あ、ここへ来たら、ここならそんな強制的のあれじゃなしで。ま、どうしても体調が悪けりゃ休んでもいいし、自由だし。で、循環バスで乗ってくるの、これで。で、自分で来ること大事ですね』などの語りから生成される。

この場所は高齢者にとって心理的安定を与え、居場所のような意味を持つ。そこで行う子どもとのふれあいやかかわりは、関心段階で示した【子ども・若者との距離感】からの影響を受けず、参加しやすいと考えられる。

## ②【ふれあい・かかわり】

【ふれあい・かかわり】のカテゴリーは、「見慣れている」「一緒に楽しむ機会」「安心して声をかける」「子どもへの配慮」という4つの概念により構成される。

### ◎「見慣れている」

「見慣れている」という概念は、子どもの泣き声や動き、子育ての様子など、若い世代と一緒にいる環境に適応していることを意味する。『ちっちゃな子を見るだけでも楽しいね。走り回ってるのも可愛いし、こっちに顔突っ込んでみたりね。泣き声は気にならない』などの語りから生成される。

### ◎「一緒に楽しむ機会」

「一緒に楽しむ機会」とは、高齢者と子どもが同じ空間で体操や食事、季節のイベントなどを行い、一緒に楽しめる活動が得られることを意味する。『(赤ちゃんや学生がいて)感じがいいもんね、やっぱり。うん。今日もああいふ落語？ あれも聞いたりね、楽しく。いろいろことあるんで。この間もいろんなこと時間つぶして。お盆な、この間の木曜日行ったときかな、お盆の昔のお盆の話したり、そういうことしたり、いろいろ体操やったりする。うちあんまりそういうことはやるけど、ほかのことあんまり行かんもんで』などの語りから生成される。

### ◎「安心して声をかける」

「安心して声をかける」という概念は、高齢者は子どもにかかわりたい時、不審者に思われるかもしれないという不安があるが、交流を目的とした場では、心配せず声をかけられることを意味する。『なかなかね、普通のとくにちっちゃな子に話かけても‘このお祖母さん、何かしらん’と思われるんじゃない？ で、ここならね、うん。結構ね。声かけたり。だから、そういう点でもいいしね』などの語りから生成される。

### ◎「子どもへの配慮」

「子どもへの配慮」の概念は、高齢者とのかかわりが、子どもに嫌な経験にならないように、子どもが安心できる環境で接触することを意味する。『あ、子どもさんみんな。やっぱり小さい子、もううちもみんな孫が大きくなっちゃつとるでしょう。やっぱり可愛いね。触りた

いけど、泣くと困ると思って。ほいで、親がおるときに声をかけて、ちょっと触らしてもらおうよね』などの語りから生成される。

類型Ⅲにおける高齢者と子どもは、基本的にそれぞれ集まる部屋があり、そこで各自の活動を行い、高齢者と子どもとのかかわりは、体操や食事の時、その他季節のイベントなどを共同で行われる。類型Ⅲに参加する子どもは、4歳以下の幼児期の子どもが多く、活発な活動性を持っている。子どもは、決まったかかわりの時間以外にも高齢者のいる部屋にはしゃぎながら走ってくる。子どもが来て顔を出すと、高齢者は、微笑みながら子どもの気持ちに合わせて声をかけたり、反応してあげる。また、子どもの泣き声や笑う声もよく聞こえてくる。高齢者は、こうした環境に慣れており、高齢者同士の話をしながら、子どもを迎えたり、送ったりする。また、高齢者は、子どもと遊びたい、かかわりたいという気持ちは大きいですが、子育ての経験から他人を警戒するという幼児期の子どもの特徴をよく知っており、子どもを不安にさせないような環境で接しようと気をつけている。

### ③【肯定的な感情】

【肯定的な感情】のカテゴリーは、子どもとのかかわりを通じて一次的に感じられる肯定的な諸感情を意味し、「受け入れられている」「癒される」という2つの概念から構成される。

#### ◎「受け入れられている」

「受け入れられる」という概念は、子どもとのかかわりの中で笑顔や喜びの行動などの子どもの反応から、高齢者自身の言動が伝えられていると感じることを意味する。『小さい子どもたちがたくさんいて、見たらやっぱり可愛いです。可愛いですね(笑)。だから、さっきもあそこまで送って行って‘バイバイ’って言って(笑)。笑顔が自然に、笑顔が出ているっというか』などの語りから生成される。

#### ◎「癒される」

「癒される」とは、子どもの純粋に笑う姿や可愛い仕草をみるだけで、高齢者は、自然と微笑みになり心が無心になることを意味する。『子ども好きなの。みんな可愛い。私もうこうやっときたい。来とる子に、頭触りたい。(子どもを見ると)もう元気もらえる。うん。元気もらえる。(中略)子どもが好き。うれしい。子どもたち。大人ばかりやったらつまらんじゃん。体操とかやって押す(動作)ってやるでしょう?それがなんとも言えないの、私。可愛くて涙が出るぐらい可愛い』などの語りにより生成される。

普段、幼児期の子どもとのかかわりのない高齢者は、子どもと一緒にいる雰囲気だけで気分転換となり、元気をもっていると感じる。高齢者の言う‘元気’とは、子どもだけが持っている純粋さや可愛さから伝えられるものであると思われる。また、かかわりの中で、高齢者の言動に対する子どもの反応から、高齢者は、相手の子どもと相互作用していると認識するのである。

### ④【相手への思いにもとづく行為】

【肯定的な感情】はかかわっている相手に向かい、【相手への思いにもとづく行為】としてあらわれる。【相手への思いにもとづく行為】のカテゴリーは、「相手への影響を想定」

「感謝の気持ちを伝える」「余計なことは言わない」という3つの概念により構成される。

#### ◎「相手への影響を想定」

「相手への影響を想定」という概念は、子どもの肯定的な反応から相手に良い影響を与えていると思うことを意味する。『*どういう影響があるかどうか分からないけど、子どもが何かしてくると、ありがとう、ありがとうっていうよ。そうすると子どもも喜んでね*』などの語りから生成される。

#### ◎「感謝の気持ちを伝える」

「感謝の気持ちを伝える」という概念は、感謝する気持ちは人にとって大事な事であり、自らの行動により子どもに伝えようとする事である。『*本当の話だな。だでさ、やっぱしさ、向こうもううれしいよ。それは、両方が、ありがとう感謝の気持ちでよう、やっぱし、親子でも感謝、ありがとうということは分かるだろう。大事なことだと思うよ。今の若い嫁さん達はそういうこと知らんわな。平均に、世間の話し聞いとるとわからん*』などの語りから生成される。

#### ◎「余計なことは言わない」

「余計なことは言わない」とは、若者が聞いてないことまで言わないように、自己の言動に注意することである。『*難しい。今でもそう思うときある。‘あ、私ここまで言ったけど、ここからさき言うところちょっと’と思うと、クエッションマーク付くと、もう自分で控えちゃうし*』などの語りにより生成される。

高齢者は、子どもと対話を通じたかかわりはできなくても、表情や言葉、軽いスキンシップを通してお祖母さんの持っている愛情を伝えようとしている。子どもが可愛くて表出される感情でもあるが、自分は愛されていると感じることは、子どもの成長に良い影響を与えるだろうという高齢者自身の子育ての経験からあらわれる側面もあると考えられる。

子どもに対して高齢者は、好感や愛情を積極的に表現しようとしているが、子どものお母さんに対しては、距離感を置いた行動がみられる。その背景には、関心段階で生成された若い世代との「子育ての価値観の違い」と関係している。高齢者世代が子育てで大事にされてきた、感謝する気持ちや人に迷惑をかけないといったことは、今の若い世代にはそれほど重要な価値ではないのを若者の子育ての様子から認識している。また、高齢者は余計な話をするという世の中で言われている高齢者へのイメージを気にして、若者が求めてないことについては、話さないようにしていると思われる。

以上、行動段階では、子ども・若者との【ふれあい・かかわり】を通して、子どもから【肯定的な感情】を感じ、【相手への思いにもとづく行為】に生じている。特に、【相手への思いにもとづく行為】では、子どもへの影響を想定し、大事な徳目である感謝する気持ちを伝えようとする一方で、養育に関する若い母親との価値観の違いから行為を制限している。

### 3) 意味段階

高齢者は継続的・定期的な子どもとのかかわりを通じて行動段階でのプロセスを繰り返し、以下のような意味付けに至る。意味段階では【自己へ向かう物語】のカテゴリーがあり、〈中年期の自己評価〉〈情緒的満足感〉〈残る人生は楽しく〉という3つのサブカテゴリー

から構成される。

### ◎「中年期の自己評価」

〈中年期の自己評価〉のサブカテゴリーは同様の一つ概念から構成される。この概念は、幼児期の子どもとその親とのふれあい・かかわりから、自然に高齢者自身の子育てが思い出し、その頃の自己に意味づけることを意味する。『なんかこう自分の手に感じて、‘あ、子ども小さいときそうだったなあ’とか思いが頭に浮かんでくるでしょう？ボケ防止にいいなあと思って』などの語りにより生成される。中年期の自分を回想する行為は、過去の自己を評価する機会となり、過去の自分を受け入れ、肯定的に捉えることは、現在の自尊心につながると考えられる。

次に、〈情緒的満足感〉のサブカテゴリーは「人間関係の広がり」「他人からの学び」「自己肯定感」という3つの概念から構成される。

### ◎「人間関係の広がり」

「人間関係の広がり」とは、同年齢の多様な人と出会い、仲間となり、新たな人間関係ができていくことを意味する。『皆さんとお話できるし。それからもう、みんなでカラオケ行ったり、ここじゃない日るとき、ないときにね。ないときもたまにね。月にいっぺんぐらいはね。そうなの、カラオケに行って。だから、今は楽しんでここへ来てる』などの語りから生成される。

### ◎「他人からの学び」

「他人からの学び」という概念は、多様な人から人生の話聞き、経験できなかったことを間接的に接したり、物事の見方が広がることを意味する。『ここへ来るとみな年いって、みんな同じなんぼ年でも違った生活した人がいっぱいおるでしょう？‘そういう生活もあったんだ’そう見る目を持ってな。と思ってやっとなる。そういう話を聞きながら勉強にもなる。‘あ、自分はこうだったけど、ああこの人難儀しとるかな’‘あ、楽しとるな’‘この人、ちょっと根性がちょっとひねくれとる’とか(笑)』などの語りから生成される。

### ◎「自己肯定感」

「自己肯定感」とは、過去を振り返って生きてきた人生に対し価値のあるものとして肯定的に捉える意味である。『昔だったらね、食べるお金もなくてね。娘のミルク買うお金もない生活だったの。(中略)私の人生ね、今感謝してます、お父さんに朝晩。国民年金だから少ないけど、お父さんと頑張ってきた何千万の預金があるから。それを大事に使わせてもらって。無駄をしない。贅沢もしないけど。(中略)自分の人生覚えがあるうちに楽しくしたいなって心に決めてるの』『不思議と。だけど、今はね。こうやって、ねえ？みんなが‘おばあちゃん、おばあちゃん’言ってくれるし。うちの孫たちもやさしいし。ああ、よかったです。これから短い人生だけでも、なるべくこの世に罪を少しにして終えたいと思ってる。で、‘人には親切に’っていうのを心掛けてるの』などの語りから生成される。

高齢者は、共生型サロンを利用しながら、〈情緒的満足感〉を感じているが、子どもとのかかわりや仲間とのかかわりは、過去を振り返る機会となり、今の生活は過去に頑張ってきた結果として肯定的に捉えている。また、高齢者にとって、共生型サロンは、子ども

とのかかわりもあるが、話の通じる仲間とのかかわりが自由にできる所である。そこで、多様な人から聞ける人生の話は、知らなかった世界を接したり、改めて人とのかかわりを学べることができる。

最後に、〈残る人生は楽しく〉というサブカテゴリーは、今後の生活に向けての意欲を意味し、「健康維持への意欲」「能動的な心構え」「集まれる場へのニーズ」という3つの概念により構成される。

#### ◎「健康維持への意欲」

「健康維持への意欲」という概念は、将来、動けなくなることへの不安とともに、子どもに迷惑かけたくないという強い思いから、現在の心身の健康を維持するために、気を付けていることである。『例えば朝夜、歩くんだ。自分で健康のために。コロッといけるように。皆に迷惑をかけるといかんだらう。医者になるべく掛からんようにしとるわ。医者へ行かんように』などの語りから生成される。

#### ◎「能動的な心構え」

「能動的な心構え」は、今後の生き方を考える上で、今のような楽しみを維持するため、努力したいという姿勢を意味する。『これから、まあ、そうだね、ここ来て、帰って、楽しんで、‘あ、今日は一日楽しかった’。ほんで、朝は‘行ってくるわな’。そんなもんだな。元気で今の暮らしのように楽しんで。自分でも、1人でもやっぱり、思い出して笑ってみたい。うん。テレビで、‘あ、こうだなあ’って言って。まあそんなもんだね、私は』などの語りから生成される。

#### ◎「集まれる場へのニーズ」

「集まれる場へのニーズ」という概念は、地域において身近な所で、誰もが利用し、自由に話せる場の拡大を求める意味である。『でももう、今までのこのように、こう続いていくんじゃないかしら。どうなのかな？よう分かんないけど。ほんとにここに来ると、皆さん、ほんとにね、全然知らない人だけどね、結構来たらいろいろおしゃべりできるでしょ？だからこのままでいいんじゃないかしら。こういう所が増えるとかそれはありますよね。また、こういうみんな一緒にもいいですよ、時々はね』などの語りから生成される。

高齢者の今後の人生への生き方には、現在に営んでいる身体機能や活動を維持したいという意欲がある。これから動けないかもしれないという不安がありつつ、介護状態になって子どもに迷惑をかけたくないという強い思いに基づいている。また、仲間とのかかわりが楽しく、満足していることから、このような色んな人が集まれる場の広がり望んでいる。一方、子どもとのかかわりに対しては、かかわりの機会が得られることが好ましいが、同世代とのかかわりより、その重要度は低いということが、「時々はね」という言葉からうかがえる。

以上、意味段階を構成しているこれらの概念は、高齢者自己に向かう意味付けが多く、子どもとのかかわりは、過去の振り返る機会となり、中年期の自己評価につながる事が確認される。

表 4-6 類型Ⅲの概念一覧

段階	【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉	「概念」	定義	
感 心	【次世代への関心】	〈内的欲求〉	「子育ての経験」	中年期において子どもを扶養するため、共働きしながら子育てを行ってきたこと	
			「祖母の役割から離れる」	孫の幼い時には子育ての補助的な役割を担っていたが、孫が大きくなるにつれ会える頻度も減り、その役割は少なくなっている	
			「子どもへの好感」	幼児に対して好ましい、可愛いという感情が自然的に湧き、小さい子どもがいるとかかわりたくなる感情	
	【子ども・若者との距離感】	〈社会的要請〉	「世代間のつながり」	近年、生活において高齢者と子ども・若者の付き合いは非常に難しくなったことを実感し、世代間のつながりへの回復を求めること	
			「お年寄りを警戒する」	普段の生活の中で子どもに声をかけると、子どもやその親から警戒するような対応を受けること	
			「子育ての価値観の違い」	高齢世代の子育て観は、‘他人に迷惑をかけない’ことが何より大事であったが、今の若い世代の母親には通用せず、隔たりを感じる	
【子ども・若者との距離感】	〈子ども・若者のイメージ〉	「普段ふれあう機会が少ない」	日常生活において自然に子どもと接する機会は得られないこと		
		「子ども・若者のイメージ」	「お年寄りを警戒する」		
		「子育ての価値観の違い」	「お年寄りを警戒する」		
行 動	【心地よい所】	〈心地よい所〉	「心地よい所」	出入りが自由で決められたことが少なく、話の通じる仲間と自由に居られる所	
	【ふれあい・かかわり】	〈ふれあい・かかわり〉	「見慣れている」	子どもの泣き声や動き、子育ての様子など、若い世代と一緒にいる環境に適応していること	
			「一緒に楽しむ機会」	高齢者と子どもが同じ空間で体操や食事、季節のイベントなどを行い、一緒に楽しめる活動が得られること	
			「安心して声をかける」	高齢者は子どもにかかわりたい時、不審者に思われるかもしれないという不安があるが、交流を目的とした場では、心配せず声をかけられること	
	【肯定的な感情】	〈肯定的な感情〉	「子どもへの配慮」	高齢者とのかかわりが、子どもに嫌な経験にならないように、子どもが安心できる環境で接触すること	
			「受け入れられている」	子どもとのかかわりの中で笑顔や喜びの行動などの子どもの反応から、高齢者自身の言動が伝えられていると感じること	
	【相手への思いにもとづく行為】	〈相手への思いにもとづく行為〉	「癒される」	子どもの純粋に笑う姿や可愛い仕草をみるだけで、高齢者は、自然と微笑みになり心が無心になること	
			「子どもへの影響を想定」	子どもの肯定的な反応から相手に良い影響を与えていると思うこと	
			「感謝の気持ちを伝える」	感謝する気持ちは人にとって大事な事であり、自らの行動により子どもに伝えようとする	
	【相手への思いにもとづく行為】	〈相手への思いにもとづく行為〉	「余計なことは言わない」	若者が聞いてないことまで言わないように、自己の言動に注意すること	
【自己へ向かう物語】			〈中年期の自己評価〉	「中年期の自己評価」	幼児期の子どもとその親とのふれあい・かかわりから、自然に高齢者自身の子育てが思い出し、その頃の自己に意味づけること
				〈情緒的満足感〉	「人間関係の広がり」
	「他人からの学び」	多様な人から人生の話聞き、経験できなかったことを間接的に接したり、物事の見方が広がること			
「自己肯定感」	過去を振り返って生きてきた人生に対し価値のあるものとして肯定的に捉える				
【自己へ向かう物語】	〈残る人生は楽しく〉	「健康維持への意欲」	将来、動けなくなることへの不安とともに、子どもに迷惑かけたくないという強い思いから、現在の心身の健康を維持するために、気を付けていること		
		「能動的な心構え」	今後の生き方を考える上で、今のような楽しみを維持するため、努力したいという姿勢		
		「集まれる場へのニーズ」	地域において身近な所で、誰もが利用し、自由に話せる場の拡大を求める		

## 第5節 類型Ⅳの参加高齢者の生きがい

類型Ⅳの参加高齢者のインタビュー調査結果を報告する前に、社会福祉館 a の参加大学生と高齢者 x 氏・y 氏の語りを紹介する。参加者らの語りを通じて、大学生と高齢者は、どのような経緯で施設を利用し、世代間交流プログラムに参加しているか、そして、この活動をどのように捉えているかについてイメージして頂きたい。大学生の語りは、社会福祉館 a の発行の『2013 年度プログラム評価書』から抜粋したものであり、高齢者の語りは、筆者の 2014 年インタビュー調査によるものである。なお、高齢者の語りの中で（ ）は文脈を変えない範囲での筆者による語りデータの補足である。

### 《世代間交流プログラムに参加している大学生の語りから》

大学に入って初めて参加した合唱団だった。社会福祉学専攻で青少年福祉専攻を考えていた私としては、お祖父さん、お祖母さんとの合唱と聞いたとき、結構悩んでいた。しかし、まだ、福祉のどの分野を専攻するか迷っていたので、この活動を通じて、高齢者福祉に向いてるかどうかを確認してみたかった。そういう思いから参加するようになった。

活動に参加する前は、何かすごいことだと思っていたが、最初行ったとき、‘あ、考えた活動とは何か違う’と思った。小さい教室みたいな所にお年寄りと集まって一緒に歌を歌い、おばあちゃんとおじいちゃんは、私たちを孫娘、孫のように思ってくくださった。たくさん褒められたり、たくさん暖かさを感じられた。率直、授業が終わってからここに行くのが疲れている時が多かった。しかし、お年寄りの方は、私たちと違っていつも元気に、明るい姿で誰よりもこの時間を楽しんでながら歌を歌っていた。それで、歌う途中で居眠りしたり、あくびをしたりすると、何となく申し訳ない気持ちになって、しっかりしようとした。お年寄りよりも私たちがはるかに若いのが、お年寄りの情熱は、私たちよりもずっと若かった。お年寄りと一緒に歌を歌うときには、思わず楽しい気分になって本当に楽しく歌が歌えた。そして、発表会のとき、ミスをしてテンポが少しズレでも楽しく歌を歌っているお年寄りの姿が何より良かった。人の前を出るのを嫌がっていた私は、他人の前で歌を歌い、また、おばあちゃんとおじいちゃんと一緒にするのは難しいと思っていたのを考え直す意味深い時間だった。合唱団を始めて間もない感じであるが、もう大学 1 年の生活が終わったのが信じられない。3 回の発表会を行い、お年寄りと一緒に小劇場で演劇も見て、夏休みは、遠足も行って、本当にたくさんの思い出がつくられた。年末発表会を最後に、私たちの 1 年の活動は終わったが、また機会があれば、お年寄りと一緒に歌を歌うときがきてほしい。

### 《参加高齢者の x 氏の語りから》

合唱団もあるし、ナイヤガラもあるから、参加してくださいとしたから、名前を書き入れた。最初は緊張だらけで、ずっと先生だけをみていたよ。今は自信も増えたと、緊張していない。だから面白い。もっとやりたくなるしね。学生たちとは 2 年目のときから一緒にするようになった。学生たちってすごい面白い。歌も上手いし、学生たちがきているからよかった。若い人がきているから歌も変わった。学生たちは上手いから、それを聞いて、私たちも頑張って歌う。

福祉館に若い人たちが多く来るけど、ここの学生たちとは違うよ。皆勉強終わってから参加しているのよ。他の実習生とは違う。学生から気をもらうの。学生でしょう。娘みたいだけど、歌うときはそうじゃない。歌う時は、学生たちも頑張ってるのに、私ももっと頑張ろうと思う。家に帰ってからも練習したり、昨日も評価会だけして帰ったじゃない。練習なしに。それで、私たち3人で、あそこ行って練習してた。発表会でうまいと言われて、また、私の故郷という歌を歌ったが、ある人は泣いたりして。他の地域の福祉館に行って披露したり、この前は、地域の大学に行って歌った。どんなにここで練習してもやっぱり外で発表したりする方がいいね。

《参加高齢者のy氏の語りから》

合唱団ってきいてやりたいと思って手をあげた。最初は合唱って何？と思った。歌は歌だけど、どういうふうなものが分からなかったから。面白いよ。合唱団が一番面白い。私の年齢は誰も参加していない。私は歌が過ぎだから参加しているけど、同じ同士は誰もいないよ。やりたい人はもう来ている感じ。興味ないと参加できないな、途中で来なくなるからさ。

お顔だけ知っていた人も合唱団を一緒にしているから、家族みたいに思うようになって、もっと関心ができたり、もっと親切になったりね。お隣さんと往来もあまりないし、挨拶もあまりしない。若者もいるけど、ここにきて会う人たちは、よくしてくれる。お互い心が合意しているから、一つのチームだからね。挨拶も良くしてくれるし、家族みたいに。ここにきて親しくならなかったら、若者は若者で、私は私で、そういうふうに過ごしたかもしれない。一緒に合唱団をやっているから親切になる。お互い理解しようとするし、一言でも優しくしようしたりね。

何でも習うのはいいね。学生たちと一緒にすることもいいし。年寄りが若者に学べるのはいいことだよ。歌を歌うと、心が元気になる。悩みが無くなるし、気分がよくなるのよ。いつも心だけは楽しいよ。こういうふう生きていくのも楽しい。

1. 高齢者の基本属性

インタビュー調査の協力を得た高齢者は4名であり、基本属性を表4-7で示す。基本属性の項目は、「年齢代」、「世帯形態」、「子・孫の有無」、「福祉制度利用有無」、「施設利用頻度」である。4人の参加高齢者はすべて女性であり、年齢は70代2名、80代2名である。平均年齢77.5歳（2014年時点）である。

表 4-7 類型IVの高齢者の基本属性

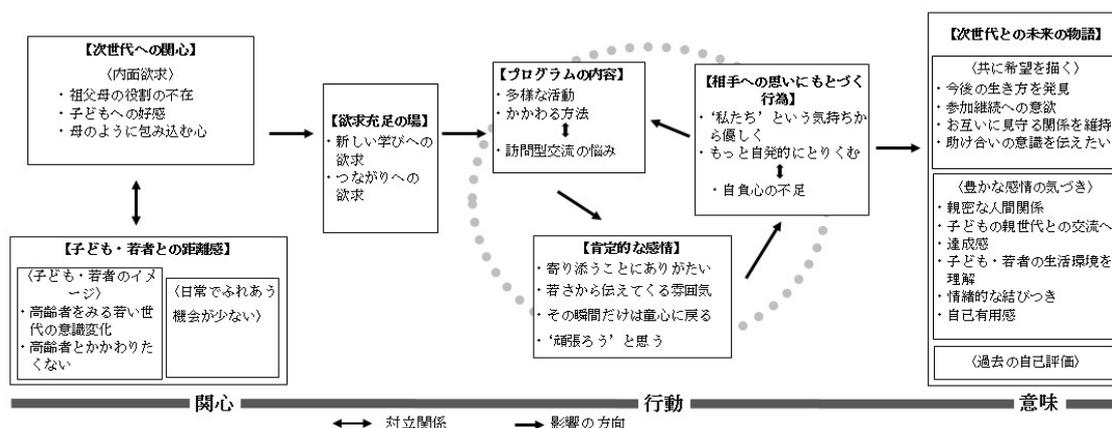
区分	ID	年齢代	世帯形態	子・孫の有無	福祉制度利用有無	施設利用頻度
D 類型 IV	w	80代	単身世帯	無・無	国民基礎生活保障制度	週4回
	x	80代	単身世帯	無・無	国民基礎生活保障制度	週4-5回
	y	70代	夫婦世帯	有・無	一般	週3-4回
	z	70代	夫婦世帯	有・有	一般	週5回

高齢者の世帯形態は、単身（2名）や夫婦（2名）世帯であった。4名のうち、2名は子や孫があったが、遠距離で別居しており、普段のかかわりは少なかった。参加高齢者は老いによる持病や体力の低下などは感じているが、主観的な健康状態が良好である。社会福祉館の利用頻度は、週3回以上で、社会福祉館の利用は最低3年～10年以上利用している。

## 2. プロセス全体像

分析により7つのカテゴリーと10つのサブカテゴリー、29つの概念が生成された。生成されたカテゴリーは【 】, サブカテゴリーは〈 〉, 概念は「 」, 語りの具体例は『斜体』で表記する。分析結果の全体像を図4-4に表し、概念の一覧を表4-8に示す。まず、全体のプロセスを概観し、次いで関心、行動、意味段階において見出したカテゴリーと関連概念について説明する。

図 4-4 類型IVの分析結果図



子ども・若者とかわるプログラムに参加している高齢者は、プログラムに参加する前から子ども・若者への関心を持っている。個人の〈内的欲求〉による【次世代への関心】とともに、高齢者が置かれた環境から感じられる【子ども・若者との距離感】を抱いている。子ども・若者に対し関心と距離感という両価的感情を抱えている高齢者は、普段から利用している社会福祉館で子ども・若者とかわるプログラムの情報を獲得し、参加することになるが、高齢者にとって社会福祉館とは、多様な余暇活動やボランティア、福祉サービスの利用等、求めることが提供される【欲求充足の場】である。長年社会福祉館の利用から蓄積された信頼や期待は、子ども・若者とかわるプログラムにもスムーズに参加できるようにする。また、関心領域と行動領域をつないでいる。

子ども・若者とかわる【プログラムの内容】は多様な活動やかかわり方を設定しており、高齢者と子ども・若者が接触するように促す。プログラムを通して高齢者は、子ども・若者による【肯定的な感情】を感じる。また、【肯定的な感情】が重なり、子ども・若者との親

密な関係が構築すると、かかわっている【相手への思いにもとづく行為】が表れる。

【相手への思いにもとづく行為】は、次のプログラムへの積極的な参加を強化する。行動領域における【プログラムの内容】，【肯定的な感情】，【相手への思いにもとづく行為】という3つのカテゴリーは、その順で循環する。

重なる一連の行動過程を通じて高齢者は、現在の〈豊かな感情の気づき〉のみならず、〈過去の自己評価〉を肯定的にとらえ、さらに、これからは子ども・若者と〈共に希望を描く〉ことも含まれる【次世代との未来の物語】に至る。

### 3. 各段階におけるカテゴリー・概念の関係

#### 1) 関心段階

関心段階は子ども・若者とのプログラムに参加する前の段階を意味し、【次世代への関心】と【子ども・若者との距離感】という2つのカテゴリーにより成り立つ。

##### ①【次世代への関心】

高齢者の【次世代への関心】は、子ども・若者とのかかわりたいと思うようにする諸起因を意味し、〈内的欲求〉という単一サブカテゴリーから構成される。高齢者の〈内的欲求〉は、中年期・高齢期における経験や現在置かれている状況から求めることであり、「祖父母の役割の不在」「子どもへの好感」「母のように包み込む心」という3つの概念から構成される。

##### ◎「祖父母の役割の不在」

「祖父母の役割の不在」の概念は、血縁関係の孫がいない、または、別居で円滑にかかわっていないため、祖父母としての役割を果たしていない状態を意味する。『(質問者：孫と一緒に暮らしていますか)違うよ。近くには住んでいるけど、月に1-2回は会えるかしら。学校行っているから忙しいみたい』などの語りから生成される。

##### ◎「子どもへの好感」

「子どもへの好感」の概念は、普段ふれあいのない年齢層の子どもに対し興味を持つことである。『学校に行ってるから忙しいからね。幼稚園、幼児園。だから可愛いよ。可愛い時だし』などの語りから生成される。高齢者のなかには、高齢者によって『年齢の低い学生は大変です。どうしても小学生は愚かでしょう。だからちょっと難しいです。言葉が通じないから』のように、交流を希望する子どもの年齢層が存在する。

##### ◎「母のように包み込む心」

「母のように包み込む心」という概念は、小さい子どもをみると、暖かい目で‘見守ってあげたい’という自然に思い浮かぶ感情を意味する。『まあ、私たちは子どもたちを愛で包み込むような気持ちで、それはまあ、誰がさせてそうするのではなく自然に湧き出てるからやってるわけ。母は、母親というのがあるでしょう。母の本当に海のような心は比べものではないよ。それは老いてお祖母さんになっても同じ。だから、私みたいな年齢の人が子どもをみると、お母さんのような気持ちで、そう見えて撫でてあげたいなってそうだろ』などの語りから生成される。

高齢者は、小さい子どもをみると、‘見守ってあげたい’という母性本能のような感情が

自然的に発生するとともに、普段ふれあいのない子どもに対し好感をもっている。しかし、現実では、孫がいないか、居ても別居して円滑な交流はできていない状況であるため、血縁関係では高齢者が持っている子ども・若者への関心欲求が解消されないことである。孫に対して祖父母として求める欲求が充足されてない状態が続くと、自然的に発生する子どもへの好感は無くなるのではなく、高齢者の内面のなかで残存し、その欲求が解消できる、非血縁関係に向かうと考えられる。

一方、類型IVでは、他の類型で生成された‘社会的要請’というサブカテゴリーはないが、それに該当する高齢者の語りはみられないため、生成されなかった。

## ②【子ども・若者との距離感】

【子ども・若者との距離感】は、子ども・若者に対し感じる心理的距離を意味し、〈子ども・若者のイメージ〉〈日常でふれあう機会が少ない〉という2つのサブカテゴリーにより構成される。

〈子ども・若者のイメージ〉は、高齢者の経験に基づいて思い浮かべる子ども・若者に対する考え方であり、「高齢者をみる若い世代の意識変化」「高齢者とかかわりたくない」という2つの概念から構成される。

### ◎「高齢者をみる若い世代の意識変化」

「高齢者をみる若い世代の意識変化」の概念は、高齢者に対する敬老意識がますます希薄していることを意味する。『時代は変わって昔と違うから。けど、親切にする人は親切で。歳月が経てるからそうだろうと思う。(中略)でも、バスのようなところで席を譲ってくれる人はしてくれたりします。一部の人は、目を閉じていたりするけど』などの語りから生成される。昔は、一般的に高齢者に対する敬老意識があり、皆から優しい気持ちを感じられたが、今は優しい人もいる一方で無関心の人も多くなっていること生活から経験し、若い世代が高齢者をどう思っているかを感じられる。

### ◎「高齢者とかかわりたくない」

「高齢者とかかわりたくない」の概念は、日常生活で高齢者とかかわりを避けるような若者の行動から思うことである。『往来もない。隣に若い人が引越してきたから、私から何度も挨拶をしたけど、それでもあまり反応がなかった。それで私も挨拶はあきらめてしまった。昔から挨拶は大事だと言うでしょう。でも、今の人々は挨拶をしない。若い人も私みたいな(高齢の)人を見ても挨拶はしないよ』などの語りから生成される。高齢者は、時代の変化に伴い、若い世代の高齢者に対する考え方は変わっていることを受け入れている。儒教思想を重要視してきた文化的特性から、高齢者を敬う意識は根付いていたが、現代社会ではますます弱まっている。また、挨拶しても反応しないなど、深い付き合いではなく、挨拶を交換する表面的な付き合いさえ、拒否するような身近な経験から、子ども・若者の不定的なイメージが形成されている。

### ◎「日常でふれあう機会が少ない」

一方、〈日常でふれあう機会が少ない〉のサブカテゴリーは同様の概念から構成され、高齢者の生活環境において、近所に子どもは住んでいない、または若者は住んでいてもふ

れあう機会がめったにないことを意味する。『近くには学生がいないんです。全体的にはいるかもしれないけど、このラインにはないですね。福祉館にきて子どもたちと会えます』などの語りから生成される。日常生活で子ども・若者とふれあう機会を殆ど得られないことは、子ども・若者への心理的距離感を感じさせる。

以上のように、関心段階における高齢者は、〈内的欲求〉から発生する子ども・若者への関心を持っている一方で、経験から感じる子ども・若者に対するネガティブなイメージと普段のふれあい不足は、高齢者に子ども・若者に対する関心とともに距離感という両価的感情を感じさせる。

## 2) 行動段階

高齢者が子ども・若者とのかかわりを行う‘行動’の段階は、【欲求充足の場】【プログラムの内容】【肯定的な感情】【相手への思いにもとづく行為】という4つのカテゴリから構成される。

### ①【欲求充足の場】

【欲求充足の場】というカテゴリは、図6-4に示したように、関心段階から行動段階に進める境界に存在し、両段階をつなげている。【欲求充足の場】は高齢者が持つ自己実現や社会的欲求が実現できる所を意味し、「新しい学びへの欲求」「つながりへの欲求」という2つの概念から構成される。

#### ◎「新しい学びへの欲求」

「新しい学びへの欲求」の概念は、経験していない新しい事に挑戦したいと思う気持ちであり、『私は家で何もしてないんです。ここに来て踊りも習うし、歌も習ってる。ナイヤガラ(認知症予防プログラム)に参加してここに出入りしてから、他の所で水泳もあるのを知ってそっちも入って習ったり、今は終わりました。今は、伝統演劇と合唱団をやっています』などの語りから生成される。

#### ◎「つながりへの欲求」

「つながりへの欲求」の概念は、人々との交流の機会の少ない一人暮らしの高齢者は、地域内で孤立しがちであるが、社会福祉館の利用することで人々と交流し、情緒的な豊かさを感じることを意味する。『一人暮らしは長いんです。うつ病があつて4年間泣きながら過ごしてきました。そのあと、福祉館であるプログラムがあるって聞いて、それで、その時から福祉館に通いはじめたんです。通ってから、うつ病が消えてしまいました。話し相手もいたり、笑ったりそうした方がいいのに、笑うことなどありますか、一人で。(社会福祉館を利用してから)どうしてもたくさん付き合うから助けになるし、結構人々とかかかわっているから良いです。分からないことも分かるようになって』などの語りから生成される。

高齢者にとって社会福祉館とは、福祉サービスを利用するほかに多様な余暇活動やボランティア、対人関係など、求めるものが提供される場であり、生活の多くの部分にかかわっている。調査協力者たちは、社会福祉館を最低3年から最大15年以上利用してきている。長年利用してきていることは、社会福祉館で行われている様々なプログラムは高齢者に有益であり、満足させているという意味でもあり、そこには社会福祉館における信頼と期待が

あることも考えられる。そうした所から提供される子ども・若者とかかわるプログラムは、外部で行われるものより、情報の獲得も安易で、プログラム参加へのハードルは生じないとみられる。

## ②【プログラムの内容】

【プログラムの内容】というカテゴリーは、社会福祉館で行われている世代間交流プログラムの活動内容や交流のやり方等の設定を意味する。「多様な活動」「かかわる方法」「訪問型交流の悩み」という3つの概念から構成される。

### ◎「多様な活動」

「多様な活動」の概念は、対話や物づくりのような静的な内容から野菜栽培や山登りのような動的な内容まで多様であることを意味する。『(質問者:主な活動は何ですか)多いよ。清掃するのもあるし、ゲームや物づくりもあるし、山登りもあったし、近いところに外出も行ったし』などの語りから生成される。プログラムの設定によっては、毎回異なる活動内容で行われる形、または、主な活動はひとつとして、たまにイベント的な小活動を組み合わせる形に分かれるが、いずれにしても参加者がプログラム内容への興味が湧いてくるように多様なものが提供される。

### ◎「かかわる方法」

「かかわる方法」の概念は、プログラムの中に設定された高齢者と子ども・若者を交える仕方を意味し、『(プログラムに参加したきっかけは)福祉館で最初推薦してくれて、何年前から。参加してから何年経ちました。学生たちが何回か変わってるから4年くらいなるみたいです。(質問者:高齢者1人に学生は一人ですか)いいえ、学生2人。男子学生。一人あたり2人ずつしてくれました。今年は双子です』などの語りから生成される。プログラムのなかには高齢者と子ども・若者のかかわりを促すために、高齢者と子ども・若者をペアで組む形や高齢者集団対子ども・若者集団でかかわる形、あるいは、両方を組み合わせた形など、工夫して取り組んでいる。

### ◎「訪問型交流の悩み」

「訪問型交流の悩み」の概念は、プログラムのなかで困っていることであり、「かかわる方法」と対比する。高齢者のお宅に訪問するプログラムに限ってみられている。『最初はよくきてました。最近、昨年からはたよく来てないです。昨年は2回か3回しか来てないです。今年は分からないですね。これからだから。2回来てたから、またいつ来れるか。19日に会おうとしたから。(中略)(質問者:大変だと思うことは?)そんなの分かりません。でも、ある時はお父さんと来たりするんです。そんな時はちょっと...うれしいけど男の方がから気をつかうことはあります。あれこれ話をするのも難しいし。(中略)孫娘だったらよさそうです。男子学生ばかりです。女の子といると、女はよくしゃべるんじゃないですか。だから、あんな話こんな話ができるけど、男の子は少し気をつかいます』などの語りから生成される。あるプログラムは、高齢者のお宅に子どもが訪問するプログラムの場合、高齢者の意思よりは、学生側の事情によって交流の成立が左右されることや、迎える側として茶菓を準備しないといけないこと、異性の子どもとのかかわりは、共通点が少なく気楽に話せな

いことなどが困っている点としてあげられている。

### ③【肯定的な感情】

【肯定的な感情】というカテゴリーは、子ども・若者とかがわりから一次的に感じられることを意味する。「寄り添うことにありがたい」「若さから伝えてくる雰囲気」「その瞬間だけは童心に戻る」「‘頑張ろう’と思う」という4つの概念から構成される。

#### ◎「寄り添うことにありがたい」

「寄り添うことにありがたい」という概念は、子ども・若者が高齢者とかがわるプログラムに参加し優しく接してくれることについての思いであり、『その大学生や先生が本当に苦労している。老人は聞き取りも遅いし、私もね。それから、頭も素早く回らないし、色々、基本から始めなければいけないのに、一度もイライラしないでね、それ難しいんです。何の得もないのに、ここまできてやるんですか。ありがたいことなんですよ』などの語りから生成される。

高齢者は、子ども・若者にとって高齢者とのかがわりは、メリットが少ないと考えているため、プログラムへの参加自体や優しく接してくれる行動についてありがたい気持ちを感じている。この感情には、関心段階で生成された高齢者とのかがわりを望まない〈子ども・若者へのイメージ〉も片隅にあって、かがわることについてありがたく感じていると考えられる。

#### ◎「若さから伝えてくる雰囲気」

「若さから伝えてくる雰囲気」の概念は、子ども・若者と同じ空間にいただけで感じられる若々しい、生き生きした雰囲気を意味する。『若い学生が来ているから気分が良くて（実習生とは）違います。この学生たちは勉強終わってからまで参加してます。福祉館に来ている学生さんは実習で来ている学生。実習学生とプログラムを一緒にしている学生たちとは違うでしょう。（中略）学生たちがお水も用意してくれたり、一緒に歌を歌うからいい。雰囲気が良いです。若い人が来てから』などの語りから生成される。高齢者は、子ども・若者と同じ空間にいただけで若々しい、生き生きしたからパワーやエネルギーを感じる。

#### ◎「その瞬間だけは童心に戻る」

「その瞬間だけは童心に戻る」という概念は、子どもだけが持っている純粋な考え方が感じられ、心が癒されることを意味する。『結構変わるよ。私も童心に戻るようなその瞬間だけはね。一緒に幸せを感じるのよ。子どもを見ると、純粋に気分がよくなるような。本当にキレイでしょう、その子どもの心は』などの語りにより生成される。小さい子どもから、その時期だけもっている純粋な考え方が感じられ、癒されるなどの感情を得られている。

#### ◎「‘頑張ろう’と思う」

「‘頑張ろう’と思う」の概念は、頑張って活動する子どもの姿を見て自分も‘頑張らないといけない’と思うことを意味し、『（学生たちと一緒に歌うと）違いますね。学生たちは上手だから、それを聞いて真似しようとするから。もっと力をもらっているんです。

学生でしょう。娘のみたいに（思う）けど、歌うときは違います。歌う時は、学生たちも頑張ってるのに、ちょっと上手に歌わなきゃって。家に帰ってからも練習したりね』

などの語りから生成される。高齢者は子ども・若者の若さから伝えられるパワーや雰囲気を感じているとともに、活動に集中して熱心にやっている姿をみて、もっと頑張りたいという刺激や動機付けになる。それは、積極的な参加を促すと考えられる。

#### ④【相手への思いにもとづく行為】

【相手への思いにもとづく行為】というカテゴリーは、かかわっている子ども・若者に親密感が形成され、その上、相手のために何かをする行動を意味する。「‘私たち’」という意識から優しく」「もっと自発的にとりくむ」「自負心の不足」という3つの概念により構成される。

##### ◎「‘私たち’という意識から優しく」

「‘私たち’という意識から優しく」という概念は、プログラムを通して子ども・若者に結束感を感じ、意識的に言動を優しくすることを意味する。『お互い心が合意して、一つのチームだから、挨拶もよくするし、家族みたいにね。ここにきて親しくなれなかったら、若い人は若い人で、私は私で、お互い無関係で過ごすのに、一緒に合唱団をするから、優しくなるよ。お互い理解するようになるし、一言でもっとあたたかくするし』などの語りから生成される。高齢者は、子ども・若者とかわるプログラムから相手に対し肯定的な感情を得られる。相手への肯定的な感情は、高齢者と子ども・若者との関係形成に影響を与える。表面的な関係から親密な関係へ発展していく。その過程のなかで高齢者は子ども・若者に対し、共同体感や結束感が生じ、それに基づき自分の行動を意識的に行うことのである。

##### ◎「もっと自発的にとりくむ」

「もっと自発的にとりくむ」という概念は、子どもの喜びを我が喜びととらえ、活動に積極的・能動的に参加することを意味する。『勉強について話したり、個人のこと少し話したり、本とか必要なものがあれば、買ってあげたりそうしてたんです』『ペアになった子どものために、私も頑張って当てないと駄目でしょう。賞品があるから。子どもはそういう好きだから』などの語りにより生成される。高齢者は、子どもの喜びを我が喜びととらえ、何かをしてあげたいという気持ちからプログラムに積極的に参加したり、子どもに必要なものを買ってあげたりするような能動的な行動がみられるようになる。

##### ◎「自負心の不足」

「自負心の不足」という概念は、自ら子ども・若者に対し何かを伝える、教える能力はないと決めつけることを意味する。上記の「もっと自発的にとりくむ」に対比する概念である。『(アドバイスや助言) そんな話は、まあ、短い時間だから、お互い気をつけるから、そんな深い話まではたくさんしてみなかったです(中略)(質問者: 特技の書道を教えることはできますか) まだ、教えるほどではないから、できません。しません。同世代ならいいけど、ちょっと無理です。どうしても子どもを教えることは』などの語りにより生成される。

【相手への思いにもとづく行為】では、他の類型で見られるような子ども・若者へのアドバイスや助言のような行為はみられなかった。高齢者の語りのように、高齢者の中は、子ども・若者に対し何かを伝える、教える行為は、専門的な人がやることで、自分にはそれほどの能力はないと決めつけていた。高齢者は、伝える、教える行動を高いレベルとしてとらえ

ているとともに、自分の能力を信じず、疑っているのである。高齢者の自負心の不足は、子ども・若者への積極的な行為を制限すると考えられる。

### 3) 意味段階

高齢者は、継続的・定期的な子ども・若者とのかかわるプログラムを通して行動段階のプロセスを繰り返し、これらの意味付けに至る。意味段階は【次世代との未来の物語】という単一カテゴリーであり、〈過去の自己評価〉〈豊かな感情の気づき〉〈共に希望を描く〉という3つのサブカテゴリーにより構成される。

〈過去の自己評価〉のサブカテゴリーは、前期高齢期を振り返り、肯定的にとらえることを意味する。〈過去の自己評価〉は同様の概念から生成されている。『その時、ここに後援でテレビも買ってあげたりしたよ。ここにバスが入ってきたことも。選挙するときに入ってきたんだ。10年ほどの前の話です。ここに引っ越してきてから22年経っています。福祉館を利用してなかっただけで、私は役場で婦人会に参加したりしてました』などの語りから生成される〈過去の自己評価〉は、子ども・若者に起因するよりは、前期高齢期を振り返り、健康維持や余暇活動、地域のボランティア活動などに精力に行ってきた過去の自分について肯定的にとらえているものである。

次に、〈豊かな感情の気づき〉のサブカテゴリーは、子ども・若者とのかかわるプログラムの参加から得られる満足感である。「親密な人間関係」「子どもの親世代とのかかわりへ」「達成感」「子ども・若者の生活環境を理解」「情緒的な結びつき」「自己有用感」という6つの概念から構成される。

#### ◎「親密な人間関係」

「親密な人間関係」の概念は、活動をするうちに挨拶だけの関係の人と親しい関係へ発展していくことを意味する。『それ以前には、顔だけ知っていた人も合唱団に参加してから、家族みたいに考えてより関心を持って親切になる。別に挨拶だけの関係だったけど、合唱団の活動をしながら、お互いの話をするようになって親しく過ごすようになった。契（韓国独特の講の一つ）をすると、（会員の間は）兄弟よりも親しくなるでしょう。それと同じように。職員（社会福祉士）も同じだ。ここにきて挨拶だけ交換した。担当者』などの語りから生成される。

#### ◎「子どもの親世代との交流へ」

「子どもの親世代との交流へ」の概念は、子どもを通してその父母と知り合い、交流が広がることを意味する。『お母さんとは、学生の幼い頃の話をしたり、大きくなったときはどうだったとか、話したりして。学生のお母さんはとても若いです。嫁、娘よりも甥っ子くらいですよ。また、結縁した学生たちは皆勉強が上手でしたよ。それで、お母さんが、この子が今度のテストで何位をしたとか話を聞いていると‘頭がいいんだ’とか思います。ここではね、正確には知らないけど、学生の親にも許可をもらってからやるみたいです。学校から推薦してくれるらしいです』などの語りから生成される。

高齢者は、プログラム参加を通して人間関係の変化を感じている。同世代の人やプログラム支援者と親しい関係に発展していく。挨拶を交換するだけの関係であったが、同じプロ

ラムに参加することで、話す機会が増え、親密な関係に進展したのである。同じプログラムに参加している所属感を共有し、より親しくなりやすいと考えられる。これは支援者との関係性においても同様にみられる。また、子ども・若者とのかかわりは、プログラムに参加している両世代に限っておらず、子どもの親へつながっている。子どもとその親が高齢者の自宅と一緒に訪問することや、地域社会で会って話すなど、子どもの親世代とのかかわりが生まれている。

#### ◎「達成感」

「達成感」という概念は、協働活動を通して何かを作り上げたという喜びであり、『(学生たちは) 私たちと同じように歌わず、高音をすとか、学生がきたら別に歌を歌います。私たちと一緒にすることもあります。発表会も出て、そこで上手だって、相当褒められた。‘私の住んでいた故郷’ という曲をそこのおじさんが歌ったよ。そうすると、ある人が泣き出したりしました。あそこの社会福祉館に行って披露しました。先日は大学に行って(披露を)しました。いくらここで練習しても、外で(発表会を)したら、いいです』などの語りから生成される。高齢者は目標のある活動に対し、発表会等の見せる場に立ち、若者と協力して披露することから達成感を感じる。この達成感は、共に作り上げたという喜びであり、プログラムに参加者たちとの結束を強化すると思われる。

#### ◎「子ども・若者の生活環境を理解」

「子ども・若者の生活環境を理解」の概念は、子ども・若者との交流から最近の子ども・若者の関心ことや学業のことなどについて知り理解することを意味する。『学校のこと。勉強するのって昔と違うでしょう。そんな話をしたり。この学生たちも結局はボランティアじゃないですか。こちらからは孫とお祖母さんの関係だけ。また、それが学業に反映されるらしいです。それで、ここだけでなく、他のところも行くみたいです』『我々は知らないことが多い。クイズをするとき、孫と住んでいるお祖母さんはよく当てるだろう。私たちは、孫と一緒に住んでないから分からないことばかり。また、最近丸い人形って何だっけ。私、そういうのも知らないのよ。ポロロ(キャラクター)とか私みたいな年代はそんなの分からない。子どもと(一緒に)すると、そんなものが出てきたりするから知っておくといいよね』などの語りにより生成される。高齢者は、普段の生活のなかでかかわりのない子ども・若者とのかかわりを通して、最近の子ども・若者の関心ことや文化、学業のことなど、置かれている環境について知り、子ども・若者のことを理解するようになる。とくに、高校生とかかわっている高齢者は、学生の参加動機には高齢者に優しい気持ちもある一方で、学業上、ボランティアの点数を求めて参加していることを理解している。子ども・若者の生活環境について理解しつつ、社会システムの変化を間接に感じる。

#### ◎「情緒的な結びつき」

「情緒的な結びつき」の概念は、かかわりを通して親しい関係になり、孫のように感じられ‘可愛い’‘愛らしい’と思うことや手をつなぐなどの親密な行動から感じる感情を意味する。『記憶に残っていることですか。2年目の学生2人は教会に通ってました。私も教会に通ってるし、その母親も教会に通ってるし。だからよく来てました。その学生たちと夕食

もよくしたし、上の子と一番親しくなりました。よく会って心が近くなったから記憶に残っています。ところが、ソウルの大学に進学したそうです。成績もよくて。(中略) (プログラムに参加してから) 楽しい時が多いです。一緒に遊びに出かけたり、一緒に手をつないで歩いたり、孫のようなそんな感じです』などの語りから生成される。

高齢者は、子ども・若者と親しい関係となり、孫のようにとらえ、愛らしいと思ったり、手をつなぐなどの愛情を表現する。このような感情は行為から、二人の間に情緒的に結びついている。また、情緒的な結びつきのなかで高齢者は、相手に受けられていると思い、自己存在感が得られると考えられる

### ◎「自己有用感」

「自己有用感」の概念は、子ども・若者に対し、祖父母のような無条件の愛情を伝えることは、子どもの人格発達に役に立ち、その一部を担っているという認識を意味する。『私が思うには、子どもに結構助けになると思う。大きくなって、お祖母さんが要る子どももし、いない子どももいるけど、いない子どもにはお祖母さんと、このような活動を通して、お祖母さんってこういうことなんだ。お祖母さんはこういう人なんだ。というのを感じるでしょう。お祖母さんの愛情ってこういうものなんだねというのを。みんな可愛がるから。そうしたのが全部人格教育でしょう』などの語りから生成される。

高齢者は子ども・若者に対し、こうした祖父母のような愛情を伝え、感じさせることは、子どもの人格発達に役立つと信じている。それは親や教育機関だけではなく、子どもと接する大人や、地域社会が伝えてあげるものである。そのなかで、高齢者は一部を担っていると考えている。子どもの健全な成長に高齢者としての役割があるという意識である。自己有用感が得られている。

最後、〈共に希望を描く〉というサブカテゴリーは、今後の生活や望む社会の様子に子ども・若者への意識が含まれていることを意味する。「今後の生き方を発見」「参加継続への意欲」「お互いに見守る関係を維持」「助け合いの意識を伝えたい」という4つの概念から構成される。

### ◎「今後の生き方を発見」

「今後の生き方を発見」の概念は、人生の希望や期待が無くなっている今の状況を受け入れ、残る人生は心の幸福を追求しながら生きたいという意欲であり、『歌を歌うと心が元気になるし、何も心配こともなくなって気分が良いのよ。だけど、今は年が高くて、すべて生きてきた。もうすべて生きてきたと思うと、希望がないね。前に進める希望がない。(質問者: 60代の時はどんな希望がありましたか?) これから生きていく希望。どうやって生きるかみたいな。しかし、今は、これからの希望が何もありません。年が高くて、年に比べては元気な方だ。いつも心は楽しい。もう今は、このように生活しているのが楽しいんだ』などの語りから生成される。高齢者は高齢期に入り、さらに年を取るにつれて人生への目標や希望が無くなっていると感じるが、こうした状況について喪失も感じながらも、残る人生は、前と異なって、心の幸福を求める生き方を見つけて受け入れている。

### ◎「参加継続への意欲」

「参加継続への意欲」の概念は、子ども・若者との親密な関係に基づいた高齢者本人の満足感が高くお互い良い影響を与えていると思うことから、続けて参加したいと思うことを意味する。『学生と？まあ、良いか悪いかよりは待ってますよ。孫と祖母に結んだでしょう。私は孫もなく、何もありません。だから人が恋しいですよ。（中略）ここ（マンション）に住んでいる間は継続しようと思ってます。それが私にも良いと思うし、学生にも良いことかなと思いますね』などの語りにより生成される。高齢者はプログラムへの継続的な参加の意思を持っているが、子ども・若者と親密な関係が形成され、次回のかかわりを期待し待つことや、こうしたかかわりが本人や相手に良い影響を与えていると思うことから、参加を維持したいと思っている。

#### ◎「お互いに見守る関係を維持」

「お互い見守る関係を維持」の概念は、プログラムの終了後でもその関係性は維持され、地域内のかかわったり、連絡をすることでお互い安穩無事であること願うという意味である。『（質問者：同じ地区だから会ったりしますか）そうです。偶然、（マンションの）上階に住んでいる子が私とペアだった。それでエレベーターで出会ったの。‘挨拶しないの？’って言ったら、にっこり笑ってて、照れくさくてね。女の子で、写真も撮ってあげたりします』などの語りから生成される。

高齢者と若者の親密な関係性は、プログラムの終了後でも維持され、高齢者は子どもの成長を見守ったり、若者は進学してからも続けて連絡をするような形で地域において自由交流として続けられている。高齢者は、子ども・若者がプログラムが終わっても自分を覚えてくれることや、見守ってくれることから、大事にされていると感じられると同時に、大切なご縁を繋いでくれた子ども・若者とかかわるプログラムに愛着を抱くと思われる。調査協力者らは4～5年も参加してきていることから、プログラムへの愛着も相当存在していると考えられる。

#### ◎「助け合いの意識を伝えたい」

「助け合いの意識を伝えたい」という概念は、子ども・若者も地域社会の構成員であり、人々はお互い助け合って生きていくことを伝えるのは地域社会の大人の役割であることを意味する。『外で会ったらすごく喜んでよ。同じ地区だから、幼稚園の子どもたちも。言わば、お互いに助け合っていくのよ。母の日のようなときには、幼稚園の子どもたちが来て、お花もつけてくれたり、キャンディでつくったネックレスもかけてくれたり。そうしたことがんなのどの また、院長とか（関係した）人々が気を配って老人を敬う姿じゃない。子どもたちが来て披露もしてくれるし、我々のために。だからありがたいんだ』などの語りから生成される。

高齢者は、子ども・若者も地域社会の構成員であり、お互い助け合って生きていくことが大事であるという意識を、今後子どもが生きていく地域のために、大人は伝えなければいけないと信じている。また、高齢者は、地域のひとりの大人として、助け合いの喜びをプログラムのなかで協力活動を通して伝えようとするのが考えられる。

表 4-8 類型Ⅳの概念一覧

段階	【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉	「概念」	定義	
感心	【次世代への関心】	〈内的欲求〉	「祖父母の役割の不在」	孫がいなかったり居ても別居しているため、祖父母としての役割を十分に果たしていない状況	
			「子どもへの好感」	普段ふれあいのない子どもに関心を持っているが、高齢者によっては交流を希望する子どもの年齢層がある	
			「母のように包み込む心」	小さい子どもをみると、暖かい目で見守ってあげたいという自然に出てくる思い	
	【子ども・若者との距離感】	〈子ども・若者のイメージ〉	「高齢者を見る若い世代の意識変化」	高齢者に対する敬老意識がますます希薄していること	
			「高齢者とかかわりたくない」	挨拶しても反応しないなど、高齢者とかかわりを避けるような若者の行動から感じる	
		〈日常でふれあう機会が少ない〉	「日常でふれあう機会が少ない」	近所に子どもが住んでいない、若しくは若者が住んでいても触れ合う機会がめったにないこと	
行動	【欲求充足の場】	〈欲求充足の場〉	「新しい学びへの欲求」	経験していない新しいことに挑戦したいという気持ち	
			「つながりへの欲求」	人々との交流の機会の少ない一人暮らしの高齢者は、地域内で孤立しがちであるが、社会福祉館の利用することで人々と交流し、情緒的な豊かさを感じる	
	【プログラムの内容】	〈プログラムの内容〉	「多様な活動」	交流プログラムは対話や物づくりのような静的な内容から野菜栽培や山登りのような動的な内容まで多様である	
			「かかわる方法」	個人対個人または集団対集団のような高齢者と子ども・若者を交わる手法	
			「訪問型交流の悩み」	高齢者のお宅に訪問する形は、学生側の意思によって交流が左右されることや、異性の子どもには気をつかうことなどの悩み	
	【肯定的な感情】	〈肯定的な感情〉	「寄り添うことにありがたい」	子ども・若者にとって高齢者とかかわりは、メリットが少ないと思うが、プログラムに参加することや優しく接してくれることについてありがたいと感じる	
			「若さから伝えてくる雰囲気」	子ども・若者と同じ空間にいただけで若々しい、生き生きした雰囲気が感じられる	
			「その瞬間だけは童心に戻る」	子どもだけがもっている純粋な考え方が感じられ、交流の間は悩みや苦勞を忘れて癒される	
			「『頑張ろう』と思う」	頑張っている学生の姿を見て頑張りたいという気持ちになる	
	【相手への思いにもとづく行為】	〈相手への思いにもとづく行為〉	「『私たち』という気持ちから優しく」	プログラムを通して接点のない子ども・若者と一つのチームになったことから言動をより優しくあたたくするようになった	
			「もっと自発的にとりくむ」	子どもの喜びを我が喜びととらえ、活動に積極的に参加したり、必要なものを買ってあげたりするなどの能動的な行動を行うこと	
			「自負心の不足」	子ども・若者に対し何かを伝える、教える行為は専門的な人がやることで、自分にはそれほどの能力はないと決めつけること	
	意味	【次世代との未来の物語】	〈過去の自己評価〉	「過去の自己評価」	前期高齢期を振り返り、健康維持や余暇活動、地域のボランティア活動に積極的に参加してきたことを肯定的にとらえている
			〈豊かな感情の気づき〉	「親密な人間関係」	挨拶だけの関係であったが、活動をするうちにその人が気になり、親しい関係に発展していくこと
				「子どもの親世代との交流へ」	交流を通して子どもの父母と知り合って特に母親と関係性を作ることに広がる
「達成感」				協働活動を通して何かを作り上げたという気分	
「子ども・若者の生活環境を理解」				子ども・若者との交流から最近の子ども・若者の関心事や学業のことなどについて知り理解する	
「情緒的な結びつき」				親しい関係になり、孫のように感じられ「可愛い」「愛らしい」と思うことや手をつなぐなどの親密な行動から感じる感情	
〈共に希望を描く〉			「自己有用感」	祖父母のような無条件の愛を経験する子どもは、子どもの人格発達に役立つと思い、一部を担っていると思う	
			「今後の生き方を発見」	年をとっていくにつれて人生の希望や期待が無くなっている現状を受け入れ、残る人生は心の幸福を追求したいと思うこと	
			「参加継続への意欲」	お互いに良い影響を与えていると思うことから、続けて参加したいと思ふ	
			「お互いに見守る関係を維持」	プログラムの終了後でも地域内で出会ってかかわったり、連絡をするなど子ども・若者との関係は続けられていること	
	「助け合いの意識を伝えたい」	子ども・若者も地域社会の構成員であり、お互い助け合って生きていくことを伝えるのは地域の大人の役割であること			

## 第5章 参加高齢者の生きがい感の数値化

第4章高齢者のインタビュー調査の概要と結果では、質的分析を行うことにより、高齢者が子ども・若者とのかかわりについてどのように感じており、最終の意味づけに至るまでのプロセスを明らかにした。しかし、各類型の違いや高齢者個人の差、男女の差等の点については明確に把握できないという限界から、本章では、より客観的な基準を用い、参加高齢者の生きがいについての検討を試みる。

### 第1節 参加高齢者の生きがい感の数値化の概要

#### 1. 調査目的

参加高齢者の生きがい感の数値化の目的は、類型や男女等による参加高齢者の生きがいへの影響を客観的に把握することである。

#### 2. 調査方法

調査目的を明らかにするために、関連尺度を用いて検討することとした。国内外においていくつかの生きがい尺度は見当たるが、本研究における「高齢者の生きがい」の定義、すなわち「次世代への関心や行動を持ち、共に生きていくことへの価値や志向」というジェネラティビティの視点が含まれている生きがい尺度は見当たらなかった。そのため、本調査で用いる尺度は、既存尺度の検討から独自の高齢者のジェネラティビティを含む生きがい感の尺度を作成することとした。

高齢者の「ジェネラティビティを含む生きがい感の尺度」を作成する際、「生きがい意識尺度（今井ら 2012）」と「短縮版 generativity の尺度（田淵ら 2012）」を参考とした。参考とした2つの尺度は、検証研究の蓄積からその信頼性と妥当性が認められており、また、本研究の第4章高齢者のインタビュー調査において質問項目を検討する際、参考としたものである。

調査の対象者は、第4章高齢者のインタビュー調査と同様に類型Ⅰの9名、類型Ⅱの5名、類型Ⅲの8名、類型Ⅳの4名、合計26名とし、高齢者のインタビュー調査で収集した生データを読みながら、採点基準に基づき実施した。採点基準の詳細については後述する。

なお、分析はEXCELの技術統計を活用した。

#### 3. 「ジェネラティビティを含む生きがい感の尺度」の作成

##### 1) 既存の関連尺度の検討

##### 《生きがい意識尺度（9）》

今井ら（2012）は、既存の標準化されている生きがい尺度は、生きがい感スケール（16項目）や生きがい対象尺度（24項目）等のように項目数が多いため、測定する際、簡便ではないことや、加齢に対する否定的な質問であることから、評価にあたって対象者に不快な思いをさせてしまう可能性があるということについて指摘した。生きがいを測定する簡便な尺

度の実用化のために、9項目に構成される「生きがい意識尺度(9)」を作成し、その信頼性と妥当性について検討した。

「生きがい意識尺度(9)」は、生きがいを感じている精神状態(生きがい意識)を測定するための9項目による自己記入式の質問紙である。生きがい意識尺度(9)の構成概念は、今井ら(2009)で示された生きがい概念の高次因子モデル<sup>16)</sup>に基づいている。生きがい意識とは、「現状の生活・人生に対する楽天的・肯定的感情や、未来への積極的・肯定的態度、社会との関係における自己存在の意味の肯定的認識から構成される意識」であると操作的に定義している。表5-1のように、高次因子モデルの一次因子に相当する3つの下位尺度により構成されている。下位尺度Ⅰ「生活・人生に対する楽天的・肯定的感情」は、項目①、④、⑦から構成される。下位尺度Ⅱ「未来への積極的・肯定的態度」は、項目②、⑤、⑧から構成される。下位尺度Ⅲ「自己存在の意味の肯定的認識」は、項目③、⑥、⑨から構成される。

「生きがい意識尺度(9)」の信頼性と妥当性の検討は、60歳以上の地域中高年者428名を対象に調査を実施し、全体項目(9)及び下位尺度(各3項目)のCronbachの $\alpha$ 係数による信頼性を検討し、妥当性については、生きがい意識尺度(9)と健康関連QOL尺度のなかで身体的健康度・精神的健康度との相関を検討する併存的妥当性、また、確認的因子分析による高次因子モデルの適合性を検討した。具体的に、得点分布は、総得点や下位尺度得点ともに分散していた。尺度の信頼性は、全体で $\alpha=0.87$ 、下位尺度ごとでは $\alpha=0.76\sim 0.82$ であり、総合点と健康関連QOL尺度の身体的健康との相関は無相関( $r_s=-0.05$ ,  $\rho=.33$ )、精神的健康度との相関は正の相関( $r_s=0.33$ ,  $\rho<.001$ )が示され併存的妥当性が確認された。また、確認的因子分析の結果、高次因子モデルの適合度はGFI=0.95で良好であり、因子的妥当性が確認された。

表5-1 生きがい意識尺度(9)

① 自分は幸せだと感じることが多い	(生活・人生への肯定)
② 何か新しいことを学んだり、始めたいと思う	(未来への積極的・肯定)
③ 自分は何か他人や社会のために役立っていると思う	(自己存在の意味の意識)
④ ところにゆとりがある	(生活・人生への肯定)
⑤ いろいろなものに興味がある	(未来への積極的・肯定)
⑥ 生活が豊かに充実している	(自己存在の意味の意識)
⑦ 自分の存在は、何かや、誰かのために必要だと思う	(生活・人生への肯定)
⑧ 自分の可能性を伸ばしたい	(未来への積極的・肯定)
⑨ 自分は誰かに影響を与えていると思う	(自己存在の意味の意識)

出所：今井忠則・長田久雄・西村芳真(2012: 433-438)「生きがい意識尺度(Ikigai-9)の信頼性と妥当性の検討」

### 《高齢者における短縮版 generativity 尺度》

第2章においてジェネラティヴィティの概念や関連研究について概観した。ジェネラティヴィティの研究領域において、McAdams and Aubin はジェネラティヴィティの検証研究にあたって大きな影響を与えている。代表的に、ジェネラティヴィティの構成要素として、「次世代の世話と責任」「コミュニティや隣人への貢献」「次世代のための知識や技能の伝達」「永く記憶に残る貢献・遺産」「創造性」を示し、これらに基づいた「Loyola Generativity Scale (以下 LGS)」の開発したことがあげられる (McAdams & Aubin 1992)。

日本においても丸島 (2005) や田渕ら (2012) を中心に McAdams らのジェネラティヴィティの概念や LGS に基づいてジェネラティヴィティの尺度について検討が行ってきた。

丸島 (2005) は、LGS を基に「日本語版ジェネラティヴィティ関心尺度」を作成し、その尺度内容の再検討を経て「改訂版ジェネラティヴィティ関心尺度」を開発したが、日本の文化的背景を含めるため質問項目を追加し項目数が多くなったことや、探索的因子分析の結果から McAdams らの提示した5つの因子が明確に分離されていないということが指摘されている (田渕ら 2012)。

そこで、田渕ら (2012: 2) は、日本で用いられているジェネラティヴィティ尺度の項目数が多く、項目表現が冗長であり、特に高齢者を対象とした研究での使用は困難であると指摘した上、日本におけるジェネラティヴィティ尺度の LGS からの乖離と、高齢者を対象とした尺度の不足という課題を解決するため、LGS の日本語訳を用いたジェネラティヴィティ尺度及びその短縮版を作成し、その妥当性と信頼性について検討した。田渕らは2つの調査を設定した。調査1では、高齢者向けの「短縮版 generativity 尺度」を作成し、調査2では、作成した尺度の信頼性と妥当性について検証した。具体的に、調査1は、McAdams らの日本語版の LGS (20項目) と外的基準に関する指標 (性別、年齢、ジェネラティヴィティ行動、感情的 well-being, 人生満足度) を用い、近畿圏内の生涯学習団体に所属する高齢者 556 名を対象に調査を実施し、5つの因子から1項目ずつ選択した5項目からなる短縮版を作成した上、その妥当性や信頼性について検討した。また、調査2では、作成した「短縮版 generativity 尺度 (表 5-2)」を用い、兵庫県但馬圏域に住む中高年者 798 名を対象に調査を実施し、尺度の妥当性を検討した。

表 5-2 短縮版 generativity (5)

① 私が死んでも、人は私のことを覚えていてくれるだろう
② 私が人のためにしてきたことは、後世にも残ると思う
③ 自分の経験や知識を人に伝えようとしている
④ 何かに向かって前進していると感じる
⑤ 無理のない範囲で、募金をしたい

出所：田渕恵・中川威・権藤恭之・小森昌彦 (2012:1-7) 「高齢者における短縮版 generativity 尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」

調査1と調査2の結果、LGSの日本語訳 20項目と短縮版の相関は0.85であり、両調査ともに年齢、ジェネラティヴィティの行動、感情的 well-being、人生満足度との有意な関連性が認められた。また、信頼性係数の推定値である $\alpha$ 係数は、調査1では0.66、調査2では0.68である。田淵ら（2012）研究から「短縮版 generativity 尺度」は、LGSの概念構造を含み、かつ信頼性・妥当性が確認されたことが示された。

以上、今井ら（2012）の「生きがい意識尺度」と田淵ら（2012）の「短縮版 generativity の尺度」の検討から、以下の3つが確認された。

第1に、両尺度ともに、先行研究においてその信頼性と妥当性が確認された。第2に、今井らによる「生きがい意識尺度」は、現在生活や人生への満足感のみならず、他人から得られる自己存在感の意味や認識、また、未来への積極的・肯定的な意識が含まれている点は、本研究における「生きがい」の定義と類似している。第3に、田淵らによる「短縮版 generativity 尺度」は、McAdams and Aubinによるジェネラティヴィティの概念に基づいており、それは本研究において高齢者の生きがいプロセスを検討する際、用いた概念と同様である。

これらのことから、本調査における「高齢者のジェネラティヴィティを含む生きがい尺度」を作成するにあたって今井ら（2012）の「生きがい意識尺度」と田淵ら（2012）の「短縮版 generativity の尺度」を参考とすることは、適切であり、高齢者のインタビュー調査結果と生きがい感の数値化の結果において整合性が担保されると判断した。

## 2) 高齢者のジェネラティヴィティを含む生きがい尺度

今井ら（2012）の「生きがい意識尺度」と田淵ら（2012）の「短縮版 generativity の尺度」を参考とし、本研究で用いる「高齢者のジェネラティヴィティを含む生きがい尺度」を作成した。表5-3に示す。尺度は全6項目に構成されている。

表5-3 ジェネラティヴィティを含む生きがい感の尺度(6)

質問項目	あてはまらない 0点	ややあてはまる 1点	とてもあてはまる 2点
① 自分は頑張ってきたと感じる			
② 子どもや若者に関心がある			
③ 子ども・若者に対する期待や楽しみをもっている			
④ 次世代のために、よりよい地域や社会になってほしい			
⑤ 子ども・若者とお互い影響を与えていると思う			
⑥ 子ども・若者に対し自分の経験や知識を伝えるなど、お祖母さんまたはお祖父さんのような役割がある			

筆者作成

質問項目の構成は、質問①は、今まで生きてきた生活や人生を肯定的な感情を意味する指標である。質問②，③，④は、子ども・若者を含む未来に対し積極的な姿勢や肯定的にとら

えることを意味する。また、質問⑤と⑥は、子ども・若者とのかかわりから得られる自己存在感の認識をあらわす。尺度の選択肢は、「当てはまらない」「やや当てはまる」「とても当てはまる」のように3つに構成している。配点基準は、高齢者の語りから質問内容が見えない場合は「0点」、前後の語りから推測できる場合は「1点」、語りから明確に見える場合は「2点」とした。得点の範囲は、0点から12点までである。高齢者のインタビュー調査で収集した生データを読みながら、採点基準に基づき実施した。

調査の対象者は、インタビュー調査と同様に類型Ⅰの9名、類型Ⅱの5名、類型Ⅲの8名、類型Ⅳの4名、合計26名である。分析方法は、EXCELの統計方法を活用した。

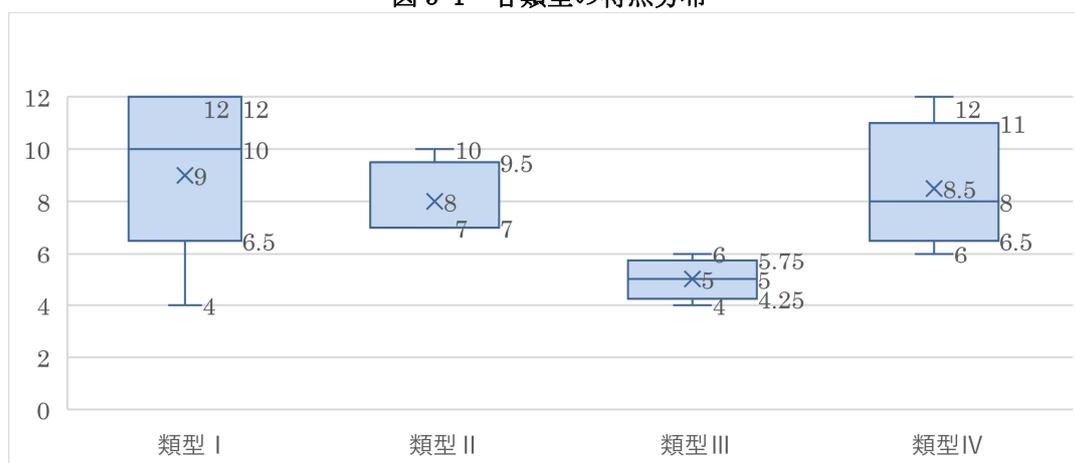
## 第2節 参加高齢者の生きがい感の結果

### 1. 各類型の得点分布

EXCELの技術統計の結果、各類型の類似点と相違点が示された。図5-1は類型別の得点分布を表したものである。縦軸は得点の範囲であり、横軸は各類型である。得点範囲は、0点から12点までであるが、実際の得点範囲は、最低4点から最大12点であった。全体平均は7.5であり、中央値は7である。

類型毎にみると、類型Ⅰは、最低4点から最大12点まででその範囲は分散している。また、平均値は9、中央値は10である。類型Ⅱは、最低7点から最大10点であり、平均値は8、中央値は7である。類型Ⅲは、最低4点から最大6点の得点範囲であり、平均値と中央値は同じく5である。類型Ⅳは、最低6点から最大12点であり、平均値は8.5、中央値は8である。また、図5-5のように、高得点が多くみられるのは類型Ⅰと類型Ⅳであり、得点の範囲が広がっている点が類似している。反面、類型Ⅱと類型Ⅳの得点の範囲は、集まっているが、とくに、類型Ⅲは、他の類型に比べ得点範囲や平均値等が著しく低いことが分かる。

図5-1 各類型の得点分布



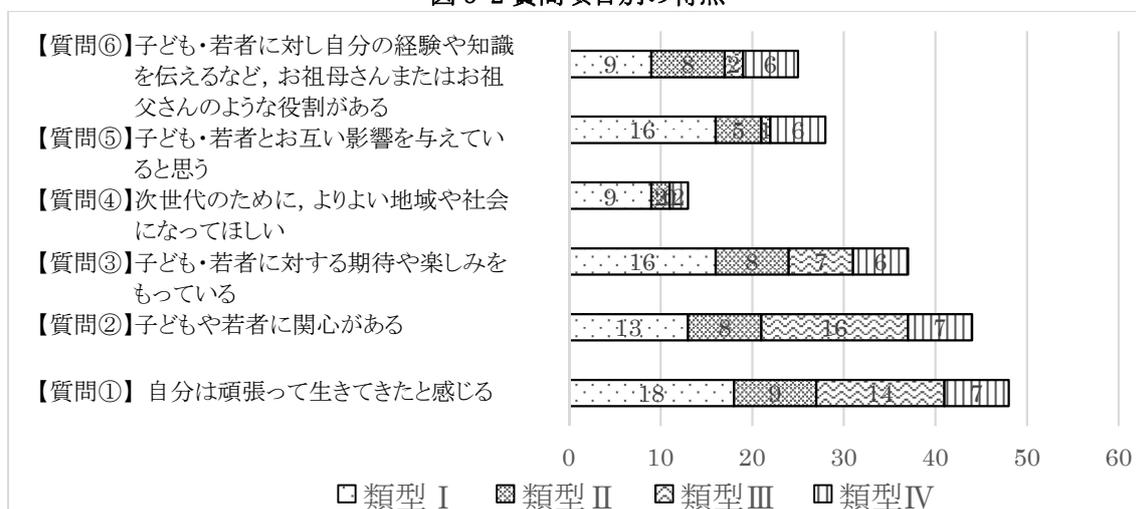
- \* 垂直方向に伸びるひげ線: 得点の範囲
- \* 箱: 得点の分布の傾向
- \* 箱の中の横線: 中央値
- \* 箱の中のX: 平均値

## 2. 質問項目別の得点

各類型の得点は、質問項目によって異なっている。図 5-2 は、質問項目毎に類型の得点をあらわしたものである。縦軸は下から質問項目①から質問項目⑥である。横軸は、各類型の得点であるが、一つの棒で積み上げている。それぞれ質問項目の得点範囲は 0 点から 52 点までである。

図 5-2 のように、質問項目別の得点順位をみると、質問①が最も得点が高く、次いで質問②、質問③、質問⑤、質問⑥、質問④という順となっている。質問①、質問②、質問③は、それぞれ大きな差はみられず、多くの高齢者が該当し得点を得ている。一方、質問④、質問⑤、質問⑥は、前の質問項目に比べ、得点が低い。とくに、質問④の場合、総得点が 13 点で最も低い数値であり、そのうち、類型Ⅲにおける得点はなかった。

図 5-2 質問項目別の得点



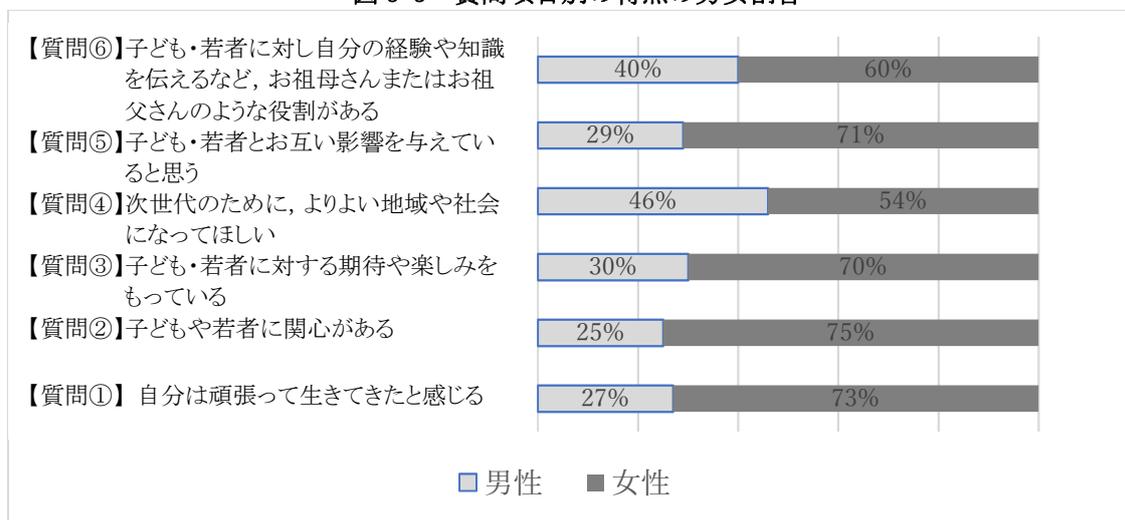
## 3. 男女による得点

調査対象者 26 名のうち、男性は 7 名 (27%)、女性は 19 名 (73%) である。男女による得点の差について検討した結果、全体平均 7.5 点に対し、男性の平均得点は 8.4 点、女性の平均得点は 7.1 点であった。全体の平均得点に比べ男性の平均得点は約 1 点程度高く、女性の平均得点は約 0.5 点程度低い。質問項目別の得点をみると、全体の質問項目別の得点順位が質問①、質問②、質問③、質問⑤、質問⑥、質問④であるのに対し、女性高齢者は同様の得点順位がみられている一方で、男性高齢者は、質問①、質問②、質問③、質問⑥、質問⑤、質問④であった。男性高齢者の質問項目別の得点順位は、女性高齢者と大きな違いはみられていないが、第 4 位と第 5 位の順序は入れ替えていることがみられている。

また、質問項目別の得点を構成する男女の割合を図 5-3 に示している。質問項目別の得点を 100 とし、男女の得点の割合を比較してみると、質問①、質問②、質問③、質問⑤では、男女構成の割合である約 3 対 7 に近い割合がみられているが、質問④では、男性による得点の割合が高く、女性は低いことがみられる。

これらの結果から、男性高齢者は、女性高齢者より子ども・若者とのかかわり活動において人生を先に歩んできた経験者として子ども・若者に何かを伝える役割があると認識しており、子ども・若者が暮らしていく地域や社会の発展を意識する傾向があると見て取れる。

図 5-3 質問項目別の得点の男女割合



#### 4. ジェネラティヴィティを含む参加高齢者の生きがい感

ジェネラティヴィティを含む高齢者の生きがい尺度を用い、参加高齢者の生きがい感を検討し、以下のような4点が明らかになった。

第1に、特定の類型だけが生きがい感の高得点を得られるものではない。類型Ⅰと類型Ⅳは高得点の該当者が多い一方で、高得点と最低点の幅も大きかった。類型Ⅰと類型Ⅳは、交流について支援者の仕掛けがあり、積極にかかわっている形である。多様な高齢者が参加しており、子ども・若者から得られる生きがい感も人それぞれであると思われるが、交流に対しての支援者のかかわりがある場合、生きがい感の高得点に至る可能性が高まる傾向があると考えられる。

第2に、子ども・若者との密な関係形成により高齢者の生きがい感の高得点を得られる。類型Ⅱの場合、支援者による積極的なかかわりはないが、全体的に高い生きがい感を示している。類型Ⅰ、類型Ⅱ、類型Ⅳをみると、高齢者と子ども・若者の間で親密な関係形成がみられ、高齢者は子ども・若者に対し、何らかの役割を持っていることが分かる。つまり、子ども・若者とのかかわりを通して高齢者の生きがい感に直接的な影響を与えているのは、高齢者の子どもの関係の質であると考えられる。

第3に、子ども・若者とのかかわりの中で、高齢者が自己存在感を認識することは、高齢者のジェネラティヴィティが発揮し、高い生きがい感を得られる。質問項目別の分析からみられるように、子ども・若者に関心があり、関わっている子ども・若者に期待や楽しみを持っているとしても、それが次世代のために、より良い社会を願う意識へつながっていないことが示された。高齢者は、子ども・若者とのかかわりが、高齢者自身とともに、関わってい

る子ども・若者にも肯定的な影響を与えていることを認識することで、子ども・若者に対し、自分ができることを行動しようとするし、何か役に立ちたいと、相手に対する何らかの役割を担う。つまり、子ども・若者から感じる高齢者の自己存在感である。質問④は質問⑤、質問⑥と正の関係がみられるように、次世代のために、より良い地域や社会になってほしいという意識に至るには、まず、子ども・若者との関わりの中で、高齢者の自己存在感が先に求められる。

第4に、男女による得点の差をみると、全体の平均得点に比較して男性の平均得点は少し高く、女性の平均得点は少し低い傾向がみられるが、男女による有意差がみられる結果は示されていない。類型によっては男性高齢者のいない類型があり、男性高齢者は類型Ⅰ（3名）と類型Ⅱ（4名）に所属しているため、ある類型の傾向が反映されている可能性があり得る。

### 第3節 子ども・若者とのかかわる活動と高齢者の生きがいの循環

高齢者が子ども・若者とのかかわりを通して得られる意味付けは、積極的な参加という形で次の活動に影響を与えていると想定される。積極的な参加を通じて子ども・若者とのかかわりから得られる生きがい感の強化・増進につながると考えられる。しかし、高齢者のインタビュー調査をみると、すべての高齢者が「子ども・若者とのかかわりを続けたい」と語っている。継続的な参加への意志も大事であるが、それだけを見て積極的な参加がみられるとは言い難い。したがって、第3節では、高齢者の意味付けのなかで、積極的な参加に導き、促進するものは何かについて検討する。検討方法としては、高齢者の意味付けの内容が豊富であり、生きがい感の尺度において高得点を獲得した類型ⅠとⅣの高齢者を中心に語りを検討し、共通するものを見出す。ただし、積極的な参加とは、子ども・若者とのかかわりの目的を理解した上、子ども・若者に与える影響を想定し、何らかの役割を持ち、自発的な行為を含む定期的な参加を意味する。

#### 1. 高得点した高齢者の特徴

高得点した高齢者の特徴を明らかにするため、低得点の高齢者に比較し、その相違点を検討する。高得点を獲得した高齢者は4名（類型Ⅰ：3名、類型Ⅳ：1名）であり、低得点を獲得した高齢者も4名（類型Ⅰ：1名、類型Ⅲ：3名）である。ただし、高得点とは12点満点のことであり、低得点とは4点を示す。

質問項目別における低得点の高齢者の特徴をみると、質問項目①、②、③において点数を獲得しており、質問項目④、⑤、⑥においては点数を獲得していないことがみられる。言い換えれば、6つの質問項目のなかで、前半においては該当しているが、後半には該当していないのである。これに比べ、高得点の高齢者は質問項目の後半においても獲得しているため、高得点が獲得できた。高得点をとるためには、後半の質問項目に該当するか否かが重要であるといえる。後半の質問内容は、どのような内容なのか。第1節において言及したように、質問①は、今まで生きてきた生活や人生を肯定的にとらえることの指標であり、質問②、③、

④は、未来に対し積極的な姿勢や肯定的に考えることを意味する項目である。また、質問⑤と⑥は、子ども・若者とのかかわりから感じられる自己存在感を意味する項目である。これらの質問項目が内包している意味を鑑みると、高得点の高齢者であれ、低得点高齢者であれ、すべての高齢者は、生きてきた人生や今の生活を肯定的にとらえており、子ども・若者への関心や期待、楽しみに向かっていることがみられる。一方、高得点の高齢者は、子ども・若者への関心を超え、今後、子ども・若者のためのよりよい地域や社会への希望を持っている。また、子ども・若者とのかかわりは、お互いに影響しており、子ども・若者とのかかわりから感じられる自己存在感の意味や認識を得ていると考えられる。

## 2. 語りからみられる積極的参加への意欲

高得点を獲得した高齢者4名に対し、質問項目④、⑤、⑥に該当した語りを再確認しながら、具体的な内容とその意味について検討する。語りの具体例は『斜体』で表記する。

まず、質問項目④は、「次世代のために、よりよい地域や社会になってほしい」という内容である。高齢者が思う次世代のための‘よりよい地域や社会’の意味について探りたい。

高齢者は、特に、地域において人間関係の希薄している状況について懸念している。

『近所挨拶しないこととかもあるが、僕も嫁さんが今(要介護)の状態になってから、近所付き合いにするようになったんであって、もし、元気だったら、必要じゃないと思う(中略)もっとそういう気持ちが今の若者には強いんですね。(中略)それね、いかなだよ。本当は』という語りのように、高齢者も近隣の手助けや見守りを求める当事者になってから、人々とのつながりの重要性や必要性について感じたということである。今日の社会は、人々のつながりに対し、その必要性を肌で感じる当事者や関連者ではないと、一般の人は関心を向けない傾向がある。しかし、そういう状況は、人の成長に正しい姿ではない。次世代が生活する地域や社会は、『ハンディキャップのある人を、もっと大事にしてやれるような世の中』を描くが、『上辺だけにやる』ことではなく、『自分の本当の気持ちで』向き合っているという気持ちが育てる地域や社会を願っていると考えられる。

次に、質問項目⑤は、「子ども・若者とお互いに影響を与えていると思う」という内容であるが、高齢者は、子どもからたくさん学べるがあると思っている。

『子どもから教えられること、たくさんあるでしょ。大人が思わないことを言ったりね』という語りのように、高齢者は、子どもを自身と平等な立場の一人の人間としてとられている。また、『若い人の居るだけで、違う話が出てくるでしょう。(中略)どんなことを考えるかなとね。聞きながら、(中略)イメージ的にわいてくる』のような語りからは、若者の話を聞いて、理解しようとする思いが込められている。

一方、高齢者は、自身から子ども・若者に与える影響もあると認識している。

『やっぱり社会人になって(中略)昔の時代の話とか、生の話だから参考になるかもね』  
『子どもたちに多くの助けになると思う。大きくなっても、そのお祖母さんのいる子どももいるし、ない子どももいると思うけど、ない子どもにはお祖母さんと、このような活動を通してお祖母さんってこういう人なんだということを感じるんじゃないかな』という語りの

ように、高齢者が認識している子ども・若者への影響とは、今までの人生の経験により伝えられるものである。社会生活や人間関係のような話は、子ども・若者が社会人になっても参考になると想定している。そして、祖父母との交流も少ない今の子どもたちに、祖父母の無条件的な愛が体験できることは、他者との関係形成や子どもの人格形成に役に立つと想定している。要するに、高齢者は、自身の子どもの頃の経験や社会生活、子育ての経験から、子ども・若者のその時期の特徴についてよく知っており、自分の行為が影響を与えていると認識している。この背景には、高齢者自身も子どもまたは若者の頃に祖父母や近所のお年寄りから聞いて気づいたり学んだことの記憶があると考えられる。

最後に、質問項目⑥は、「子ども・若者に対し自分の経験や知識を伝えるなど、お祖父さんまたはお祖母さんのような役割がある」という内容である。上記の質問項目⑤と関連している。質問項目⑤が子ども・若者への影響を認識することであれば、質問項目⑥は、その上、子ども・若者への役割を果たしているかという質問である。

『普通の人間としてのレベルアップを考えながらね。こういうことしたら子どもはそれに反応して、次にチャレンジできるとかのようなことを言ってあげるとか、経験してあげるとかね』という語りのように、高齢者は、高齢者とのかかわりは、子どもに心の成長や社会性の発達に学校とは異なる役割があると考えている。子どもの成長を応援しながら、サポートする支持者のような役割である。また、高齢者は、『(若い人は)大体、身内の言うことって誰も聞かない。他人に言われて初めて分かるみたい。 (中略) うるさいなと思われても、言ってあげないとあかんって。それもね、我々の役目の一つかなと思ってるね』『(学生の反応は) うんーとしてるけど、 (中略) 他人からボンと言われて、あ、本当はそういうもんだと』感じだろうと思っている。高齢者は、若者にみられる自己中心的な考え方に刺激を与えている。身内ではない、年の離れた他人からの話は、身内と違って感情の動揺が大きいがないが、若者に、冷静になってもう一度考えさせる機会になると信じている。

以上のように、質問項目④、⑤、⑥における高得点を獲得した高齢者4名の具体的な語りとその意味について検討してみた。高齢者は、子ども・若者とのかかわりが、高齢者と子ども・若者にお互いに影響を与えると想定しており、かかわりの中で、高齢者自身の行為は、子ども・若者に影響していると信じ、子ども・若者の発達時期に必要とされるものを与えようとする。そして子ども・若者が暮らしていく地域や社会は、人に優しいより良いところになればと望んでいる。高齢者は、子ども・若者とのかかわりを通して、参加者らは相互に影響を与えるという本来の活動の意味を明確に認識している。その上、高齢者自身が子ども・若者にできることを言葉や行動を通して伝えている。それが子ども・若者とのかかわりでの役割であると認識している。このように認識していることは、子ども・若者とのかかわりに最も積極的に参加する動機づけになり、子ども・若者に対する高齢者の役割を強化すると考えられる。

## 第6章 支援者インタビュー調査の概要と結果

### 第1節 調査概要

#### 1. 調査目的

本章では、研究課題2の高齢者と子ども・若者のかかわる地域活動を行う機関や団体の支援者を対象にインタビュー調査を実施し、子ども・若者のかかわる地域活動が高齢者にもたらす生きがいを促すために、どのような役割を果たしているかについて明らかにする。類型Ⅰ～Ⅳに該当する高齢者と子ども・若者のかかわる地域活動を行う機関や団体の支援者がどのような交流の場を設定しており、どのようなかかわり支援が行われているかについて検討する。

#### 2. 調査対象

各類型におけるインタビュー調査の対象者は、機関の設立からかかわってきた支援者に調査協力を依頼した。類型Ⅰ～類型Ⅲにおいてはそれぞれの支援者1名ずつ合計3名を対象に半構造化インタビューを実施した。インタビューは平均90分程度で1-2回を行った。質問内容は、①事業の始まった経緯、②事業と関連した制度や施策の捉え方、③かかわりによる効果や影響、④かかわりを促すための工夫、⑤運営課題等とした。調査は2018年3月～7月中に実施した。ただし、類型Ⅳにおける韓国社会福祉館の世代間交流プログラムの支援者へのインタビュー調査は、筆者の修士論文「韓国における高齢者の世代間交流がサクセスフル・エイジングに与える影響に関する研究」で収集された調査データを用いる。調査は2014年7月に実施したものである。

また、予め各類型の調査協力支援者の基本情報を表6-1に示す。ほとんどの支援者は30代から40代の男性であり、社会福祉士として専門的な援助技術が行使できる者である。類型Ⅲの支援者のみ、年齢が高く民生委員として地域の福祉活動に長年携わってきた経歴を持っている。

表6-1 調査協力支援者の基本情報

区分	性別	年代	立ち位置	
A (類型Ⅰ)	男	30代	社会福祉士	
B (類型Ⅱ)	女	40代	社会福祉士	
C (類型Ⅲ)	男	70代	民生委員, 福祉活動	
D (類型Ⅳ)	a	男	40代	社会福祉士
	b	男	40代	社会福祉士
	c	男	30代	社会福祉士

#### 3. 分析方法

支援者へのインタビュー調査の分析方法は、質的分析法を参考に行った。支援者へのインタビュー調査は、高齢者と子ども・若者のかかわる地域活動を行う機関や団体の支援者が、

子ども・若者のかかわりを通した高齢者の生きがいを促すためにどのような役割を果たしているかについて明らかにすることを目的としている。そのため、調査分析から高齢者と子ども・若者が交流する場の設定や活動内の支援者によるかかわり支援に含まれている意味を把握することが求められる。そこで、質的分析法が適切であると判断した。分析手順は、録音データを文字化し、文字化したデータ（生データ）からコード化、カテゴリー化、再文脈化という順である。

#### 4. 倫理的配慮

日本福祉大学大学院の倫理ガイドライン（改定版）に沿って倫理的配慮を行った。調査対象者に対して、研究の目的・方法及び調査への協力について「インタビュー調査へのご協力のお願い」、「インタビュー調査の概要と内容」という文書を用い説明した。

インタビュー調査への概要と内容については、①予定するインタビュー時間、②調査協力は対象者の自由意思によるものであり、いつでも協力を中止・撤回できること、③話したくない内容は話さなくてもよいこと、④インタビューは録音すること、⑤インタビュー内容は説明した研究目的以外には使用しないこと、⑥個人の特定を防ぐため対象者はIDで表記・管理すること、以上6点を説明した。

## 第2節 類型Ⅰの支援者のかかわり支援

### 1. 抽出された5つのカテゴリー

質的分析により、類型Ⅰの支援者のカテゴリー表を作成した(表6-2)。**【立ち上げの経緯】****【共生型の居場所づくり】****【地域の大学生と連携した地域課題の取り組み】****【夕食会への取り組み】****【直面している課題】**という5つのカテゴリーが抽出された。以下は各カテゴリーを構成するサブカテゴリーとその内容について記述する。

### 2. 各カテゴリー

#### 1) 【立ち上げの経緯】

**【立ち上げの経緯】**のカテゴリーは〈活動の原点〉〈地域の土壌再生への必要性〉〈行政の後押し〉というサブカテゴリーにより構成される。支援者は、大学時代から子どもの社会教育に興味があり、卒業後、地域における子どもの社会教育を広げたいという〈活動の原点〉になるものがある。地域における子どもの居場所の活動に取り組んでいるうちに、地域自体のエネルギーが弱いことや、人々の居場所が少ないという地域課題について気づく。また、地域を支える既存の担い手は高齢化していく一方で、新しい担い手は見つからないという悪循環とともに、地域が抱えている様々な問題の複雑化について実感し、〈地域の土壌再生への必要性〉を認識する。当時、市では地域住民間のつながり構築という先駆的な共生型への働きかけが行われ、〈行政の後押し〉によりAの立ち上げに至った。

#### 2) 【共生型の居場所づくり】

**【共生型の居場所づくり】**のカテゴリーは、〈基本方針〉〈居場所という意味の曖昧さ〉〈地域特徴を活用〉〈環境や雰囲気づくり〉というサブカテゴリーにより構成される。

地域住民の誰でも利用可能な共生型の居場所をつくるために、まず、人が交わる場をつくることを〈基本方針〉とした。しかし、一般の住民に対して‘居場所づくり’という言葉は分かりづらく、〈居場所という意味の曖昧さ〉が存在していた。また、この地域は昔から地域自体の行事や活動が多く住民間の結束力が強い上に、外部から入りにくいという特徴がある。現在の地域住民は高齢化し、若い人も少ないため、昔のような地域の結束力は低下しているが、地域特徴は残っている。支援者は、こうした地域特徴を理解し、自ら地域に入り込み、地域住民になって地域住民の一人として居場所づくりに働きかけた。まず、人が交わる場の〈環境や雰囲気づくり〉に努めた。一人でも気楽に来られるようにカウンター席を設置したり、若い住民の中でスタッフを採用し、気軽い話が通じるようなところに工夫した。

#### 3) 【地域の大学生と連携した地域課題の取り組み】

**【地域の大学生と連携した地域課題の取り組み】**のカテゴリーは、〈資源・ニーズ調査実施〉〈調査結果に基づく事業展開〉というサブカテゴリーにより構成される。

支援者は、地域の持っている資源や住民のニーズを把握するためには、地域調査が必要であることを認識していた。地元の大学の学生から地域活動に参加したいという依頼を受け、大学生とともに地域の資源・ニーズ調査を実施する。調査は大学生らが主体となり、地域住民の協力を得て1年かけて実施し分析を行った。その後、〈調査結果に基づく事業展開〉を

行っている。地域の資源と住民のニーズに応じて色々な角度から少しずつ活動を広げている。例えば、地域に理髪店が多く、そこに高齢の住民がよく集まることに着目し、理髪店を拠点とした見守りネットワークを構築した。また、高齢者と大学生をつなぐ幾つかの活動に取り組んでいる。具体的に、家を持っている一人暮らしの高齢者と大学生を結び、一緒に暮らす世代シェアのモデル事業を実施することや、大学生が高齢者にスマートフォンの使い方を教える活動などである。地域カフェの一角を子育ての親子に開放し、赤ちゃんスペースも提供している。

#### 4) 【夕食会への取り組み】

【夕食会への取り組み】の категорияは〈きっかけ〉〈目的〉〈参加者〉〈運営方法〉というサブカテゴリーにより構成される。夕食会を考えた〈きっかけ〉は「夜一人で寂しい」という既存の取り組みでは疎外される高齢者や人たちの声であった。夕食会は、住民同士と一緒に食事を通してつながることを目的とし、〈参加者〉は高齢者から子どもまで誰でも参加できる多世代食事会とした。約20名程度が参加している。夕食会の〈運営方法〉は、食事は地元のお弁当屋から提供してもらい、Aではご飯、味噌汁、飲み物だけを用意する。支援者は、事前準備として参加希望者に連絡を入れることから高齢者と大学生が交流できるように座席配置や配席表の作成、食事後30分程度のレクリエーションを準備する。食事の支度や後の片づけは参加者皆で一緒に行う。夕食会が終わった後、支援者や参加した学生とともに振り返り会を行う。

#### 5) 【直面している課題】

【直面している課題】の категорияは〈大学生との連携の難しさ〉〈財政面の厳しさ〉〈安定的な雇用の確立〉というサブカテゴリーにより構成される。支援者は地域の大学の学生と連携した取り組みについて、学生のエネルギーは強いが、受け入れる側の地域の力は弱まり縮小しているため、学生のエネルギーが地域の中でうまくいかず、続かないという〈大学生との連携の難しさ〉について実感している。また、Aは、市の委託により財政面では安定的に運営してきたが、委託終了後、現在は家賃と最低限の人件費程度の補助へと変更されたため、〈財政面の厳しさ〉に直面している。一方、支援者は、地域においてAが継続するためには、かかわっているスタッフの〈安定的な雇用の確立〉が重要であると認識している。そのため、現在の活動を仕事化し、若い人材が職業として勤められるようにモデル化することが今後の課題であると認識している。

表 6-2 類型 I の支援者のカテゴリー

【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉	「コード」
立ち上げの経緯	活動の原点	・地域で子どもの社会教育を広めたい
	地域の土壌再生への必要性	・前身活動から地域のエネルギーの弱体化や居場所の少なさという地域課題 ・担い手の高齢化と新しい担い手がないという悪循環の上、さらに地域問題の複雑化
	行政の後押し	・市の先駆的な共生型への働きかけ
共生型の居場所づくり	基本方針	・人が交わる場を作ることを基本とする
	居場所という意味の曖昧さ	・一般の住民に対して‘居場所づくり’とは分かりづらい
	地域特徴を活用	・元々結束力が強く外部から入りにくい地域 ・昔から福祉など必要なことに先駆的に取り組んできた ・(支援者は) この地域に引っ越しし住民になって、一緒に居場所づくりをやり始めた
	環境や雰囲気づくり	・一人でも来られるようにカウンター席も設置した ・スタッフは地元の住民で、話が気軽に通じるし、よく聞いてくれる人が常にいる
地域の大学生と連携した地域課題の取り組み	資源・ニーズ調査を実施	・地域の資源と住民のニーズの調査の必要性 ・地域の大学生から地域活動を希望する声
	調査結果に基づく事業展開	・ニーズに合わせて色んな角度から少しずつ展開 ・地域資源(理髪店)を活用し見守りネットワークを構築 ・赤ちゃんスペースを開設 ・世代シェアも試験実施 ・学生プロジェクトでアプリを作り、地域情報の見える化を実施
夕食会への取り組み	きっかけ	・地域住民の声から夕食会を実施 ・既存の取り組みでは疎外される人たち
	目的	・住民同士と一緒に食事を通してつながることが目的
	参加者	・高齢者から子どもまで参加できる多世代食事会 ・1回20人程度の人が参加
	運営方法	・地元のお弁当屋から食事を提供してもらい、施設ではご飯、味噌汁、飲み物だけを用意する ・一回参加費は一人当たり600円 ・事前準備として参加希望者に連絡、配席表作成、ネームカード作成、食事後のゲームや話し合いのテーマを準備 ・食事準備や食事後の片付けは皆で一緒にする ・終了後、支援者や学生等の振り返り会
直面している課題	大学生との連携の難しさ	・学生のエネルギーは強いが、受け入れる地域は縮小している ・地域の力が高まらないと学生のエネルギーは一時として留まり、うまくいかない
	財政面の厳しさ	・3年間の委託終了後、現在は家賃と最低限の人件費程度の補助へと変わった ・活動を拡大するための予算が足りない
	安定的な雇用の確立	・今の活動を仕事化し、若い人材が職業として勤められるようにモデル化すること

### 第3節 類型Ⅱの支援者のかかわり支援

#### 1. 抽出された4つのカテゴリー

質的分析によりB（類型Ⅱ）の支援者のカテゴリー表を作成した（表6-3）。【立ち上げの経緯】【地域共生施設の役割】【主体的活動を行うフリースペース】【抱えている課題】という4つのカテゴリーが抽出された。以下は各カテゴリーを構成するサブカテゴリーとその内容について記述する。

#### 2. 各カテゴリー

##### 1) 【施設の立ち上げ】

【施設の立ち上げ】は〈地域住民の意見の反映〉〈既存サービスへの問題意識〉〈地域共生社会の捉え方〉というサブカテゴリーから構成される。B（類型Ⅱ）は、設立する前から、地域住民との意見会を開き、どのような形にするかについて地域住民と一緒に考えてきた過程がある。その結果、Bの設立にあたって地域住民が自由に使用できる空間等の〈地域住民の意見が反映〉された。また、支援者は、既存の多くの福祉施設の場合、サービス対象別に分かれており、逆に多様な人と人のつながりを妨げているという〈既存サービスへの問題意識〉を持っていた。国による地域共生社会という地域の方向性が公表されてから、地域における共生社会を実現するため、行政による補助金等が設定された。一部の他の施設や福祉現場からは、地域や住民に丸投げにすぎないという批判もあるなかで、Bの支援者は、地域共生社会について、地域住民である当事者こそこの地域をどうするか、どのようにつくっていくかについて一番関心が高い。そして、行政から補助を受けられることは地域を見直しでできる再チャンスであるにとらえていた。

##### 2) 【地域共生施設の役割】

【地域共生施設の役割】は〈地域の人と人をつなげる〉〈安心感のある居場所〉〈地域の主体であることを認識させる〉というサブカテゴリーにより構成される。地域共生施設は、地域住民のニーズが反映され立ち上がった所である。多くの利用者は、人とのつながりや小活動を求めている。Bは、地域カフェやフリースペース等の運営し、〈地域の人と人をつなげる〉役割を担っている。Bを利用する高齢者や子ども・若者にとって、いつも行ける所、ずっと居られる所、行ったら誰かは居る所のような〈安心感のある居場所〉を重視している。また、地域住民の一人ひとりに地域で暮らしている主体者であることを気づかせ、その主体性が発揮できるように支援することが支援者の重要な役割であると認識している。

##### 3) 【主体的活動を行うフリースペース】

【主体的活動を行うフリースペース】は〈開設のきっかけ〉〈目的〉〈支援者のかかわり〉〈見えてきた効果〉というサブカテゴリーから構成される。支援者は、共生地域づくりを目指すものの、具体的な方法については分からなかったため、地域の実態を把握し、課題に取り組むこととした。高齢者、子育て、障害者といった対象者別のサロンは存在するものの、皆が一緒にするサロンは少ない現状や、サービスをする側とされる側で二分化していた問題意識から、あえて自由なフリースペースを構想した。フリースペースの〈目的〉は、高齢

者、子ども・若者、障害者といった地域住民が自由に使えるようにすることである。フリースペースの運営において〈支援者のかかわり〉は、利用者が主体的に楽しめるように補助的な支援を行うことである。その背景には、当事者の主体性を大事にするBの理念が背景にある。そのため、フリースペースを利用している高齢者と子どもをつなげるような支援者による意図的な活動は行わない。しかし、利用者の意見を受け入れ、実現できるように支える。支援者は利用者のニーズに合わせた受け皿を用意し、それを支える立場ということである。

フリースペースでは、高齢者と子どものかかわりをよく見かける。支援者は、高齢者と子どもの交流から〔高齢者〕と〔子ども〕それぞれに感じられる効果がある。まず、〔高齢者〕は、自分の特技ややりたいことを子どもと一緒にいることを、楽しく受け入れて子どもを相手にしていた。また、祖父母のような気持ちで子どものことを気にかけて見守っていた。一方、〔子ども〕は 多様な年齢や人とふれあったりかかわることから、高齢者や障害者などと一緒にいることについて‘当たり前’と思う意識を自然に学び、子どもの経験値が広がり、小さい社会が経験できると感じている。

#### 4) 【抱えている課題】

【抱えている課題】は〈地域への拡大〉というサブカテゴリーから構成される。支援者は、Bのような所を地域へ拡大することを課題として認識している。地域の中で地域共生施設を拡大していくためには、行政や住民に対し、地域共生施設の機能やその効果について効果的に発信することが求められると考えている。特に、Bが地域住民の居場所であることや、地域住民のつながりの拠点であることを明らかにすることが支援者の役割であると認識している。

表 6-3 類型Ⅱの支援者のカテゴリー

【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉	「コード」	
立ち上げの経緯	地域住民の意見の反映	<ul style="list-style-type: none"> <li>・立ち上がる前から、地域住民と意見会を開き、どのような所で作り上げるかを考えてきた過程がある</li> </ul>	
	既存サービスへの問題意識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・既存の対象別のサービスは人と人のつながりを妨げている</li> </ul>	
	地域共生社会の捉え方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・行政の共生社会の取り組みは、地域を見直しできる再チャンス</li> <li>・地域のことについて地域住民である当事者が一番関心の高い</li> </ul>	
地域共生施設の役割	地域の人と人をつなげる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多くの利用者は人としゃべりたいと思っている</li> <li>・人とのつながりを求めている</li> </ul>	
	安心感のある居場所	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いつもいける場所、ずっといられる場所、行ったら誰かはいる場所として安心感を与える</li> </ul>	
	地域の主体であることを認識させる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢者や子ども、障害者が地域で暮らしている主体者であることを感じさせる、証明することがもう一つの役割</li> </ul>	
主体的活動を行うフリースペース	開設のきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域で対象別のサロンは多いが、一緒にするサロンは少ない</li> <li>・する側とされる側に分けられず一緒にする所を目指した</li> </ul>	
	目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢者、子ども、障害者、地域住民など皆の自由活動を可能にする</li> </ul>	
	支援者のかかわり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・職人主義ではなく本人主義の活動</li> <li>・意図的なプログラムはしない</li> <li>・利用者が主体的に楽しめるように補助的な支援</li> <li>・利用者のニーズに合わせた受け皿を用意し、本人がやりたいことを自由に行われるように支える</li> <li>・利用者の意見は何でも受け止める</li> </ul>	
	見えてきた効果	[高齢者]	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お祖父さんのような気持ちで楽しそうに相手にし、見守っている</li> <li>・自分のやりたいことをしにくるし、笑って帰る</li> </ul>
		[子ども]	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普段、同じスペースで見ること、子どもの経験値が拡大する。自然として実体験して学んでいく</li> </ul>
抱えている課題	地域への拡大	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の中でBのような所を増やしていきたい</li> <li>・行政や地域住民に対し、地域住民の居場所とつながりの拠点になっていることを発信しなければいけない</li> </ul>	

## 第4節 類型Ⅲの支援者のかかわり支援

### 1. 抽出された5つのカテゴリー

分析によりC(類型Ⅲ)の支援者のカテゴリー表を作成した(表6-4)。「立ち上げの経緯」「共生型つながり交流の具体的な運営」「幼児と高齢者のかかわり」「地域の高校生とのかかわり」「抱えている課題」という5つのカテゴリーが抽出された。以下は各カテゴリーを構成するサブカテゴリーとその内容について記述する。

### 2. 各カテゴリー

#### 1) 【立ち上げの経緯】

【立ち上げの経緯】は〈社協の地域活動計画〉〈共生型つながり交流の具現化〉というサブカテゴリーから構成される。支援者は、2014年頃、地域の社会福祉協議会の地域活動計画の委員として関わっていた。当時、地域活動計画の4つの柱のなかで、「つながり交流」を担当し、複数の委員とともに数多くの議論を重ね、「共生型」というつながり交流の方向性が決められた。地域活動計画が完成された後、地域のなかで〈共生型つながり交流の具現化〉に取り組むこととなった。共生型つながり交流は、既存の高齢者サロンと子育てサロンが同じ空間でできるようにする形に構想し、適切な場所を探した。地域の空き古民家が見つかり、その場所を活用することとなった。こうした経緯から高齢者サロンと子育てサロンを同じ場所で共に開催する共生型サロンが行われるようになった。

#### 2) 【共生型つながり交流の具体的な運営】

【共生型つながり交流の具体的な運営】は〈3つの大原則〉〈運営会議の開催〉〈財政の確保〉というサブカテゴリーから構成される。Cの運営にあたって、具体的な運営方針がある。共生型つながりという目的に沿って「第一、来ている人は拒否せず迎えること、第二、この場に来ている人々はお互い持ちつ持たれつの関係であること、第三、みんなが主役として参加すること」である。また、毎月1回は、社協の職員を含めた支援者の運営会議を開催する。そこで詳細なプログラムや季節イベントなどを企画する。共生型つながり交流が実施される日には、活動終了後、高齢者サロンや子育てサロンの支援者らが振り返り会を行い、当日参加者の様子や反応、改善する点などについて話し合う。また、Cは、社協から一部の運営費の補助を受けており、参加者からは茶菓代や保険代として少額の参加費をもらい、運営の〈財政の確保〉を行っている。

#### 3) 【幼児と高齢者のかかわり】

【幼児と高齢者のかかわり】は〈目的〉〈交流内容〉〈感じられる効果〉というサブカテゴリーから構成される。高齢者サロンは週2回、子育てサロンは週5回行われている。そのため、共生型つながり交流が行われるのは、高齢者サロンが開催される時である。高齢者と子育ての親子が一緒に過ごすことでお互いの存在を身近く感じ、見慣れることを〈目的〉として、空間と時間を共有する場面を設定した。具体的に、昼食前に皆が集まって体操をすることや、同じ空間で食事をとること、または季節のイベントのような特別プログラムの開催は一緒に行うなどの〈交流内容〉である。支援者は、高齢者と子育ての親子のかかわりから、

両世代に対し〈感じられる効果〉がある。まず、小さい子どもからは、高齢者を見ても怖がっていないことを感じている。また、高齢者にとって、乳児期の子どもはひ孫や孫のような年齢差であるため、見るだけで可愛がっている。それをみた子どもの母親は、自分の子どもが愛されていると感じ、喜ばれていることが感じられる。世代を超えて一緒にいるだけで感じられる雰囲気があり、それを両世代が自然に体感している。かかわっているすべての人に肯定的な気持ちが生じていると認識している。

#### 4) 【地域の高校生とのかかわり】

【地域の高校生とのかかわり】は〈きっかけ〉〈目的〉〈交流内容〉というサブカテゴリーから構成される。支援者は、長年地元の民生委員として活動していた。当時、地域の高齢者と子どもの食事会を開催したが、高齢者が子どもとのかかわって活気が出てくることを感じた。その経験が〈きっかけ〉となり、地域の高校生とのかかわりを企画するようになった。地域の高校生とのかかわりの〈目的〉は、高齢者に多様な世代とのつながりの機会を提供するとともに、学生には、今後高齢者を相手とする職業に就く場合、練習の場として活用してもらうためであった。高校生との〈交流内容〉は、主に夏休みの期間中に行われているが、既存の高齢者サロンのスケジュールに高校生と一緒に参加する形である。

#### 5) 【抱えている課題】

【抱えている課題】は〈現実上の制限〉〈身のまわりの楽しさに集中する後期高齢者の傾向〉〈学校との連携の難しさ〉〈障害者・児とのかかわりの難しさ〉というサブカテゴリーから構成される。

共生型つながり交流は、本来は、誰でも参加しつながるという構想から始まったものであるが、実際では、開催日や時間の制限が生じ、一部の世代のみの参加できるという〈現実上の制限〉を抱えている。また、支援者は、今までの共生型つながり交流を進めてきた経験値から80-90代の後期高齢者の共通点について気づいている。子どもの頃、戦争中で貧しい経験が多かった場合、高齢になって身のまわりの楽しさだけに集中する傾向がみられることである。この世代は、障害者と健常者を区分する世代でもあり、社会貢献や地域発展という意識は乏しいと感じていた。

一方、高校生とのかかわりについては、〈学校との連携の難しさ〉を感じている。外部の福祉施設との連携に前例がある学校の場合は、校長先生や担当先生が変わってもスムーズに進められるが、これから学校と連携し交流を始めようとする学校は、校長先生や担当先生の考え方により理解や協力が得られない場合もある。また、地域の障害者・児とのかかわりも図っているが、高齢者と障害者・児がお互いに興味を持っておらず、〈障害者・児とのかかわりの難しさ〉を感じている。

表 6-4 類型Ⅲの支援者のカテゴリー

【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉	「コード」
立ち上げの経緯	社協の地域活動計画	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域活動計画の委員として参加し、地域の‘つながり交流’を担当した</li> <li>・多くの議論を重ね、共生型という方向性を決定</li> </ul>
	共生型つながり交流の具現化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢者サロンと子育てサロンが一緒にできる場所を選定</li> <li>・地域の空き古民家を活用する</li> <li>・運営スタッフはボランティアを中心とする</li> </ul>
共生型つながり交流の具体的な運営	3つの大原則	<ul style="list-style-type: none"> <li>・来るもの拒まず、持ちつ持たれつ、みんなが主役</li> </ul>
	運営会議の開催	<ul style="list-style-type: none"> <li>・運営を担当するボランティアと社協の支援者が集まり月1の運営会議を実施し、主なプログラムなどを決める</li> </ul>
	財政の確保	<ul style="list-style-type: none"> <li>・独立に財政を確保するのは難しい</li> <li>・社協から一部の運営費を受ける</li> <li>・少額の参加費を設定</li> </ul>
幼児と高齢者のかかわり	目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一緒に過ごすことでお互いの存在が身近く感じ慣れる</li> </ul>
	交流内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昼食前にみんなで体操を行う</li> <li>・高齢者や子どもなど皆同じ空間に集まり食事をする</li> <li>・季節イベントなどを一緒に行う</li> </ul>
	感じられる効果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちは高齢者をみても怖がらない</li> <li>・高齢者は幼児を孫・ひ孫のように感じ、可愛がるし、それをみた幼児の母親は、自分の子どもが愛されていると感じ喜んでいる</li> <li>・乳児の母親は色んな高齢者を見て、自分の親を見る目も暖かくなると思われる</li> <li>・世代を超えてお互い一緒にいるだけで感じられる雰囲気を感じ体感する</li> </ul>
地域の高校生とのかかわり	きっかけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢者は子どもとかかると活気が出ることを実感した</li> <li>・民生委員の経験から地域の学生との交流を企画</li> </ul>
	目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生には、今後高齢者に接する職業に就く場合、練習の場として活用</li> </ul>
	交流内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の高校と連携し、夏休みの間、高齢者とかわる時間を設定</li> <li>・話の相手やゲームなど、既存のプログラムを一緒にする</li> </ul>
抱えている課題	現実上の制限	<ul style="list-style-type: none"> <li>・誰でもつながっていこうという発想だが、週2回、午後3時半までという実施制限から誰でも来られる状況ではない</li> </ul>
	身のまわりの楽しさに集中する後期高齢者の傾向	<ul style="list-style-type: none"> <li>・経験値から80-90代の高齢者は、子どもの頃、戦争中で貧しい経験も多く子ども時代を楽しく過ごせなかった</li> <li>・社会貢献や地域発展という意識は乏しい</li> <li>・障害者と健常者を区分する世代</li> </ul>
	学校との連携の難しさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前例がある場合はスムーズに進められるが、交流を始めるときには、校長先生や支援者の考え方によって変わる</li> </ul>
	障害者・児とのかかわりの難しさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・障害者・児の参加も図っているが、うまくいかず、壁を感じる</li> <li>・どのようにかわっていけば良いかわからない</li> </ul>

## 第5節 類型Ⅳの支援者のかかわり支援

### 1. 抽出された4つのカテゴリー

分析によりD（類型Ⅳ）施設の支援者のカテゴリー表を作成した（表6-5）。【立ち上げの経緯】【プログラムの企画及び運営】【見えてくる効果】【直面している課題】という4つのカテゴリーが抽出された。以下は各カテゴリーを構成するサブカテゴリーとその内容について記述する。

### 2. 各カテゴリー

#### 1) 【立ち上げの経緯】

【立ち上げの経緯】は〈地域的特徴〉〈利用者のニーズ〉〈世代間にとりまく状況へ問題意識〉という3つのサブカテゴリーから構成される。社会福祉館における世代間交流プログラムは、「高齢者が多い」「地域に敬老堂と乳幼児教育機関が多数存在」「幼児と一緒にする事業に好意的」な雰囲気等の〈地域的特徴〉と、「独居高齢者の情緒的支援の必要性」「毎年お正月のイベントからお互いの期待」の向上、「文化活動の接近性の欠如」という〈利用者のニーズ〉に加え、「今後、世代間の距離感は深刻化」「世代間の両極化」「意思疎通機会のない地域社会」のような支援者の〈世代間にとりまく状況へ問題意識〉によって、世代間交流プログラムが立ち上げられている。

#### 2) 【プログラムの企画及び運営】

【プログラムの企画及び運営】は〈目的〉〈重視する観点〉〈交流を促すための具体的な仕掛け〉という3つのサブカテゴリーから構成される。まず、世代間交流プログラムの目的は、単一ではなく、複数の目的が存在している。「家族のような情緒的な支援を図る」「高齢者の孤独感の減少」「元気な老後を奨励」といった高齢者に対する目的とともに、世代間交流「事業の活性化」や「高齢者と幼児の調和を通してお互い共同体意識を図り、幸せな地域を創り出す」こと、「文化活動を地域住民が参加し創り上げ、他の地域の住民と共有」することがあげられている。

#### 3) 【見えてくる効果】

【見えてくる効果】は、同様の単一のサブカテゴリーにより構成される。支援者は、プログラムを運営しながら、高齢者への変化を感じている。すべてのプログラムにおいて高齢者は元気になっていた。高齢者と高校生の結縁関係を通してかかわりを図ったところでは、学生の親までつながるようになり、家族のような関係から高齢者の孤独感が軽減されていると評価した。また、普段、地域において高齢者と子どもの両世代がふれあう機会は少なかったが、定期的なプログラムを通じた高齢者と子どものかかわりから、子どもと高齢者が協力し、調和していくような様子が見られた。そして、同じプログラムに参加している意識から、所属感が向上し、皆で協力し、つくりあげたという気持ちから達成感がみられる。支援者は、効果をより客観的に評価するため、プログラムの企画段階から評価方法について設定していた。簡単なアンケート調査や感想会、社会福祉実践でよく使われている満足尺度等を用い、高齢者への効果を確認していた。

#### 4) 【直面している課題】

【直面している課題】は〈若い世代の募集〉〈財政確保の困難〉〈評価方法〉〈参加対象者間の関係形成〉という4つのサブカテゴリーから構成される。プログラムの参加者募集において、特に、高校生や大学生などの〈若い世代の募集〉に困難している。一方、幼児の場合は、地域の教育機関と連携して行うため、募集への困難はみられない。また、プログラムを維持するため、安定的な〈財政確保の困難〉を抱えている。世代間交流プログラムは、最初から自主事業か、あるいは、契約支援金が終了し自主事業へ転換し、運営している。自主事業であるため、他の事業に比較し、豊かではなく、予算に従ってプログラムの活動内容や規模に影響されていた。さらに、プログラムの〈評価方法〉に対し、自体的評価は行っているが、より「適切な評価尺度の不在」や「支援者の交替」で、継続的・「客観的検証ができない」という課題を抱えている。一方、〈参加対象者間の関係形成〉が直面している課題としてあげられたが、3か所のなかでも、とくにCにおいて「高齢者と大学生の関係形成」を課題としてあげられていた。

表 6-5 類型Ⅳの支援者のカテゴリー

【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉	「コード」(事例 ID)
立ち上げの経緯	地域の特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・低所得層と中所得層との違和感 (a)</li> <li>・高齢者が多い (a)</li> <li>・敬老堂と乳幼児教育機関が多数存在 (b)</li> <li>・幼児と一緒にする事業に好意的 (b)</li> <li>・経済面で困難な高齢者が多い (c)</li> </ul>
	利用者のニーズ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・独居高齢者の情緒的支援の必要性 (a)</li> <li>・毎年お正月のイベントからお互いの期待感が高まった (b)</li> <li>・文化活動の接近性が欠如 (c)</li> </ul>
	世代間にとりまく状況への問題意識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後、世代間の距離感深刻化 (a)</li> <li>・世代間の両極化 (b)</li> <li>・意思疎通機会のない地域社会 (b)</li> </ul>
プログラムの企画及び運営	目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家族のような交流活動から情緒的な支援を図る (a)</li> <li>・家族のような役割、孤独感の減少 (a)</li> <li>・事業の活性化 (a)</li> <li>・元気な老後を奨励 (b)</li> <li>・高齢者と幼児の調和を通してお互い共同体意識を図り、幸せな地域を創り出す (b)</li> <li>・文化活動を地域住民が参加し創り上げ、他の地域の住民と共有 (c)</li> </ul>
	重視する観点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・予防的、情緒面を重視 (a)</li> <li>・世代間の意思疎通機会が重要 (a)</li> <li>・地域の特徴を活用し、利用者のニーズに対応したい (b)</li> <li>・文化活動に重点 (c)</li> <li>・世代を区分せず、組織のなかで受け入れることによる意思疎通 (c)</li> </ul>
	交流を促すための具体的な仕掛け	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最初、縁組式を行う (a)</li> <li>・活動の例を提示、高齢者と高校生が話あって決めるように誘導 (a)</li> <li>・参加者全員が一緒にする全体活動 (a)</li> <li>・高齢者と幼児と一緒に地域の掃除をすることを提案 (b)</li> <li>・関係形成を意図したプログラム実施 (b)</li> <li>・共に楽しく活動できるプログラム選定 (b)</li> <li>・途中、世代間の理解を求めるプログラムを実施 (c)</li> </ul>
見えてくる効果	見えてくる効果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生と学生の親までつながり、3世代の家族のような情緒的な交流から高齢者の孤独感の軽減 (a)</li> <li>・元気な高齢者 (b)</li> <li>・地域における子どもと高齢者の調和 (b)</li> <li>・所属感や達成感の向上 (c)</li> </ul>
直面している課題	若い世代の募集	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校生募集 (a)</li> <li>・大学生募集 (c)</li> </ul>
	財政確保の困難	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自主事業+協力機関の後援金 (a) (b)</li> <li>・社会福祉協働募金会の支援 (3年間約 80 万円) (c)</li> <li>・2014 年から自主事業に転向 (年間約 10 万円の予算) (c)</li> <li>・支援終了後の予算 (c)</li> </ul>
	評価方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・適切な評価尺度がない (a)</li> <li>・高齢者の中でも情緒支援介入の軽重が分かりにくい (a)</li> <li>・支援者交替や適切な評価方法がないため、客観的検証ができない (b)</li> </ul>
	参加対象者間の関係形成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢者と大学生の関係形成 (c)</li> </ul>

## 第7章 高齢者の生きがいと支援者のかかわり支援の関係

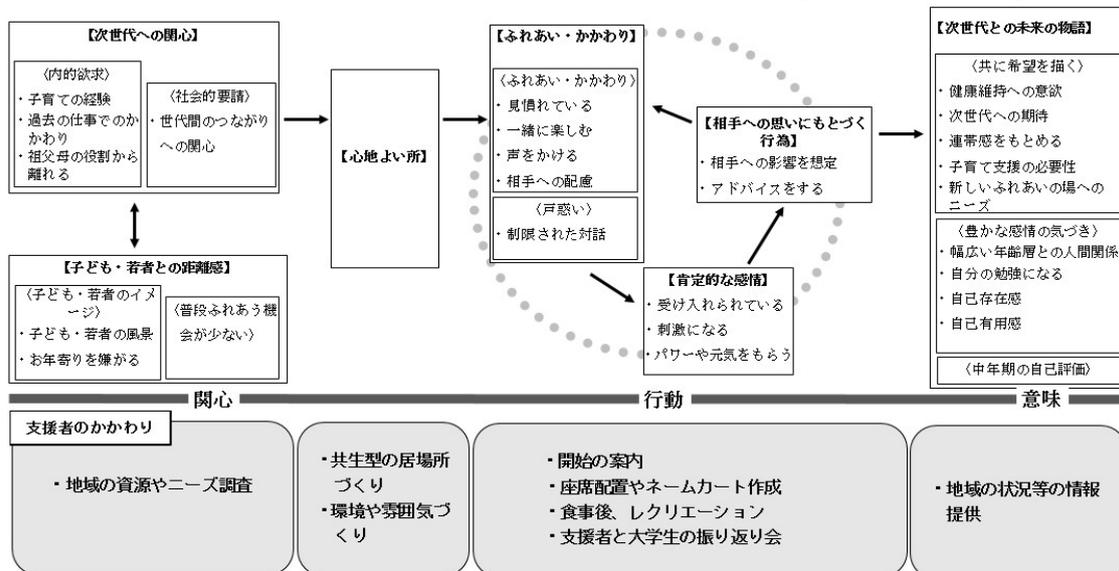
第7章では、第4章高齢者インタビュー調査と第6章支援者インタビュー調査から示された結果に基づき、子ども・若者とのかかわりによる高齢者の生きがいと支援者のかかわり支援との関係について検討することが求められる。なぜならば、支援者によるかかわり支援によってかかわりの内容やかかわり方は異なっているが、それは活動のなかで、高齢者と子ども・若者との相互作用や相互関係性に影響を与え、最終的には子ども・若者とのかかわりから得られる高齢者の生きがいに影響を及ぼすと考えられるからである。

子ども・若者とのかかわりによる高齢者の生きがいと支援者のかかわり支援との関係を明らかにするため、類型毎に示された関心—行動—意味という高齢者の生きがいプロセスに、支援者はどのようなかかわり支援を行っているかを照らし合わせながら検討してみる。

### 第1節 類型Ⅰの高齢者の生きがいプロセスと支援者のかかわり支援

子ども・若者とのかかわりによる高齢者の生きがいと支援者のかかわり支援との関係を明らかにするため、高齢者の生きがいプロセスでの関心—行動—意味という段階毎に、行われている支援者によるかかわり支援を検討し、その内容を図7-1に示している。図の上部は、第4章の類型Ⅰの高齢者インタビュー調査分析から作成された結果図であり、下部は、第6章の類型Ⅰの支援者インタビュー調査の分析表をもとに該当するところを抜粋し作成したものである。

図7-1 類型Ⅰの高齢者の生きがいプロセスに関連した支援者のかかわり支援



まず、関心段階において、高齢者は、子ども・若者に対して内面からの関心や距離感を持っているが、こうした高齢者の内面的な感情について支援者は把握しているのか、または、把握するためにどのような取り組みを行っているかを検討した。支援者の調査結果からは、

高齢者の持つ子ども・若者への関心や距離感のような感情を把握しているような表現はみられていない。しかし、支援者は、高齢者を含む地域住民のニーズや地域資源を把握するため、地域調査を実施していた。特に、ニーズを把握するために利用者との普段の会話に心かけている。また、A（類型Ⅰ）で展開される全ての事業やプログラムは、利用者の希望から展開されてきているものである。高齢者と子ども・若者のふれあいやかかわりが始まった経緯も同様である。つまり、支援者は地域の資源やニーズ調査を通じて、高齢者が子ども・若者とのふれあいやかかわりに好感を持って希望していることは把握しているが、高齢者が持っている次世代への関心や距離感を構成する諸要素についてまでは把握されていないことがみてとれる。

次に、高齢者の子ども・若者への関心を行動へつなぐものとして、「心地よい所」が存在する。高齢者は、そこを経由してふれあいやかかわりに参加している。支援者は、高齢者に、どのような場を提供したいと考え、何を取り組んでいるのか。Aは、立ち上がる時から地域のつながりを目指し、共生型居場所づくりを主な事業として取り組んできた。しかし、当初は、地域住民から居場所づくりという活動について理解を得ることは難しかったため、支援者自らが地域に移住し、同じ地域住民になって試行錯誤をしながら、共に努力してきた経緯がある。特に、居場所としての環境や雰囲気づくりを重視して男性高齢者の一人でも来られるようにカウンター席を設置したり、コミュニケーションの上手な若い住民をスタッフとして採用し、訪問する方々にふれあえるように心かけている。このように、一人の高齢者でも気軽に訪問し、心地よく利用してもらうために、空間的・心理的な安定感の提供に心かけていた結果、高齢者は「心地よい」居場所として感じるようになったと考えられる。

類型Ⅰの高齢者と子ども・若者のふれあいやかかわりは、地域住民の希望から始まったものである。高齢者と大学生などが参加する夕食会の他、子育ての場である赤ちゃんスペースはその代表的なものである。行動段階において、高齢者は、赤ちゃんスペースの開催で小さい子どもやその親とふれあい、夕食会の参加では大学生とかかわっている。子ども・若者と接する多様な機会が得られているのである。支援者は、夕食会において高齢者と大学生を交えるためにどのような支援を取り組んでいるのか。

夕食会は高齢者と大学生、支援者を含め平均20人程度が参加しているが、支援者は、開催当日の午前中に、参加予定の高齢者に連絡し、忘れず参加できるよう開始案内をする。一方、大学生には、当日開催時間より早めに来てもらい、参加高齢者の身体的な特徴、例えば、ある高齢者は右の耳が遠いことなどを伝え、高齢者への配慮を促すとともに、かかわりに妨げると予想される要因に関して対応する。また、事前準備として座席配置や参加者のネームカードを作成する。座席配置は、高齢者と大学生が交代に座って話せる環境を意図的に設定した仕掛けである。指定された座席で一緒に食事をしながら、高齢者は隣に座っている大学生に声をかけて様々な話を交わす。食事後は、2名または4名のグループをつくり、簡単なゲームやテーマを決めて話し合うなど、レクリエーションを行う。レクリエーションは、高齢者と大学生がお互い自分の意見を交換・調整し、協力する内容である。こうしたかかわり支援は、高齢者と大学生の間に、活発な相互作用が起こり、そのなかで楽しさと親近感を感じ

じさせる。高齢者は、大学生と楽しい時間を過ごして大学生とのかかわりに肯定的な感情を得る。さらに、継続的に参加している高齢者は、大学生に役に立ちたいと思いから、会話のなかで大学生の悩みに対して祖父母のような立場から励ましたり、経験上のアドバイスを行う。このような行動には、かかわっている相手への影響を想定した上、自発的に行う行為である。夕食会の終了後は、支援者と参加大学生で振り返りを行う。大学生の参加感想やかかわった高齢者の反応、改善点などについて意見を交換する。

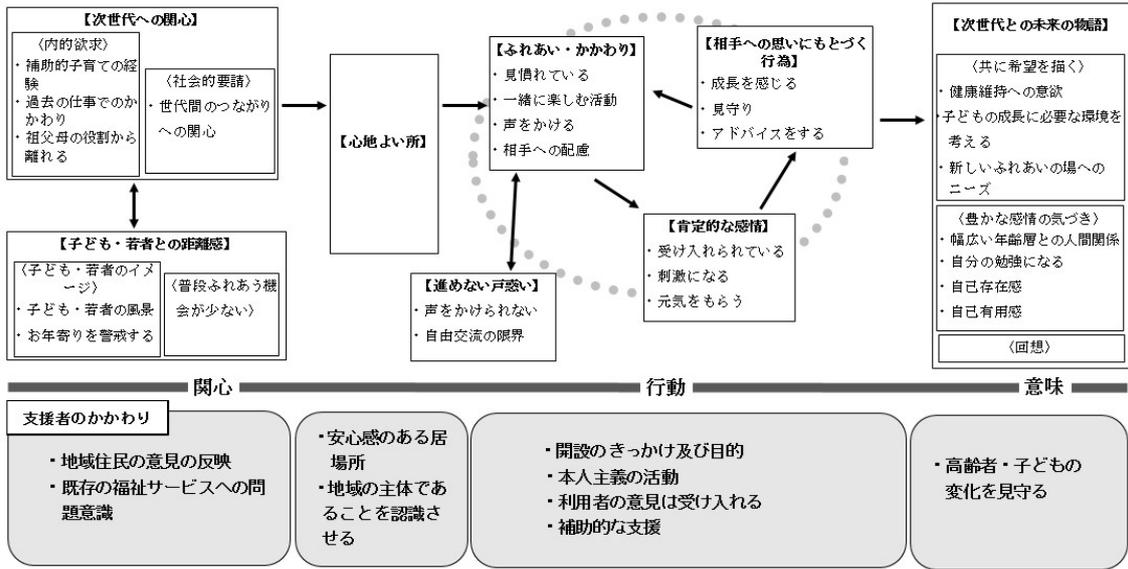
上記のように、行動段階におけるふれあい・かかわりを通じて、高齢者は多様な意味づけに至っている。意味段階における支援者のかかわり支援について、支援者のインタビュー調査結果からは、該当する内容はみられていないが、高齢者のインタビューから、次のような意味のある内容が見出された。『先も店長に聞いたんだけど、〇〇のところだね、〇〇団地があるでしょう。あそこの人たちもやっぱり子育てにいいところ、こういうところがほしいわけよ。あそこは公団だからなかなか、そういうあれはないよね』の語りのように、高齢者は、地域における子育て支援の必要性について認識しているが、その背景には、高齢者自身の過去の経験や赤ちゃんスペースでの子育て中の親子とのふれあいに加えて、不足している地域の子育て支援の現状への理解が含まれている。支援者は、高齢者に地域状況などの情報を提供し、理解や共感を求めていることがみてとれる。支援者による地域の子育てに関する情報提供は、高齢者が、子育て支援の必要性について漠然とした思いではなく、身近なこととして捉えるように影響していると考えられる。

## 第2節 類型Ⅱの高齢者の生きがいプロセスと支援者のかかわり支援

類型Ⅱにおいても同様に、子ども・若者とのかかわりによる高齢者の生きがいと支援者のかかわり支援との関係を明らかにするため、高齢者の生きがいプロセスでの関心－行動－意味という段階毎に、行われている支援者によるかかわり支援を検討し、その内容を図7-2に示している。図の上部は、第4章の類型Ⅱの高齢者インタビュー調査分析から作成された結果図であり、下部は、第6章の類型Ⅱの支援者インタビュー調査の分析表をもとに該当するところを取り上げたものである。

関心段階における高齢者は、子ども・若者に対する関心とともに、心理的な距離感を感じている。こうした高齢者の内面的な感情について支援者は把握しているのか、または、把握するためにどのような取り組みを行っているかについて検討してみると、子ども・若者に対し、高齢者の持っている諸感情を把握しているような支援者の語りは見当たらなかった。しかし、支援者は、B(類型Ⅱ)の立ち上げのときから「地域住民の誰でも自由に使える所が欲しい」という高齢者の含む地域住民の意見を反映し、フリースペースをつくったのである。また、従来の福祉サービスにおける高齢者や子ども、障害児・者のような対象別に分けた縦割り体系こそ、人と人の自由なつながりを妨げていると実感し、高齢者や子どもなどの多様な人々がふれあい、かかわることを重要視していることがみられる。

図 7-2 類型Ⅱの高齢者の生きがいプロセスに関連した支援者のかかわり支援



次に、高齢者の持っている子ども・若者への関心が行動として移行する局面において「心地よい所」が存在する。支援者は、高齢者にBを心地良い所として感じさせるためにどのようなことを取り組んでいるのか。支援者は、高齢者に心理的な安心感を与えるために、この場は誰もがいつでも行ける所、ずっと居られる所、一人で行っても会話できる誰かは居るということを重視し、訪問する高齢者と会話することを何より大事にしている。とりわけ、ここでは、半強制的に参加しなければいけないプログラムのようなものは提供していない。好きな活動を自由にできるような環境を提供している。このように、自分らしく居られることも高齢者にとっては、心地よく感じられる要因になっていると考えられる。

高齢者と子どもがふれあい、かかわるところはフリースペースという所である。フリースペースの開設のきっかけ及び目的は、上記で述べたように、既存の福祉サービスでは、地域において皆が一緒に集まる場は少ないことや、する側・される側のように二分化していることを問題として認識していることから、高齢者や子どもを含む地域住民が、自由に集まって活動できる場の提供を目指したのである。また、Bは、当事者の本人主義が機関の大事な考え方の一つであることから、Bの設立の段階から意見会や工事状況の報告会なども開き、地域住民との疎通を大事にしていた。このような考え方は、フリースペースの運営においても適用されている。支援者の方から高齢者と子どもをつなげる意図的なプログラムは実施していないが、交流したいという利用者の希望や意見があれば、積極的に受け入れ、実現できるように努める。活動に対し主体的に楽しめるように、支援者は補助的な支援を行う。しかし、高齢者と子どものかかわりにおいて、相互作用や相互関係性を促進するような支援者による意図的なかかわり支援は行っていないため、高齢者と子どものかかわりに成立するまでのきっかけづくりや、継続しにくいという限界もみられる。

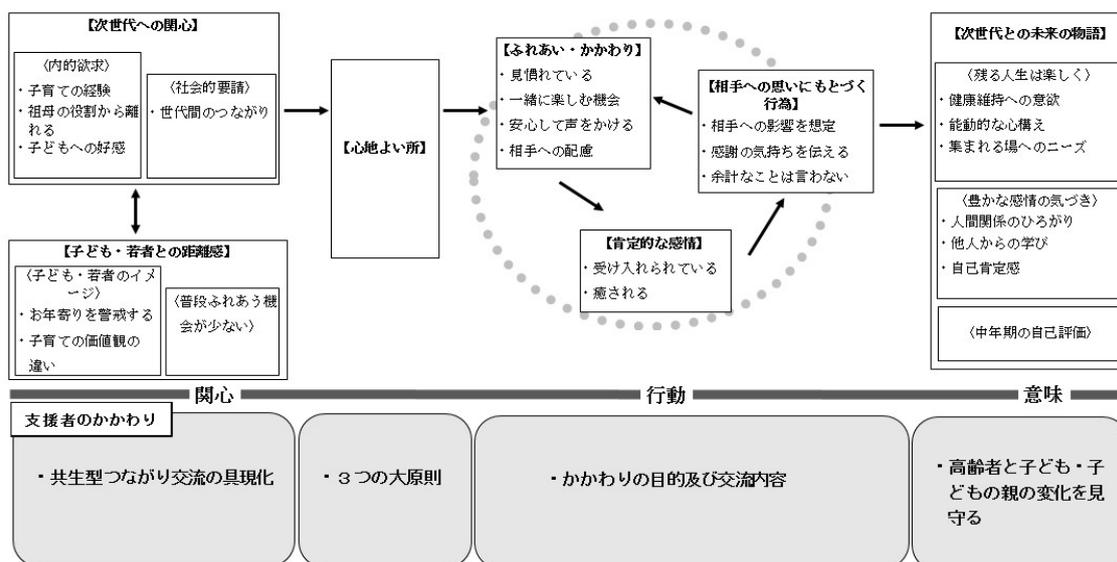
こうした行動段階におけるふれあい・かかわりを通じて高齢者は多様な意味づけに至る。

意味段階において支援者はどのような支援を行っているのか。支援者は、フリースペースでの高齢者と子どものかかわりを見守って高齢者の表情や行動の変化について感じている。また、高齢者と子どもの中に心の架け橋のような役割を行っている。例えば、欠席した高齢者に子どもが心配していたことを伝えることなど、高齢者や子どもが直接に表現していない、または表現できない感情を代わりに伝えている。支援者から子どもの気持ちを聞いた高齢者は、子どもから大事にされていると感じ、子どもとのかかわりによる意味付けに影響を与えたと考えられる。

### 第3節 類型Ⅲの高齢者の生きがいプロセスと支援者のかかわり支援

類型Ⅲにおける子ども・若者とのかかわりによる高齢者の生きがいと支援者のかかわり支援との関係を明らかにするため、高齢者の生きがいプロセスでの関心－行動－意味という段階毎に、どのような支援者のかかわり支援が行われているのかについて検討し、その内容を図7-3に示す。図の上部は、第4章の類型Ⅲの高齢者インタビュー調査分析から作成された結果図であり、下部は、第6章の類型Ⅲの支援者インタビュー調査の分析表をもとに該当するところを取り上げたものである。

図7-3 類型Ⅲの高齢者の生きがいプロセスに関連した支援者のかかわり支援



関心段階における高齢者は、次世代に対する関心がある一方で、子ども・若者に対する心理的な距離感を持っている。支援者の語りからは、こうした高齢者の感情を把握しているような内容は見当たらないが、地域における人々のつながりが不足していることや、高齢者と子ども・若者がふれあう機会が少ないことについて認識していることがみられる。地域活動計画のなかでも、共生型つながり交流が取り上げられ、その具現化を図ったものが類型Ⅲの取り組みなのである。

次に、高齢者は、この場を「心地よい所」として捉えているが、支援者は、心地良く感じさせるために、何を取り組んでいるのか。類型Ⅲは、地域の空き古民家を活用し、高齢者サロンと子育てサロンを同時に開催することで、高齢者や子ども・その親がお互いに見慣れていくことを目標としている。そして、類型Ⅲは、3つの大原則に沿って運営されている。第1に、来るもの拒まず、第2に、参加者のみんなが持ちつ持たれつ、第3に、みんなが主役であるという内容である。この大原則の内容から分かるように、参加希望があれば、誰でも受け入れる姿勢を持っている。参加高齢者は、ただの受け側ではなく、高齢者の一人ひとりが主人公になり、教えたり、教えられたりすることを志向する。また、既存の高齢者サロンと異なって自由に対話できる時間が長く、やりたいことや楽しいことが仲間と共有できるという点から、高齢者は心地良いと感じると考えられる。

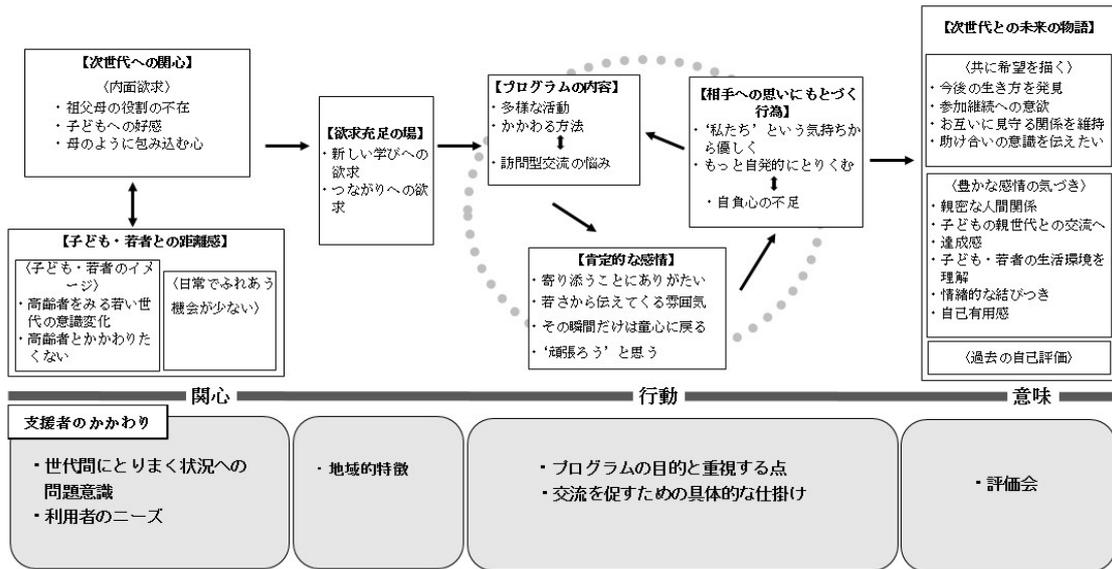
類型Ⅲにおける高齢者と子どものかかわりは、基本的にお昼前の体操や同じ部屋でお昼をとることである。その他、特別イベントや季節行事等の企画は共同で開催している。また、夏休み中は、地域の高校生が訪問し、高齢者と一緒に過ごしながらかかわることを図っている。支援者は、高齢者と子どもとのかかわりを促すために、どのようなかかわり支援を行っているのか。支援者の語りからは両世代のかかわりを促すような内容は見当たらなかったが、その背景には、共生型つながりに対する支援者の考え方に関係していると考えられる。支援者は、普段のふれあいの少ない高齢者と子ども・若者が、この共生型サロンを通して、お互いに見慣れていることを重視し、自然にかかわりながら、お互いの存在が馴染むと考えている。そのため、高齢者と子ども・若者を密に接触させる意図的なかかわり支援は設けていないと思われる。行動段階における高齢者の変化をみると、肯定的な感情の内容について他の類型と同様であるが、その次のステップである「相手への思いに基づく行為」に関する内容においては、「感謝の気持ちを伝える」が、「余計なことは言わない」という概念のように、子ども・若者に対する感情や行為を抑えていると考えられる。なぜ、子ども・若者に対する感情や行為を抑えているのか。子ども・若者に対してアドバイスのような積極的な行為は、相手に誤解を招くかもしれないという意識が強く、そこには若い母親との「子育ての価値観の違い」による心理的な距離感が作用していると考えられる。

行動段階におけるふれあい・かかわりを通じて高齢者は多様な意味づけに至る。意味段階において支援者はどのような支援を行っているのか。支援者は、高齢者と子どもとのかかわりを見守りながら、高齢者や子どもの変化を感じている。高齢者は、子どもを孫・ひ孫のように可愛がり、子どもは高齢者をみても怖がらない。また、子どもの親も自分の子が他人から愛されていることから喜びを感じる。さらに、多様な高齢者とかわり、自分の親や高齢者を見る目が暖かくなることも期待される。世代を超えて一緒にいるだけで感じられる雰囲気というものがあり、参加している高齢者と子ども・若者、そして支援者はそれを体感しているのである。

#### 第4節 類型Ⅳの高齢者の生きがいプロセスと支援者のかかわり支援

類型Ⅳにおける子ども・若者とのかかわりによる高齢者の生きがいと支援者のかかわり支援との関係を明らかにするため、高齢者の生きがいプロセスでの関心→行動→意味という段階毎に、どのような支援者のかかわり支援が行われているのかについて検討し、その内容を図7-4に示す。図の上部は、第4章の類型Ⅲの高齢者インタビュー調査分析から作成された結果図であり、下部は、第6章の類型Ⅲの支援者インタビュー調査の分析表をもとに該当するところを取り上げたものである。

図7-4 類型Ⅳの高齢者の生きがいプロセスに関連した支援者のかかわり支援



関心段階における高齢者は、子ども・若者に対する関心とともに、心理的距離感を抱えている。関心段階における高齢者の諸感情は、家庭内での祖父母としての役割不在や、地域での子ども・若者とふれあう機会の少ないという現状から起因するものである。支援者は、こうした高齢者の諸感情について把握するために、どのような支援を行っているのか。支援者は、近年、社会問題としてあげられている世代間の距離や葛藤という問題について認識しており、意思疎通の機会の少ない地域では、世代間の距離感はますます深刻化し、果ては両極化する可能性もあると懸念している。このように、支援者は、社会変化による問題について敏感にとらえており、機関の地理的特徴や利用者のニーズに合わせ、素早く対応している。例えば、一人暮らしの高齢者を対象に家族のような情緒的支援を図るプログラムの企画や、季節イベントの肯定的な反応から高齢者と子どもがかかわるプログラムに展開していること、そして、文化活動への接近性が悪い地域では、高齢者と大学生が文化活動をつくるプログラムを企画することである。

次に、高齢者の子ども・若者への関心を行動へ移行するものとして、「欲求充足の場」が存在し、高齢者は、ここを経由して子ども・若者とかかわるプログラムに参加している。高

高齢者にとってC（類型IV）は、生活を営む上で社会的人間として求められるものが充足される場である。新しいことを学べる所であり、人や地域社会とつながる所でもある。支援者は、高齢者の欲求を充足させるために、どのような支援を行っているのか。支援者は、機関が位置している地域や住民の特性について把握し、それに基づいた適切なプログラムを企画する。例えば、経済的に困難な高齢者が多いことや、低所得層と中所得層との違和感があること、地域における高齢者や子どもの関連施設の把握及び連携状況などについて把握している。そして、新プログラムが企画されると、掲示板を利用した情報提供とともに、必要とされる高齢者に直接声をかけるなど、参加を促している。

類型IVは、支援者による高齢者と子ども・若者がかかわるプログラムである。プログラムの目的や重視する点によって活動内容や高齢者と子ども・若者のかかわり支援は異なっている。例えば、家族のような情緒的支援を図り、高齢者の孤独感の減少を目的としたプログラムでは、高齢者一人と高校生二人を縁組に結び、高齢者のお宅に訪問して高齢者と学生がやりたい活動を決めて行う形をとっている。情緒的交流が起きやすい環境をつくるため、少人数のかかわる形を設定しているのである。かかわり支援を行っているプログラムに参加している高齢者の変化をみると、かかわっている子ども・若者に対する肯定的な感情とともに、子ども・若者に対し、親近感を感じ、子ども・若者を喜ばせたい気持ちから積極的な行いが行われていることがみてとれる。一方、高齢者と大学生が文化活動を創り上げるプログラムでは、高齢者と大学生とのかかわりは、活動のなかで自然に生まれてくると想定していたため、支援者は、高齢者と大学生が交わる意図的なかかわり支援は設定していなかった。その結果、高齢者と大学生は、それぞれの同世代と集まってかかわる場合が多く、支援者の想定したようなかかわりはみられなかったため、プログラムの中間段階にお互いの関係形成を図る活動を取り入れていた。また、支援者によるかかわり支援を設定していなかったプログラムに参加している高齢者の変化をみると、子ども・若者への親近感を感じているものの、子ども・若者に対し、積極的・自発的に行動するような様子はみられていない。

高齢者と子ども・若者がかかわるプログラムを通じて、高齢者は多様な意味づけに至る。意味段階において支援者はどのような支援を行っているのか。プログラムという特徴上、プログラムの計画段階から、終了後のプログラムの評価についても設定しておく。既存尺度を用いプログラムの満足度を測定する方法や、参加者と振り返りを行う方法などである。しかし、支援者は、適切な評価方法の不在を課題として抱えており、既存のプログラムの満足度を測定する方法では、高齢者と子ども・若者が相互作用から感じる満足感や具体的な変化などについては把握できないという限界があると考えられる。

## 第5節 生きがいプロセスにおける支援者によるかかわり支援

第1節から第4節までは各類型における高齢者の生きがいプロセスに該当する支援者によるかかわり支援について検討した。本節では、プロセスを構成する段階、すなわち、「関心段階」、「関心段階と行動段階をつなぐ境界」、「行動段階」、「意味段階」を中心に、

支援者によるかかわり支援を整理し、各段階における類型の共通点や相違点について検討してみる。表 7-1 に生きがいプロセスにおける支援者によるかかわり支援のマトリックス表を作成した。

「関心段階」において、支援者は地域の問題や利用者のニーズについて把握しており、それに関連する支援を取り組もうとする点が共通している。類型Ⅰと類型Ⅱの場合は、地域住民への調査や声の聞き取りからかかわり活動が出発している一方で、類型Ⅲと類型Ⅳは、地域においても懸念されている社会問題、世代間のつながりの希薄化からかかわり活動を取り組んでいる点が相違である。

「関心段階と行動段階をつなぐ境界」では、各類型に該当する機関や団体は、高齢者の居場所のような機能を行っている。高齢者の心理的安定感や学びへの欲求を充足させるために、各類型の支援者は各々の方法で努めている。その中で支援者によるかかわり支援の多い類型Ⅰと類型Ⅳの場合は、高齢者のニーズに対し、プログラムの支援を行う傾向がみられる一方で、支援者によるかかわり支援の少ない類型Ⅱと類型Ⅲでは、高齢者同士が自主的に取り組む傾向がみられる。

「行動段階」における支援者によるかかわり支援には、各類型によって重視する点が存在し、それに伴ったかかわり支援を行っていることが共通する。類型Ⅰと類型Ⅳは、高齢者と子ども・若者の情緒的な交流を促す高齢者と子ども・若者のかかわり方に対する仕掛け、例えば、高齢者と子ども・若者を1対1または1対2にペアにする等がみられる。一方、類型Ⅱと類型Ⅲは支援者によるかかわり支援の少ない類型であるが、少し異なる点がみられる。類型Ⅱでは、高齢者の主体性を重視し、高齢者の主導で取り組む活動に対し、支援者は必要な物品を提供する等のその活動を支える補助的な支援を行っている。一方で類型Ⅲでは、高齢者と子どもが見慣れることを重視し、季節のイベント等の多様な企画に取り組んでいるが、高齢者と子ども・若者のかかわり方に対する仕掛けは行っていない。

ただし、行動段階の支援者によるかかわり支援において留意することがある。第3章で言及したように、本研究では子ども・若者の年齢層が統一されていないため、子ども・若者の年齢層は幼児から大学生まで幅広い。かかわり活動は、特に子ども・若者の年齢層によってプログラムの内容を含む支援者によるかかわり支援は変わると思われる。具体的に、高校生や大学生を対象とする活動は、活動の中に対話を通してコミュニケーションや相互作用ができる活動が中心である。一方、幼児や小学生の場合、対話より体を動かす活動や工作のような活動を通して、楽しさを感じながら相互作用のできる活動である。

「意味段階」において各類型の支援者は、高齢者や子ども・若者の変化について感じており、高齢者と子ども・若者のかかわり活動の効果を認知している点は共通している。しかし、類型Ⅳを除く他の類型では、子ども・若者とのかかわり活動の感想を聞く評価会のような支援が行われていない。そのため、高齢者は子ども・若者とのかかわりをどのように思っているか、または、今後どのようにかかわっていききたいか等について明確に認識していない。また、高齢者にとっても子ども・若者に行う関心や行動が、相手にどのように受け入れられているか、どのように考えられているかが当然疑問として浮かびあがってくるが、それに対す

るフィードバックを受ける機会を設けていない。

表 7-1 生きがいプロセスにおける支援者によるかかわり支援

	関心段階	関心と行動の境界	行動段階	意味段階
類型Ⅰ	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域の資源やニーズ調査</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>共生型の居場所づくり</li> <li>環境や雰囲気づくり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>開始の案内</li> <li>座席配置やネームカード作成</li> <li>食事後、レクリエーション</li> <li>支援者と大学生の振り返り会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域の状況等の情報提供</li> </ul>
類型Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域住民の意見の反映</li> <li>既存の福祉サービスへの問題意識</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>安心感のある居場所</li> <li>地域の主体であることを認識させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>開設のきっかけ及び目的</li> <li>本人主義の活動</li> <li>利用者の意見は受け入れる</li> <li>補助的な支援</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>高齢者・子どもの変化を見守る</li> </ul>
類型Ⅲ	<ul style="list-style-type: none"> <li>共生型つながり交流の具現化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>3つの大原則</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>かかわりの目的及び交流内容</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>高齢者と子ども・子どもの親の変化を見守る</li> </ul>
類型Ⅳ	<ul style="list-style-type: none"> <li>世代間にとりまく状況への問題意識</li> <li>利用者のニーズ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域的特徴</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>プログラムの目的と重視する点</li> <li>交流を促すための具体的な仕掛け</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>評価会</li> </ul>

## 第8章 高齢者の生きがい対策における子ども・若者との交流事業の意味と課題

第4章参加高齢者のインタビュー調査及び第5章参加高齢者の生きがい感の数値化から、子ども・若者とかかわる地域活動に参加している高齢者は、子ども・若者への関心段階と行動段階を通して意味段階に至ることや、プロセスが確認された。また、生きがい感の高い高齢者は、ジェネラティビティをあらわす項目がみられており、支援者によるかかわり支援が多い類型に参加していることが確認された。そして、第6章支援者のインタビュー調査及び第7章高齢者の生きがいと支援者によるかかわり支援との検討からは、高齢者の生きがいを促すためには、高齢者と子ども・若者をつなげる支援者によるかかわり支援が求められることが確認された。

しかし、日本における高齢者の生きがい対策の中で、子ども・若者との交流事業は拡大されているものの、なぜ、高齢者と子ども・若者をつなぐ支援者の役割やかかわり支援は重視されていないのか。本章では、研究課題1と研究課題2の結果を踏まえ、高齢者が子ども・若者とかかわる活動や高齢者の生きがいに関連する対策を批判的に検討し、高齢者の生きがい対策の展開の中で高齢者と子ども・若者の交流事業の意味付けや課題について検討する。

まず、第1節において高齢者の生きがい対策がみられはじめた1960年代から現在までの日本の高齢者の生きがい対策の変遷について文部科学省（旧文部省）や厚生労働省（旧厚生省）を中心に検討する。その上、第2節において高齢者と子ども・若者の交流事業の意味付けや課題について考察する。

### 第1節 高齢者の生きがいに関する対策動向

高齢者の生きがいに関する対策や関連事業の展開には多様な関係部署がかかわってきた。主な所管省庁としてあげられる文部科学省（旧文部省）や厚生労働省（旧厚生省）を中心に1960年代から2010年代まで10年毎に分け、時代背景を含めた省庁の関係審議会及び白書について検討していく。時代別の高齢者生きがい対策の展開過程を整理したものを表8-1に示す。

#### 1. 文部科学省（旧文部省）

##### 1) 1960年代

1965年にユネスコ第3回成人教育推進国際委員会において提唱された「生涯教育」が世界的に注目されることにより、日本へ導入され、旧文部省を中心に生涯教育の理念が政策の中に取り入れるようになった。生涯教育理念の導入により、高齢者を対象とする本格的な学習組織の結成が始まった。代表的に、1965年に打ち出した「高齢者学級」の奨励政策は、1950年代後半から1960年代までの高齢者の教育・学習がもっぱら老人クラブなどで行われてきたことを反省し、老人クラブとは異なる高齢者学園づくりという狙いが明らかにされていた（新海2003）。

##### 2) 1970年代

生涯教育理念の導入は、社会教育事業の一環として高齢者学習を位置付け、生涯教育を通じた高齢者の生きがい対策へと進むようになった。1971年の社会教育審議会答申である

「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について」では、生涯教育理念に立脚した提言が記された。人口の高齢化から生じる社会的条件の変化に対応するために、高齢者教育の重要性を指摘し、高齢者教育と生涯教育の関連や、高齢者の能力開発等を述べた。具体的に、今後の高齢者教育は従来の老人クラブ、親睦会など的高齢者学級と異なり、個人差に応じた高齢期に相応しい社会的な能力、自立、生きがいの創出などに取り組むことの重要性を強調していた。この答申を受け、高齢者教育の普及宣伝を行ったり、国庫補助金による全国の市町村に対し「高齢者教室」の設置を奨励したりするなど生涯教育学習事業の一環として対策が打ち出された。また、1970 年後半からは高齢者の生きがいの向上とともに、社会教育における指導者層の充実を図ることを目的として、市町村に対し「高齢者の人材活用」を促進する事業に補助を行うようになった。

### 3) 1980 年代

1970 年代に導入した生涯教育政策は次第に生涯学習政策へと転換することになる。1981 年の中央教育審議会答申では、「生涯教育」と「生涯学習」に関する概念の違いや用語の区分が本格的に述べられており、これまでの福祉・医療を中心とした消極的な高齢者保護政策から、高齢者の経験・能力を活かす積極的な社会的活用政策への転換の必要性が提言された。

また、1984 年に発足された臨時教育審議会による四度にわたる答申では、全体として「生涯学習体系への移行」と位置付けられ、本答申以後、「生涯教育」に代わり「生涯学習」という用語が一般的に用いられるようになった。生涯学習政策を推進するために、1988 年に生涯学習局を設置し、人々が生涯いつでも、どこでも自由に学ぶことができる生涯学習社会を築いていくことを目的に、学校や社会教育の拡充、文化・スポーツの振興等により学習機会の確保を図ることによって、生涯学習の基盤につき体系的な整備を行ってきた（伊原 1999）。これらの答申を受けて、従来、市町村の教育行政が実施していた「高齢者教室」と「高齢者人材活用」への助成事業を統合、福祉関係部局や老人クラブなど関係団体を連携した「高齢者の生きがい促進総合事業」が発足された。この事業では、高齢者教育促進会議の設置、高齢者教室、ボランティアの養成講座、高齢者の人材活用、高齢者と若い世代の交流、高齢者の社会参加や生活上の諸問題の相談に応じる事業などが実施された。また、多種多様化していく高齢者の学習要求に対応し、1989 年から地域の大学や民間の教育事業等と連携を図りながら、「長寿学園」を開設し、修了者を地域活動の指導者として積極的に活用する事業を実施した。この時代の旧文部省は、国庫補助として助成した「高齢者の生きがい促進総合事業」及び「長寿学園」を通じ、高齢者の生きがいを促進する高齢者学習を行っていたのである。

### 4) 1990 年代

高齢者への生きがい支援は、生涯学習対策の一環として位置付けられていた。1990 年に「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律（以下、生涯学習振興整備法）」が制定された。この法律に基づき、生涯学習の振興に資するための都道府県事業の実施や特定地区における民間事業者に対して必要な助言指導を行う地域生涯学習基本構想の策定、そして国及び都道府県における生涯学習審議会の設置等が進められてきた（伊原

1999) . 1992 年の生涯学習審議会答申「今後社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」には、注目すべき今後の生涯学習の方向性について言及している。第 1 に、人々が社会生活を営む上で、理解と体得が求められる課題が増大していると指摘し、現代的課題に取り組む学習機会の提供を示した。現代的課題を強く意識して生涯学習の機会の充実を図ろうとする姿勢は、その後の答申においてもみられる。従来、生涯学習の主な内容であった、個人が知りたい、学びたいと望む趣味や教養を指す「要求課題」のみならず、行政などによって奨励される「必要課題」(赤尾 2009 : 30) が含まれることを意味している。第 2 に、ボランティア活動の拡大を通じた学習機会の充実が示された。ボランティア活動は「現代社会における諸課題を背景として行われるもの」とし、「個人の自由意思に基づき、その機能や時間等を進んで提供し、社会に貢献すること」とした。これまで高齢者個人への学びの達成感や満足感にとどまらず、学習の成果を活用し社会に貢献するか、が問われるようになった。

一方、高齢社会に対応する小等中等教育の在り方についても議論が行われていた。1997 年、中央教育審議会の第一・二次答申「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」をみると、長寿化する社会の中で、子どもの自ら学び、自ら考える力、豊かな人間性やたくましく生きるための健康や体力などの「生きる力」を培うことは大変重要であるとし、各学校段階において、子どもたちと高齢者が実際に交流し、触れ合う体験活動や、子どもたちが高齢者の介護や福祉に関するボランティア活動を体験することなどを一層重視していくことが必要であるとした。豊かな経験と知識を有する元気な高齢者が、子どもたちの教育という営みに積極的に参加していくことは、子どもたちが高齢者から様々な生きた知識や人間の生き方を学んでいくことが極めて有意義である。学校における横断的・総合的な指導を一層推進するため、各教科の教育内容を厳選することにより時間を生み出し、一手のまとまった時間「総合的な学習の時間」を設けることが強調されている。

## 5) 2000 年代

2001 年に中央省庁が再編されるが、旧文部省は旧科学技術庁と統合し、現在の文部科学省とその名称が変更された。2000 年代には教育関連法制度が整えるようになる。代表的に 2006 年に教育基本法が約 60 年ぶりに改正され、新たに生涯学習の理念に関する条文が盛り込まれた。改正教育基本法において生涯学習社会の志向が打ち出されたことを受け、2000 年代の答申は、学校・家族・地域がより包括的に連携する環境や、学びを支える体制を整え、生涯学習社会の構築に向けて邁進していく内容が、これまで以上に盛り込まれるようになる。

「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない」

〈2006 年 12 月に改正された教育基本法第 3 条〉

2008 年の中央教育審議会の答申「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について—

「一知の循環型社会の構築を目指して——」を見ると、人ひとりが自立した人間として生き抜くための総合的な力を身につけることの重要性と、「知」を基盤として生涯にわたって学習を継続することを示していた。とりわけ、学習は個人的な活動であっても、その成果を適切に社会において活用することで、社会全体の活性化が図られること、ひいては国家の持続的発展にも結びつくという考えを示し、生涯学習社会の構築が求められることを強調した。学校・家庭・地域が協力して地域の教育力を高めることや、行政が調整役としてネットワーク化を努めることなど、学びを支える体制の準備及びその強化への対策が推進されるようになった。

## 6) 2010年代

文部科学省では、2012年に超高齢社会においてプレ高齢者を中心とする成人が取り組むべき学びの在り方を検討することを目的として「超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会」を設置した。検討会では超高齢社会の現状及び課題を踏まえ、超高齢社会における生涯学習の在り方や生涯学習を通じた高齢者の社会参画の在り方などについて論議された。同年度に「長寿社会における生涯学習の在り方について～人生100年いくつになっても学ぶ幸せ「幸齢社会」～」という報告書が出された。この報告書では、高齢者を、元気で地域の支え手、すなわち社会的役割を担う存在としてとらえていた。また、超高齢社会において生涯学習の持つ意味・役割とは、個人の楽しみや自己向上を促すことのみならず、学習者が学びを通して生きがいの創出につながっていくことがさらに重要であるとした。とくに、生涯学習を通して高齢者が生きがいを持つことで、健康維持や介護予防につながることや、地域が抱える諸課題の解決に向けて活躍することが期待されていた。この報告を受け、学校の教育活動を支援する「学校支援地域本部」や放課後や週末等に小学校の余裕教室等を活用し体験・交流活動等を提供する「放課後子ども教室」、家庭教育に関する学習機会の提供等を行う「家庭教育支援」を一体的・総合的に推進することとなり、高齢者を含む幅広い世代の地域住民の参画による地域全体で子どもを育む環境づくりが行われるようになった。

表 8-1 高齢者生きがい対策の展開過程（1960～1980 年代）

年代	社会状況	高齢者の生きがい関連対策・事業	管轄省庁	関連法その他
1960	高度成長の本格化，高齢者自殺率の増加	62 老人福祉センター国庫補助	厚生省	
		63 老人クラブ助成事業	厚生省	63 老人福祉法
	65 高齢者学級事業	文部省	生涯教育	
	高齢化率 5.7%	67 全国老人クラブ連合会助成制度（老人クラブ地域社会活動促進特別事業，老人クラブ活動推進員設置事業）	厚生省	
		68 高齢者無料職業紹介所の設置（老人就労斡旋事業，高齢者能力活用推進事業）	厚生省	
1970	前半：高齢者医療無料化政策をめぐる高齢者層の行政対策対象化，高齢者の自立問題 高齢者生きがいの問題	71 高齢者学習活動促進事業の開発	文部省	
		72 老人スポーツ普及事業	厚生省	
		73 高齢者教室事業 73 老人のための明るいまち推進事業	文部省 厚生省	
	後半：オイルショックによる所得格差の増大，中高年雇用問題の本格化，高齢化社会の急進行 高齢化率 7.1%	79 生きがいと創造の事業	厚生省	
1980	バブル景気による社会成熟，経済的余裕，人生 80 年代の到来	80 高齢者能力開発情報センター，高年齢者労働能力活用事業（シルバー人材センター） 高齢者スポーツ教室	厚生省 文部省	82 老人保健法
		84 高齢者生きがい促進総合事業	文部省	臨時教育審議会の発足
	高齢化率 9.1% 3 世代世帯 50.1% 高齢単独世帯 10.7%	85 高齢者スポーツ活動推進事業	文部省	
		86 老人クラブ活動等社会参加促進事業 地域老人福祉システム開発育成事業	厚生省	長寿社会対策大綱
		89 高齢者の生きがいと健康づくり推進事業（長寿社会開発センター事業，明るい長寿社会づくり推進機構事業）	厚生省	高齢者保健福祉推進 10 年戦略策定（ゴールドプラン）

表 8-1 高齢者生きがい対策の展開過程 (1990～2020 年代)

年代	社会状況	高齢者の生きがい関連対策・事業	管轄省庁	関連法その他
1990	高齢社会へ突入	生涯学習局の設置 高齢者の生きがいと健康づくり推進事業	文部省 厚生省	新・高齢者保健福祉推進 10 か年戦略 策定 (新ゴールドプラン)
	高齢化率 12.1% 3 世代世帯 39.5% 高齢単独世帯 14.9%	94 高齢者率 14.6% 96 高齢社会対策大綱 (高齢社会基本法に基づく)	厚生省	95 高齢社会対策基本法 97 介護保険法 97 21 世紀を展望した我が国の教育 の在り方について (中央教育審議会 第二次答申)
2000	介護保険導入, 定年延 長, 経済の低迷 高齢者医療費 1 割負 担,	介護予防・生活支援事業 01 高齢社会対策大綱の見直し	文部省→文部科学省 厚生省→厚生労働省	今後 5 か年間の高齢者保健福祉施策 の方向 (ゴールドプラン 21)
	老人医療の対象年齢 を 70 歳以上から 75 歳 以上に引き上げ	05 介護保険法の改正 (予防型システムと地域密着 型サービスの創設) 06 教育基本法の改正 (約 60 年ぶり) 07 高齢化率 21%超	厚生労働省  文部科学省	
2010	超高齢少子化社会 孤立死問題	12 高齢社会対策大綱の見直し (11 年ぶり) 14 介護保険法の改正 (地域支援事業の充実とサー ビスの多様化) 18 高齢社会対策大綱の見直し 19 生涯学習局→総合教育政策局 (案)	厚生労働省	
	高齢化率 23% 3 世代世帯 16.2% 高齢単独世帯 24.2%			

筆者作成

## 2. 厚生労働省（旧厚生省）

### 1) 1960年代

日本における高齢者の生きがい対策は 1960 年の老人福祉法制度をもって開始された。1960 年代は高度成長期が本格化してきた時期である反面、高齢者の自殺率の増加という社会問題があらわれ、高齢者の孤独感の解消を目的とした対策が行われた（鶴若 2004）。具体的に老人クラブの助成、老人福祉センターや老人ホームの設置、高年齢求職者職場適応訓練などである。特に、1951 年から中央社会福祉協議会（現・社会福祉協議会）の働きかけによって結成されてきた老人クラブは、この時代旧厚生省の助成支援によって全国に拡大されていた（宮里・土志田 1994；伊原 1999）。

### 2) 1970年代

1970 年代後半オイルショックによる低成長経済の影響から所得格差の問題や、高齢人口の増加による高齢化社会の急進行等の急変する社会変化がみられた。社会的に老後への関心が高まり、高齢者の老後問題が注目されるようになった。1973 年の『厚生白書（昭和 48 年版）』をみると、高齢者の生きがい対策の必要性について、「老人層の生きがいを高めると同時に、老人の持つ豊富な経験と知識を活用することは、社会全体の進歩にとっても極めて重要な課題である」と指摘しつつ、老人に配慮した住居条件の整備や高年齢者の雇用促進の施策、拠点となる余暇活動の場を大幅に整備すること等が求められ、老人クラブ活動を基盤とした教養活動、地域社会への奉仕活動、レクリエーション活動等が展開されるようになった。その後、1979 年に高齢者の生きがいを高め、健康で豊かな生活を目的とした「生きがいと創造の事業」が実施されるが、例えば、スポーツ大会の実施や老人クラブの助成するものであった。

この時期、高齢人口の増加や老後問題等から老後への関心が高まり、行政による生きがいに関連事業がみられるようになったが、その活動内容をみると、余暇活動に集中していることがみられる。ちなみに、全国老人クラブ数の変化をみると、1973 年の『厚生白書（昭和 48 年版）』による全国老人クラブの数は 9 万 1,000 か所であり、加入人員 540 万人であったのに対し、1979 年の『厚生白書（昭和 54 年版）』による全国老人クラブの数は 11 万 8,000 か所であり、加入人員は当時 60 歳以上の老人の半数以上にあたる約 725 万人が加入していた。生きがい支援の下で急激に増加していることが分かる。

### 3) 1980年代

1980 年代に入ると、日本はオイルショックからバブル景気に迎え、社会は円熟期に突入することから、余暇活動への価値等が注目されるようになった。また、この時期は一連の福祉関係の法律・制度が変更され、社会保障の仕組みが大きく変わっていた。

1985 年に旧厚生省は「高齢者対策企画推進本部」を設置し、長寿社会に相応しい社会保障施策のあり方について模索し、1989 年高齢者の保健福祉サービスにおける基盤を整備するための「高齢者保健福祉推進 10 か年戦略（ゴールドプラン）」を策定した。ゴールドプランでは、高齢者の生きがいづくりを他の高齢者対策と並べ独立の事業として位置づけ、生きがいづくりのための「雰囲気づくり、組織づくり、人づくり」を体系的に進めることを始

めて打ち出した（伊原 1999：73）。「明るい活力ある長寿社会」を目的として教育・文化・スポーツ活動対策が拡充され、老人クラブや生涯学習支援が行われた。また、シルバー人材派遣センターが設置されるなど、高齢者の社会参加を促進する対策が行われた。この時期は、ゴールドプランの策定により、これまで多くの社会福祉・社会保障の行政対策の間隙を埋めるものとして発生してきた生きがい対策を制度的なものとして高めようとした。そして、これまでの生きがい対策が統合された時期でもある（鶴若 2004）。

#### 4) 1990 年代

1990 年代には高齢化社会から高齢社会へ突入するとともに、核家族化の増加という家族形態の変化、女性の社会進出等がみられるようになった。旧厚生省は、明るい活力ある長寿社会の実現に向けて高齢者がそれまで培った豊かな経験と知識・技能を活かし、生涯を健康で、かつ生きがいをもって社会活動ができることを目指した、「高齢者の生きがいと健康づくり推進モデル事業」を実施した。その推進母体として国には「長寿社会開発センター」を、都道府県には「明るい長寿社会づくり推進機構」を設立した。1994 年に日本の高齢化率は 14%を達し、高齢社会に相応しい総合的な対策及び社会システムの再構築の必要性から、1995 年「高齢社会対策基本法」が制定、その翌年に『高齢社会対策大綱』が策定された。高齢者の社会参加では、地域社会における高齢者等の多種多様な社会参加活動を促進するため、組織的な取り組みが図られた（伊原・荻生 1999：79）。国及び地方自治体の任務の明確化や高齢者の自立的な生活、社会参加による生きがいづくりへの取組が推進された。とりわけ、国・地方公共団体をはじめ、企業・地域社会・NPO（非営利活動団体）、家庭、個人等、社会を構成するすべての者が相互に協力しあい、それぞれの役割を積極的に果たす姿勢、いわゆる公助、共助及び自助が強調されるようになった。

#### 5) 2000 年代

少子高齢化がますます進み、世帯構成においても 3 世代世帯は減少、高齢世帯（単独・夫婦のみ）は増加する傾向がみられていた。1997 年に制定された介護保険法は 2000 年 4 月からスタートし、翌年 2001 年には、中央省庁再編により旧厚生省は旧労働省と統合し、「厚生労働省」という名称に変更された。

2001 年に団塊世代（1947～49 年の生まれ）が高齢期を迎えることを備え、分野別の枠を越えた横断的・総合的施策を推進する『新高齢社会対策大綱』が決定された。新大綱では、高齢者の捉え方や推進方針において大きな一歩を踏み出していた。今後の高齢者像について、健康・経済面で恵まれない旧来の画一的な高齢者像から多様なライフスタイルを持つ主体的な高齢者像として捉えなおし、多様なライフスタイルを可能にする高齢期の自立支援や高齢者を別扱いする制度や慣行等の見直し、世代間の連帯強化、地域社会への参画促進等が示された。とりわけ、注目すべきところは、従来、ボランティア活動を通じた高齢者の社会参加は、この時期、教育分野との連携により更なる展開がみられていたことである。そして、2003 年度の『高齢社会白書（平成 15 年版）』では、ボランティア活動や高齢者との交流を行うこととした「新学習指導要領」の円滑な実施（小・中学校は平成 14 年度、高等学校は 15 年度より実施）に努めることが求められていた。

2007年の高齢化率は21%を超え、超高齢社会へ進入した。2007年度の『高齢社会白書（平成19年版）』によれば、同時の状況を前例のない高齢社会とし、直面している課題として次の3点をあげていた。①必要な労働力の維持・確保、②高齢者を支えてきた家族や地域の機能の低下、③子育て世代含む若年世代に対する支えの必要である。これに対する対策や取組として、健康で活力ある高齢者の存在が取り上げられた。同白書では、65歳は高齢者で支えられる人という固定観念を捨て、今後の「高齢者は高齢社会を支えることが可能な貴重なマンパワー」と位置づけ、有償ボランティアや就業等、働く意欲のある高齢者の「ワーク」に向けられる時間を増やす方向性を示していた。

一方、生活の利便性が向上し、家族や地域の人たちとの交流をしなくても、生活は成り立つようになったが、一人暮らし高齢者の増加とともに、家族や地域での希薄しつつある人間関係は、高齢期の社会的孤立を表面化していた。これは、上記に言及した新しい高齢者像に該当する高齢者とともに、家族や社会と結びつきが浅く社会的孤立しやすい高齢者も多く存在していることが確認されることであった。高齢者の孤立問題が浮上し、2010年度の『高齢社会白書（平成22年版）』では、高齢者の孤立を「社会的孤立」とし、「家族や地域社会との交流が客観的にみて著しく乏しい状態」と定義した。社会的孤立は生きがいや尊厳といった高齢者の内面にも深刻な影響をもたらし、高齢者による犯罪や消費契約のトラブル、孤立死につながる可能性が高いと指摘した上、こうした高齢者の社会的孤立に対する対応策として、人とのつながりを持てる機会づくり（居場所づくり）や、元気な高齢者が孤立した高齢者の支え手になること、そして、その主体として民と官の協働によるネットワークづくりという取り組みが行われるようになった。

## 6) 2010年代

2010年時点、高齢化率は23%であり、10年前と比べて高齢単独世帯は4.5%増加した24.2%、3世代世帯の割合は10.3%減少した16.2%となっており、超高齢社会が本格化していた。1990年代から進んできた女性の就労の拡大、少子化や貧困化により、地域活動に参加する女性が減少し、地域活動の担い手は、女性の参加が少なくなるなかで、相対的に定年退職後の高齢者が中心となってきた。2010年代に入って、年金支給年齢の引き上げに伴い、60歳代後半から70歳代が、地域活動の中心とならざるを得なくなった（大村2016：247）。老人クラブやボランティア活動、就労斡旋といった高齢者の社会進出を目的とした高齢者の生きがい対策は引き続き行っていたが、高齢者のみならず全ての世代による高齢社会への意識向上や支え合いは、さらに強調されていた。2005年の介護保険改正では団塊世代が65歳以上になる2015年の問題に対応するため、予防を中心とする地域での支えが主な内容として打ち出された。次いで2011年の改正では、地域包括ケアシステムの確立を示し、2014年の改正において地域包括ケアシステムの構築及び地域のサービス提供主体の多様化等が打ち出された。一方、2015年に厚生労働省は、ワーキンググループを設置し、「全世代・全対象化地域包括体制」を発表した。新ビジョンとして地域共生社会を具体化するものである。翌年「共生社会実現本部」が設置され、2017年に「地域共生社会実現を向けて」の工程表が出されるなど、地域を中心とする全世代をとりあげた対応へ展開が推進され

るようになった。こうした政策方向の展開は、高齢者の生きがい対策にも影響を与えていた。

1996 年高齢社会対策大綱が策定された以降、3 度目の見直しが行われたが、2002 年の見直しを踏まえ、2012 年、2018 年それぞれの「学習・社会参加」の分野の基本方針は、どのように変化してきているかについて検討し、以下のような点が示された（表 8-2）。

第 1 に、2002 年の基本方針に比べ 2012 年の「学習・社会参加」の分野の基本方針は、より具体的な表現や内容になっている。例えば、2002 年の基本方針では、心の豊かさや生きがいの充足の機会を「学習を通じて」としているのに対し、2012 年の基本方針では、学習活動のみならず、「社会参加活動」が加えられた。また、高齢者が生きがいを持って活躍したり、さらに「学習成果を活かしたり」できるよう、社会参加活動の促進と整備を図ることが記されている。

第 2 に、提供主体を広げ明確に示している。2002 年の基本方針では、「生涯のいつでも自由に学習機会を選択して学ぶことができ、その成果が適切に評価される生涯学習社会の形成を目指す」としているのに対し、2012 年の基本方針では「高齢者を含めた全ての人々が生涯のいつでも…」というようにその対象を具体的に示し、「学校や社会における多様な学習機会の提供を図る」と、提供主体を具体的に示している。また、公共のみが学習・社会参加活動を提供するのではなく、「新しい公共」として「高齢者を含めた市民や NPO 等が主体となって公的サービスを提供する」ことを強調している。

第 3 に、社会変化を反映した表現に変わりつつある。2002 年の基本方針では、社会変化について「経済社会の変化」とし、経済を中心とした捉え方であったが、2012 年の基本方針では、「社会の変化」としており、2018 年基本方針では、より具体的に表現されている。また、2002 年の基本方針では、学習・社会参加にかかわる人々は、世代間、世代内の交流を深めて「世代間連帯」や相互扶助の意識の醸成が期待されると記しているのに対し、2012 年の基本方針では、「世代間連帯」という言葉を「世代間交流」という言葉にトーンダウンし、表現している。

第 4 に、ボランティア活動や NPO 活動といった地域の社会参加を通して期待されることが変化している。2012 年の基本方針では、「自己実現への欲求及び地域社会への参加意欲を充足させる」としているのに対し、2018 年の基本方針では、「生きがい、健康維持、孤立防止等につながる」とのように変更されている。これは、社会参加の影響が個人の欲求やその満足に留まらず、現在の社会が抱えている諸問題と関係しており、社会に影響を及ぼしていると読み取れる。

表 8-2 2002 年, 2012 年, 2018 年の高齢社会対策大綱における学習・社会参加の基本方針

2002 年の基本方針	2012 年の基本方針	2018 年の基本方針
<p>高齢社会においては、価値観が多様化する中で、学習を通じての心の豊かさや生きがいの充足の機会が求められ、経済社会の変化に対応して絶えず新たな知識や技術を習得する機会が必要とされることから、生涯のいつでも自由に学習機会を選択して学ぶことができ、その成果が適切に評価される生涯学習社会の形成を目指す。</p> <p>また、高齢者が年齢にとらわれることなく、他の世代とともに社会の重要な一員として、生きがいを持って活躍できるよう、ボランティア活動を始めとする高齢者の社会参加活動を促進するとともに、高齢者が自由時間を有効に活用し、充実して過ごせる条件の整備を図る。</p> <p>さらに、ボランティア活動を始めとする NPO 等やシルバー人材センターにおいて行う活動は、自己実現への欲求及び地域社会への参加意欲を充足させるとともに、福祉に厚みを加えるなど地域社会に貢献し、世代間、世代内の人々との交流を深めて世代間連帯や相互扶助の意識を醸成するものであることから、誰もが、いつでも、どこでも、気軽に活動に参加できるよう、自発性を尊重しつつ、基盤の整備を図る。</p>	<p>高齢社会においては、価値観が多様化する中で、社会参加活動や学習活動を通じての心の豊かさや生きがいの充足の機会が求められるとともに、社会の変化に対応して絶えず新たな知識や技術を習得する機会が必要とされる。このため、高齢者を含めた全ての人々が、生涯にわたって学習活動を行うことができるよう、学校や社会における多様な学習機会の提供を図るとともに、その成果の適切な評価の促進を図る。</p> <p>また、高齢者が年齢や性別にとらわれることなく、他の世代とともに社会の重要な一員として、生きがいを持って活躍したり、学習成果を活かしたりできるよう、ボランティア活動を始めとする高齢者の社会参加活動を促進するとともに、高齢者が自由時間を有効に活用し、充実して過ごせる条件の整備を図る。</p> <p>さらに、ボランティア組織や NPO 等における社会参加の機会は、自己実現への欲求及び地域社会への参加意欲を充足させるとともに、福祉に厚みを加えるなど地域社会に貢献し、世代間、世代内の人々の交流を深めて世代間交流や相互扶助の意識を醸成するものである。</p> <p>このため、高齢者を含めた市民や NPO 等が主体となって公的サービスを提供する「新しい公共」を推進する。</p>	<p>高齢社会において、価値観が多様化する中で学習活動や社会参加活動を通じての心の豊かさや生きがいの充足の機会が求められるとともに、就業を継続したり日常生活を送ったりする上でも社会の変化に対応して絶えず新たな知識や技術を習得する機会が必要とされる。</p> <p>また、一人暮らし高齢者の増加も背景に、地域社会において多世代が交流することの意味が再認識されている。このため、高齢者が就業の場や地域社会において活躍できるよう高齢期の学びを支援する。</p> <p>さらに、高齢者を含んだ全ての人々が、生涯にわたって学習活動を行うことができるよう、学校や社会における多様な学習機会の提供を図り、その成果の適切な評価の促進や地域活動の場での活用を図る。</p> <p>また、高齢化するわが国社会の持続可能性を高めるには全ての世代による支え合いが必要であることから、義務教育を含め、生涯を通じて社会保障に関する教育等を進め、若い世代を含む全世代が高齢社会を理解する力を養う。</p> <p>さらに、ボランティア活動や NPO 活動等を通じた社会参加の機会は、生きがい、健康維持、孤立防止等につながるとともに、福祉に厚みを加える等地域社会に貢献し、世代間、世代内の人々の交流を深めて世代間交流や相互扶助の意識を醸成するものであることから、こうした活動の推進や参画支援を図る。</p>

出所:2002 年, 2012 年, 2018 年における『高齢社会対策大綱』を基に筆者作成

### 3. 共生型地域参加活動の展開と社会的意味

身近な場所で仲間を作り、生きがいを持って地域生活ができるよう、高齢者や障害者、子育て中の親子などを対象とした地域活動が全国的に広がっている。その中で、新たな動きとして従来の対象別ではなく、誰もが利用可能な共生型地域活動が注目されている。共生型地域活動は、身近な所で気軽に参加できることや異世代との交流が図れることから、公共圏での生きがいの機会が提供できる場として期待される。共生型地域活動の成立と拡大には、介護保険制度の変遷過程及び地域共生社会の推進過程に密接にかかわっている。

2005 年の介護保険の改正から共生型地域活動に関連した内容を中心に検討する。また、地域共生社会の出現とその内容について検討する。その上、共生型地域活動の拡大や活性化がもつ社会的意味について考える。

#### 1) 介護保険制度の改正と地域共生社会の展開

2000 年以後介護保険制度の方針に従い、高齢者の生きがい支援にも影響が与えられた。

2015年の高齢者問題（団塊世代が65歳以上になる時期）や要介護高齢者の急増、介護給付費の増大などの予測から制度の見直しが求められた。2005年の介護保険制度の見直し以降、予防重視型システムと地域で支える介護という2つの観点から地域における介護予防事業が展開されてきた。その後、2014年の改正では地域包括システムの構築の下で、既存の介護予防事業は、地域支援事業へ移行するとともに、サービスの提供主体の多様化が図られた。こうした展開は、NPO法人、民間団体、ボランティア団体、住民といった多様な主体による提供を促し、地域参加活動の拡大に影響を与えた。さらに、サービスの利用対象についても介護認定に関わらず利用できるように、その範囲が拡大された。提供主体の拡大と利用者の拡大によって、より多くの高齢者が身近な所で仲間をつくり、生きがいを持って地域生活を営むことを目標とした地域活動が実施されるようになった。

一方、2010年代後半、人口減少、家族・地域社会の変容などにより、既存の縦割りのシステムには課題が生じているという指摘から、福祉分野においても新しいパラダイムへの転換が求められた。そこで2015年に厚生労働省は「全世代・全対象化地域包括体制」という今後の社会システムを構想し、いわゆる「地域共生社会」を目指した新しい社会像を公表した。「地域共生社会」とは、「支え手側」と「受け手側」に分かれるのではなく、地域のあらゆる住民が役割を持ち、支え合いながら、自分らしく活躍できる地域コミュニティを育成し、公的な福祉サービスと協働して助け合いながら暮らすことのできる地域社会を意味する。2016年には「共生社会実現本部」を設置し、共生社会の実現に向けた本格的な取り組みを次々と打ち出した。共生社会の実現に向けた具体的なとらえ方として、「他人事」になりがちな地域づくりを地域住民が「我が事」として主体的に取り組んでいただく仕組みを作っていくとともに、市町村においては、地域づくりの取組の支援と、公的な福祉サービスへのつながりを含めた「丸ごと」の総合相談支援の体制整備を進めていく必要がある。また、対象者ごとに整備された「縦割り」の公的福祉サービスも「丸ごと」へと転換していくため、サービスや専門人材の養成課程の改革を進めていく必要があるとしている。

こうした地域共生社会という概念は2017年に行われた介護保険法の改正にも影響を与えた。改正内容のなかに「地域共生社会の実現に向けた取り組みの推進」という項目が示されている。とりわけ、同改正では「共生型サービス」が創設されたが、これは、高齢者・障害児者・児童への支援を一事業として提供できる仕組みである。共生型サービスは介護予防事業である地域支援事業にも適応され、地域において高齢者と子どもが一緒にする地域活動がさらに広がるきっかけとなった。例えば、名古屋市では、社会福祉協議会を中心に、2003年度から「ふれあい・いきいき事業」を開始し、高齢者サロンの開設時に助成金を支援してきたが、2005年度からは子育てサロンや障害者サロン、共生型サロンへと助成対象が拡大され、幅広い世代を対象とした地域のサロン活動を支援している。2019年に報告された名古屋市社会福祉協議会の『高齢者・共生型サロン実態把握調査』によると、2005年12月時点、共生・高齢者・障害・子育てを含む全体サロンの合計295か所に対し、共生型サロンは、5か所に過ぎず、全体の5%の割合であったが、2018年12月時点では、全体サロンの合計1817か所に対し、420か所が共生型サロンであり、全体の23%を占めている。十数年の間

で共生型サロンは5か所から420か所へと28倍も増加していることがみてとれる。

## 2) 共生型地域活動の社会的意味

地域共生社会における多様な取り組みでは、「支え手」と「受け手」に分かれるのではなく、地域のあらゆる人が役割を持ち、支え合いながら、自分らしく活躍できる地域コミュニティを育成し、公的な福祉サービスと協働して助け合いながら暮らすことを目指している。

とくに、共生型地域活動は、普段の関わることの少ない子ども・若者とふれあい・かかわることでお互いに刺激を与え合うことができることが、同世代で行う活動と大きく異なる点である。また、高齢者に特有の経験を活かした新しい役割を提供することもできる。役割を与えられることが生活の張りにもつながっている。さらに活動を通して健康も維持されることから介護予防ともなっている（黒岩 2018：88-89）。共生型地域活動は、地域において小規模で行われるため、高齢者が比較的に行きやすい所である場合が多い。また、特別な技術や条件が必要ではなく誰もが参加しやすい活動であるため、高齢者の生きがい効果や介護予防効果が期待されていると考えられる。

## 4. 高齢者生きがい対策の展開の特徴

以上のように、1960年代から2010年代まで主に厚生労働省（旧厚生省）及び文部科学省（旧文部省）における高齢者の生きがい対策の動向について検討してみた。日本における高齢者生きがい対策は、産業構造や家族形態の変化、高齢人口の増加などの社会変化による社会問題に対応していく上で、対策の一環として展開してきていることがみられる。

高齢者の生きがい対策は、高齢者を弱者として救済的観点から捉えた観点から脱皮した1960年代を起点に始まったといえる。1960年代において「老人福祉法」の成立など、高齢者の老後の孤独感を解消するため、政策の対象を健全な高齢者へと拡大し、老人クラブや老人大学の設立を推進してきた。1970年代においても1960年代と同様な政策を維持していたが、1980年代に入ってから大きな転機を迎えるようになる。旧厚生省はそれぞれ行われていた高齢者対策をゴールドプランの策定で総合化したと同時に、旧文部省では、生涯教育から生涯学習社会へと移行し、高齢者の経験や能力を社会に活かせる条件や生きがいづくりの環境を整備する方向へ転換していた。その結果、1990年代には高齢者の社会参加が注目され、学校との連携も図られていたが、2000年代に入ってから社会の一員として活躍する新しい高齢者像の登場や、民間による社会参加活動の提供が推進されるようになった。

文部科学省（旧文部省）及び厚生労働省（旧厚生省）による高齢者の生きがい対策において共通する特徴として次の3点がみられる。第1に、高齢者生きがい対策における高齢者対象の拡大である。1950年代には高齢者を社会的弱者として捉え救済を目的とした生きがい対策が主に行われたが、1980年代バブル景気による成熟社会の影響から福祉関係の法・制度が大きく改正されることで、高齢者生きがい対策における対象も高齢弱者から健全な高齢者へと拡大された。第2に、生きがい対策は、多くの高齢者の社会参加を促進する観点から、社会参加を通じて社会に貢献できるように高齢者を社会資源として活用する観点へと変わった。受ける高齢者ではなく、支え手、担い手としての高齢者の社会参加を促した。

第 3 に、地域における人々のつながりの希薄化や子育て問題等により高齢者に対する問題だけを生きがい対策で取り扱うのではなく、社会における多様な問題に対しても、社会参加活動として取り扱うような展開が行われてきた。

高齢者の生きがい対策の大体な展開の動向は社会変化に影響を受けた政府の方針や主導によるものであると考えられる。高齢者の生きがいは個人的なものとして捉えた時代もあったが、公共的なものとして提供されることへの要求が求められている。そして、近年、注目されてきた高齢者と子ども・若者の交流は、社会における子ども・若者の健全な養育や公共圏域における高齢者の生きがい、社会貢献への可能性から高齢者の生きがい対策として期待されると思われる。第 2 節では、高齢者の生きがい対策の中で見られる子ども・若者との交流活動に注目し、どのように展開してきたかについて検討する。

## 第 2 節 子ども・若者との交流の視点からみた生きがい対策と事業

高齢者の生きがい対策のなかで「世代間交流」という言葉が用いられていたことから、高齢者の生きがい対策に伴い、世代間交流の場は拡大されてきたと予測される。そこで、第 2 節では、高齢者と子ども・若者の交流という世代間交流視点から高齢者の生きがい対策を検討する。具体的に、これまでの高齢者の生きがい対策のなかで、「世代間交流」という言葉や同様の意味を持つ内容がいつから現れてきたのか、また、どのようにとらえられていたかについて明らかにする。そのうえ、どのような事業が実施されていたかについて検討したい。

### 1. 高齢者の生きがい対策における「世代間交流」の位置づけ

高齢者の生きがい対策において「世代間交流」という言葉が用いられたのは、1986 年の『長寿社会対策大綱』からであるといえる。その以前までは、政府が支援する高齢者の生きがいづくり事業のなかで一つの活動として用いられていた。例えば、1984 年に旧文部省による「高齢者の生きがい促進総合事業」や、1989 年に旧厚生省による「高齢者の生きがいと健康づくり事業」及び「老人クラブの助成事業」のなかに、高齢者と若い世代との野外活動、創作活動、緑化活動などが盛り込まれていた（斎藤 1994）。いずれでも直接世代間交流と銘打ってはいないが、生きがい事業の展開のなかで世代間交流が用いられていたのである。1986 年に閣議決定された『長寿社会対策大綱』から、高齢者の生きがい対策は「学習・社会参加システム」に位置付けられ、その基本方針のなかで「世代間交流」という言葉や同様の文脈が頻繁にあらわれるようになった。『長寿社会対策大綱』では、「高齢者の地域への貢献を促すとともに、高齢者と若年世代との交流を強め、世代間の連帯と活力に満ちた地域社会の形成を図るため、地域における各種ボランティア活動を更に推進する」とした。とくに、定年退職者などの健康な高齢者に、ボランティア活動をはじめとする様々な社会参加を通し、高齢者の健康で生きがいのある生活の実現を図り、地域社会の福祉の向上や活性化に貢献できることが期待された。ボランティア活動が強調されるように思われるが、その背景には、1970 年代から推進してきたボランティア活動を全国に育成・展開しようとする動

きがあったと同時に、この時期、高齢者の老後や余暇活動への関心が高まった時期でもあったため、ボランティア活動を通じた高齢者の生きがいがづくりがみられていたと考えられる。そして、高齢者のボランティア活動への推進は、高齢者について従来のような福祉サービスの受け手ばかりではなく、高齢者自身によるボランティア活動が、孤独をなくし生きがいを得る視点から論じられるようになった（宮里・土志田 1994）。また、高齢者の老後生活への関心の向上から、高齢者の健康づくり・スポーツ・文化・学習・趣味活動を通してふれあい・生きがいを創造し、高齢者の生活を豊かにする活動がますます広がっていた。

こうした対策の方向は 1990 年代においても続けられる。ボランティア活動の拡大とともに高齢者の社会参加への推進は一層拍車をかけており、そのなかに世代間交流が盛り込まれるようになっていた。1993 年に全国社会福祉協議会による「ボランティア活動推進 7 年プラン構想」では、ライフステージに合わせた世代間交流が、例えば、児童との世代間交流、高齢者との世代間交流、文化伝承における世代間交流が盛り込まれていた。ボランティア活動などの社会参加を通して高齢者の自己実現を目標とした生きがいがづくりのなかで、世代間交流が手法として用いられ、全国的に推進されていた。社団法人エイジング総合研究センターは、総務庁長官官房老人対策室の委託事業として、1993 年に全国の世代間交流の 10 事例を調査分析した、『世代間交流に関する調査報告書』を発表し、翌年は『高齢者との世代間交流の手引き』を発行した。

2000 年代にも社会参加をとおした高齢者の生きがいがづくりは強調されるが、2000 年前後に主体的でポジティブな新しい高齢者像が描かれ、社会における高齢者の役割を促していた。地域においては高齢者人材の活用や社会貢献が求められた。2000 年代に入ってから世代間交流という言葉は、高齢者の生きがい対策で以前より用いるようになる。しかし、『高齢社会対策大綱』が策定された 1996 年以後から 2012 年の改正までは、対策の方向上の有意義な転換は見られていない。その例として、2002 年 12 月に改正された『高齢社会対策大綱』をみると、学習・社会参加分野において 1986 年と同様に「世代間連帯」という用語が使われており、地域活動における「世代間交流の機会の確保」という指摘にとどまっていた。

一方、その後 2012 年と 2018 年の 2 度目の改正では、学習・社会参加の基本方針において有意義な転換がみられていた。前節でも言及したが、2002 年改正に使われた「世代間連帯」という表現が、2012 年の改正では、「世代間交流」へ変更されたところである。なぜ「連帯」から「交流」という言葉に変更されたのか。この点に注目したい。その理由を考えるうえで、まず、用語自体の一般的意味を検討する。辞典的な意味として「連帯」とは、「お互いが結びついており気分が一つになっていること」を意味し、一方、「交流」とは、「異なる地域・組織・系統に属する人や文物が互に行き来すること」を意味する。それぞれの辞典的な意味から、「連帯」は二人以上の人結びついて生じる感情のことを含んでおり、「交流」は異なる人が交わる行為自体を意味していることと理解できる。この二つの単語の関係性をみると、交流という行為が行われた後に連帯という感情があらわれると考えられる。つまり、連帯という言葉の中には、お互いを結びつく「交流」という行為が前提されていることである。そうすると、2012 年改正での「世代間連帯」から「世代間交流」への変更は、世

代間交流を通して期待されるもの（目標）が異世代間の連帯意識から交流行為の確保へと引き下げられたと考えられる。2000年代から少子高齢化とともに急激な家族形態の変化は、家庭内や地域社会における人々、とくに高齢者と子ども・若者とのつながりの希薄化が社会問題として指摘しはじめていた社会背景がある。こうした状況のなかで高齢者の社会参加は、とくに子ども・若者との活動には、高齢者の生きがいを超えて社会的役割を果たすことが求められていた。2012年の改正以降、2018年の改正では「地域社会において多世代が交流することの意味が再認識されている」とし、今日において多様な異世代の交流が重要であることを強調している。

また、文部科学省の答申や報告書においても「世代間交流」が言及されていた。とりわけ、2012年の「長寿社会における生涯学習の在り方について」では、長寿社会における生涯学習政策の今後の方向性として世代間交流を促進することを示していた。具体的に、高齢者や高齢社会を正しく理解することや、高齢者と若者がお互い得意分野を活かしながら世代間で協力することにより知識や経験を共有・伝承するために、世代間交流を日常化するための仕組みづくりを行うことなどが述べられていた。この方針に基づき、学校等の教育機関における高齢者と子ども・若者との交流の機会が本格的に設けられるようになった。教育領域との連携により世代間交流の場が量的に拡大されることになった。

## 2. 世代間交流の場の量的増加とその中身

高齢者の生きがい対策の展開の中で、どのような高齢者と子ども・若者の交流事業が実施されてきたかについてその中身を検討する。1970年代の世代間交流は、老人の自殺や孤独死といった老人問題に対応するものであり、高齢者は主にサービスの受け側としてとらえていた。全国社会福祉協議会は「老人福祉のための全国運動」、「孤独死老人ゼロ運動」を提唱し、社会福祉協議会やボランティアによる友愛訪問、ホームヘルプ、老人給食サービスを各地で展開した。そのなかで配食・会食サービスでは、老人と主婦たちとの心のふれあい交流がみられていた（宮里・土志田1994）。これが1970年代後半になると、高齢者をボランティアサービスの受け手としてばかりでなく、高齢者自身によるボランティア活動が、孤独をなくし生きがいを得る視点から論じられるようになった。例えば、老人クラブによる児童福祉施設の一里親の会や昔の遊びを子どもに伝承する活動などが行われた。こうした活動が本格的に行われるようになったのは1980年以降である（宮里・土志田1994）。

1984年に旧文部省により実施された「高齢者の生きがい促進総合事業」は、6つの柱のなかに世代間交流事業が盛り込まれており、高齢者と若い世代との相互理解を深めるため、高齢者と若い世代でグループを構成し、野外活動、創作活動、緑化活動等が行われた（斎藤1994）。そして、1989年旧厚生省では、長寿社会開発センターや各県の長寿社会推進機構の整備、市町村をモデルとする「高齢者の生きがいと健康づくり事業」を実施し、老人クラブの助成事業も実施されていた（斎藤1994）。老人クラブは1986年度に旧厚生省による「老人クラブ社会参加モデル事業」から支援を受けられ、高齢者の生きがい対策の下で発展・拡大してきた代表的な高齢者団体である。老人クラブは、高齢者の主体的な団体として高齢者

の生きがいつくりや健康づくり、ボランティア活動のような様々な活動に取り組んでいた。とくに、「老人クラブ 21 世紀プラン」では、今後の方向性として伝承活動や交流活動をとらえ、高齢者が壮年・青年・少年・幼児の各世代と連携・協力する活動に心がけることを示した。政府の積極的な支援により老人クラブの数や会員は全国に増え続けた。従来、行政主導による高齢者の生きがいの場の提供が行われてきたのに対し、この時期からは社会福祉協議会、福祉施設、NPO 法人、ボランティア団体などの民間領域からの参与・提供を促していた。2000 年以降、財政難や高齢者の増加などの影響から、1990 年代から行われた民間領域の参与をより積極的に取り入れるようになった。2010 年に入ってからは、少子化の深刻や子育ての問題などに伴い、教育領域においても高齢者の人材を活用し、社会貢献を求めることから、地域の異世代との交流を積極に取り組む方針へと展開されていた。

要するに、1980 年代は高齢者の生きがいを創造するために政府のもとで提供されてきた生きがいの場が、1990 年、2000 年に入り、民間領域の参与が推進され、2010 年代には地域における民間領域による提供が拡大されていた。さらに教育分野による生きがいの場の提供も設けられた。近年は、地域共生社会という対策の方向性の下で、地域住民の主体的な参与が求められ、推進されている。

### 3. 高齢者の生きがい対策における子ども・若者の交流事業の課題

高齢者と子ども・若者の交流活動は、高齢者の生きがい対策がみられた 1960 年代には、高齢者の生きがいつくり事業のなかで一つの活動として用いられていた。1986 年の『長寿社会対策大綱』のなかで「学習・社会システム」分野に位置づけられてから、その後の『高齢社会対策大綱』において高齢者と子ども・若者の交流活動（世代間交流）が強調されるようになった。高齢者と子ども・若者の交流事業は、高齢者の生きがい対策の一環として用いられてきたことが確認された。

高齢者の生きがい対策における高齢者の生きがいへのとらえ方は社会環境の変化に伴い変わってきた。1980 年代に旧文部省による生涯教育から生涯学習へと政策転換は、生涯いつでも、どこでも自由に学ぶことから高齢者の自己実現や生きがいを強調し、学校や社会教育の拡充、文化・スポーツの振興といった学習機会の確保に重点をおいたものであった。しかし、2000 年代以降、少子高齢化が進み、高齢世帯の増加や介護保険制度の導入等の背景に、高齢者の生きがいは、社会参加を通じた健康維持や介護予防を強調するようになった。さらに、近年では高齢者個人の学びの達成感や満足感にとどまらず、高齢者を地域の支え手として捉え、社会的役割を担うことが要請されている。こうした高齢者の生きがいへのとらえ方の変化は、高齢者と子ども・若者の交流活動にも反映され、高齢者と子ども・若者との交流活動は拡大してきているものの、子ども・若者とのかかわりによる高齢者の生きがいやかかわり支援の必要性等についての認識は、欠如していると考えられる。

子ども・若者とのかかわり活動を通して求められるべき高齢者の生きがいは、高齢者と子ども・若者との情緒的相互作用に基づいた心理的つながりによるものである。現況の高齢者の生きがい対策をこのような視点から洗い直すことで、高齢者と子ども・若者の交流活動の

質を高めていくことが求められる。

## 第9章 考察

本章では、第1章と第2章において行った高齢者の生きがいやジェネラティビティ、高齢者と子ども・若者の交流に関する先行研究の検討及び第4章から第8章にわたって行った参加高齢者及び支援者に対するインタビュー調査結果等を踏まえ、総合的に考察する。具体的に、第1節では高齢者個人レベルを中心に考察し、第2節では地域社会レベルを、第3節では制度・政策レベルについて考察する。

### 第1節 子ども・若者との相互作用・相互関係性に基づき発揮されるジェネラティビティは高齢者の生きがいへ

本研究の研究課題1において、子ども・若者とのかかわる地域活動に積極的に参加している高齢者を対象にインタビュー調査を実施し、ジェネラティビティの視点から、子ども・若者とのかかわりが高齢者の生きがいへ及ぼす影響を明らかにすることを設定した。

本節では、参加高齢者及び支援者へのインタビュー調査の分析結果を踏まえ、以下のような5点に分けて考察を行う。①子ども・若者とのかかわりから高齢者の生きがいに至るまでのプロセスや各段階における特徴について検討する。②各類型におけるプロセスの特徴について述べる。その後、③豊かな生きがい感が得られた高齢者から示唆される点について検討し、④男女によるジェネラティビティの様相、⑤今日におけるジェネラティビティの意味等について考察する。

#### 1. 子ども・若者とのかかわりから生きがいに至るまでのプロセス

##### 1) 子ども・若者とのかかわりから生きがいに至るまでのプロセスの全体像

第4章高齢者インタビュー調査結果と第5章参加高齢者の生きがい感の数値化においてMcAdams and Aubinによるジェネラティビティの概念を参考に検討した。類型にかかわらず、高齢者が子ども・若者とのかかわりを通して生きがいに至るプロセスは、関心段階―行動段階―意味段階を経ていることが示された。なお、本研究の分析結果から、各段階を構成する諸要素とともに、要素の下位概念が示された。各段階を構成する要素やその下位概念を含む生きがいに至るプロセスは以下の通りである。

地域における子ども・若者とのかかわりに参加している高齢者は、参加する前の関心段階において【次世代への関心】とともに【子ども・若者との距離感】を抱えている。次世代への関心が行動に移る局面には、子ども・若者とのかかわりが提供される場への意味付けが位置し、そこを経由して行動段階に移行する。行動段階の中では、3つの過程が存在する。高齢者は、子ども・若者との【ふれあい・かかわり】に参加し、子ども・若者とのかかわりから【肯定的な感情】を感じる。また、継続的なかかわりを通して高齢者と子ども・若者の間には相互関係性が築かれ、かかわっている【相手への思いにもとづく行為】を行う。このような行動段階における【ふれあい・かかわり】→【肯定的な感情】→【相手への思いにもとづく行為】という一連の過程は循環し、次の過程の強化につながる。重なる一連の行動過程

を通じて高齢者は、現在のかかわりの満足感だけではなく、自分の中年期を肯定的に評価するとともに、今後の生き方に子ども・若者を意識した【次世代との未来の物語】を描く意味づけに至る。

## 2) McAdams and Aubin との比較から明らかになった点

McAdams and Aubin が示したジェネラティヴィティの展開過程及び構成要素と比較検討し、以下の4点が本研究において新たに示された。

第1に、関心段階において高齢者は、内面欲求に基づいた「次世代への関心」とともに、今の「子ども・若者への距離感」が存在していることである。McAdams and Aubin は、ジェネラティヴィティを動機づける源泉として内的欲求と文化的要求を提示し、「次世代への関心」に影響を与えたとした。彼らは動機づけに焦点をあててきているため、実際に高齢者が子ども・若者とのふれあいやかかわる機会が得られないことや、子ども・若者の風景や態度から感じる距離感・疎外感といった高齢者が抱えている状況は考慮されていない。しかし、高齢者の持つ次世代への関心をより明確に把握するためには、高齢者が置かれている状況とともに、それに伴う感情や認識を踏まえることが必要である。

第2に、関心段階と行動段階をつなぐ要素として、子ども・若者とのかかわり活動を提供する機関や団体に対しての意味付けが存在し、この意味付けは、子ども・若者とのかかわり活動に安心して参加できるようにしている。子ども・若者とのかかわり活動が提供される所は、高齢者に心理的安定とともに、新しい人間関係や生活上の必要な情報等が得られるため、高い信頼感を得ている。そこで行われる子ども・若者とのかかわり活動に高齢者は、安心して気楽に参加することができるのである。したがって、地域における高齢者と子ども・若者とのかかわり活動を企画する際、その場が高齢者にどのような意味を持たせるかは、子ども・若者とのかかわり活動への参加促進に深く関係しており、高齢者に心理的安定感を提供する居場所のような機能を果たすことが重要であると考えられる。

一方、McAdams and Aubin は関心段階と行動段階をつなぐ要素として、「積極的関与」と「信頼」というものを示しており、本研究の結果とは異なる様相である。「積極的関与」とは、日々の生活における次世代とのかかわり合いや他者に良い結果をもたらそうとする意図をもったケア、または、社会に重要な寄与をしようとする意図をもった創造的関与等である。「積極的関与」には労力や時間をかけるだけの価値があるという「信念」に深く関係しており、この信念の根底には人類の発展を信じていることがある(岡本ら2018:91-132)。要するに、McAdams and Aubin は高齢者の「次世代への関心」が「行動」としてあらわれるその間に、次世代と積極的にかかわりたいという思考があり、その思考に対する価値付与から支えられていることが理解できる。

なぜ、本研究の結果と異なっているのか。本研究における調査対象の高齢者は、子ども・若者への関心や好感は持っているものの、積極的にかかわりたいという意志から子ども・若者とのかかわり活動に参加したわけではないことがあげられる。上記で記述したように、利用している機関を居場所のようにとらえているため、そこで行われる子ども・若者とのかかわり活動に気軽に参加することができたからである。

第 3 に、行動段階における高齢者の感情や行動が具体的に示されている。McAdams and Aubin の行動段階では、創造、扶養、提供として大分類しているだけで、そこにおける高齢者の感情や行動の変容については明らかにされていない。本研究では高齢者は、子ども・若者とのふれあいやかかわりを通して、一次的に肯定的な感情を得られる。また、密な相互作用は親密な相互関係性を構築し、子ども・若者への影響を意識した行動が生じ、これは、肯定的な感情の後のステップとして現れることが示された。

第 4 に、意味段階において高齢者が、子ども・若者とのかかわりから得られる意味づけとは、高齢者の過去や現在、未来にわたるものであり、次世代を意識する内容である。McAdams and Aubin は、最後の要素として物語ることを強調し、語ることを通して以前の諸要素との相互作用を行い、ジェネラティヴィティが完成されるという。しかし、語ることの重要性は強調しているものの、語りから何が見えるかについては示していない。本研究からは、過去への回想や自己評価は、自己肯定感につながり、現在の満足感、人間関係によるものが多く、自己存在感や有用感につながっていること、また、残る人生の意欲とともに、次世代への期待や関心が含まれる未来志向的な意味付けに至っていることが明らかになった。

## 2. 支援者によるかかわり支援をふまえた各類型における生きがいの特徴

子ども・若者とのかかわり活動において高齢者は、関心段階—行動段階—意味段階を経て多様な生きがい感に至ることが示された。ここでは、各類型にみられる特徴について述べる。

類型 I は、高齢者と子ども・若者の時間の共有とともに、支援者によるかかわり支援が多く行われる形態であり、「積極的つながり型」と命名できる。類型 I を提供する機関は、地域カフェを運営し、基本的に地域における住民の集まり場という機能を持っている。それに加え、支援者は、高齢者と地域の大学生がかかわる複数のプログラムを企画し提供している。高齢者と若者がかかわるプログラムの中で、高齢者と子ども・若者の間に、円滑な相互作用を誘導するために、座席配置や協働するレクリエーションを入れるなど、かかわりの環境造成に詳細な仕掛けを取り入れている。そこに参加している高齢者は、高齢者のインタビュー調査結果や生きがい感の尺度を用いた評価から示されたように、子ども・若者を意識し、共に未来を描く意味づけが一番多くみられる。また、生きがい感尺度の結果では、ほとんどの高齢者が平均値を上回っており、半数以上が高得点を獲得している。要するに、類型 I は、高齢者と子ども・若者のふれあいができて、さらに、両世代の相互作用と関係性を重視した積極的なつながりを支援している。積極的つながりを支援している所での高齢者の生きがいは、ジェネラティヴィティのある意味付けが豊富にみられると考えられる。

類型 II は、高齢者と子ども・若者の共有する時間は多いが、支援者によるかかわり支援は殆ど行われていない形態であり、「主体的自由交流型」と命名できる。類型 II を提供する機関は、類型 I と同様に、地域カフェを運営し、地域住民の集まり場という機能を持っているが、類型 I のような支援者による意図的に企画された高齢者と子ども・若者のかかわり支援は提供していない。その代わりに、地域住民の意見が反映された誰でも利用できるフリースペースを確保し常時提供している。支援者は、フリースペースを利用する高齢者や子どもを

見守り、交流を希望するニーズに応じ、利用者同士をつなげる支援または活動に必要な道具等を支援する程度の補助的な支援を行う。支援者による補助的支援を行う理由として、類型Ⅱの機関は、利用者の主体性を大事にしていることがあげられる。フリースペースで地域の高齢者と子どもが集まり、空間を共有することから両世代の間で接点が発見され、活発なかかわりにつながっていくのである。こうした点から類型Ⅱは、主体的自由交流型といえる。

しかし、類型Ⅱのように、空間を共有することで高齢者と子どもとのかかわりが生まれるとは限らない。高齢者の語りに示されたように、定期的・継続的に行うことは安易ではなく、高齢者と子どもの自由交流の限界がある。類型Ⅱのように、空間を共有だけで高齢者と子どもの間で自由交流が生まれた理由はどこにあるのか。高齢者インタビューの分析から、自由交流が成立する条件として次の2点が推測される。1点目、自由交流が成立するためには、高齢者と子どもの共通の関心事が存在することである。例えば、囲碁、将棋、工作などの共通する関心事が接点になり、声をかけてかかわることができた。2点目、子どもの興味が維持されることである。自由交流の成立もそうであるが、かかわりを継続するためには、子どもの興味や意欲の維持が重要である。つまり、自由交流における高齢者と子どものかかわりの成立や継続は、子どもの方から大きく影響を受けている。

類型Ⅱにおける高齢者は、共通の興味を持つ活動が子どもとつながる接点になり、関心段階と行動段階において類型Ⅰに似通っている内容がみられるが、意味段階における高齢者の意味付けは、異なる点がみられる。まず、類型Ⅱの調査協力高齢者のほとんどが男性であるため、子どもとのふれあい・かかわりから過去を回想しているが、中年期の自己評価には至らなかった。そして、子どもとのかかわりから感じる現在の満足感や感情の内容は似通っているが、今後の生き方や未来に関する意味付けにおいては、子どもの成長に必要な地域環境を考えることから、子ども・若者を意識し、共に未来を描く意味づけがみられる。また、高齢者の生きがい感は、全体の平均値より上回り、一定区間に集まっている傾向から、参加高齢者の間に大きな個人差はみられず、同じ傾向の生きがいに至ると考えられる。

類型Ⅲは、高齢者と子ども・若者の時間の共有とともに、支援者によるかかわり支援が少ない形態であり、「見慣れる型」と命名できる。類型Ⅲを提供する機関は、高齢者サロンと子育てサロンを一緒に開催し、それぞれの集まりの時間もある一方で、体操や食事、季節イベントなどを共同で行うことで高齢者と子ども、その親とのつながりを図っている。支援者は、自然的なふれあい・かかわりからお互いを見慣れていくことを重視するため、類型Ⅱと同様に、意図した交流プログラムや支援者によるかかわり支援は行っていない。支援者によるかかわり支援がないことは類型Ⅱと同様であり、時間の共有だけが、多少分かれている。類型Ⅱのような高齢者と子どものかかわりがみられない。そこには、時間の多少の差よりは、かかわる子どもの年齢に起因するのではないかと考えられる。類型Ⅲの子どもは低年齢で幼児期の子どもが多いため、類型Ⅱのような高齢者と子どもに共通の関心事がなく、かかわりの成立条件を満たしていない。共同開催する小活動において、高齢者と子どもを交えるような工夫した仕掛けは取り組んでいないため、高齢者と子どもは、各サロンの集団で参加している傾向がみられる。類型Ⅲは、高齢者と子どもがお互いの存在を自然のかかわりの

なかで見慣れていくような、見慣れる型といえる。

一方、高齢者のインタビュー調査結果や生きがい感尺度の結果からも、他の類型に比べ、子どもとのかかわりから得られる意味づけの内容は少なく、得られている意味付けは高齢者自分自身に向かっている傾向がみられる。また、生きがい感の数値化では、類型Ⅲのすべての高齢者が全体の平均値を下回り、一定の区間に集まっていることから、類型Ⅲにおける参加高齢者の生きがいは同じ傾向であることが推測できる。要するに、類型Ⅲでは、支援者が高齢者と子どもとのかかわりの目標としていること、つまり、両世代が見慣れることが、高齢者の語りからみられており、その目標は達成していると評価できるが、高齢者と子どもとの相互作用や関係性が不十分であることがうかがえることから、子どもを意識した高齢者の生きがいに至ることは期待しがたいと考えられる。

類型Ⅳは、高齢者と子ども・若者の共有する時間は少ないが、支援者によるかかわり支援は多い形態であり、「目的評価型」と命名できる。類型Ⅳは、支援者が、地域の特徴や利用者のニーズ、社会問題として注目されている世代間問題を踏まえ、高齢者と子ども・若者の交流プログラムを企画し、提供するものである。プログラムへの参加時間の他、類型Ⅰのように同じ空間や時間を共有することは殆どない。プログラムの目的が明確に示されており、その目的を達成するためのプログラムの内容が組み込まれている。また、プログラムは、一年単位に進める場合が多いが、プログラム終了後の評価についても企画段階から考慮される。こうした特徴から類型Ⅳは、目的評価型ともいえる。類型Ⅳは、支援者による意図的なプログラムであるため、高齢者と子ども・若者の交流自体が主な目的であるものか、それとも、手段として活用されるかによって、支援者によるかかわり支援の程度が異なると考えられる。

プログラムにおいて高齢者の生きがいは、活動内容による影響よりは、高齢者と子ども・若者との密接な関係形成がされているかどうかにかかわっている。類型Ⅳでは、支援者によるかかわり支援の視点から2つのプログラムに分けられる。高齢者と子ども・若者とのかかわりを個人対個人及び集団対集団で適切に組合せたプログラムでは、子どもを意識した高齢者の生き方や未来を描く内容の意味付けがみられているが、高齢者と若者との意図的なかかわり支援を取り入れていないプログラムでは、次世代を意識した生きがいの内容が少なく、高齢者個人に向かう生きがいの内容であった。そして、高齢者の生きがい感の数値化をみると、すべての高齢者は全体の平均値を上回り、得点範囲は類型Ⅰのように広がっている。上記の支援者のかかわり支援と高齢者の意味付けの傾向から予想できるように、高得点を得た高齢者は、支援者によるかかわり支援が行われたプログラムであった。類型Ⅳの検討からは、すべてのプログラムが支援者によるかかわり支援が行われているとは限らないことが確認された。高齢者と子ども・若者の交流プログラムの自体が目的なのか、手段なのかによってその重要度は変わると思われる。また、プログラムは、評価をしなければならない点から、満足感を評価する質問紙評価や聞き取りから、フィードバックを受けて次のプログラムの企画に反映している。

以上、各類型における支援者によるかかわり支援の特徴と高齢者の生きがいについて考

察し、次のような点が明らかになった。第1に、各類型にはそれぞれの目的があり、それに応じた高齢者の生きがいの内容がみられる。目的とその効果という視点からみると、各類型は適切な高齢者と子ども・若者のかかわり場を提供している。第2に、ある特定の類型だけが、特定の生きがい感を得られるのではない。それぞれの4つの類型の中で、似通っている生きがい感がみられる。第3に、支援者によるかかわり支援がある類型では、子ども・若者を意識した生きがいがみられる傾向がある。これらのことから、子ども・若者とのかかわりから得られる高齢者の生きがいにおいて、最も大事なことは、高齢者と子ども・若者が相互作用のできる適切な時間の共有とともに、高齢者と子ども・若者が密接にかかわっており、親密な相互関係性が形成されることであるといえる。

### 3. 高齢者のジェネラティビティの発揮は豊かな生きがい感の獲得へ

第4章における高齢者インタビュー調査の分析結果と第5章における高齢者の生きがい感の数値化した結果を鑑みると、類型Iにおける高齢者は、生きがいと見なす多様な感情がみられるとともに、生きがい感の数値化においても高得点を獲得している。このような結果は、類型Iのみならず、類型IVにおいても高得点を獲得した高齢者から同様の傾向がみられる。高得点を獲得した複数の高齢者の語りから次のような共通点が確認された。まず、高齢者は、このかかわりが、子ども・若者にも影響を与えると想定していること、また、高齢者本人の行為は子ども・若者に影響していると信じていること、そして子ども・若者が暮らしていく地域のことを考えていることである。これらの共通点は、McAdams and Aubin が述べている「積極的関与」と「信念」の意味に似通っていると考えられる。高齢者は、相互に影響を与えるというかかわりの意味を明確に理解し、子ども・若者に役に立てばという思い、さらには、子ども・若者が暮らす地域が良くなればという思いを込めてかかわっているからである。意味段階において示されている内容という点がMcAdams and Aubin と異なるが、彼らが提示したジェネラティビティの7つの要素がすべてみられていることから、高得点の高齢者はジェネラティビティが十分発揮されていると考えられる。

ジェネラティビティが発揮されている高齢者は、子ども・若者とのかかわりにより過去と現在、未来にわたり意味付けが得られている。子ども・若者とのかかわりにより中年期への自己評価や、現在の情緒的なつながりや満足感は、高齢者が自分自身を肯定的にとらえ、自己存在感と自己有用感につながっている。長谷川ら(2001)が述べた過去と現在、未来における「生きがいの対象」が、子ども・若者とのかかわりを通して高齢者の心に思い浮かんでくる。同時に伴って湧いてくる感情は、自己存在感、自己有用感、生きる意欲といった未来に向かう気持ちや価値意識が含まれている。さらに、上記で記述しているような次世代への期待やより良い地域へのニーズなどが得られていることは、豊かな生きがい感の獲得につながっていると考えられる。

### 4. 男女によるジェネラティビティの様相

ジェネラティビティを考える上、留意すべき点として、ジェンダーの視点が欠けている

ことをあげた。ジェンダーとジェネラティヴィティに関する先行研究では、女性の方が、ジェネラティヴィティが発揮しやすい傾向があると報告されている (McAdam & Aubin 1992)。本研究の生きがい感の統計的検証の結果からは、男性高齢者と女性高齢者におけるジェネラティヴィティの相違の有意性は示されていない。しかし、高齢者の語りの検討からは、次世代への関心において、女性高齢者は自身の過去の子育ての経験に基づいている一方で、男性高齢者の場合は、仕事上の経験に基づいていることがみられる。これは、男性のジェネラティヴィティは自己本位的な傾向がある一方で、女性は他者への受容的態度の傾向がみられる (串崎 2005; 相良・伊藤 2017) という先行研究の結果に関連していると思われる。

また、子ども・若者とのかかわりから得られる意味において、過去への回想は男女ともにみられているが、女性高齢者は、過去の子育てを回想し、自分が生きてきた人生への肯定的とらえ方につながっている一方、男性高齢者は、自分の幼い時を回想することにとどまり、生きてきた人生への肯定的な感情にはつながっていない。この結果からもジェンダーによるジェネラティヴィティの様相の相違はありと想定されるが、これがジェンダーによるものか、子育ての経験によるものかといった主な関係要因についての検討が求められる。

## 5. 今日における高齢者のジェネラティヴィティの意味

Erikson (1963) はジェネラティヴィティを「次世代を確立させ導くことへの関心」と定義した。ジェネラティヴィティは、子どもの有無を前提としている概念ではなく他者への利他的な関心と創造へとその対象を広げ向ける態度が前提である (森岡 2018 : 32)。また、個人内の営みとして達成されるものではなく、この概念それ自体が関係概念かつ過程概念 (森岡 2018 : 38) が含まれている。

他者とながれぬ、また、他者への関心が希薄化している今日の社会において、高齢者のジェネラティヴィティは果たして可能であるかが問われる (岡本ら 2018 : 7-8)。現代社会において高齢者の生きがいを考える時に、次世代に大切なものを伝えるという価値は弱くなってきており、高齢者側もその役割を十分に果たせなかったが、それに関わらず、高齢者は、子ども・若者とのかかわり活動を通して次世代に何かを伝えようとしている。本調査で示された高齢者のジェネラティヴィティは、Erikson が示した人類への信頼や信念に基づいた次世代への関心や行動とまでは言い難いが、高齢者はかかわっている子ども・若者の心理的かつ社会的な成長を考え、人生を先に歩んできた先輩として伝えるべきと思うことについて言葉や行動で伝えようと努力していた。

例えば、ある高齢者は、『ありがとう感謝の気持ちでよう、やっぱし、親子でも感謝、ありがとうということは分かるだろう。大事なことだと思ふよ』という語りのように、90年近く生きてきた人生の中で、感謝する気持ちは人にとって大事なものであり、伝えるべきと考え、子どもに対し小さな事でも「ありがとう」という言葉を伝えている。もう一人のある高齢者は、『同じ地区だから、幼稚園の子どもたちも。お互いに助け合っていくのよ』という語りのように、高齢者であれ、子どもであれ、地域社会の構成員としてお互いに助け合っ

て生きていく存在であるという共同体意識が大事であることを大人が伝えなければいけないと考えている。また、祖父母との交流が少ない今日の子どもにおいて高齢者とのかかわりは、『大きくなっても(中略)活動を通してお祖母さんってこういう人なんだとを感じるんじゃないかな』という語りのように、高齢者からもらった関心や愛情は、高齢者に対する漠然なイメージに残るかもしれないが、その子どもが大人になり、また高齢者になる時に、影響を与えるかもしれない。一方、高齢者の中では子ども・若者の態度や考え方に対する助言をする人もいる。『うるさいなと思われても言わなければならないとあかんって。それもね、我々の役目の一つかなと思ってるね』という語りのように、子ども・若者に綺麗な言葉だけではなく、子ども・若者の心の成長のために、大人として果たす役割が高齢者にあると信じている。

一方、高齢者とかかわっている子ども・若者は、どのように思っており、何が伝えられているのか。本研究で聞き取った子ども・若者の感想をあげてみる。『私たちが孫のように思ってくれました。たくさん褒められたり、たくさん暖かさが感じられた』のように、高齢者が子ども・若者に対する条件のない愛情を子ども・若者は感じとっている。子ども・若者は高齢者とのかかわりから、高齢者に対するイメージは肯定的に変わっている。『お年寄りの方は、私たちと違っていつも元気に、明るい姿で誰よりもこの時間を楽しんでいた』『お年寄りの情熱は私たちよりもずっと若かった』との語りのように、高齢者に対するイメージが「消極的」「怖い」「難しい」というものから「情熱」「優しい」「親近感」というイメージに変化した。また、子ども・若者は高齢者とのかかわりを通して自身の未来を描いていた。『お年寄りをみて、どんなふうに自分は年を重ねていくのかなとか、漠然だけど、思ったことはある。こんな方になりたいなって明るい感じで』『お年寄りは先生に近い感じである。お年寄りから、紙芝居をしてくれたり、教えてもらったことがあった。学べるところがたくさんある。その中には、英語のうまい方もいて「格好いい」と思った。そのお年寄りみたいに、私も英語のうまい人になりたい。憧れている』の語りのように、高齢者の姿は子ども・若者に対し、ロールモデルとなり、子ども・若者の描く未来に影響していた。

岡本(2014)は、人と人の対面での伝承や技術の受け継ぐようなことをミクロな継承であり、社会における価値を継承することをマクロな継承であるとしている。この観点から子ども・若者とかかわる地域活動に参加している高齢者は、表面的にはミクロな継承であるが、社会を維持するための重要な価値を継承するマクロな継承も行われていると考えられる。

## 第2節 ジェネラティヴィティを発揮する高齢者の生きがいを促すための子ども・若者とのかかわり支援

### 1. 類型化の特徴と意味

本研究は、研究課題2において、高齢者と子ども・若者のかかわる地域活動が高齢者にもたらす生きがいを促すために、どのような役割を果たしているかを明らかにすることを設定した。支援者による高齢者と子ども・若者のかかわり支援を明らかにするために、「時間

の共有」と「支援者によるかかわり支援」を軸とした本研究における類型化を行った。両軸の多少により4つのタイプの交流の場に分類された。

第6章では、各類型に高齢者と子ども・若者のかかわる地域活動を行う機関や団体の支援者を対象にインタビュー調査を実施し、高齢者と子ども・若者のかかわる地域活動の目的やその方法（活動内容やかかわり支援）、見える効果などが、類型別によって異なることが確認された。加えて、第7章では、第4章で見出された各類型の高齢者の生きがいプロセスに第6章の各類型の支援者によるかかわり支援を照らし合わせて検討した。その結果、各類型では、高齢者と子ども・若者のかかわる地域活動において目的や重視する点があり、それに伴った支援者によるかかわり支援を行っており、高齢者の生きがい感もその目的に該当するものが得られていることが確認された。とりわけ、高齢者と子ども・若者との相互作用や相互関係性を意識したかかわり支援のある類型では、高齢者と子ども・若者が、個人対個人で密接にかかわるよう、仕掛けを行っており、そこにおける参加高齢者の生きがいは、子ども・若者を意識した意味付けの内容が多い傾向がみられた。一方、高齢者と子ども・若者のかかわりを通して両世代がお互いに見慣れることを重視した類型では、支援者による高齢者と子ども・若者の相互作用や関係性に影響を与えるような支援は行っておらず、参加高齢者の生きがいは、子ども・若者による肯定的な満足感は得られるが、高齢者の自己中心的な意味付けの内容が多くみられた。

しかしながら、高齢者と子ども・若者との相互作用や関係性を促すために、支援者による積極的なかかわり支援は必要不可欠なものではないことが類型Ⅱの結果から示された。高齢者と子ども・若者との自由交流の形態、そして支援者による補助的支援が行われる交流の場においても、高齢者と子ども・若者との間に十分な相互作用と相互関係性が展開され、子ども・若者を意識した高齢者の生きがい感が得られる。ただし、前述したように自由交流が成立するためには、両世代の共通する関心事があることや子ども側の興味が維持されることが求められる。

要するに、子ども・若者とのかかわりを通して豊かな高齢者の生きがいをもたらすためには、高齢者と子ども・若者の密な相互作用と相互関係性が非常に重要であり、適切な支援者によるかかわり支援は高齢者と子ども・若者との相互作用や相互関係を促進しているということが示されたといえる。一方、支援者によるかかわり支援をジェネラティヴィティの視点からみると、異なる世代をつなぐ、または、異世代の相互作用を図るための支援は取り組んでいるが、高齢者は子ども・若者に大切な価値を伝えて、子ども・若者に伝えられるようなジェネラティヴィティの意識は不十分であり、ジェネラティヴィティを意識した支援までは至っていないと考えられる。

本研究における「時間の共有」と「支援者によるかかわり支援」を軸とした類型化の持つ意味は、高齢者と子ども・若者との相互作用と相互関係性に基づいたかかわりの質を重視する分類であると考えられる。これはカプラン（2004）が述べた「世代間関与の深さ」に関連する分類の一つであると考えられる。高齢者と子ども・若者のかかわりの質を重視するため、ある特定の活動が必ずしも特定の類型に該当することではない。例えば、地域で行われるおま

つりの場合、高齢者と子ども・若者の相互作用や相互関係性を意識したかかわり支援が行われているとすると、時間の共有程度によって類型Ⅰまたは類型Ⅳに該当することである。しかし、おまつり自体が目的で高齢者と子ども・若者の相互作用や相互関係性に関するかかわり支援は行われていないとすると、類型Ⅱや類型Ⅲに該当するということになる。要するに、地域において取り組んでいる様々な高齢者と子ども・若者のかかわり活動は交流の質を中心に新しく分類できると考えられる。

## 2. 高齢者のジェネラティヴィティが發揮できる支援者によるかかわり支援

これらの分析結果と前節に述べた内容を踏まえ、高齢者と子ども・若者のかかわる地域活動が、ジェネラティヴィティを發揮する高齢者の生きがいを促すために、必要とされる支援者による高齢者と子ども・若者のかかわり支援について考察する。地域における高齢者と子ども・若者のかかわり活動は、支援者がかかわりの場を設定し、高齢者と子ども・若者という参加者に提供するところである。かかわりの場の設定を想定する際、5つの点が示唆される。

第1に、高齢者と子ども・若者のかかわりが行われる場所は、高齢者にとって、居場所として心理的安定感を提供することが重要である。類型に関わらず、高齢者は利用している機関を心地よく感じており、高齢者のニーズが充足される場所であった。支援者も居場所としての機能を意識して環境や雰囲気づくりに取り組んでいた。機関への満足感や信頼感のある高齢者は、子ども・若者とのかかわりという新しい活動にも軽く参加できると思われる。

第2に、多くの高齢者は、子育ての経験などから子ども・若者への興味や関心が向かう傾向はあるが、子ども・若者に対する物理的・心理的距離感を抱いていることを理解する必要がある。

第3に、高齢者と子ども・若者のかかわり活動においては、目的に沿ったかかわり支援を行う必要があり、高齢者にもたらす生きがいは、目的やかかわり支援に相応する結果であることを理解しなければならない。ジェネラティヴィティが含まれる高齢者の生きがいを目指すならば、高齢者と子ども・若者とのかかわり支援に多面的な取り組みが求められる。高齢者と子ども・若者の集団対集団のかかわりとともに、個人対個人のかかわりを適切に組み合わせる方が、高齢者と子ども・若者との相互関係性の構築を促すと考えられる。

第4に、高齢者と子ども・若者のかかわり活動の参加者同士での振り返り会を設定し、高齢者と子ども・若者がかかわりを通して感じることをお互い話し合う機会が求められる。多くの高齢者の語りでは、『子ども・若者は、高齢者とのかかわりをどのように捉えているか分からない』『自分の行動が役に立っているかどうか分からない』のような内容がみられ、高齢者は、子ども・若者への影響が気になっていることが分かる。ある程度かかわり活動が進行している段階で、振り返り会や中間評価会を設けてお互いにどのように感じているかについて話し合う場面があると、高齢者や子ども・若者は、自分のやっていることが相手の喜びにつながっていること、または、役に立っていることを認識し、漠然と考えたことが確実なものとして確信に変わる。言い換えれば、高齢者は、子ども・若者との振り返りの言葉

から、自己存在感や自己有用感が明確に感じられるのである。

高齢者にもかかわりを通して感じられることを語ることは重要である。第 1 節で言及したように、次世代への関心と行動からもたらす意味は、語るという行為を通してたどり着くものである。McAdams and Aubin の諸研究においても語りを通してジェネラティヴィティは完成されると指摘している (McAdams & Aubin 1992, 1998) 。しかし、現実的に、高齢者と子ども・若者が一緒に振り返りをするのが難しい場合もあるかもしれない。そのような場合、支援者は、高齢者と子ども・若者の間で、お互いの感想を伝える伝達者としての役割が求められる。本研究の類型Ⅱのような、支援者によるかかわり支援は、補助的なものに限定し、高齢者と子ども・若者の主体的な交流を進めている場合である。類型Ⅱにおいて高齢者と子ども・若者のかかわりが活発に継続されている理由の一つは、高齢者と子ども・若者の間で、それぞれから聞いた感想や反応を伝え、両世代の心理的つながりを強化している支援者の役割があったからである。

第 5 に、振り返り会における高齢者や子ども・若者の意見は、次のかかわりに反映し、活動における参加者らの参画機会を確保し、主体性を高めることが求められる。世代間交流のテーマが、世代間分離への対応から社会問題、特に、地域共同体の問題に取り組む方向へ変化・発展してきているアメリカの過程を鑑みると、今後、日本における高齢者と子ども・若者のかかわり活動も、両世代をつなげることから、地域で直面している問題やニーズに取り組むことへ展開していく可能性が高いと予想される。高齢者と子ども・若者にとって、私たちが創り上げるという意識は、共同体意識につながると考えられる。

### 第 3 節 ジェネラティヴィティを発揮する高齢者の生きがい関連対策

本研究は、研究課題 3 において、高齢者が子ども・若者とのかかわる活動や高齢者の生きがいに関連する対策を批判的に検討し、今後のあり方への示唆を得ることを設定した。

かつて、高齢者と子ども・若者がかかわる活動は、高齢者の生きがい対策の中で取り入れ、拡大されてきた。近年では、地域共生社会という地域の目指す社会像の下で、さらに拡大されている。地域共生社会を掲げる背景の一つとして、地域に蔓延している人と人のつながりの希薄化があげられる。人々のつながりに対する社会的関心は、福祉サービスの提供主体の多様化という政府方針と相まって高齢者と子ども・若者のかかわり場の拡大に影響を与えた。地域において様々な形態の高齢者と子ども・若者がかかわる場が存在し、高齢者に多様な選択肢が提供されるのは望ましいことであろう。しかし、高齢者が、子ども・若者とのかかわりを通して得られる効果や影響が、同世代との交流によるそのものと大きな違いは得られず、ジェネラティヴィティが発揮できる高齢者の生きがいに至らないとするならば、子ども・若者とのかかわりを通して高齢者の生きがい効果を期待している本来の対策の趣旨に相応する結果とは言い難いのではないか。

本章の第 1 節と第 2 節の考察から、高齢者と子ども・若者との密な相互作用と親密な関係形成が重要であり、それに関連するかかわり支援が求められることが示唆できた。しかし、

高齢者の生きがい対策は、少子高齢化においてますます進行していく家族内や社会における高齢者と子ども・若者の関係の希薄化を背景に、高齢者と子ども・若者が出会い・つながること自体に重点をおいて、交流の場を拡大してきた。しかし、その先のつながり、すなわち、高齢者と子ども・若者の間の心理的つながりの重要性や必要性については注目されてこなかった。子ども・若者とのかかわり活動を通して高齢者の生きがいを促すためには、交流の場での支援者によるかかわり支援のみでは限界があり、高齢者の生きがい対策による後押しが求められる。

高齢者と子ども・若者のかかわり場において、参加者の心理的つながりを強調し、かかわりの質を高めるために、対策レベルではどのような支援が必要なのか。これに関してはアメリカの世代間交流の展開過程から示唆を得ることができる。アメリカの場合、世代間交流の全国的な拡大とともに、交流の質の向上を努めてきた。その後押しをしたのは、政府や地方政府による安定的な財政支援とともに、世代間交流の関連機関や団体のネットワークの構築による情報共有や、効果的な世代間交流プログラムの開発・評価を行う基盤ができたことである。同時に、両世代の特性を理解し、スキルを持った専門的な人材養成にも力を注いだのである。要するに、世代間交流の拡大とともに、交流の質を高めるために、行政機関、民間の関係機関、専門家、高齢者や子ども・若者の関連団体などが多方面に努力した結果、アメリカの世代間交流は、社会の一つの有益な資源として活用されている。

したがって、今後の高齢者の生きがい対策は、地域における高齢者と子ども・若者とのかかわり活動において、両世代の心理的距離感を減らし、心理的つながりの質に注目し、高めることが求められる。また、地域で高齢者と子ども・若者とのかかわり場を提供している多様な機関や団体の支援者をつなぐネットワークを図り、かかわりの質の確保を担保するための情報発信・共有を支援することが必要であると考えられる。

以下では、上記の示唆点が実現するためには、どのようなことが必要であるかについて、本研究において議論を進めてきた4類型に即してそれぞれ簡略に考察を行う。

類型Ⅰでは、相互作用を意識した支援者によるかかわり支援が行われていることにより、高齢者と子ども・若者の間に心理的つながりができている。しかし、前述したように、心理的つながりを通して高齢者と子ども・若者の間に何を伝えて何が伝えられたのかということについては、評価はできていない。心理的つながりが評価できる多様な視点からの評価方法の開発の支援が求められる。心理的つながりを含む社会福祉プログラム等々を評価することには高い水準の専門性が求められるため、支援者のスキルアップ教育等の導入や、ソーシャルワーカーの養成教育の段階より評価に関する専門教育の実施が必要であると考えられる。

類型Ⅱでは、参加者が主体的に行う自由交流であるが、支援者による補助的な支援によって心理的つながりはできている。しかし、自由交流が定期的・継続的に行われることは安易ではなく限界がある。支援者は、共通の関心事を持つ高齢者と子ども・若者をつなげる支援が必要である。また、もっと多様な関心事を持っている高齢者や子ども・若者の参加を促すために、地域において地域住民への呼びかけや広報の支援が求められる。

類型Ⅲでは、高齢者と子ども・若者がつながる場は提供しているが、お互いに見慣れることを重視し、心理的つながりまでは至っていない。類型Ⅲは、高齢者サロンと子育てサロンを同時に開催し、高齢者と子ども・若者とのかかわりを促す形態である。他の類型の支援者と異なって長年民生委員としての経験があり、福祉活動に積極的に携わってきた地域住民である。福祉の専門家ではない地域住民が中心にする共生型サロンが増加すると考えられるが、高齢者と子ども・若者とのかかわりをする際に、両世代の心理的つながりを支援できるような、関連専門家からの知識や教育、研修等の支援が求められる。

類型Ⅳでは、高齢者と子ども・若者の情緒的交流を目的としたプログラム型として、高齢者と子ども・若者の心理的つながりは形成されている。今後、日本において地域における社会福祉協議会等を中心に徐々に拡大されていくと予想されるが、プログラムを担当するソーシャルワーカーの経験値に依存することが多い。今後、高齢者と子ども・若者とのかかわり活動が、両世代のつながりを超えて、地域社会の問題を取り組んでいくことが期待されるため、ソーシャルワーカー養成教育の際に、多世代の交流に関連する基礎知識や心理的つながりを重視するプログラムの企画・運営ができる能力を高める教育が求められる。

最後に、これらの心理的つながりに関する支援が一時的なものにとどまらず、継続的な支援が可能な仕組みを確立することが重要な政策課題となる。そのためには、4類型の相違を考慮した国や地方自治体による制度化や地域における関連専門化間のネットワークの構築・交流が求められる。

## 終章 結論と意義

### 第1節 各章で明らかになったこと及び結論

本研究は、高齢者が子ども・若者とかかわる地域活動に焦点をあて、交流の場で共有する時間や支援者によるかかわり支援のあり方が、高齢者の生きがいにどのような影響を与えるかを明らかにするとともに、ジェネラティブィティの視点から、高齢者の生きがいを促す支援のあり方や高齢者の生きがい関連対策について示唆を得ることを目的とした。

地域における高齢者と子ども・若者のかかわりを、時間の共有と支援者によるかかわり支援を軸に類型化し、4つの類型における参加高齢者の生きがいのプロセス及び支援者によるかかわり支援について調査・分析することから、支援者によるかかわり支援は、子ども・若者との相互作用・相互関係性に影響を与え、高齢者のジェネラティブィティを発揮し、最終的には高齢者の生きがいに影響していることが把握された。また、高齢者のジェネラティブィティが発揮できる支援者によるかかわり支援及び高齢者の生きがい関連対策への示唆が示された。まず、各章において明らかになったことを整理したうえで、本研究での結論について述べる。

#### 1. 各章で明らかになったこと

第1章から第9章において明らかになったことについて整理する。

**第1章**では、高齢者の生きがいや高齢者と子ども・若者の交流に関する先行研究を検討した。高齢者の生きがい概念や構造についての検討から、高齢者にとって生きがいは、過去と現在、そして未来を含む生きる価値や意味を与えるものとして極めて重要な概念であること、そして、従来、家族を中心とした日常生活圏内による生きがいは今日の家族形態では期待できず、地域の子ども・若者との活動のような公共圏での高齢者の生きがいの必要性が高まっていることが確認された。また、高齢者への効果や支援者側の役割という視点から高齢者と子ども・若者の交流に関する先行研究の検討からは、子ども・若者との交流による高齢者への効果は、生きがい感と深く関連していること、また、高齢者に肯定的な効果をもたらすためには、理論に基づく支援方法を用いることが望ましいが、関連理論のうち、ジェネラティブィティの視点が有力であることが明らかになった。

**第2章**では、Erikson (1950, 1963) と McAdams and Aubin (1992) を中心にジェネラティブィティを検討し、高齢者のジェネラティブィティは、次世代への関心や、次世代のための行動であり、子ども・若者への関心や交流への継続的な参加、子ども・若者との相互関係性の構築に関与していること、また、高齢期の適応心理特性と正の相関関係である見解から、本研究における高齢者の生きがい変容を明確にするための重要な視点であることが確認された。これらを踏まえ、本研究におけるジェネラティブィティの定義やジェネラティブィティの視点の留意点が示された。なお、本研究でとらえる高齢者の生きがい概念とジェネラティブィティ概念の関係は、高齢者の生きがい概念の中にジェネラティブィティが一部重なっており、ジェネラティブィティが発揮されることで重なる部分は大きくなり、高齢者の生

きがい豊かにするということが示された。第1章と第2章の検討を踏まえ、本研究における3つの研究課題を提示した。

**第3章**では、高齢者と子ども・若者の交流に関する先行研究においては、交流の場での高齢者と子ども・若者のかかわりの程度や交流の場を提供する支援者による支援の影響については考慮されていないことから、既存の交流の場の分類から検討することは不適切だと考え、本研究における交流の場の類型化を試みた。アメリカ・韓国・日本における高齢者と子ども・若者の交流の場を検討から、交流の場を構成する基本要素として、異世代となる参加者、かかわる場所と時間、高齢者と子ども・若者の相互作用を促進する仕掛けといったかかわり支援が見出された。支援者によるかかわり支援の有無または多少は、子ども・若者のかかわりから得られる高齢者の生きがいに影響を及ぼす可能性が高いという想定から、「時間の共有」と「支援者によるかかわり支援」を軸として、支援者のいる交流の場を4類型に分類した。各類型の条件を示し、その条件を満たす調査対象を選定した。

**第4章**では、ジェネラティヴィティの視点から、子ども・若者のかかわりが高齢者の生きがいへ及ぼす影響を明らかにすることを目的とし、類型Ⅰから類型Ⅳにおける参加高齢者のインタビュー調査を実施し、M-GTA分析法を参照し分析を行った。分析する際、McAdams and Aubin (1992)によるジェネラティヴィティの展開過程及び要素を参考とした。

各類型における参加高齢者は、【次世代への関心】と【子ども・若者との距離感】から構成される関心段階から、【心地よい所】を通して子ども・若者とかわる行動段階に移る。行動段階では、かかわっている子ども・若者から【肯定的感情】が得られ、【相手の思いに基づく行為】があらわれることが示された。行動段階において子ども・若者のかかわりが重なるにつれ、高齢者はかかわりに基づいた意味段階に至ることが確認できた。

具体的に、類型毎にみると、類型Ⅰ（時間の共有と支援者によるかかわり支援が多い類型）の参加高齢者は、子ども・若者との交流を通して若者や自己への肯定的な感情を得られるとともに、次世代が暮らしていく地域社会の未来を考える等の未来志向的な今後の生き方がみられた。類型Ⅱ（時間の共有は多いが、支援者によるかかわり支援は少ない類型）の参加高齢者は、子どもと同じ空間を共有する中で、お互い興味を持つ活動があり、自然にかかわるようになった。かかわりが重なるにつれて子どもの成長を感じ、祖父母のような見守りがみられた。類型Ⅲ（時間の共有と支援者によるかかわり支援が少ない類型）の参加高齢者は、普段かかわりの少ない子どものかかわりから癒される等の多様な感情が得られていた。類型Ⅳ（時間の共有は少ないが、支援者によるかかわり支援が多い類型）の参加高齢者は、協力する活動を通して達成感や情緒的な交流を感じていた。また、自己行動は、子ども・若者の人格形成に有意義な影響を与えると認識していることが確認できた。

**第5章**では、参加高齢者の生きがいを客観的なものとして示し、類型や男女による参加高齢者の生きがいへの影響を客観的に把握するために、本研究において作成したジェネラティヴィティを含む高齢者の生きがい感の尺度を用い、参加高齢者の生きがい感の数値化を試みた。その結果、類型Ⅰと類型Ⅳの得点は広い範囲で分布している反面、類型Ⅱと類型Ⅲの得点範囲は集まっていること、また、生活・人生への肯定感をあらかず質問項目では得点

が高く、次世代を意識した未来への積極的・肯定感をあらわす質問項目の得点は低いという傾向は低得点の特徴であること、逆に、高得点では、すべての質問項目の得点が均等に高かったこと、さらに、生きがい感の高得点の人が、子ども・若者とのかかわりから得られる多様な意味づけは、次の積極的な参加としてつながっていることが明らかになった。ジェンダーの視点からの検討では、男性の方が若干平均得点の高い数値がみられたが、男女による有意な差までは明らかにされていない。

**第6章**では、各類型の支援者は、子ども・若者とのかかわる活動を通して高齢者の生きがいを促すために、どのような役割を果たしているかを明らかにするために、支援者のインタビュー調査を実施し、質的分析法を参照し分析を行った。その結果、類型Ⅰの支援者は、高齢者と子ども・若者の交流プログラムを企画し、両世代が交流できる多様な仕掛けを設けていた。類型Ⅱの支援者は、高齢者と子ども・若者が同じ空間を共有することで自然な交流が生まれるという見解から、意図的・計画的な支援は行わず、高齢者や子ども・若者の方から要求があれば支援する補助的なかかわり支援をしていた。類型Ⅲの支援者は、高齢者と子ども・若者がお互い見慣れることを重視し、両世代と一緒に体験できる季節のイベントや体操等の多様な機会を企画していたが、高齢者と子ども・若者へのかかわり支援はみられなかった。類型Ⅳの支援者は、交流を通じた高齢者と子ども・若者の相互理解等を求めた世代間交流プログラムを企画し、交流方法や内容等の運営に意図的なかかわり支援を行っていることが示された。

**第7章**では、第4章と第6章で示された調査結果を照合し、各類型に、関心-関心と行動の境界-行動-意味段階で展開されている高齢者の生きがいプロセスに支援者によるかかわり支援について検討した。各類型においては、高齢者と子ども・若者のかかわりの目的や重視する点によってかかわり支援を行っており、それに相応した高齢者の生きがいが得られていることが確認された。具体的に、類型Ⅰでは、関心-関心と行動の境界-行動-意味段階において支援者による間接的・直接的な支援がみられており、高齢者はかかわっている子ども・若者に親密感を感じ、子ども・若者に祖父母のような立場からできる行為を高齢者の役目である意識していた。類型Ⅱの支援者は、高齢者と子ども・若者がふれあえる場は設定し提供しているものの、利用者の主体性を重要視することから、主体性を支持する補助的な支援に限られていた。そのため、高齢者と子ども・若者とのかかわりの成立や維持は、子ども・若者側に左右される傾向があり、子ども・若者の興味を得て継続的なかかわりにつながっている高齢者は、密な相互関係性が構築され、子ども・若者による多様な生きがいが得られていた。類型Ⅲは、地域における共生型つながり交流を具現化したもので、高齢者と子ども・若者とのかかわりを通じて、両世代が見慣れることを目的としているため、具体的な支援者によるかかわり支援はみられなかった。参加高齢者も子ども・若者とのかかわりから肯定的な感情は得られているものの、今後の生き方は、自己自身に向かう内容であった。類型Ⅳでは、プログラムという特徴上、企画段階からプログラムの目的や方法、交流内容、評価方法などが設定されているが、支援者によって、高齢者と子ども・若者のかかわり支援を具体的に設定する場合と、自然交流を期待し、かかわり支援を行っていない場合があった。積

極的なかかわり支援があるプログラムの参加高齢者は、子ども・若者と親密な関係が形成され、子ども・若者を意識した未来を描いていたが、かかわり支援を行っていないプログラムの参加高齢者は、活動内容への満足感と子ども・若者に対する肯定的な感情にとどまっていた。

**第8章**では、第4章から第7章における検討から示された、子ども・若者とのかかわりに基づいた高齢者の生きがいを促すためには、高齢者と子ども・若者をつなげる支援者によるかかわり支援が求められることを踏まえ、日本の高齢者の生きがい対策の中で、子ども・若者との交流事業が拡大されてきているものの、なぜ、高齢者と子ども・若者をつなぐ支援者の役割やかかわり支援は重視されていないのかという批判的視点から、高齢者の生きがい対策の展開の中で高齢者と子ども・若者の交流事業の意味付けや課題について検討した。

1960年以降、文部科学省（旧文部省）や厚生労働省（旧厚生省）を中心とした高齢者の生きがい対策の展開動向を概観から、高齢者の生きがい対策の一環として高齢者と子ども・若者の交流事業が用いられてきたこと、政府主導の提供からNPO法人や民間、住民等へと提供主体が拡大されてきたこと、近年、地域共生社会実現の下で高齢者と子ども・若者の交流活動や高齢者の積極的な役割が注目されていることが確認された。しかし、1980年代に高齢者の自己実現を挙げていた高齢者の生きがいは、2000年代以降、少子高齢化が進み、高齢者世帯の増加や介護保険制度の導入等を背景に健康維持や介護予防を強調するようになった。さらに、近年では高齢者を地域の支え手として捉え、社会的役割を担うことが要請されている。こうした高齢者の生きがいへのとらえ方の変化は、高齢者と子ども・若者の交流活動にも反映され、高齢者と子ども・若者との交流活動は拡大してきているものの、子ども・若者とのかかわりによる高齢者の生きがいやかかわり支援の必要性等についての認識は乏しいことが示唆された。

**第9章**では、第1章から第8章にわたって行った高齢者の生きがいや高齢者と子ども・若者の交流に関する先行研究の検討や、参加高齢者及び支援者に対するインタビュー調査の結果等を踏まえ、①高齢者個人レベル、②地域社会レベル、③制度・政策レベルに分けて考察した。

①高齢者個人レベルでは、McAdams and Aubin (1992) のジェネラティヴィティの展開過程及び構成要素から検討したことで、子ども・若者とのかかわり活動に参加している高齢者は、関心段階と行動段階を通して意味段階に至る生きがいのプロセスが確認された。また、本研究の分析結果から、各段階を構成する諸要素とともに、要素の下位概念が示されたが、そのうち、関心段階における高齢者の子ども・若者への距離感や行動段階における具体的な高齢者の感情や行動、意味段階において過去や現在、未来にわたり、次世代を意識した意味づけの内容等が新たに明らかになった。

高齢者の生きがいプロセスに支援者によるかかわり支援を照合した結果の考察から、類型Ⅰは「積極的つながり型」、類型Ⅱは「主体的自由交流型」、類型Ⅲは「見慣れる型」、類型Ⅳは「目的評価型」と命名した。また、ある特定の類型だけが、特定の生きがい感を得られるわけではないが、支援者によるかかわり支援が多い類型（類型Ⅰと類型Ⅳ）では、子

ども・若者を意識した生きがいが見られる傾向があることから、高齢者と子ども・若者が密接にかかわり、親密な相互関係が形成されている高齢者は、ジェネラティヴィティの視点が強い生きがい感を得られることが示唆された。本調査で示された高齢者のジェネラティヴィティは、Erikson が示した人類への信頼や信念に基づいた次世代への関心や行動とまでは言い難いが、高齢者は、かかわっている子ども・若者の心理的・社会的な成長を考え、伝えるべきと思うことについて伝えようとしている。一方、こうした高齢者とかがわっている子ども・若者は、怖い・難しいと思っていた高齢者に対するイメージが肯定的に変化し、信頼関係に基づいた高齢者との対話を通して物事をみる観点を広げ、自分の考え方や行動をもう一度考えてみるきっかけになっていることが明らかになった。

②地域社会レベルでは、各類型の支援者によるかかわり支援は、異なる世代をつなぐまたは異世代の相互作用を図るための支援は取り組んでいるが、高齢者は子ども・若者に大切な価値を伝え、それが子ども・若者に伝えられるようなジェネラティヴィティの意識は不十分であり、ジェネラティヴィティを意識した支援までは至っていないことが示された。高齢者と子ども・若者のかかわる地域活動が、ジェネラティヴィティを発揮し、高齢者の生きがいを促すために、居場所としての心理的安定感を与えることや高齢者も子ども・若者に対する物理的・心理的距離感を抱いていることを理解した上でかかわり活動を企画すること、高齢者の生きがいは、子ども・若者とのかかわりの質により異なっており、高齢者と子ども・若者との相互関係の構築を促すためのかかわり支援を行うこと、子ども・若者への関心や行為を強化するためのかかわり活動の参加者同士の振り返り会を設けること等が示唆された。

③制度・政策レベルでは、ジェネラティヴィティを発揮する高齢者の生きがい関連対策について考察した。高齢者の生きがい対策では、少子高齢化においてますます進行していく家族内や社会における高齢者と子ども・若者の関係の希薄化を背景に、高齢者と子ども・若者が出会い・つながること自体に重点をおいて、交流の場を拡大してきた。しかし、その先のつながり、すなわち、高齢者と子ども・若者との心理的つながりの重要性や必要性については注目されてこなかった。

子ども・若者とのかかわり活動を通して高齢者の生きがいを促すためには、高齢者と子ども・若者との密な相互作用と親密な関係形成が重要であり、それに関連するかかわり支援が求められる。しかし、交流の場での支援者によるかかわり支援のみでは限界があり、高齢者の生きがい対策による後押しが求められる。ここでは、交流の場に焦点をあて、参加者の心理的つながりを促すために、対策レベルではどのような支援ができるかについて、アメリカの交流の場の展開から示唆を得ることができた。また、本研究で試みた4つの類型化に基づき、それぞれに類型毎に政策課題を検討した。

今後の高齢者の生きがい対策は、地域における高齢者と子ども・若者とのかかわり活動において、両世代の心理的距離感を減らし、心理的つながりに注目し、つながりの質を高めることが求められる。地域で高齢者と子ども・若者とのかかわりの場を提供している多様な機関や団体の支援者をつなぐネットワークを図り、情報発信・共有を支援することへの必要性が指摘できた。

## 2. 結論

高齢者と子ども・若者がかかわる交流の場において、共有する時間や支援者によるかかわり支援は、子ども・若者との相互作用・相互関係性に影響を与え、子ども・若者とかかわりによる高齢者の生きがいに影響していることが把握された。とりわけ、高齢者と子ども・若者の相互作用や相互関係性を意識したかかわり支援が行われている類型の参加高齢者は、子ども・若者との親密な関係性に基ついた自己存在感や自己有用感とともに、次世代への関心や行動を追求する生き方を得ることが示された。また、ジェネラティヴィティの視点から、高齢者と子ども・若者がかかわる地域活動において高齢者の生きがいを促すためには、高齢者と子ども・若者との心理的つながりを重視し、高齢者のジェネラティヴィティが発揮できる高齢者と子ども・若者へのかかわり支援が重要である。しかし、支援者によるかかわり支援のみでは限界があり、高齢者の生きがい関連対策においても心理的つながりを重視した対策への必要性を指摘することができた。

### 第2節 本研究の意義と課題

本節では、学術的・実践的・政策的領域における本研究の意義について示したい。その上、本研究における限界と今後の課題について示す。

#### 1. 本研究の意義

##### 1) 学術的な意義

高齢者の生きがい研究において、子ども・若者とかかわりによる生きがいを検討することから、従来、家族や友人などの比較的狭い日常生活圏内から得られていた生きがい感から、地域における子ども・若者とかかわり活動という公共圏における生きがいへの可能性の検証ができた。また、高齢者の世代間交流研究においては、Eriksonによるジェネラティヴィティ理論に基ついた高齢者への影響を検討することができた。さらに、支援者によるかかわり支援についても検討することによって、かかわりの場における支援者によるかかわり支援の実態と、高齢者への効果を効果的に得られるために、かかわり支援への必要性が示唆された。

##### 2) 実践的な意義

子ども・若者とかかわりから得られる高齢者への影響について、質的分析を用い、そのプロセスを検討したことから、高齢者がどのようなプロセスで、どのような効果を得られているのかが明らかになった。この結果は、高齢者と子ども・若者とかかわりを設定するうえで、支援者の基礎知識として提供することができると考えられる。また、支援者のかかわり支援と高齢者の生きがいプロセスを照らし合わせた分析結果から、世代間交流において、支援者によるかかわり支援が、高齢者と子ども・若者の相互作用と相互関係性の促進に影響を与え、高齢者の多様な生きがい感に間接的な影響を与えることが確認された。この点から、かかわりの質を重視するといった点で、高齢者の生きがいを促す支援者によるかかわり支

援へのいくつかの示唆が得られたことに意義がある。

### 3) 政策的な意義

今後の高齢者の生きがい対策において、高齢者と子ども・若者のかかわり活動は、その場の拡大から、高齢者と子ども・若者との心理的つながりへの展開や後押しが求められることが示唆された。心理的つながりを展開するためには、政府による重要性の認識とともに、関連機関や団体、支援者とのネットワークの構築が必要であり、関連情報の発信と共有の支援を求めることが示唆された点に意義がある。

## 2. 本研究の限界と今後の課題

本研究においていくつかの限界点があげられる。

第1に、地域における高齢者と子ども・若者のかかわりの場を4つの類型に区分し、それぞれに該当する調査対象を選定したが、結果として、同一の調査対象地域での選定となっていないため、地域の特性が高齢者に反映されている可能性があり得る。

第2に、高齢者の生きがい感を数値化するために、本研究で作成したジェネラティヴィティを含む高齢者の生きがい尺度を用いたが、尺度自体の信頼性や妥当性は検証していないため、傾向を見る結果として用いるにとどまっている。

第3に、子ども・若者の年齢を統一しようと考えたが、子ども・若者の年齢幅を狭く制限すると4類型を探することは困難であるという現実と直面したため、高齢者と子ども・若者のかかわりに調査において、子ども・若者の年齢幅が広がっている。

第4に、高齢者と子ども・若者の相互作用を前提とし、高齢者への影響に焦点を当てて分析・検討しているため、高齢者と子ども・若者との相互作用の詳細な様子や子ども・若者への影響分析は徹底していないが、参加している子ども・若者の一部の感想を聞き取ることで補っている。

第5に、本研究は日本における高齢者と子ども・若者との交流を中心として研究目的や分析範囲を絞った検討に充実しているため、日本と韓国の比較検討までは取り組んでいない。

以上の限界を踏まえ、残された課題として、地域や子ども・若者の年齢を統制した分析ができる調査対象の探索を続けること、また、高齢者と子ども・若者の両世代に質的調査と観察調査を併用した相互作用と相互関係性の変容について深く検討することが求められる。また、量的調査からジェネラティヴィティを含む高齢者の生きがい尺度の信頼性や妥当性への検証も求められる。さらに、本研究の結果を基盤とし、日本と韓国における高齢者と子ども・若者がかかわる地域活動の比較検討も求められる。

## 注

- 1) 高齢者の「親と未婚の子のみの世帯」とは、「夫婦と未婚の子のみの世帯」及び「ひとり親と未婚の子のみの世帯」のことである。
- 2) generativity(ジェネラティヴィティ)は「生殖性」「世代性」「世代継承性」「次世代育成力」等に訳されるが、合意された訳語はないため、本稿ではそのまま「generativity」もしくはカタカナの「ジェネラティヴィティ」と表記する。
- 3) 積極的な参加とは、単なる参加頻度のみならず、活動目的を理解した上、何らかの役割を持ち定期的に参加することを意味する。
- 4) 近年、教育学や生涯学習において、フォーマル領域とインフォーマル領域の中間に位置するノンフォーマル領域が注目されている。フォーマル領域は、制度にかかわる系統的、構造化されたものである。たとえば、公民館や社会福祉協議会などが主催する体系的な講座、認知症サポーター養成講座や介護職員初任者研修などが該当する。また、インフォーマル領域は、家庭や地域生活の中で偶発的に起こり、関わるものである。これらに対し、ノンフォーマル領域は、非定型であり、もう少し意識的に踏み込んでいる地域の行事や講演会、あるいはボランティア活動などのことである(原田 2016 : 4, 264-265)。
- 5) 本節は、崔恩熙(2019)「理論をふまえた高齢者と子ども・若者の交流に関する研究の到達点—高齢者への効果を中心とした文献レビュー—」『福祉社会開発研究』の一部を修正・加筆したものである。
- 6) generativity は、「世代」generation と「創造性」creativity を組み合わせて作られたものである。語幹の gen は「始まり」「生む」という to give birth を意味し、そこから連想される意味群は幅広い(森岡 2018 : 32)。
- 7) 先行研究において「次世代を確立させ導くことへの関心」という訳が多く用いられているが、「guiding」を「指導」という意味として捉えて「次の世代の確立と指導に対する興味・関心(大野 2018 : 45)」とのように訳すこともある。
- 8) 1950 年代に性別役割分業に基づく近代家族の価値が再び高まってきた現象には、いくつかの特殊な条件が同時に存在していた。第 1 は、第二次世界大戦後の経済的繁栄から、労働階級が安定した家庭生活を手にすることができた。第 2 は、人口規模の小さい 1920 年代から 1930 年代に出生した人々の中で、中流階級が青年期の大恐慌経験から相対的に低い物質的な願望を持ち、性別役割分業に基づく安定した家庭生活に価値をおいた。第 3 は、大恐慌を経験したコーホートが成人期をむかえた時期は、雇用条件がよく、家族形成も容易であった(岩井 1997)。
- 9) 崔恩熙(2019)「理論をふまえた高齢者と子ども・若者の交流に関する研究の到達点—高齢者への効果を中心とした文献レビュー—」『福祉社会開発研究』の一部を修正・加筆したものである。
- 10) 社会福祉館は、地域社会を基盤とし専門職を揃え、地域住民の参与と協力を通して地域社会の福祉問題を予防し解決するために総合的な福祉サービスを提供する施設をいう

- (社会福祉事業法社会福祉館設置・運営規定第5条)。1983年に社会福祉事業法の改正により、社会福祉の国庫補助を受けることになってから、ますます増加し、2019年度全国における社会福祉館の数は、466か所が設置・運営している(韓国社会福祉館協会)。
- 11) 老人福祉館は、老人の教養・趣味生活及び社会参与活動等に関する各種の情報とサービスを提供し、健康増進及び疾病予防と所得保障・在宅福祉その他老人の福祉増進に必要なサービスを提供することを目的とする施設である(老人福祉法による老人福祉施設の設置・運営規定第36条)。
  - 12) 韓国において世代間交流や世代間交流プログラムに関する用語は様々である。崔(2018: 31)は、文献調査から、「老人と児童の相互作用」をはじめ、「世代共同体」、「世代統合プログラム」、「1・3世代プログラム」、「世代間交流」が使われており、学問分野によって用語が異なるのではなく、学問分野を問わず多様な用語が混在しているとして、本節では、世代間交流及び世代間交流プログラムと統一して表記する。
  - 13) 韓国では高齢者の労働市場への参加意欲と高齢者の貧困に対する政策的対応の一環として、2004年から仕事を希望する65歳以上の高齢者に雇用や、所得補充、社会参加等の機会を提供するために「老人就労及び社会活動支援事業」を実施している。世代間交流は、地域児童教育機関へ派遣され、絵本の読み聞かせや伝統の遊び等の行う活動である。当初の名称は老人就労支援事業であったが、2015年度事業再編により、「老人社会活動(老人就労)支援」と変更した(保健福祉部2014, 2015)。
  - 14) 1993年にハン・ジョンランによる「老人教育における教育課程開発の実践研究」において世代間交流プログラムに関する論議が始まった(チャン2011)。
  - 15) 類型Ⅲについては、新型コロナウイルス感染症の影響によって参加している子どもの母親に対する聞き取りは実施できなかったため、高齢者の語りの記述にとどまっている。
  - 16) 今井ら(2009)は、60歳以上の退職者198名を対象に生きがい概念の因子構造を探索的に検討し、3つの下位因子から構成される高次因子モデルを構築した。そして60歳以上の地域中高年者367名を対象にモデルの良好な適合(GFI=0.97等)が報告されている(今井ら2012: 433)。

## 引用・参考文献

- Allport, G. W. (1954) *The nature of prejudice* Reading, MA: Addison-Wesley
- Boström, Ann-Kristin (2009) Social Capital in Intergenerational Meetings in Compulsory Schools in Sweden, Journal of Intergenerational Relationships, 7(4), 425-441.
- Cheng, S-T (2009) Generativity in Later Life: Perceived Respect from Younger Generations as a Determinant of Goal Disengagement and Psychological Well-being, Journal of Gerontology: Psychological Sciences, 64(B), 45-54.
- Chung, S., Kim, J. (2020) The Effects of Intergenerational Program on Solidarity and Perception to Other Generations in Korea, Journal of Social Service Research
- de Souza, E. (2007) Intergenerational interaction through reminiscence processes: A theoretical framework to explain attitude changes, Journal of Intergenerational Relationships, 5(1), 39-56
- Devore, S., Winchell, B., Rowe J. M (2016) Intergenerational Programming for Young Children and Older Adults: An Overview of Needs, Approaches, and Outcomes in the United States, Childhood Education, 92(3),216-225.
- Erikson, E. H., Erikson, J. M. (1997) *The life cycle completed a review*, Expanded edition, W. W. Norton & Company Inc., New York. (=2001, 村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル, その完結(増補版)』みすず書房. )
- Erikson, E.H. (1963) *Childhood and society* 2nd ed., W. W. Norton & Company Inc., New York. (Original work published in 1950) (=1977, 1980, 仁科弥生訳『幼児期と社会 1, 2』みすず書房. )
- Erikson, J. M., Erikson, E. H. and Kivnick, Q. H (1986) *Vital Involvement in Old Age*. W. W. Norton & Company, N. Y. (=1990, 朝長正徳・朝長梨枝子訳『老年期 生き生きしたかかわりあい』)みすず書房
- Fletcher, K. S. (2007) Intergenerational Dialogue to Reduce Prejudice, Journal of Intergenerational Relationships, 5(1), 6-19.
- Fruhauf, C. A., Jarrott, S. E., & Lambert-shute, J. J. (2004) Service-learners at dementia care programs: an intervention for improving contact, comfort, and attitudes. Gerontology and Geriatrics Education, 25(1), 37-52.
- Giles, Howard., Fox, Susan., Smith, Elisa (1993) Patronizing the Elderly: Intergenerational Evaluations, Research on Language and Social Interaction,26(2),129-149.
- Heyman, J. C., & Gutheil, I. A. (2008) "They touch our hearts": The experiences of shared site intergenerational program participants. Journal of Intergenerational Relationships, 6(4), 397-412.
- Hock, Nancy., Mickus, Maureen. (2019) *An Intergenerational Residential Model for*

- Elders and Students, Journal of Intergenerational Relationships, 17(3), 380-387.
- Judith Garrard (2011) *Health Sciences Literature Review Made Easy: The Method 3rd ed.* (=2012, 安部陽子訳『看護研究のための文献レビュー—マトリックス方式』医学書院)
- Kuehne, S. Valerie., Melville, Julie (2014) *The State of Our Art: A Review of Theories Used in Intergenerational Program Research (2003—2014) and Ways Forward*, Journal of Intergenerational Relationships, 12, 317–346.
- McAdams, D. P. (2001) *Generativity in Midlife*. In M. E. Lachman (Ed.), *Wiley series on adulthood and aging. Handbook of midlife development*. John Wiley & Sons, Inc., 395–443
- McAdams, D. P., de St. Aubin, Ed. (1992) *A Theory of generativity and Its Assessment Through Self-Report Behavioral acts, and narrative themes in Autobiography*, Journal of Personality and Social Psychology, 62(6), 1003-1015.
- McAdams, D. P., de St. Aubin, Ed. (1998) *Generativity and adult development*. Washington, D.C. American Psychological Association.
- McCrea, M. James., Smith, B. Thomas (1997) *Type and Models of Intergenerational Programs*, Newman, Sally., Ward, R. Christopher., and Smith, B. Thomas. et al. (1997) Intergenerational Programs: Past, Present and Future, Taylor & Francis, 81-93.
- Newman Sally, Ward R. Christopher, Smith B. Thomas, et al. (1997) Intergenerational Programs: Past, Present and Future, Taylor & Francis
- Newman, S & Hatton-Yeo, A (2008) *Intergenerational Learning and the Contributions of Older People*, Ageing Horizons 8, 31-39.
- Newman, Sally (1997) *History and Evolution of Intergenerational Programs*, Newman, Sally., Ward, R. Christopher., and Smith, B. Thomas. et al. (1997) Intergenerational Programs: Past, Present and Future, Taylor & Francis, 55-80.
- Roodin, P., Brown, L. H. and Shedlock, D (2013) *Intergenerational Service-Learning: A Review of Recent Literature and Directions for the Future*, Gerontology & Geriatrics Education, 34(1), 3-25.
- Schwartz, A. E. (1994). *Gender and generativity*. *Psychoanalysis & Psychotherapy*, 11(1), 25–33.
- Tajfel, H., Turner, J.C. (1979) *An integrative theory of intergroup conflict*. In S. Worchel & W.G. Austin (Eds.), The social psychology of intergroup relations. Monterey, CA: Brooks-Cole
- Teater, B. (2016) *Intergenerational Programs to Promote Active Aging: The Experiences and Perspectives of Older Adults*, Activities, Adaptation & Aging, 40(1), 1-19.
- 赤尾勝己 (2009) 『生涯学習社会の可能性—市民参加による現代的課題の講座づくり』ミネルヴァ書房.
- 青井和夫 (1994) 『高齢化社会の世代間交流——世代間交流による高齢者の社会参加促進に

- 関する基礎研究——』長寿社会開発センター.
- 青井和夫(1999)『長寿社会を生きる——世代間交流の創造』有斐閣.
- 青木邦男(2015)「在宅高齢者の性格特性, 生きがい感関連要因及び生きがい感の関連性」  
山口県立大学学術情報 8, 7-17.
- チャン・ミハ(2011)「老人総合福祉館における世代統合プログラムの満足度の決定要因に  
関する研究」漢陽大学行政自治大学院(修士学位論文)
- 崔恩熙(2018)「世代間交流の高齢者への効果に社会福祉士が及ぼす影響—韓国 T 市の社会  
福祉館調査から—」『世代間交流学会誌』8(1), 31-40 .
- 崔恩熙(2019)「理論をふまえた高齢者と子ども・若者の交流に関する研究の到達点—高齢  
者への効果を中心とした文献レビュー—」『福祉社会開発研究』(日本福祉大学) 14, 1-  
11.
- 崔恩熙(2020)「地域の若い世代とのかかわりによる高齢者の意識変容のプロセスの検討」  
『中部社会福祉学研究』11, 89-99.
- 超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会(2012)「長寿社会における生涯学習  
の在り方について～人生 100 年いくつになっても学ぶ幸せ「幸齢社会」～」  
([https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2012/03/28/1319112\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2012/03/28/1319112_1.pdf)/2020. 5. 11)
- 中央教育審議会(1996)「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について一次答申」  
([https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm)/2020. 5. 11)
- 中央教育審議会(1996)「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について二次答申」  
([https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chuuou/toushin/970606.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/970606.htm)/2020. 5. 11)
- 中央教育審議会(2008)「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について——知の循環  
型社会の構築を目指して——(答申)」
- 電子政府の総合窓口(2015)「子ども・若者育成支援推進法」  
([https://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws\\_search/lsg0500/detail?lawId=421AC0000000071#B](https://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws_search/lsg0500/detail?lawId=421AC0000000071#B), 2020. 9. 10)
- エイジング総合研究センター(1994)『平成5年度 総務庁長官官房老人対策室委託事業高  
齢者との世代間交流の手引き』
- エイジング総合研究センター(2006)『平成5年度 総務庁長官官房老人対策室委託調査「世  
代間交流に関する調査研究報告書」』社団法人エイジング総合研究センター.
- 深瀬裕子・岡本祐子(2010)「老年期における心理社会的課題の特質: Eriksonによる精神  
分析的個体発達文化の図式第Ⅷ段階の再検討」『発達心理学研究』21(3), 266-277.
- 藤原佳典・渡辺直紀・西真理子・ほか(2007)「児童の高齢者イメージに影響をおよぼす要  
因—“REPRESENTS” 高齢者ボランティアとの交流頻度の多寡による推移分析から」『日本公  
衛誌』54(9), 615-625.
- 藤原佳典・杉原陽子・新開省二(2005)「ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす  
影響—地域保健福祉における高齢者ボランティアの意味」『日本公衛誌』52(4), 293-307.

- 藤原佳典・西真理子・渡辺直紀・ほか (2006) 「都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプログラム“REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果」『日本公衛誌』53(9), 702-714.
- 藤原佳典 (2012) 「世代間交流における実践的研究の現状と課題—老年学研究の視座から」『日本世代間交流学会誌』2(1), 3-8.
- 後藤澄江 (2012) 『ケア労働の配分と協働——高齢者介護と育児の福祉社会学』東京大学出版会.
- ハン・ジョンラン (2000) 「大学生の老人に対する態度に関する研究」『韓国老年学』14(1), 140-153.
- ハン・ジョンラン (2002) 「老人教育と世代統合：世代共同体の教育」『韓国成人教育学会 Andragogy Today』5(2), 91-108.
- 原田正樹 (2014) 『地域福祉の基盤づくり—推進主体の形成—』中央法規.
- 長谷川明弘・藤原佳典・星旦二 (2001) 「高齢者の「生きがい」とその関連要因についての文献的考察—生きがい・幸福感との関連を中心に—」『総合都市研究』75, 147-170.
- 長谷川明弘・藤原佳典・星旦二 (2003) 「「生きがい」の構造—「生きがい」の対象と伴う感情の共分散構造分析—」『日本ケアマネジャー学会誌』2, 65-79.
- 長谷川明弘・藤原佳典・星旦二 (2015) 「2000年から2014年までの我が国における生きがい研究の動向—生きがい研究の「ルネッサンス」—」『生きがい研究』21, 30-143.
- 保健福祉部 (2015) 「2015年度老人社会活動（老人就労）支援事業の総合案内」
- 本田春彦・植木章三・岡田徹・そのほか (2010) 「地域住宅高齢者における自主活動への参加状況と心理社会的健康及び生活機能との関係」『日本公衛誌』57(11), 968-976.
- 堀薫夫編著 (2012) 『教育老年学と高齢者学習』学文社.
- 堀田力 (2003) 「高齢者の社会参加の現状と課題」『老年精神医学雑誌』14(7), 853-858.
- 伊原正躬・荻生和成 (1999) 「第5章 生きがい支援事業の変遷」香川正弘・佐藤隆三・伊原正躬・荻生和成『生きがいある長寿社会学びあう生涯学習』ミネルヴァ書房, 70-83.
- 今井忠則・長田久雄・西村芳貢 (2012) 「生きがい意識尺度 (Ikigai-9) の信頼性と妥当性の検討」『日本公衛誌』59(7), 433-438.
- 石井留美 (1996) 「主観的幸福感研究の動向」『コミュニティ心理学研究』1(1), 94-107.
- 糸井和佳・亀井智子・田高悦子・ほか (2012) 「地域における高齢者と子どもの世代間交流プログラムに関する効果的な介入と効果文献レビュー」『日本地域看護学会誌』15(1), 33-44.
- 伊藤ひとみ・亀井知子 (2015) 「都市部における高齢者と小学生の世代間交流プログラムで生じる両世代間の交流及び高齢者の generativity (世代継承性) についてのエスノグラフィ」『日本世代間交流学会誌』5(1), 37-45.
- 岩井八郎 (1997) 「ジェンダーとライフコース：1950年代アメリカ家族の特殊性を中心に」『教育・社会・文化研究紀要』(京都大学) 4, 1-16.
- 香川正弘・佐藤隆三・伊原正躬・荻生和成 (1999) 『生きがいある長寿社会学びあう生涯学

習』ミネルヴァ書房

海道清信・村山隆英 (2005) 「米国における持続可能な地域発展を目的とする地域振興型 NPO の活動とその形成過程に関する研究—シリコンバレー・フェアファックス・オースティンの比較考察から—」『都市計画論文集』(日本都市計画学会) 40(3), 61-66.

神谷美恵子 (1966) 『生きがいについて』みすず書房.

神谷美恵子 (2004) 『神谷美恵子コレクション 生きがいについて』みすず書房.

韓国社会福祉館協会ホームページ (<http://kaswc.or.kr/welfarecenter>, 2020. 8. 26)

片桐恵子 (2012) 『退職シニアと社会参加』東京大学出版会.

加藤美穂・三浦英雄・加藤恵子 (2015) 「ふれあい給食が世代間交流として地域高齢者および短大生に与える効果」名古屋文理大学紀要 16, 19-26.

河添博幸 (2007) 「非営利組織におけるリーダーシップ：類型的研究に関する一考察」『熊本大学社会文化研究』5, 77-94.

キム・ソジン (2006) 「世代統合プログラムの運営と評価—独居老人とひとり親家庭の児童を中心に—」『児童福祉研究』4(1), 111-128.

金貞任・新開省二・熊谷修・藤原佳典・吉田裕子・天野秀紀・鈴木隆雄 (2004) 「地域中高年者の社会参加の現状とその関連要因—埼玉県鳩山町の調査から—」『日本公衛誌 51』(5), 322-334.

木下康仁 (1999) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的検証研究の再生』弘文堂.

木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂.

木下康仁 (2007) 『ライブ講義 M-GTA』弘文堂.

木下康仁 (2009) 『質的研究と記述の厚み—M-GTA・事例・エスノグラフィー』弘文堂.

厚生省 (1973) 『厚生白書 (昭和 48 度版)』ぎょうせい, 厚生労働省ホームページ ([https://www.mhlw.go.jp/toukei\\_hakusho/hakusho/kousei/1973/2020.7.20](https://www.mhlw.go.jp/toukei_hakusho/hakusho/kousei/1973/2020.7.20))

厚生省 (1979) 『厚生白書 (昭和 54 度版)』ぎょうせい, 厚生労働省ホームページ ([https://www.mhlw.go.jp/toukei\\_hakusho/hakusho/kousei/1979/2020.7.20](https://www.mhlw.go.jp/toukei_hakusho/hakusho/kousei/1979/2020.7.20))

小澤 義雄 (2012) 「老年期の Generativity 研究の課題—その心理社会的適応メカニズムの解明に向けて」『老年社会科学』34(1), 46-56.

小澤 義雄 (2013) 「老年期における世代間継承の認識を伴う自己物語の構造」『発達心理学研究』24(2), 183-192.

熊野道子 (2003) 「人生観のプロファイルによる生きがいの 2 次元モデル」『健康心理学研究』16(2), 68-76.

熊野道子 (2006) 「生きがいとその類似概念の構造」『健康心理学研究』19(1), 56-66.

熊野道子 (2012) 『生きがい形成の心理学』風間書房.

桑川美紀・堀田明裕 (2006) 「高齢者の生きがいデザインに関する研究—行政による生きがい対策の分析」『デザイン学研究』53(1), 29-36.

草野篤子・秋山博介編 (2004) 『現代のエスプリーインタージェネレーション「世代間交流プログラム - どの程度深く関与するかの問題」』至文館, 51-58.

- 草野篤子 (2006) 「日本における世代間交流の歩みと今後の展望」『社会教育』61(3), 8-11.
- 草野篤子・金田利子・間野百子ほか編(2009)『世代間交流効果—人間発達と共生社会づくりの視点から』三学出版.
- 草野篤子・柿沼幸雄・金田利子・ほか編 (2010) 『世代間交流学の創造—無縁社会から多世代間交流型社会実現のために』あけび書房.
- イ・クムリョン (2004) 「年齢別の老人に対する態度比較による世代統合プログラムの戦略的方案模索」『老人福祉研究』26, 143-164.
- 間野百子(2004) 「インタージェネレーションの現状と課題」草野篤子・秋山博介編(2004)『現代のエスプリーインタージェネレーション』至文館, 66-72.
- 間野百子 (2012) 「米国における祖父母と孫の世代間家族の現状と課題—孫を養育する祖父母支援に焦点をあてて」『日本世代間交流学会誌』2(1), 9-17.
- 松本卓也・山本圭編 (2018) 『〈つながり〉の現代思想 社会的連帯をめぐる哲学・政治・精神分析』明石書房.
- 松高由佳 (2018) 「第8章セクシュアリティ, ジェンダーと世代継承性」岡本裕子・上手由香・高野恵代編『世代間継承性研究の展開—アイデンティティから世代継承性へ—』ナカニシヤ出版, 407-425.
- マシュー カプラン・ナンシーヘンケン・草野篤子編 (2008) 『グローバル化時代を生きる世代間交流』明石書店.
- 宮里進勇・土志田祐子 (1994) 「第5章 世代間交流のボランティア活動」青井和夫『高齢化社会の世代間交流—世代間交流による高齢者の社会参加促進に関する基礎研究—』長寿社会開発センター, 142-159.
- 森一郎 (2017) 『世代問題の再燃 ハイデガー, アーレントとともに哲学する』明石書店
- 村山陽 (2009) 「高齢者との交流が子どもにも及ぼす影響」『社会心理学研究』25(1), 1-10.
- 村山陽 (2011) 「『世代間交流』学の樹立に向けて」『哲学』(慶應義塾大学三田哲學會) 125, 75-104.
- 村山陽・竹内瑠実・大場宏美・ほか (2013) 「世代間交流事業に対する社会的関心とその現状—新聞記事の内容分析及び実施主体者を対象とした質問紙調査から」『日本公衛誌』60(3), 138-145.
- 村山陽・竹内瑠実・山口淳・ほか (2017) 「幼老複合施設における世代間交流の可能性と課題」『老年社会科学』38(4), 427-436.
- 内閣府 (1986) 『長寿社会対策大綱』ぎょうせい.
- 内閣府 (1996) 『高齢社会対策大綱 (平成8度版)』ぎょうせい.
- 内閣府 (2002) 『高齢社会対策大綱 (平成14度版)』ぎょうせい.
- 内閣府 (2003) 『高齢社会白書 (平成15度版)』ぎょうせい.
- 内閣府 (2007) 『高齢社会白書 (平成19度版)』ぎょうせい.
- 内閣府 (2010) 『高齢社会白書 (平成22度版)』ぎょうせい.

- 内閣府 (2010) 「子ども・若者ビジョン～子ども・若者の成長を応援し、一人ひとりを包摂する社会を目指して～」 (<https://www8.cao.go.jp/youth/suisin/pdf/vision.pdf>, 2020.9.10)
- 内閣府 (2012) 『高齢社会対策大綱 (平成 24 年版)』ぎょうせい.
- 内閣府 (2013) 『高齢社会白書 (平成 25 年版)』ぎょうせい.
- 内閣府 (2015) 『平成 27 年度第 8 回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査』 (<https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h27/zentai/index.html/2020.7.20>)
- 内閣府 (2016) 『高齢社会対策大綱 (平成 24 年版)』ぎょうせい.
- 内閣府 (2017) 『高齢社会白書 (平成 29 年度)』ぎょうせい.
- 内閣府 (2018) 『高齢社会対策大綱 (平成 24 年版)』ぎょうせい.
- 中川恵理子 (2001) 「米国における世代間プログラムの成立と展開—高齢社会における家庭・青少年問題への対応と学校ボランティア」『東京大学大学院教育学研究科紀要』41
- 中村正人・白澤政和 (2014) 「中学生の高齢者イメージ形成プロセスに高齢者施設訪問経験が与える影響」『老年学雑誌』5, 21-38.
- 中野いく子 (2007) 「世代間交流プログラムの実践と評価」『老年社会科学』28(4), 497-503.
- 日本事業所内保育団体連合会 (2016) 『世代間交流施設の挑戦—保育と介護はどのように融合しているか』あっぷる出版社.
- 西山直子 (2010) 「世代間関係における Generativity の可能性 : Narrative Approach の立場から」『京都大学大学院教育学研究科紀要』56, 345-357.
- 野村千文 (2005) 「「高齢者の生きがい」の概念分析」『日本看護科学会誌』25(3), 61-66.
- 大場宏美 (2014) 「地域高齢者の generativity と社会参加活動との関連構造」『生きがい研究』20, 52-67.
- 岡本裕子・上手由香・高野恵代編 (2018) 『世代間継承性研究の展開—アイデンティティから世代継承性へ—』ナカニシヤ出版.
- 大村恵 (2016) 「第 14 章地域社会の実践と課題—子どもと青年の人格形成支援—」新海英行・松田武雄編著『世界の生涯学習—現状と課題—』大学教育出版, 246-247.
- 王姿月・中野いく子 (2016) 「世代間交流が幼児の高齢者観に及ぼす影響」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』27, 86-96.
- パク・ヘソン, アン・テュン (2012) 「世代交流の活性化のために世代統合プログラム及び世代交流空間に関する研究:京畿道福祉館を中心に」『韓国医療福祉施設学会誌』18(2)
- 相良順子・伊藤裕子 (2017) 「中年期におけるジェネラティヴィティの構造とジェンダー差」『パーソナリティ研究』26(1), 92-94.
- 斎藤貞夫 (1994) 「第 6 章 社会福祉分野における世代間交流の現状——福祉教育を通して——」『高齢化社会の世代間交流——世代間交流による高齢者の社会参加促進に関する基礎研究——』長寿社会開発センター.
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社.

- 關戸啓子 (2006) 「全国の幼稚園・保育所における幼児と高齢者のふれあいに関する実態調査」『川崎医療福祉学会誌』15(2), 655-663.
- サリー ニューマン・エリザベス ラーキン・高橋恵他訳 (2006) 「世代間交流の視点世代間交流の実践における評価の重要性」『社会教育』61(5), 30-35.
- 新海英行・松田武雄編著 (2016) 『世界の生涯学習—現状と課題—』大学教育出版
- ソ・ウォンソク (2014) 「世代間葛藤と解消方案」『Land & housing insight』18, 32-37
- 末田啓二・菊池信子・丸山総一郎 (2009) 「青年との世代間交流が及ぼす高齢者の QOL への効果」神戸親和女子大学研究論叢 42, 47-54.
- 菅谷泰行 (2014) 「老人福祉施設における世代間交流に関する実態調査報告—近畿 2 府 4 県でのアンケート結果の分析—」『介護福祉学』21(2), 122-129.
- 田渕恵 (2009) 「中高年者による若年世代支援プログラムにおける関心とその年齢差：世代間交流とジェネラティビティの視点から」『生老病死の行動科学』14, 3-12.
- 田渕恵・三浦麻子 (2014) 「高齢者の利他的行動場面における世代間相互作用の実験的検討」『心理学研究』84(6), 632-638.
- 田渕恵・三浦麻子・中川威・ほか (2013) 「高齢者における世代性 (Generativity) と次世代との関わり行動の因果関係—性差に着目した検討—」『日本世代間交流学会誌』3(1), 35-40.
- 田渕恵・中川威・権藤恭之・小森昌彦 (2012) 「高齢者における短縮版 Generativity 尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」『厚生の指標』59(3), 1-7.
- 田渕恵・中川威・石岡良子・ほか (2012) 「高齢者の世代性及び世代性行動と心理的 Well-being の関係—若年者からのフィードバックに着目した検討—」『日本世代間交流学会誌』2(1), 19-24.
- 高崎義幸・日隈健壬 (2008) 「高齢化社会と地域福祉 (15) —高齢者の生きがい研究の地平—」『広島修大論集』49(2), 243-260.
- 田中重好 (2010) 『地域から生まれる公共性—公共性と共同性の交点—』ミネルヴァ書房.
- 田中富子・竹田恵子 (2016) 「中山間地域で生活する後期高齢者の世代間交流と生活機能の関連性」『川崎医療福祉学会誌』26(1), 37-47.
- 谷村千絵 (1999) 「E. H. エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する考察——ライフサイクルとかかわりのダイナミズム——」『教育哲学研究』80, 48-63.
- 築山崇・黒澤祐介・草野篤子・角間陽子 (2006) 「世代間交流の実態調査報告～東京市・神戸市のアンケート調査より～」『福祉社会研究』7, 123-129.
- 鶴若麻里 (2004) 「我が国の高齢者の生きがい対策への一考察—バイオエシックスの視座から—」『ヒューマンサイエンス』16(1), 26-34.
- 上村眞生・岡花祈一郎・若林紀乃・ほか (2007) 「世代間交流が幼児・高齢者に及ぼす影響に関する実証的研究」『幼年教育研究年報』29, 65-71.
- 上野谷加代子・原田正樹編 (2016) 『地域福祉の学びをデザインする』有斐閣.
- 上野谷加代子・原田正樹監修 (2014) 『新 福祉教育実践ハンドブック』全国社会福祉協議

会.

渡辺秀樹 (2013) 「多様性の時代と家族社会学—多様性をめぐる概念の再検討—」 家族社会学研究 25(1), 7-16.

渡辺秀樹・有末賢 (2008) 『多文化多世代交差世界における市民意識の形成』慶應義塾大学出版会.

山口重克 (2001) 「外的諸条件の構造化と類型論の方法」 國士舘大学政経論業, 57-82.

山口重克 (2006) 『類型論の諸問題』御茶の水書房.

山田洋子 (2012) 『世代を結ぶ—生成と継承』新曜社.

## 謝 辞

本論文の執筆にあたり，多くの方々にご支援いただきました。

多忙ななか，本研究のインタビュー調査へのご理解とご協力をいただいた調査対象機関の支援者ならびに高齢者の皆さま，学生さんに心より感謝申し上げます。

執筆資格審査をはじめ博士学位授与審査では，後藤澄江教授，原田正樹教授，木全和巳教授より，ご貴重なご指導とご助言を賜りました。深く感謝申し上げます。

主査である後藤澄江教授には，修士課程から大変お世話になりました。研究の着想から，調査，論文執筆まで多くのご指導をいただきました。ご丁寧なご指導を頂きましたこと深謝いたします。そして，研究の面だけでなく，留学生である私の生活面においても温かくサポートしていただき，誠にありがとうございました。

そして，韓国留学生の先輩方々，いつも応援してくださった多くの方々にこの紙面を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

最後に，物心両面に日本での留学生生活を援助していただいた心強い支援者であるお母さんを始めとする私の家族に感謝の意を表します。